

仙台市文化財調査報告書第36集

北前遺跡

発掘調査報告書

1982年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第36集

北前遺跡

発掘調査報告書



1982年3月

仙台市教育委員会



▲D-3 a区15層上面出土状況

◀D-3 a区東壁セクション

▼D-3 a区15層上面出土石器群(約3/4)



I-5 b区第9層上面出土石器(約3/4)



序 文

仙台の南縁を画して東流する名取川の北岸一帯には、数多くの埋蔵文化財が包蔵され、随所にその分布をみるることができます。なかでも山田上ノ台・人米田・上野・三神峯の各遺跡はその代表として古くから周知されています。

北前遺跡は、一昨年発掘調査の対象となり、5～6万年以前にまで遡る前期旧石器時代の遺跡を包蔵する重要な遺跡として注目をあつめた山田上ノ台遺跡の北縁に接して一段高い青葉山段丘状丘陵の南縁一面に位置しています。

仙台の中心的市街の北縁を画する台ノ原丘陵を「北の杜」とするならば、名取川北岸にせまる青葉山丘陵は南縁を向する「南の杜」とも言うべき貴重な緑園でありましたが、戦後の土地開放や市街地の拡大によって、近年、特に大型団地を中心とする土地開発が進展し、自然地形を大きく改変しながら市街化が促進されてきています。この北前遺跡を中心とする根岸地区一帯もその例にもれず、最近ますます宅地化が進められている現況にあります。

こうした中において、今回の発掘調査の対象となった北前遺跡の一面は、畑地として利用されてきたことによって保存継承されてきた貴重な遺跡であります。土地所有者の下山氏の、農業経営上、どうしても深く天地返しを行い、土壌の改良を計らねばならないとの要請から、仙台市教育委員会が県・国との協議を重ねた結果、国の補助対象事業として、緊急発掘調査に踏み切ることとなった次第であります。

本調査は、多くの地元民や学識者の協力を得ながら、8月から12月末まで実施されましたが、東北地方でも数少ない縄文時代早期(7,000～10,000年前)の集落跡の発見や、縄文時代前期(6,000～7,000年前)の土器群の検証をはじめ、これらの遺跡群の基盤をなす火山灰層からは前期旧石器、後期旧石器時代の文化層も発見され、結論的には、隣接する山田上ノ台遺跡と連続する重要な複合遺跡であることが判明するに至りました。

本報告書は、その調査結果をまとめたものでありますが、調査や整理にあたっては、多くの方々のご協力やご指導と調査員の夜を徹しての労苦によって作成されたものであります。心から敬意と感謝を申し上げます次第であります。

本報告が多くの方の学見諸氏、研究家はもとより、文化財保護啓蒙思想の啓発に大きく役立つことを念じて、その序にかえるものであります。

昭和57年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤 井 黎

本文目次

序 文

例 言

調査要項

第 I 章

1. 調査に至る経過…………… 斎野…… 1
2. 遺跡の位置と環境…………… 佐藤…… 1
3. 調査の概要…………… 斎野…… 4

第 II 章 層序…………… 佐藤・斎野…… 6

第 III 章 遺構と遺物

1. 遺物分類表…………… 佐藤・斎野・吉岡・荒井…… 19
2. 旧石器時代…………… 吉岡・荒井…… 27
3. 縄文時代早期の遺構と遺物…………… 佐藤…… 44
4. 縄文時代前期の遺構と遺物…………… 斎野…… 75
5. 縄文時代中期の遺構と遺物…………… 斎野…… 99
6. 平安時代の遺構と遺物…………… 斎野…… 117
7. 江戸時代の遺構と遺物…………… 佐藤…… 122
8. 時期不明の遺構…………… 斎野…… 138

第 IV 章 考察とまとめ

1. 縄文時代早期…………… 佐藤…… 147
2. 縄文時代前期…………… 斎野…… 151
3. まとめ…………… 佐藤…… 157

挿図・表目次

第 1 図 北前遺跡と周辺の遺跡分布図…………… 2	第 8 図 仙台付近の地質図…………… 15
第 2 図 調査区設定図…………… 5	第 9 図 遺構全体図…………… 17
第 3 図 基本層序模式図…………… 6	第 10 図 縄文土器器形模式図…………… 21
第 4 図 調査区基本層位 (東西・南北断面図) …… 7	第 11 図 旧石器時代の石器出土状況図(1)…………… 28
第 5 図 深掘りトレンチ断面図(1)…………… 10	第 12 図 旧石器時代の石器出土状況図(2)…………… 29
第 6 図 深掘りトレンチ断面図(2)…………… 11	第 13 図 D-3a区15層上面出土石器 (旧石器時代)…………… 35
第 7 図 深掘りトレンチ柱状図…………… 14	

第14回	D-3a区15層上面出土石器 (旧石器時代)……………	36
第15回	I-5b区17層上面出土石器 (旧石器時代)……………	37
第16回	I-5b区17層上面出土石器 (旧石器時代)……………	38
第17回	I-5b区17層上面出土石器 (旧石器時代)……………	39
第18回	I-5b区17層上面出土石器 (旧石器時代)……………	40
第19回	I-5b区17層上面出土石器 (旧石器時代)……………	41
第20回	I-5b区第9層上面出土石器 (旧石器時代)……………	42
第21回	A-3d区第5層上面出土石器 (旧石器時代)……………	43
第22回	1号住居跡(縄文時代早期)……………	45
第23回	2号住居跡(縄文時代早期)……………	46
第24回	2号住居跡出土遺物……………	47
第25回	3号住居跡(縄文時代早期)……………	50
第26回	3号住居跡出土遺物……………	51
第27回	4号住居跡(縄文時代早期)……………	52
第28回	4号住居跡出土遺物……………	53
第29回	5号住居跡・6号住居跡 (縄文時代早期)……………	55・56
第30回	5号住居跡出土遺物……………	57
第31回	7号住居跡(縄文時代早期)……………	58
第32回	6・7号住居跡出土遺物……………	59
第33回	8号住居跡(縄文時代早期)……………	60
第34回	7・8号住居跡出土遺物……………	61
第35回	1号土壇(縄文時代早期)……………	66
第36回	2号・3号土壇(縄文時代早期)……………	67
第37回	4号・5号土壇(縄文時代早期)……………	68
第38回	5号土壇出土遺物・6号土壇 (縄文時代早期)……………	69
第39回	7・8・9号土壇(縄文時代早期)……………	70
第40回	包含層・遺構外出土土器……………	71
第41回	遺構外出土土器・早期包含層出土	

	円盤状土製品・石器……………	72
第42回	11・12・13・14号土壇(縄文 (縄文時代前期末葉)……………	76
第43回	15号土壇(縄文時代前期末葉)……………	77
第44回	16・17号土壇(縄文時代前期末葉)……………	80
第45回	16号土壇出土遺物(縄文時代前期末葉)……………	81
第46回	18・19・20・22号土壇 (縄文時代前期末葉)……………	82
第47回	22・21号土壇(縄文時代前期末葉)……………	83
第48回	23号土壇(縄文時代前期末葉)……………	86
第49回	24号・25号・26号土壇 (縄文時代前期末葉)……………	88
第50回	26号土壇(縄文時代前期末葉)……………	89
第51回	27・28号土壇(縄文時代前期末葉)……………	92
第52回	27・28号土壇出土遺物・29号土壇 (縄文時代前期末葉)……………	93
第53回	29号土壇出土遺物・30号土壇 (縄文時代前期末葉)……………	94
第54回	31号・32号・33号土壇 (縄文時代前期末葉)……………	95
第55回	遺構外出土縄文土器 (縄文時代前期末葉)……………	96
第56回	1号竪穴遺構(縄文時代中期中葉) 1号埋設土器(縄文時代中期後葉)……………	103
第57回	9号住居跡(縄文時代中期後葉)……………	105
第58回	9号住居跡(縄文時代中期後葉)……………	106
第59回	9号住居跡出土遺物……………	107・108
第60回	10号住居跡(縄文時代中期後葉)……………	109
第61回	10号住居跡出土遺物……………	110
第62回	10号住居跡出土遺物……………	111
第63回	遺構外出土遺物(縄文時代中期)……………	112
第64回	遺構外出土(縄文時代中期)……………	113
第65回	遺構外出土の縄文時代の石器(1)……………	114
第66回	遺構外出土の縄文時代の石器(2)……………	115
第67回	遺構外出土の縄文時代の石器(3)……………	116
第68回	11号・12号住居跡(平安時代)……………	119
第69回	11号・12号住居跡……………	120
第70回	11号・12号住居跡出土遺物・34号	

	35号・36号土城(平安時代)……………	121
第71図	1号溝・2号溝(江戸時代)……………	123・124
第72図	3号・5号・6号溝(江戸時代)……………	125
第73図	4号溝(江戸時代)……………	127
第74図	7号・8号溝(江戸時代)……………	131
第75図	37号・38号、39号・40号・41号・ 42号墓塚・43号土城(江戸時代)……………	133
第76図	古銭・土師質土器(江戸時代)……………	134
第77図	時期不明土城(44号—50号土城)……………	143
第78図	時期不明土城(51号—56号土城)……………	144
第79図	時期不明土城(57号—61号土城)……………	145
第80図	時期不明土城(62号—69号土城)……………	146
第81図	第2群土器傾度分布図……………	150
第82図	前期土城分布図……………	152
第83図	縄文時代前期末葉の上器……………	155

第1表	遺跡地名表……………	2
第2表	石器属性表(旧石器時代)……………	33
第3表	石核属性表(旧石器時代)……………	33
第4表	ビット計測表……………	73
第5表	遺構・区別土器集計表……………	74
第6表	9号住居跡柱穴一覽表……………	113
第7表	10号住居跡柱穴一覽表……………	113
第8表	古銭一覽表……………	137
第9表	土城分類表……………	153
第10表	住居跡・工房跡・竪穴遺構・溝一覽表 江戸時代以降の遺物……………	158
第11表	土城一覽表(1)、(2)……………	159
第12表	縄文時代の石器集計表……………	161
第13表	縄文時代の石器属性表……………	164

写真目次

写真1	遺跡全景・旧石器時代の石器出土状況……………	169
写真2	縄文時代早期の住居跡……………	170
写真3	縄文時代早期の土城……………	171
写真4	縄文時代前期末葉の土城(1)……………	172
写真5	縄文時代前期末葉の土城(2)……………	173
写真6	縄文時代前期末葉の土城(3)……………	174
写真7	縄文時代中期の住居跡……………	175
写真8 a	縄文時代中期の竪穴遺構……………	175
8 b	平安時代の住居跡・土城……………	176
写真9	江戸時代の溝・土城(1)……………	177
写真10 a	江戸時代の土城(2)……………	177
10 b	時期不明の土城(1)……………	178
写真11	時期不明の土城(2)……………	179
写真12	時期不明の土城(3)・調査風景……………	180
写真13	旧石器時代の石器(1)……………	181
写真14	旧石器時代の石器(2)……………	182

写真15	旧石器時代の石器(3)……………	183
写真16	縄文時代早期の土器……………	184
写真17	縄文時代前期末葉の上器(1)……………	185
写真18	縄文時代前期末葉の土器(2)……………	186
写真19	縄文時代前期末葉の土器(3) 中期の土器(1)……………	187
写真20	縄文時代中期の上器(2)……………	188
写真21	縄文時代の石器(1)……………	189
写真22	縄文時代の石器(2)……………	190
写真23	縄文時代の石器(3)……………	191
写真24	縄文時代の石器(4)……………	192
写真25	縄文時代の石器(5)……………	193
写真26	縄文時代の石器(6)……………	194
写真27 a	平安時代の土器(土師器)……………	195
27 b	江戸時代の土師質土器……………	195
写真28	江戸時代及び江戸時代以降の遺物……………	196

例 言

1. 本書は、農地改良に先立って行った、北前遺跡の発掘調査の本報告書である。すでに公表された現地説明会資料等に優先するものである。
2. 報告書作成のための整理は、佐藤洋・斎野裕彦が担当し、田中則和・吉岡恭平・荒井格・主浜光朗がこれを補佐した。また、直接整理に参加しなかった職員にも全面的な協力をいただいた。

また、編集は、整理参加職員の協力を得て、佐藤洋・斎野裕彦が行った。

3. 本文の執筆は、佐藤洋・斎野裕彦・吉岡恭平・荒井格が分担し、本文目次に示した。
4. 作図・写真撮影等については、下記の通り分担した。

遺構トレース：大場拓俊・斎藤秀寿・石黒伸一郎・松木仁・大友透・内藤隆史

遺構写真：佐藤洋・斎野裕彦・大場拓俊

遺物実測（土器）田中則和・主浜光朗・斎藤秀寿・石黒伸一郎・柿沼敏郎・古屋敷則雄・佐藤幸子・松岡敦子・藤沢敦

（石器）梶原洋・阿部朝衛・小川出・山田晃弘・横山裕平・藤田淳・吉岡恭平・荒井格

遺物トレース（土器）田中則和・主浜光朗・斎藤秀寿・藤沢敦・石黒伸一郎

（石器）阿部朝衛・山田晃弘・小川出・鈴木博子

遺物拓影：相沢史子・石黒伸一郎・古屋敷則雄・柿沼敏郎・古川隆子・佐藤幸子・吉田康子・松岡敦子

遺物復原：森剛男

遺物写真：田中則和・吉岡恭平・荒井格・主浜光朗・佐藤甲二・阿部朝衛

版組：田中則和・吉岡恭平・荒井格・主浜光朗・横山裕平・佐藤洋・斎野裕彦

地形・地質については豊島正幸氏、石材鑑定は佐々木隆氏に御教示を蒙った。

5. 発掘調査及び遺物整理において、下記の方々に助言・協力を賜った。

伊東信雄（東北学院大学教授）、藤沼邦彦・岡村道雄（東北歴史資料館）、録川俊昭・藤村新一・梶原洋・阿部朝衛・小川出・山田晃弘・横山裕平・鈴木博子（石器文化談話会）、豊島正幸（東北大学院生）、佐々木隆（仙台市科学館）

以上敬称略

凡 例

○本書中の上色については、「新版標準上色帳」(小山、竹原1973)を使用した。

- 図版中の水系レベルは海拔高を示す。
- 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1「仙台南西部」を使用した。
- 基本層序には「第」を付し、他の埋土や層の対比のできないものには付していない。
- 遺構の名称は、時代・種類毎に通し番号を付し、時期不明の土壌は最後に扱った。
- 本書で使用している「ローム」は、単に火山灰を示し、粒土区分した表現ではない。
- 「埋土」という用語は、覆土、堆積土と同一の意味で用いている。
- 土壌の埋土が単層の場合は、文章中で述べただけのものもある。
- 写真図版のうち、縄文早期の土器については、外面、内面を上下で示した。
-  印は図版中焼土を示す。
-  印は図版中炭化物を示す。
- 北前遺跡の出土遺物は、仙台市教育委員会が一括保管している。

調 査 要 項

- 遺 跡 名 称 北前遺跡 (C-131)
- 所 在 地 仙台市山田字北前46-12
- 調 査 主 体 仙台市教育委員会
- 調 査 担 当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係
- 担 当 職 員 佐藤洋・斎野裕彦
- 調 査 期 間 昭和56年9月1日～12月28日
- 調査対象面積 2,500㎡
- 調 査 面 積 1,320㎡
- 調 査 参 加 者 大場拓俊、大友透、松木仁、長谷川徹、内藤隆史、五十嵐康洋、高橋建一、樋口賢一、諸沢暁、古川睦子、小野正康、八島浩一郎、阿部正規、真壁三郎、三品雄一、石川俊英、木戸春夫、小原ミツヨ、阿達成子、大里ちよし、沼田和子、阿部とよ子、沼田スエノ、菅井マツ子、沼田すい子、阿部とめよ、千葉時子、目黒和子、阿部貞子、柴崎清子、阿部あき子、阿部いしよ、阿部武志、阿部高子、阿部とめよ、太田かつ子、大里美恵子、大久節子、小野俊子、小沼ちえ子、加藤けい子、川村玲子、甲山静子、佐伯千圭子、佐藤ふみ子、佐藤よし江、庄司よしみ、鈴木つや子、西村日出子、早坂みつえ、曳地いな子、沼田廣子、沼田絹子、嶺岸光子、梶原洋、阿部朝衛、小川出、山田晃弘、石黒伸一朗、柿沼敏郎、佐藤政人、山田しょう

第I章 調査の概要

1. 調査に至る経過

仙台市西部の山田地区は、近年まで畑地等に利用され遺跡も比較的良好な保存状況を示していた。しかし最近の団地や宅地の造成に伴ない畑地も急速に姿を消しつつあり、それと並行して遺跡の破壊が進行している。

今回の調査は、団地や宅地などの造成工事等によるものではなく、農地改良により遺跡が破壊される危険が生じたためによるものである。当地区は畑として使用されていたが、天地返しにより地表下1mまで攪乱される事になったため、仙台市教育委員会では昭和54年2月に試掘調査を行なった。その結果地表下20～30cmで遺構面となり縄文時代の遺物を出土し、また遺構のプランも確認した。その後、本調査区南約200m位置する山田上ノ台遺跡が昭和55年度に調査され、旧石器時代・縄文時代・平安時代にわたる複合遺跡であることがわかり、同じ丘陵上に位置する北前遺跡はその関連性において重要視されてきた中で調査を行なうに至った。

2. 遺跡の位置と環境

仙台市内には、名取川およびその支流である広瀬川が東流している。この河間の丘陵は釜山丘陵と呼ばれ、残丘の多い、起伏に富む丘陵(370～100m)である。この丘陵の南部には、岩頭と呼ばれる太白山(標高320.8m)が存在し、仙台駅の南西約7.5kmに位置している。

この太白山から南東に丘陵が伸び、この丘陵上には太白団地や日本平団地などの団地群が存在している。また、この丘陵は、名取川および太白山周辺に源を発する芥川(1)の河間にあり、さらに名取川の支流によって2つに分断されている。2つの丘陵には、それぞれ山田・釣取付近で段丘が連なる。

このうち、北前遺跡は西側の丘陵に迎なる山田付近の段丘面上(山川面)にのっている。また、昭和53年度に調査し、前期旧石器時代の石器などが発見された山田上ノ台遺跡も同一面上に存在する。しかし、この段丘面が地形学上、台ノ原段丘・上町段丘(1)のどちらに属するかはまだ決着をみていない。

歴史的環境

仙台市南部には、名取川が形成した扇状地および名取川左岸の青葉山段丘南側などに、多くの遺跡群が存在している。これらの遺跡群については、先に山口遺跡の報告書において指摘したところである(佐藤洋:1981)。ここでは、北前遺跡周辺に限って述べることにする。

北前遺跡の南約200mには、前期旧石器時代の文化層や縄文時代中期の集落跡などが検出された山田上ノ台遺跡(第1図2)があり、さらに南側には名取川が形成した自然堤防上に清太



第1図 北前道跡と周辺の道跡分布図

道跡番号	道跡名	所 属 時 期	道跡番号	道跡名	所 属 時 期
1	北前道跡	旧石部(前), 縄文(早, 前, 中), 平安, 江戸	30	瀬崎坂A道跡	奈良, 平安
2	山田上ノ台道跡	旧石部(前), 縄文(早, 中, 後), 平安, 江戸	31	瀬崎坂B道跡	奈良, 平安, 中世
3	菅原山道跡	旧石部	32	瀬ノ内道跡	奈良, 平安
4	佐保山道跡	縄文, 平安	33	高沢上ノ台道跡	奈良, 平安
5	森野橋穴跡	縄文, 奈良, 平安(早)	34	宝沢池水道跡	縄文, 奈良, 平安
6	茂原堂和	中世(江ノ上ノ城)	35	野一里跡	古墳, 奈良, 平安
7	新屋橋穴跡	古墳	36	高東道跡	古墳, 奈良, 平安
8	坂ノ下道跡	弥生, 古墳, 平安	37	高野古墳	古墳
9	中ノ瀬道跡	縄文, 奈良(末), 平安	38	高野堂道跡	古墳
10	八重田A道跡	縄文(中), 弥生(中)	39	三神堂道跡	旧石器, 縄文(早, 前, 中)
11	八重田B道跡	縄文(中), 弥生	40	土手内橋穴跡	奈良, 平安(?)
12	八重田C道跡	縄文, 古墳, 平安	41	戸ノ口道跡	平安
13	八重田D道跡	縄文, 古墳, 平安	42	土手内道跡	縄文, 奈良, 平安
14	岩屋台道跡	縄文, 古墳, 奈良, 平安	43	土手内塚跡	古墳, 平安
15	岩屋台池跡	縄文, 古墳, 平安	44	赤坂古墳	古墳
16	跡平道跡	縄文, 奈良, 平安	45	砂野古墳	古墳
17	下野山道跡	縄文	46	砂野塚道跡	奈良, 平安
18	跡土手江戸		47	鳥塚道跡	縄文(後), 古墳, 奈良, 平安
19	町道跡	縄文, 古墳, 平安	48	教場古墳	古墳
20	汚田道跡	縄文, 奈良, 平安	49	山口道跡	縄文(中, 後), 弥生, 古墳, 奈良, 平安
21	徳志郎道跡	縄文(中), 奈良, 平安	50	六反目道跡	縄文(中, 後), 弥生, 古墳, 奈良, 平安
22	徳志郎道跡	縄文(中), 奈良, 平安	51	伊吉白道跡	奈良, 平安
23	志流前道跡	縄文(中), 弥生(前), 奈良, 平安	52	二ツ沢橋穴跡	奈良
24	志流前道跡	奈良, 平安	53	高野野道跡	奈良, 平安(?)
25	上野道跡	縄文(中), 弥生, 奈良, 平安	54	高野二丁目道跡	奈良, 平安
26	八幡道跡	古墳, 奈良, 平安	55	二ツ沢道跡	縄文
27	徳田道跡	奈良, 平安(?)	56	八和田町道跡	縄文(中)
28	六事道跡	奈良, 平安	57	坂野堂橋穴跡	古墳, 奈良
29	御治郎道跡	奈良, 平安	58	新口上道跡	古墳, 奈良, 平安

第1表 北前道跡と周辺の道跡地名表

原西遺跡（第1図21）、清太原東（第1図22）、船渡前遺跡（第1図23）など縄文時代中期および奈良、平安時代の遺跡が散在している。また、先の船渡前遺跡では、弥生時代の包含層が確認されている。東側では、裏町古墳（第1図37）、町遺跡（第1図19）、原遺跡（第1図35）などの縄文、古墳～平安時代に属する遺跡や縄文時代前期の集落跡として知られる三神牽遺跡（第1図39）が散在している。また、北側には、古くより旧石器時代の遺跡として知られる青葉山遺跡（第1図3）や今年度宮城県教育委員会が調査を行った御堂平遺跡（第1図16）などがある。さらに、西側には先に指摘した山田上ノ台遺跡や上野遺跡（第1図25）などと同様に広大な面積をもつ、縄文時代が主体の人来田遺跡（第1図11）、さらに平安時代を主体とする羽黒台遺跡（第1図14）などがある。しかし、その内容が十分に把握されている遺跡は数少ない。また、歴史の変遷をたどる場合、空白となる時期も数多く存在する。こうした状況の中で、今回の北前遺跡の調査は極めて意義深いものがある。すなわち、山田上ノ台遺跡の旧石器時代の文化層を追認したこと、ほとんど不明であった早期の住居跡（集落跡）や前期末の土壌群などを検出した。しかも、今回北前遺跡の調査において検出された、縄文時代以後の各時期に渡る遺構は山田上ノ台遺跡（仙台市教育委員会：1980）より検出された遺構と相互補完的な状況を示している。段丘上における人間活動の変遷を知る上で貴重な発見になったといえるだろう。

注 仙台市内には、高台から青葉山段丘・台ノ原段丘・上野段丘・中町段丘・下町段丘の大きく5つの段丘に分類されている。このうち、台ノ原段丘は南関東の下木吉段丘・武蔵野段丘に対比され、また、中町段丘は立川段丘に対比されている。（地研研仙台支部編：1980）

3. 調査の概要

調査は9月1日より開始され、方位に合わせて調査区に6mグリッドを設定した。東西ラインを東から1～11、南北ラインは北からA～Jとし、北東杭をグリッド名とした。グリッドはさらに四分割し北東区をaとし、時計まわりに以下をb・c・dとした。南東部は当初から攪乱が及んでいたことが知られていたため、調査区Fライン以南、7ライン以東に幅50cmのトレンチを入れ攪乱の範囲を確認し上捨て場とした。攪乱の及んでいない他の調査区については各グリッドのa区及びc区をあけて遺構確認を行ない、状況に応じて拡張した。また調査区が、昭和54年度の調査で旧石器時代の文化層の存在が確認された山田上ノ台遺跡と同じ段丘上にあることから、本調査区においても旧石器時代の文化層の存在が予測された。このため調査区南東部の各地形の縁辺に計6ヶ所の探掘りトレンチを設定し調査を行った。

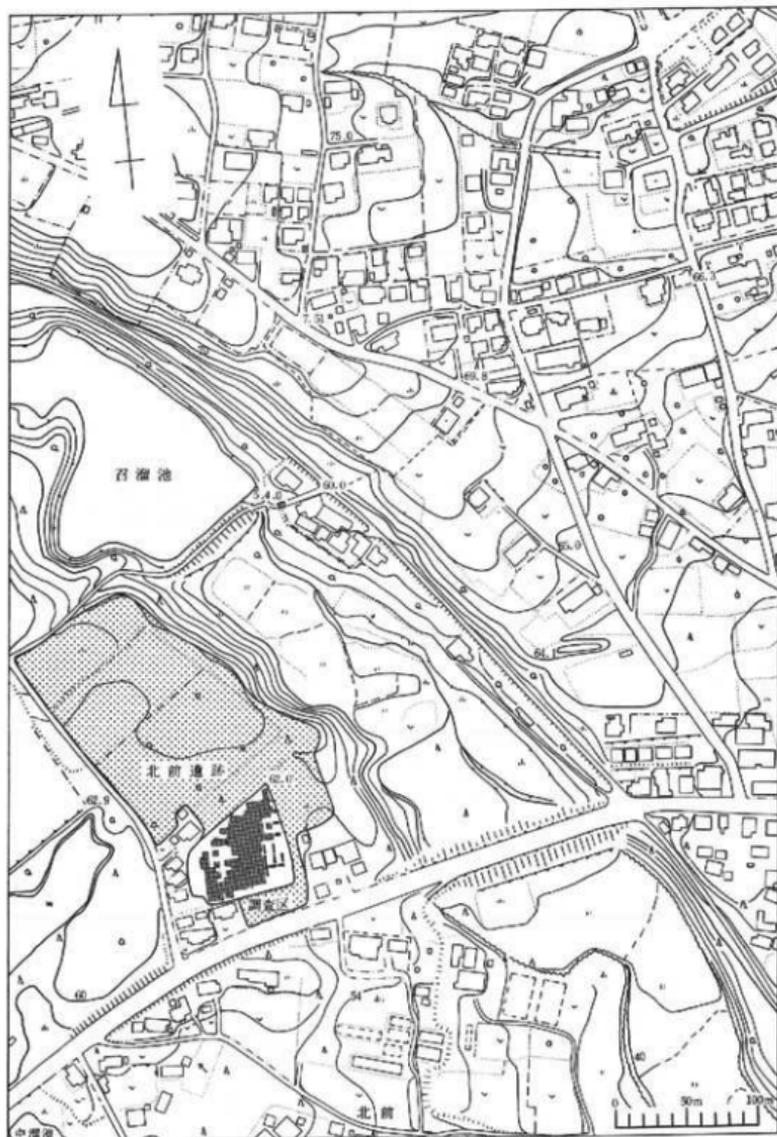
また、耕作土中に遺物が散乱していること、耕作土下20～40cmで火山灰層に到達することから、全て手掘りで行った。

検出された遺構は竪穴住居跡12棟・竪穴遺構1基・埋設土器1基・土塘69基・溝跡8条・土房跡1棟であった。時代は縄文時代早期後葉、縄文時代前期末、縄文時代中期中葉、平安時代江戸時代後半と各時代にわたる。さらに旧石器時代の文化層も確認された。

特に山田上ノ台遺跡と同様に旧石器時代の文化層が2～3枚確認され、2万数千年～3万数千年前より以前の石器が20数点出土している。旧石器時代に関しては今回は文化層の確認の域にとどまった。また縄文時代早期後葉の竪穴住居跡が8棟、土塘が10基確認され、志津川町の大平館跡に次いで県内では2番目の集落跡の発見となった。竪穴住居跡1棟を除きほとんどの遺構は調査区南側に集中する。中に1棟だけ大型の住居跡も見られる。縄文時代前期末に属する遺構は土塘だけであるが、北半部から西半部に分布し、調査区北側中央に集中する傾向が見られる。縄文時代中期では、長軸約7.5m程の大型の住居跡が検出された。他に平安時代の竪穴住居跡、江戸時代後半の墓塚などが検出されている。遺物も各時期にわたり多量に出土した。

調査は4ヶ月間に及び、その間、11月20日には現地説明会を開き一般市民への公開の場とした。また、現地説明会の時点では旧石器時代の文化層は確認されていなかったため、新聞・テレビの報道により一般公開の場とした。

調査終了は12月28日、埋戻しは1月25～27日に行った。



第2図 調査区設定図

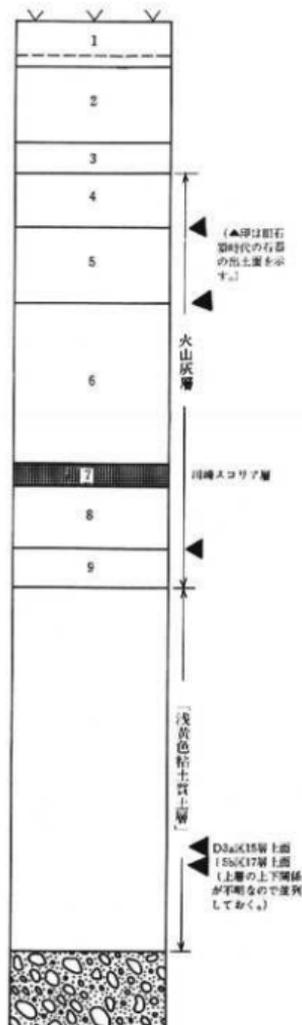
第Ⅱ章 層 序

D-3 a区の層位を基本として各層の概略とその成因について述べることにする。調査区の基本的な層位は大きく4つに分けられる。第1層の耕作土、第2層・第3層のシルト質土層、第4層～第9層の火山灰層、10層～15層の砂～粘土層である。第1層は約20cmの厚さで調査区全域にみられるが、第2層・第3層は部分的な広がりを示す。特に調査区南東部は南に開く浅い谷地形を呈し、第3層はこの谷部にしかみられない。第4層～第9層の火山灰層は調査区全域にわたってみられるが、第7層は部分的にしかみられない。10層～15層の各層は、土色は明黄褐色、浅黄色、灰黄褐色を呈するが、浅黄色が多く、土性は砂～粘土とさまざまであるが、粘土質シルトと粘土が大半を占める。ここではこの10層～15層を一括して「浅黄色粘土質土層」とよぶ。「浅黄色粘土質土層」は調査区全域にみられる。以上の層の基盤は段丘礫層である。

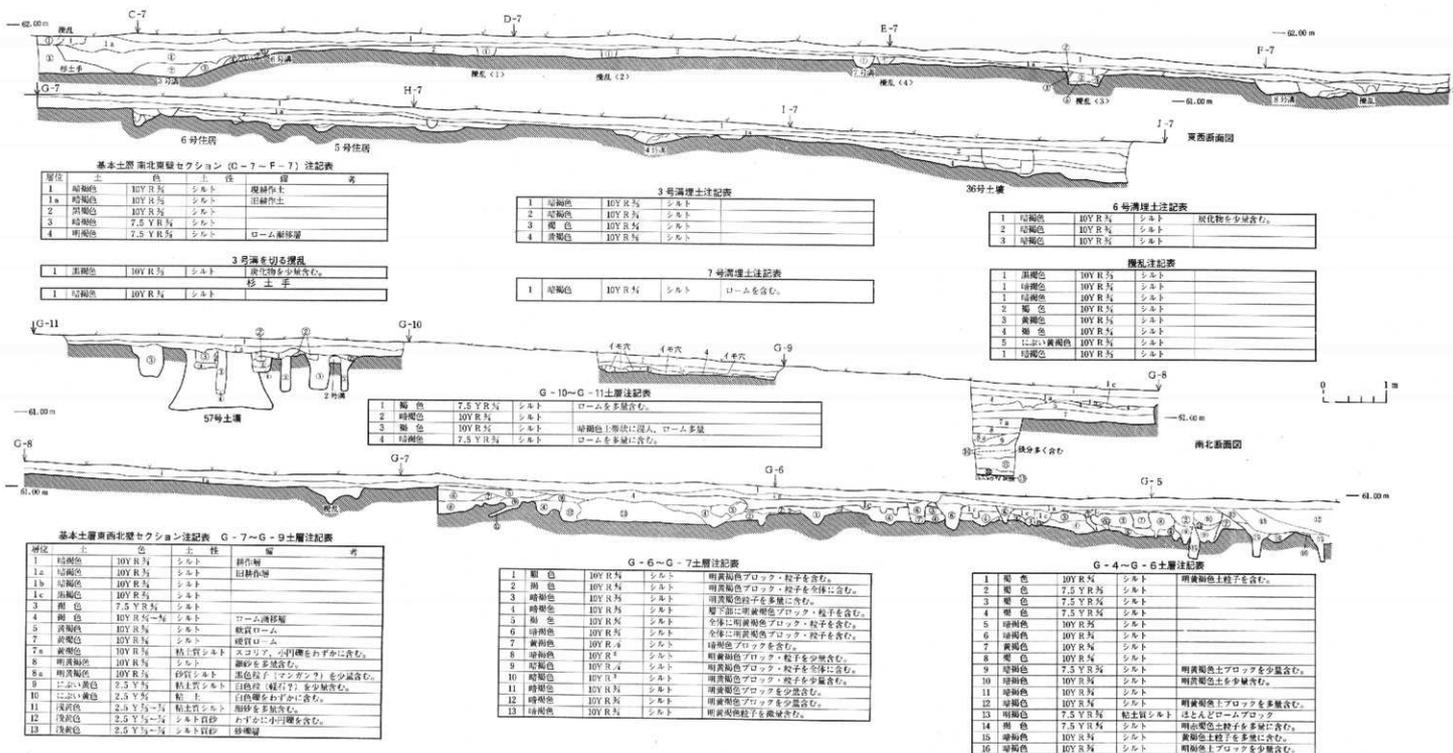
当地区は名取川の旧河床面でありその時に堆積したものが上述の段丘礫層である。名取川が下刻に転じ河床面が離水する（段丘化する）と、当地区は支谷からの供給物質（主に砂・シルト・粘土）の堆積の場となる。この時堆積した支谷起源の堆積物が「浅黄色粘土質土層」である。この層の起源となっているものは層相から判断して当地区の北側に分布している軽石質凝灰岩（(注1)謀立層）（地学団体研究会仙台支部編：1980）である。この層の堆積には支谷の流水が関与してはいたものの、(注2)主な堆積はある降水強度以上の降雨があった時に生じやすかったと考えられる。従って当地区が当時常に水の影響を受けていたわけではなく、十分に生活面になり得る状態であったと判断される。

第4層～第9層の火山灰層は降下火山灰層である。

第1層の耕作土・第2層・第3層のシルト質土層も「浅黄色粘土質土層」同様に支谷起源の堆積物と考えられる。



第3図 基本層序模式図



第4図 調査区基本層位 (東西・南北断面図)

なお昭和55年度に調査された山田上ノ台遺跡で段丘礫層上に堆積する第13層、第15層～第32層(仙台市教委:1981)は、当地区の「浅黄色粘土質土層」と同一起源の層と判断される。また、当地区ののる段丘面については上町段丘に比定する説(旧山:1933・中川:1960・1961)と台ノ原段丘に比定する説(中田他:1976)の両説がある。山田上ノ台遺跡では段丘礫層の標高が50～55m、当地区では59～60mと、5～10mの標高差があるが両者間に明瞭な段丘地は認められないため両者は同一段丘にのるものとして採えられる。

以下各層について記述するが、「浅黄色粘土質土層」の各層は層相変化が顕著であると見られるので、これらの各層をトレンチ間で対比を行なうのは困難である。このため10層以下は各トレンチごとにそれぞれ記述した。

第1層 10YR 7/4暗褐色シルト。耕作土である。この層は、さらに2層に細分される。上部の層は現在の耕作土であり、下部の層は堅緻で小礫や磁器等を含む。この下部の層は、およそ江戸時代以降に形成されたものである。また、調査区のほぼ全域にわたって、2層以下まで芋穴が穿たれている。また、Eライン以南、4ライン以東は削平を受けている。

第2層 10YR 7/4暗褐色シルト。この層は、調査区東部に存在し、北部の上城が密集する地区から、調査区東南部にかけてみられる。縄文時代早期～中期にかけての遺物が出土している。平安時代以降の遺構は、この層を掘り込んでいる。また、極めて狭い範囲ではあるが、F-4区からG-5区にかけての一部とB-4区に黒色砂質シルト(7.5YR 3/4)が認められた。この黒色土中から、土師質土器(江戸時代)が出土している。

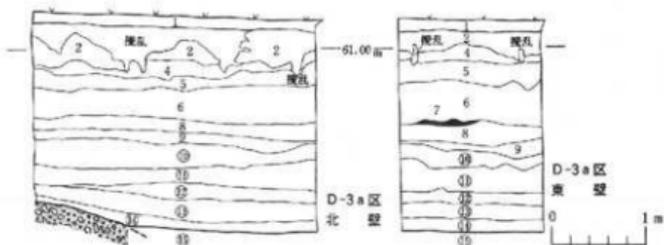
第3層 10YR 7/4暗褐色シルト。円礫、歪角礫、炭化物を含む。この層は、調査区南東部の縄文時代早期の住居群の分布範囲に限られる。早期の土器、石器等が出土することから、縄文時代早期の包含層である。

第4層 10YR 7/4暗褐色シルト質粘土(火山灰層)。比較的軟質で、粘性は弱い。径約1cmの硬質ロームブロックを含む。木の根の攪乱が多い。

第5層 10YR 7/4暗褐色シルト質粘土(火山灰層)。しまりがあり、粒子は細かく、白色の微粒子やバミス(2～3cm)をわずかに含み、粘性は弱い。この層の上面からは旧石器時代の石器が出土している。

第6層 10YR 7/4暗褐色シルト質粘土(火山灰層)。第5層と比較すると、しまりはさらにあり、白色微粒子や岩片(0.5～1.0cm)をわずかに含む。この層の上面からは旧石器時代の石器が出土している。

第7層 10YR 7/4明黄褐色砂質シルト(火山灰層)。この層は「川崎スコリア層」を含む固結

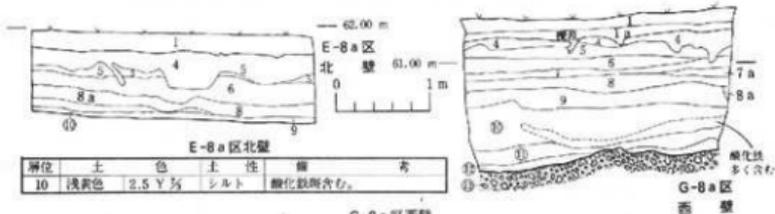


D-3a区北壁

層位	土色	土性	備考
10	明黄褐色 10Y R 5/6	シルト質粘土	マンガン斑が明瞭に見られる。
11	明黄褐色 10Y R 5/6	シルト質粘土	マンガン斑・酸化鉄斑入る。
12	浅黄色 2.5 Y 5/6	粘土	マンガン斑若干入る。
13	浅黄色 2.5 Y 5/6	粘土	マンガン斑を以りより多く含む。
14	浅黄色 2.5 Y 5/6	粘土	砂っぽい粘土。
15	浅黄色 2.5 Y 5/6	砂質シルト	マンガン斑・小礫を若干含む。

D-3a区南壁

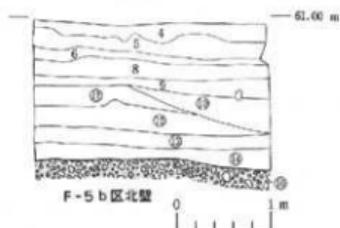
層位	土色	土性	備考
10	明黄褐色 10Y R 5/6	シルト質粘土	マンガン斑が明瞭に見られる。
11	明黄褐色 10Y R 5/6	シルト質粘土	マンガン斑・酸化鉄斑入る。
12	浅黄色 2.5 Y 5/6	粘土	マンガン斑若干入る。
13	浅黄色 2.5 Y 5/6	粘土	マンガン斑を以りより多く含む。
14	浅黄色 2.5 Y 5/6	粘土	砂っぽい粘土。
15	浅黄色 10Y R 5/6	砂質シルト	マンガン斑・小礫を若干含む。



層位	土色	土性	備考
10	浅黄色 2.5 Y 5/6	シルト	酸化鉄所含む。

G-8a区西壁

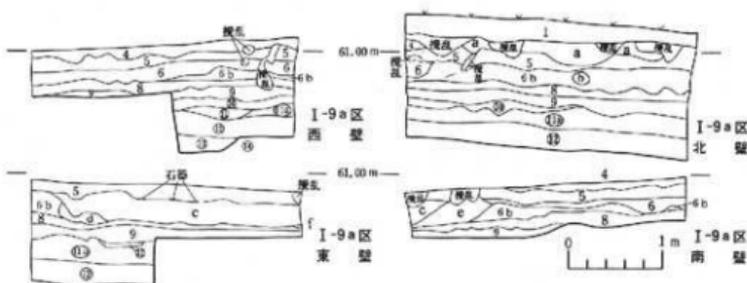
層位	土色	土性	備考
10	にじい黄色 2.5 Y 5/6	粘土	白色粒をわずかに含む。
11	浅黄色 2.5 Y 5/6	粘土質シルト	細砂を多量含む。
12	浅黄色 2.5 Y 5/6	シルト質砂	わずかに小円礫を含む。
13	浅黄色 2.5 Y 5/6	砂礫	



F-5b区北壁

層位	土色	土性	備考
10	浅黄色 2.5 Y 5/6	粘土	岩片、マンガン斑含む。一部酸化
11	明黄褐色 10Y R 5/6	シルト	マンガン斑多量に含む。
12	浅黄色 2.5 Y 5/6	粘土	岩片、マンガン斑含む。一部酸化
13	浅黄色 2.5 Y 5/6	粘土	小礫少量含む。マンガン斑含む。
14	灰黄色 2.5 Y 5/6	シルト	酸化部分解決に入る。
15	浅黄色 2.5 Y 5/6	砂	小礫、マンガン斑含む。
16	浅黄色 2.5 Y 5/6	砂	礫多量含む。

第5図 深掘りトレンチ断面図(1)



I-9a区西壁

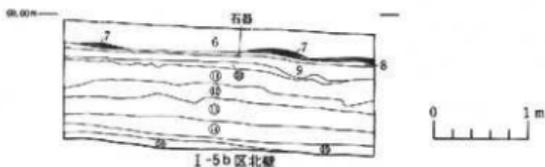
層位	土色	土性	備考	
10	明黄褐色	10Y R 5/6	シルト	酸化鉄斑着下含む。
11	にぶい黄褐色	10Y R 5/6	シルト質粘土	白色砂子・酸化鉄斑多量含む。
11a	浅黄褐色	2.5 Y 7/6	粘土	マンガン斑着下含む。酸化鉄斑多量含む。
12	浅黄褐色	10Y R 5/6	粘土	小礫含む。部次に酸化鉄含む。
13	浅黄褐色	2.5 Y 7/6	粘土	白色砂子若干含む。
14	浅黄褐色	2.5 Y 7/6	粘土質シルト	礫多量含む。

I-9a区北壁

層位	土色	土性	備考	
10	明黄褐色	10Y R 5/6	シルト	酸化鉄斑着下含む。
11a	浅黄褐色	2.5 Y 7/6	粘土	マンガン斑着下含む。酸化鉄斑多量含む。
12	浅黄褐色	10Y R 5/6	粘土	小礫含む。部次に酸化鉄含む。
14	浅黄褐色	2.5 Y 7/6	粘土質シルト	礫多量含む。

I-9a区東壁

層位	土色	土性	備考	
11	にぶい黄褐色	10Y R 5/6	シルト質粘土	白色砂子・酸化鉄斑多量含む。
11a	浅黄褐色	2.5 Y 7/6	粘土	マンガン斑着下含む。酸化鉄斑多量含む。
12	浅黄褐色	10Y R 5/6	粘土	小礫含む。部次に酸化鉄含む。
a	褐色	7.5 Y R 5/6	粘土質シルト	カーボン粒・白色砂子をまばらに含む。
b	褐色	10Y R 5/6	ローム	小礫・白色砂子をまばらに含む。
c	黄褐色	10Y R 5/6	粘土質シルト	マンガン斑・黄褐色土粒を多量に含む。
d	黄褐色	10Y R 5/6	粘土質シルト	マンガン斑を多量に。黄褐色土粒をまばらに含む。
e	褐色	10Y R 5/6	粘土質シルト	マンガン斑・黄褐色土粒を多量に含む。



I-9a区北壁

層位	土色	土性	備考	
10	明黄褐色	10Y R 5/6	シルト	白色粘土を多量に含む。
11	浅黄褐色	2.5 Y 7/6	シルト質粘土	砂・酸化鉄を含む。
12	浅黄褐色	2.5 Y 7/6	粘土	酸化鉄を含む。
13	浅黄褐色	5 Y 7/6	粘土	12層より砂っぽい。
14	褐色	7.5 Y R 5/6	粘土	酸化鉄を含む。
15	灰白色	6 Y 7/6	粘土	白礫を多量に含む。
16	浅黄褐色	2.5 Y 7/6	シルト質砂	マンガンを微量含む。
17	明黄褐色	2.5 Y 7/6	シルト質砂	小礫を含む。

第6図 深掘りトレンチ断面図(2)

部に相当する。「川崎スコリア層」は、蔵王起源と推定され、その噴出年代は ${}^{14}\text{C}$ 年代で $31,500 \pm 2,610$ 年 B. P. (TH-365) から $26,240 \pm 1,360$ 年 B. P. (TH-309) の間のある時期とされる(板垣他:1981)。この層は発掘区毎に異っており、まったく存在しない場所、層厚約4cmのスコリア層を伴っている場所、スコリア層が痕跡的に残っている場所など様相を異にしている。なお、この層は永野火山灰層(中川他:1960)の基底部に相当する。

第8層 10YR $\frac{5}{6}$ 褐色シルト質粘土(火山灰層)。粘土化が進み堅緻である。クラックが発達している。岩片(0.5~1.0cm)を多量に、マンガン斑をわずかに含む。この層の上面には明瞭な風化帯が形成されている。

第9層 10YR $\frac{5}{6}$ 黄褐色シルト質粘土(火山灰層)。粘土化が進み第8層よりさらに堅緻である。第8層と同様の岩片およびマンガン斑を多量に含む。この層の上面からは旧石器時代の石器が出土している。

(D-3 a区)

10層 10YR $\frac{6}{6}$ 明黄褐色シルト質粘土。しまりがあり、0.2~5.0cmの風化礫を多量に含む。マンガン斑が多量に含まれ、部分的に砂を含む。

11層 10YR $\frac{3}{6}$ 明黄褐色粘土質シルト。しまりがあり、粘性が強く、部分的に砂が入る。マンガン斑、酸化鉄斑を含み、小円礫(0.1~2.0cm)もわずかに含まれる。

12層 2.5Y $\frac{7}{6}$ 浅黄色粘土。しまりが非常にある。堅緻である。明黄褐色土(2.5Y%)が斑状に混入し、マンガン斑をわずかに含む。

13層 2.5Y $\frac{7}{6}$ 浅黄色粘土。しまりが非常にある。堅緻である。明黄褐色土(2.5Y%)が全体的に含まれ、細砂、マンガン斑を多量に含む。

14層 2.5Y $\frac{7}{6}$ 浅黄色粘土。しまりがあり、黄色粘土(2.5Y $\frac{3}{6}$)を一部に含む。13層に比較すると、かなり砂質となる。

15層 10YR $\frac{3}{6}$ 浅黄色砂質シルト。しまりが非常にあり、黄橙色砂(10YR $\frac{3}{6}$)を含み、マンガン斑、小礫(0.2~2.0cm)をわずかに含む。この層の上面より、旧石器時代の石器が出土している。

(E-8 a区)

10層 2.5Y $\frac{7}{6}$ 浅黄色シルト。しまりがあり、粘性は弱い。明黄褐色土(10YR $\frac{3}{6}$)を一部に含み、マンガン斑、酸化鉄斑、石英粒がわずかに含まれる。

(G-8 a区)

10層 2.5Y%に近い黄色粘土。しまりが非常にある。白色の粒子、小礫(約1.0cm)がわずかに含まれる。

- 11層 2.5Y_{7.5} 浅黄褐色粘土質シルト。しまりが非常にあり、粘性は弱い。細砂を多量に含み、マンガン、白色の小礫(0.5~1.0cm)がわずかに含まれる。
- 12層 2.5Y_{7.5} 浅黄褐色シルト質砂。11層に比較すると、砂粒は粗くなる。小円礫がわずかに含まれる。
- 13層 砂礫層。マトリックスは、12層と共通するシルト質砂である。礫はかなり風化を受けた最大約20cmの円礫・亜角礫である。

(F-5 b区)

- 10層 2.5Y_{7.5} 浅黄褐色粘土。しまりが非常にある。一部に酸化鉄斑(10YR_{7.5})が含まれ、下部においては帯状となってみられる。マンガン斑を含み、岩片(1~2mm)が多量に含まれる。
- 11層 10YR_{7.5} 明黄褐色シルト。しまりがあり、粘性は弱い。一部に明黄褐色粘土(2.5Y_{7.5})を含み、マンガン斑(0.2~0.3cm)が多量に含まれる。
- 12層 2.5Y_{7.5} 浅黄褐色粘土。しまりが非常にある。マンガン斑(0.5~1.0cm)を縞状に多量に含み、岩片が少量含まれる。
- 13層 2.5Y_{7.5} 浅黄褐色粘土。しまりが非常にある。一部に黄褐色砂(10YR_{7.5})を含み、マンガン斑、小礫(約1.0cm)がわずかに含まれる。
- 14層 2.5Y_{7.5} 灰黄褐色粘土。しまりがあり、上下に黄褐色酸化鉄(10YR_{7.5})が帯状に入る。
- 15層 2.5Y_{7.5} 浅黄褐色砂。しまりはあるが、粘性なし、小礫、マンガン斑をわずかに含む。15層は西壁で14層と16層の間に一部みられる層である。
- 16層 2.5Y_{7.5} 浅黄褐色砂。しまりはあるが、粘性なし。一部に黄褐色酸化鉄(2.5Y_{7.5})を含み、礫(1.0~15.0cm)が多量に含まれる。

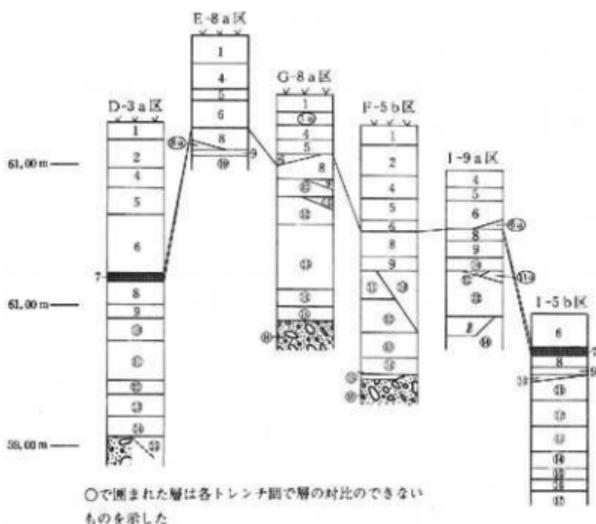
(1-9 a区)

- 10層 10YR_{7.5} 明黄褐色シルト。しまりはあるが、粘性は弱い。酸化鉄斑がわずかに含まれる。
- 11層 10YR_{7.5} 明黄褐色シルト質粘土。しまりがある。堅緻である。白色の粒子、酸化鉄斑が多量に含まれる。
- 11a層 2.5Y_{7.5} 浅黄褐色粘土。しまりがある。堅緻である。マンガン斑、白色粒子をわずかに含み、酸化鉄斑を多量に含む。
- 12層 10YR_{7.5} 浅黄褐色粘土質シルト。しまりがあり、粘性が強い。小礫(1~3cm)を含み、一部に酸化鉄斑を含む。
- 13層 2.5Y_{7.5} 浅黄褐色粘土。しまりは良好である。白色の粒子(0.5cm)をわずかに含む。
- 14層 2.5Y_{7.5} 浅黄褐色粘土質シルト。しまりがあり、粘性が強い。円礫(1~15cm)が多量に含まれる。

(1-5b区)

- 10層 10YR 8明黄褐色シルト。しまりはなく粘性は強い。白色の粘土を多く含む。
- 11層 2.5Y 7.5浅黄色シルト質粘土。しまりがあり、粘性が強い。砂粒、酸化鉄、白色の岩片を混入する。
- 12層 2.5Y 7.5浅黄色粘土。しまりがあり、粘性が強い。砂粒、酸化鉄が混入するもの11層よりは少ない。
- 13層 5Y 7.5浅黄色粘土。しまりがあり、12層より砂質である。
- 14層 7.5YR 8.5橙黄色粘土。しまりがあり、酸化鉄を縞状に含む。
- 15層 5Y 7.5灰白色粘土。円礫(3.0~5.0cm)を多量に含む。
- 16層 2.5Y 7.5浅黄色シルト質粘土。しまりがあり、粘性は強い。風化礫(約3.0cm)をわずかに含み、マンガンが含まれる。
- 17層 2.5Y 8明黄褐色シルト質砂。しまりはあり、粘性は16層より弱い。風化礫(3~5cm)がわずかに含まれ、この層の上面からは旧石器時代の石器が出土している。

注1. 下刻: 河流がその底面を低下させるような垂直下方に向かって働きかける侵食作用
 注2. 降水強度: 単位時間当りの降水量 (町田他編: 1981による)



第7図 深掘りトレンチ柱状図



第9回 遺構全体図

— 深掘トレンチ断面図位置

第三章 遺構と遺物

1. 遺物の分類基準

遺物の分類基準は、遺跡から出土した遺物が、旧石器時代から江戸時代の各時代にまたがっているため、同一基準で分類するのは不可能である。したがって、各時代毎に遺物の性質によって分類した。縄文時代以後の遺物に関しては、縄文時代は型式毎に「群」として扱い、平安時代以降については、時代別に「群」として分類している。また、江戸時代に関しては、そうした表現はとっていない。

第1群土器

本群は、貝殻緑文および沈線文を合わせ持つものを扱った。しかし、本群に属する土器はわずかに口縁部破片2点であるため、類型化は困難である。

第2群土器

本群は、いわゆる縄文系板土器を一括して扱った。本群土器は、すべて破片であるため、全体の器形を知り得るものがない。しかし、各部位毎の破片から判断すれば、およそ口唇部付近がやや外反し、体部がやや張る砲弾形の尖底深鉢形が基本になると推定される。口縁部は、口唇部に刻目や縄文等を施すものがあるが、平縁が基本となり、わずかに波状口縁のものが1点存在する。また、底部は尖底以外に、平底（揚底）が1点存在する。すでに述べた通り、すべてが破片であるため、土器の部位毎に分類を行った。すなわち、口縁部・体部・底部付近のものを、それぞれ1類、2類、3類とした。土器全体の属性は、これら1～3類の組合せによって構成されるものと考えられるが、今回の出土土器では、それらを明確にすることはできなかった。

1類、本類は、口縁部破片を一括して扱った。

- a. 口唇部に刻目あるいは刺突が施され、口唇部直下に刺突のある隆帯をめぐらし、隆帯の下位に幾何学的な沈線文を施文するもの。
- b. aと基本的には同一であるが、口縁部文様帯の地文として条痕文が施されるもの。
- c. aと基本的には同一であるが、口縁部文様帯の地文として縄文を施文するもの。
- d. 口唇部に刺突を施し、口縁部文様帯に幾何学的な沈線文を施文するもの。
口縁部文様帯以下は縄文が施文され、文様帯と体部文様は側面圧痕によって区画されている。口唇部直下には、隆帯が認められない。
- e. 口唇部に縄文を施し、口縁部は地文に条痕文、さらに幾何学的な沈線文を施

文するもの。

- f. 地文に条痕文を施文し、さらに幾何学的な沈線文を施文するもの。
口唇部には、特徴を持たないものや、欠損していて特徴の不明なものも扱っている。
- g. 口縁部文様帯と体部文様を細降帯で区画するもの。
- h. 口縁部の内外に縄文が施文されるもの。
口唇部に刺突をもつものもある。
- i. 羽状縄文を施文するもの。
- j. 内外ともに無文のもの。

2類. 本類は、体部破片を一括して扱った。

- a. 外面に縄文、内面に条痕文を施文するもの。
- b. 外面に縄文、内面に無文あるいは擦痕の認められるもの。
- c. 外面に縄文、条痕文、内面に条痕文が施文されるもの。
- d. 内外面に縄文が施文されるもの。(1類hの可能性も考えられるが、便宜上区別して扱った。
- e. 外面に羽状縄文が施文され、内面は無文となるもの。
- f. 外面に幾何学的な沈線文を施文するもの。
- g. 地文に条痕文を施し、幾何学的な沈線文を施文するもの。
- h. 半截竹管による連続刺突文と斜格子状沈線文を施文するもの。
- i. 内外面ともに条痕文を施文するもの。
- j. 内外面ともに無文のもの。

3類. 本類は、底部付近のものを一括して扱った。本類には、尖底のものと平底（揚底）の2形態が存在する。このうち平底のものは、わずか1点だけである。

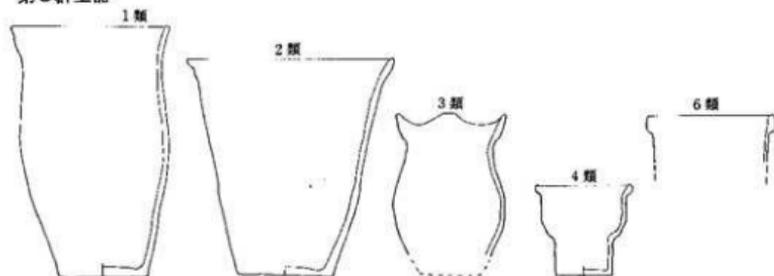
- a. 外面に縄文を施文する尖底のもの。
内面は無文であるが、中には擦痕のつくものも存在する。
- b. 外面に縄文、内面に条痕文を施文する尖底のもの。
内面の条痕文は縦方向となる。
- c. 外面に縄文、内面は無文となる平底のもの。
底面に条痕文が施文されている。

第3群土器～第5群土器は器形により類別、さらに分類可能なものについては文様帯、文様施文要素、文様要素により種別した。文様は器面に施される装飾性のすべてであり、文様要素とは文様を構成する基本的要素とし、文様施文の際に器面に対してなされる断面形態要素を文様施文要素とした。また文様帯は一定の上下幅をもち器面を全周する文様構成帯として把え、頸部に文様が全周するものは特に頸部文様として扱った。

Ⅱ緑部文様帯をA、頸部文様をB、胴部文様帯をCとし、文様施文要素は1.沈線文、2.貼付文、3.刺突文、4.隆帯、5.隆帯+沈線文、6.隆帯+刺突文、7.圧痕文とした。各種文様要素を以下に示す。

1. 沈線文 1.山形沈線文、2.斜行沈線文、3.横位沈線文、5.馬蹄形沈線文、6.連続弧状沈線文、7.弧状沈線文、8.直曲沈線文、9.棘状文、10. 栴門文、11. 懸垂文、12. 逆「U」字文、13. 「C」字文、
2. 貼付文 1.コブ状貼付文、2.ボタン状貼付文、3.棒状貼付文、4.細い粘土紐による渦巻文、5.細い粘土紐による弧状文、6.細い粘土紐による幾何学貼付文
3. 刺突文 1.円形刺突文、2.連続刺突文、3.連続押し引き刺突文
4. 隆 帯 1.横位隆帯、2.弧状隆帯
5. 隆帯+沈線文 1.隆帯+山形沈線文、2.隆帯と沈線による渦巻文、3.隆帯と沈線による曲線文、4.隆帯と沈線による直線文
6. 隆帯+刺突文 1.隆帯+連続刺突文、2.隆帯+連続押し引き刺突文
7. 圧痕文 1.縄文原体による側面圧痕文

第3群土器



第10図 縄文土器器形模式図

1類 Aタイプ

口縁部が外反し胴部がややふくらむ深鉢形土器である。最大径は口縁にある。口縁は液状をなすものもあるが、平縁の方が多く突起をもつものがある。口縁部は肥厚するものも多くまた複合口縁をなすものもある。Ⅱ緑部文様帯の上下幅が狭く頸部に段を有するものもある。

1種

文様帯は頸部で区画され口縁部と胴部に二分される。頸部文様をもつものがある。さらに文様帯が貼付文や縦位沈線文により口縁部・胴部共に4区画されるものがあるが胴部に文様帯をもつものは少ない。口縁部は無文であり、地文は胴部には横位綾格文・単節斜行縄文が施され薄く撫で消してあるものもある。地文の不明なものが多い。文様は縦位・横位・斜めの沈線文を基調として構成されている。山形沈線文により特徴づけられる。胎土は粗く、角礫凝灰岩粒及び砂粒の混入が顕著である。

2種

文様帯は頸部で区画され口縁部と胴部に二分されるが、頸部文様は認められない。口縁部は無文であり、地文は胴部には単節斜行縄文が施されるが薄く撫で消しについては不明である。

口縁部文様帯は横位沈線文と連続縦位弧状沈線文を基調とする。胴部下半の文様は不明である。胎土は極めて粗く、角礫凝灰岩粒及び砂粒の混入が顕著である。

2類

器形は口縁部が外傾し頸部でわずかに屈曲、胴部はほぼ直線的に外傾する深鉢形土器である。最大径は口縁にある。第50図1、1点である。口縁は平縁であり口縁部は肥厚していない。

文様帯は頸部で区画されるが口縁部文様帯だけであり胴部に文様帯はない。口縁部は無文であり、地文は胴部には単節斜行縄文が施文されている。薄く撫で消しが行なわれている。胎土は粗く、角礫凝灰岩粒及び砂粒の混入が顕著である。

3類

器形は口縁部が外反し頸部で屈曲、あるいはくびれ、胴部でふくらむ深鉢形土器である。最大径は胴部にある。口縁は波状と平縁がある。口縁部は肥厚するものが多く複合口縁も認められる。口縁端内面に段をもつものがある。第2種には四波状口縁を呈するものが多い。

1種

文様帯は頸部で区画され口縁部と胴部に二分される。頸部文様をもつものがある。さらに文様帯が貼付文や縦位沈線文により口縁部・胴部共に4区画されるものがあるが胴部に文様帯をもたないものもある。口縁部は無文であり、地文は胴部には横位綾格文・単節斜行縄文が施され、薄く撫で消してあるものが多い。文様は縦位・横位・斜めの沈線文を基調として構成される。山形沈線文により特徴づけられる。胎土は粗く、角礫凝灰岩粒及び砂粒の混入が顕著である。1類1種にほぼ共通する文様帯をもつ。

2種

文様帯は頸部で区画され口縁部と胴部に二分される。第54図2、1点だけである。頸部文様は認められない。器面の剥落が著しく地文は不明である。口縁部文様は横位沈線文を基調として

いる。

4類

器形は口縁部が外反し頸部でくびれ胸部は上半がややふくらみをもつが中位でくびれ下半が円筒状を呈す深鉢形土器である。胸部下半はやや内弯気味に立ち上がる。最大径は口縁部にある。口縁は平縁で口縁部の肥厚は顕著ではない。

文様帯は胸部上半に認められるが、地文だけのものもある。地文は横位綾絡文・単節斜行縄文が施文され薄い撫で消しのなされるものもある。文様は山形沈線文・山形連続刺突文が施文されているものがある。胎土はやや緻密であり角礫凝灰岩粒の混入は少ない。

5類

器形は口縁部が内弯気味に外傾し頸部で脛曲し胸部上半がふくらみ深鉢形土器と考えられる。胸部下半については不明であるが、球形の胸部が底部へむけてしだいにすぼまっていくものと3類のように円筒状を呈する2形態があると考えられる。最大径は口縁あるいは胸部にある。口縁は平縁であるが突起をもつものもある。口縁部の肥厚するものが多い。

1種

文様帯は頸部で区画され口縁部と胸部に二分されるが、口縁部が無文帯のもの、胸部に文様帯をもたないものがある。地文は口縁は無文であるが単節斜行縄文が施される場合もある。胸部には横位綾絡文・単節斜行縄文が施文され、薄い撫で消しがなされるものが多い。文様は縦位・横位・斜めの沈線文を基調としている。胎土は粗く、角礫凝灰岩粒及び砂粒の混入が顕著である。

2種

文様帯は頸部で区画され口縁部と胸部に二分されるが、口縁部と胸部上半の文様要素が同一である。細い粘土紐による幾何学貼付文を施文しているものである。胎土は粗く、角礫凝灰岩粒の混入が顕著であるが砂粒はほとんど含まれない。第55図9、1点だけである。

6類

器形は口縁から底部までわずかに外傾する円筒形の深鉢形土器と考えられる。第52図1、1点だけである。胸部上半が残存している。最大径は口縁にあり、平縁である。地文は無節斜行縄文である。文様帯はなく、口唇に隆帯をめぐらせ口縁部を肥厚させ、隆帯上に4ヶ所コブ状貼付文を配してある。胎土は緻密で、砂粒の混入は少ない。

7類

器形は口縁部がやや内弯し、胸部上半は外傾する深鉢形と考えられる。第55図12、1点だけである。胸部下半については不明である。口縁は平縁であるが山形突起を有する。最大径は胸部上半にあると考えられる。

文様帯は頸部で区画され口縁部と胴部に二分されるが、隆帯+連続押し引き刺突文という文様要素は口縁部・胴部に共通する。胎土は緻密で、砂粒の混入は顕著ではない。

8類

類別が困難な土器破片である。

第4群土器

1類

器形は口縁部が強く内湾し頸部でくびれ胴部がややふくらむ深鉢形土器である。復原はできなかったが第56図1～6の一括出土遺物である。最大径は口縁にあり、平縁である。

文様帯は頸部で区画され口縁部と胴部に二分される。地文は口縁部・胴部共に単節斜行縄文が施文される。文様は口縁部には隆帯と沈線による渦巻文・曲線文が、胴部には直曲沈線文が施文される。胎土は緻密であり砂粒の混入は顕著でない。

2類

類別が困難な土器破片である。

第5群土器

1類

器形は第4群1類土器とほぼ同形である。第62図1、1点だけである。最大径は口縁にあり、平縁である。

文様帯は頸部で区画され口縁部と胴部に二分される。頸部文様が認められる。地文は口縁部は楕円形の中に単節斜行縄文が施文される。胴部は不明である。文様は口縁部・胴部共に隆帯と沈線による渦巻文・曲線文を基調としている。胎土は粗く、砂粒の混入は少ない。

2類

器形は口縁部が外反し頸部でくびれ胴部がややふくらむ深鉢形土器である。頸部文様をもつものがある。最大径は口縁にある。口縁は平縁が多く突起をもつものもある。

1種

文様帯は頸部で区画され口縁部と胴部に二分される。地文は単節斜行縄文が施文されるが、胴部の沈線区画内に認められるにすぎない。文様は口縁部が隆帯と沈線による渦巻文・曲線文・胴部には沈線による楕円文・懸垂文・逆「U」字文などが施文される。胎土は緻密で砂粒の混入は少ない。

2種

文様帯は胴部に認められる。口縁部は無文である。地文は1種に同じである。文様は沈線による楕円文・懸垂文などが施文される。胎土は緻密で砂粒の混入は少ない。

3種

地文だけのものである。第61図1である。半節斜行縄文が施文される。胎土はやや粗く砂粒の混入は少ない。

3類

類別が困難な土器破片である。

第6群土器

1類

土師器環である。平底である。体部から口縁にかけてはやや内湾気味に外傾するものと直線的に外傾するものがある。ロクロ成形であり、回転糸切りによる切り離し後底部に回転ヘラ調整が施されるが糸切り痕はほとんど残っていない。

外面にはナデ、内面はヘラミガキ後黒色処理が施されている。胎土は緻密である。

2類

土師器甕である。口縁部破片のため全体の器形は知り得ない。頸部で強く外反、口縁端で上方へ立ち上がる。胴部は長胴形をなすものと考えられる。ロクロ成形であり、内外面ともナデが施される。

なお、ここでの半截竹管は半截竹管そのものではなく、半截竹管状の工具をいう。

2) 縄文時代の石器

石器の分類は本来、形態的・技術的な属性を抽出し詳細な分析を経た後に行なわれるべきである。しかし本報告書では、時間的制約によりその検討を加えることができなかったため、不十分ではあるが、とりあえず以下の定義に基づき分類し、集計を行なった。

石鏃：尖端部の作出が明確で、基部及び両側縁の整形がなされた小形の三角形を基本とする打

製石器

尖頭器：一ないし二尖端を作出した長く細身の左右対称の打製石器

石匙：ノッチを入れることによって作出されたつまみを有し、それ以外の部位に連続する二次加工を施し刃部を形成した打製石器

へら状石器：基部が狭く刃部の広い、ほぼ左右対称に整形した縦長の打製石器

スクレイパー：縁辺に連続的な二次加工を施すことによって刃部を形成した打製石器

石鏃：鏃状の尖端部を作出し、石鏃・尖頭器・石匙の定義にあてはまらない打製石器

ピエス・エスキュー：両極加撃の痕跡を有し、二ヶ一對の潰れ状の刃部を有する打製石器

打製石斧：へら状石器より大型でやや細身の、ほぼ左右対称に整形した打製石器

釣針形石器：釣針の形をした打製石器

二次加工のある剥片：二次加工が部分的に施された剥片

微細刻離痕のある剥片：縁辺に沿って連続もしくは非連続な微細刻離痕を有する剥片

剥片：剥片と碎片とは本来分離されるべきであるが、その基準を明確に設定しえなかったためここでは両者を分離せずに剥片として分類した。

礫石器：礫を素材とした、使用によると考えられる痕跡を有する石器の総称。その痕跡の種類・形状・程度によって細別される。

凹石：凹部のみのある礫石器

磨石：磨面のみが認められる礫石器

敲石：敲打による損傷を有する礫石器

上記の三種の痕跡が複合している礫石器については「凹十磨」、「磨十敲」等のように表現した。

板状磨石：板状の礫を素材とした、磨面が広く認められる礫石器

石皿：一般に扁平な礫を素材とし、ややくぼんだ磨面が広く認められる礫石器

砥石：磨面が完全に磨滅し、小さな凹凸さえなくなった礫石器

いわゆる「折衝調整石器」については、その認定方法についての十分な検討を成し得なかったため分類は行なっていない。従って二次加工のある剥片、微細刻離痕のある剥片・剥片の中に含まれる。

2. 旧石器時代の遺物

本遺跡では、基本層序の第5層・第6層・第9層、D-3 a区での15層、I-5 b区での17層の各層上面から旧石器時代の石器が出土している。さらに、I-9 b区東壁に確認された第6層上面からの落ちこみ内埋土上面からも旧石器時代の遺物が出土している。また縄文時代の包含層・遺構埋土・表土等から出土した石器の中にも旧石器時代に属すると考えられるものが存在する。以下、各石器群について層位的に古い順に出土状況を説明する。

(1) 出土状況

D-3 a区15層とI-5 b区17層の層位的上下関係は、基本層序の項で述べたように対比が困難な状況のため、便宜的にD-3 a区から記載する。

D-3 a区15層上面出土の石器群 (第11図、第13図、第14図、写真1-3~7)

D-3 a区の北半部1.5×3mの範囲を深掘区とした。径約1mの円内のしかも円周寄りに並ぶ状態で石器が5点出土している。いずれも層理面である15層上面に貼り付く状態で、かつほとんどレベル差をもたずに出土している。段丘礫層は、西壁付近から南東方向に傾斜しながら深掘区の約1/3に広がり15層の下へもぐり込む。15層は残りの約2/3にほぼ水平に広がる。石器は石斧1点、スクレイパー3点、剥片1点の計5点で狭義の石器 (Tool) が多い。石器以外に炭化物等の遺物は出土していない。なお、スクレイパー1点が北壁にかかっており、石器の分布の広がりも北側へ伸びる可能性がある。

I-5 b区17層上面出土の石器群 (第11図、第15~19図、写真1-8、9)

I-5 b区の南半部1.5×3mの範囲を深掘区とした。約1.3×1.5mの楕円状の範囲に石器が15点出土した。いずれも層理面である17層上面に貼り付くか、若干17層にくい込んで出土している。17層は南東方向へ緩く傾斜している。石器は、スクレイパー7点、エンド・スクレイパー1点、石核3点、剥片3点、両極剥離痕ある石器1点の計15点である。石器以外に、土層中にある自然石とは石質の異なる礫や礫片が3点出土している。炭化物は検出されていない。なお石器5点が北壁にくい込んでおり、石器の分布の広がりも北側へ伸びる可能性が高い。

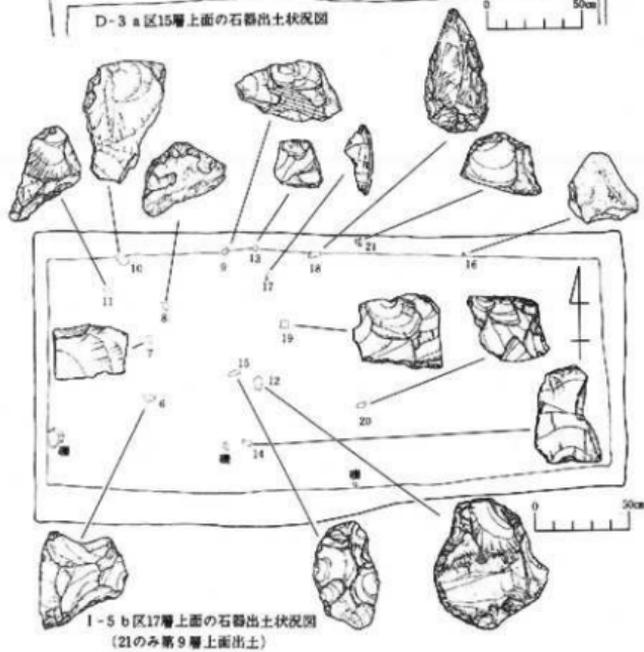
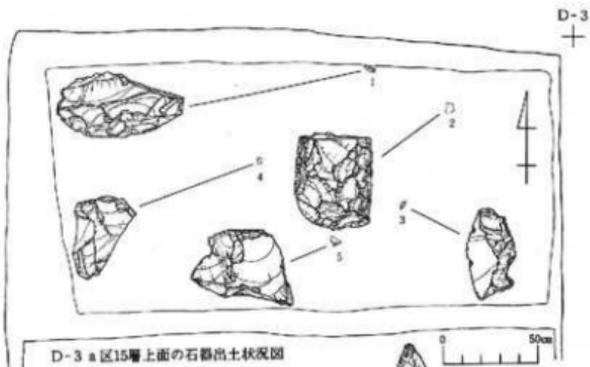
第9層上面出土石器 (第20図21図、写真15-21)

I-5 b区の北壁から二次加工ある剥片が1点出土している。石器は層理面である第9層上面ののった状態で出土している。

第6層上面出土石器群

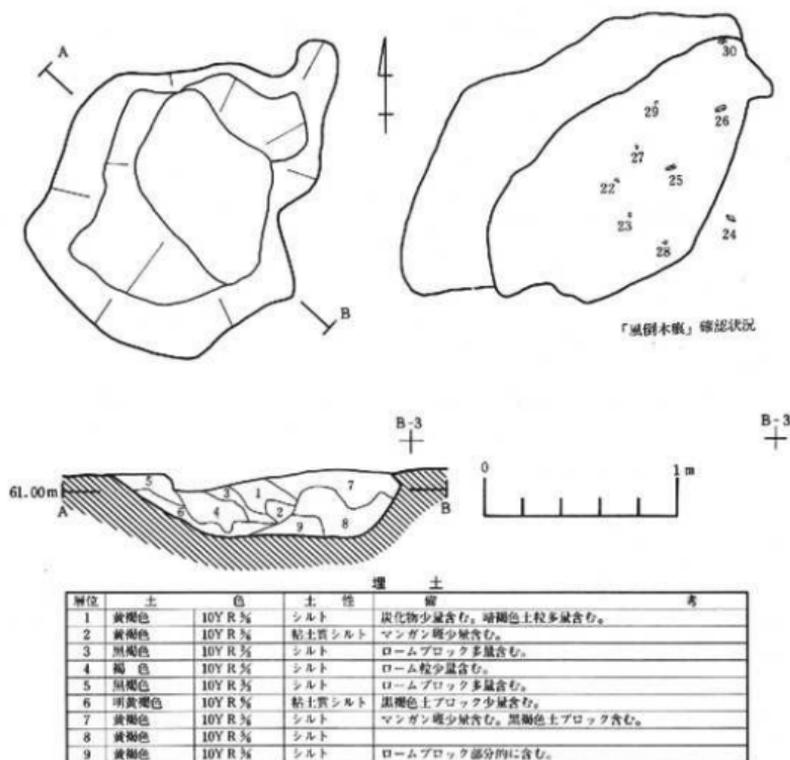
23号土壌の壁面から剥片が3点出土している。また、I-9 a区の東壁に確認された第6層上面からの落ち込みの埋土上面から、スクレイパー1点、剥片2点の計3点が出土している。落ち込みの埋土は第5層堆積以前の堆積層であるから、第6層上面の時期に近いと考えられる。

第5層上面出土の石器群 (第12図、第20図22~25、第21図、写真1-10)



第11図 旧石器時代の石器出土状況図(1)

A-3 d区の東半部において、約1.5×2.3mの不整楕円形のプランが確認された。プラン内の南東部分には第5層起源のロームの盛り上がり、北西部分には黒色土がある。この不整形のプランは調査の結果落ち込みを形成しており、プランが不整形であること、底面の凹凸が激しいこと、黒色土がロームの盛り上がりの下にもぐり込むことなどの特徴があげられる。これらの特徴は「風倒木痕」にみられる特徴と一致する（石器文化談話会：1981）。形成時期は、流れこんだ黒色土中の土器より、縄文時代前期以降と考えられる。埋土が比較的レベルであることや、ロームの盛り上がりを形成している第5層が黒色土による激しい攪乱を受けていないこと、石器が面的まとまりをもつことなどから、石器をのせた状態の第5層が根により若干隆起ないしずれを生じた程度の「風倒木痕」と判断される。したがってロームの盛り上がりの上ののっていた石器群は、厳密な意味での原位置は保っていないが、一括性を保っていると判断される。



第12図 旧石器時代の石器出土状況図(2)

このことより第5層上面出土のものに相当すると考えられる。石器は、スクレイパー5点、ノッチ1点、二次加工ある剥片1点、石刃^(注1)2点の計9点出土している。

縄文時代の包含層等より出土した石器

縄文時代の包含層、遺構の埋土、表上等から、ナイフ形石器など旧石器時代の石器の可能性のあるものが計14点出土している。

(2) 石器群について

ここでは、属性表との重複を避けるため個々の石器の説明は省き、各石器群の特徴を述べることとする。ただし、I-5 b区第9層上面出土の石器は1点のみである。また23号土壌の賦面、I-9 b区東壁より出土した石器は面的広がり調査し得なかった。従って、石器群としての特徴を充分に把握しかねたため、上記の石器群については言及しない。よって、それ以外の石器群の特徴について述べる。なお、石器の属性表は33・34頁の第2・3表である。

D-3 a区15層上面出土の石器群 (第11図、第13図、第14図、写真13-1~5)

出土石器点数は15点のみである。その特徴は次のようにまとめることができる。

- ①同一母岩の資料はない。
- ②厚い剥片を素材としている。
- ③バルブはよく発達している。
- ④背面の面構成は、^(注2)腹面の剥離方向と^(注3)同方向からの剥離面を主体とし、^(注4)その中でさらに横方向からの剥離面を含むものが1点ある (第14図4)。
- ⑤錯向剥離が施されているものがある (第13図1)。
- ⑥二次加工が施された2縁辺が鋭角に互いに交わるスクレイパーがある (第14図5)。
- ⑦両面加工の石器がある (第13図2)。

I-5 b区17層上面出土の石器群 (第11図、第15~19図、写真13-6~9、写真14、写真15-19・20)

出土石器点数は15点で、石核が3点含まれる。以下に述べる特徴は、ことわりのない限り石核3点を除く。

- ①同一母岩の資料はない。
- ②やや薄い剥片を素材としている。
- ③バルブの発達しているものが多い。
- ④自然面を打面としているものが多い (9点中6点)。
- ⑤背面の面構成は、腹面の剥離方向に対して横方向からの剥離面を含むものが多い (12点中7点)。(第15図6・7、第16図11、第17図12・13、第18図17、第19図20)
- ⑥二次加工が施された2縁辺が鋭角に互いに交わるスクレイパーがある。(第15図8、第16図

11)。

- ⑦両極剝離痕のある石器^(注5)(第15図6)、両極打法により剝離された、あるいはその可能性のある剥片を素材とした石器(第16図10、第17図14、第19図20)、両極剝離痕のある石核(第18図16)が存在する。

以上、D-3 a区15層上面出土の石器群とI-5 b区17層上面出土の石器群についてそれぞれ特徴をあげたが、前述のように両者は層位的対比が困難である。しかし、石器の特徴に次のような共通点がみられ、両者にはそれ程の時間差はないと考えられる。

- ①鉛向剝離が施されている石器がある。
- ②二次加工を施された2縁辺が鋭角に互いに交わるスクレイパーがある。
- ③石質は堆積岩系の珪質岩が多い。

ただし、I-5 b区17層出土の石器群には両極打法の存在が認められるのに対して、D-3 a区15層上面出土の石器群にはそれが認められない。これは、技術の差を反映するものかもしれない。しかし、両石器群のまとまりがさらに面的に拡大するのか、或いは完結するののかについては未調査であるため、その結論を出すことはできない。

A-3 d区第5層上面出土の石器群(第12図、第20図22~25、第21図、写真15-20~30)

この石器群の特徴は次のようにまとめられる。

- ①同一母岩の資料はない。
- ②薄い小さな剥片を素材としている。
- ③石刃が2点存在する(第20図24、第21図26)。
- ④折れ面をもつものが多い(9点中5点)。(第20図23、第21図26・28~30)
- ⑤背面の面構成は、腹面の剝離方向と同方向からの剝離を主体とする。

本石器群はその内容を把握するに足る十分な資料ではないが、おそらく石刃技法の存在した時期のものであろう。

(3) まとめ

D-3 a区15層出土の石器群とI-5 b区17層出土の石器群の年代的位相付けをする上で重要となる点は以下の3点である。

- ① 仙台とその周辺地域における火山灰の年代を考える上で鍵層となる川崎スコリア層は、3万数千年前より新しく2万数千年前より古いと推定されている(板垣他：1981)。両石器群はこの川崎スコリア層より約1.1m程下位から出土しているので、その年代をさらに遡ることは確実である。
- ② 両石器群に、二次加工が施された2縁辺が互いに交わるスクレイパーが存在する。これらは従来“斜軸尖頭器”と呼ばれていたものである。

③ 両石器群には、後期旧石器時代の様相を示すような特徴がみられない。

一方、日本の旧石器時代の時代区分において、約3万年BPを境にそれ以前を前期旧石器時代、以後を後期旧石器時代とされている（岸沢：1979）。

以上のことから、D-3 a区15層上面出土の石器群とI-5 bを17層上面出土の石器群は、前期旧石器時代に属すると考えられる。

第5層上面出土の石器群の年代的な位置付けは、川崎スコリア層より上位であること、石刃技法の存在した時期にほぼ比定されることから、後期旧石器時代に属すると考えられる。

尚、第9層・第6層上面出土石器については、資料が不十分なのでここでは言及しない。

段丘礫層の上位にある「浅黄色粘土質土層」の形成過程は基本層序の項で詳述した（6頁）つまり、各層は、直上の層が形成されるまでの期間地表面として人間の生活圏に組み込まれていたことが十分に考え得るのである。石器群が層面に貼り付く状態で、しかも集中地点を形成して出土していることは、このことを裏付けるものである。

本遺跡から約200m南に位置する山田上ノ台遺跡（仙台市教委：1981）では、旧石器時代の遺物が層的に出土しており、大まかに段丘礫層・浅黄色の粘土質の層（山田上ノ台遺跡の15層以下に相当）・火山灰層と捉えられる層も本遺跡と共通している。本報告においては時間的制約により、両遺跡の石器群の比較検討は成し得なかったが、山田上ノ台遺跡・北前遺跡と相次いだ成果は、名取川の形成する段丘上に同様の遺跡が多数存在することを予想させ、宮城県北部の座敷乱木遺跡等の成果と共に日本の旧石器文化、特に前期旧石器文化を考える上で重要かつ貴重な資料を提供するものといえる。しかし、これらの前期旧石器時代の資料の増加により必然的に生ずる問題——周知の資料の再検討や、前期旧石器時代の細分、石器群の内容把握等——は、今後の研究の進展に待たなければならない。

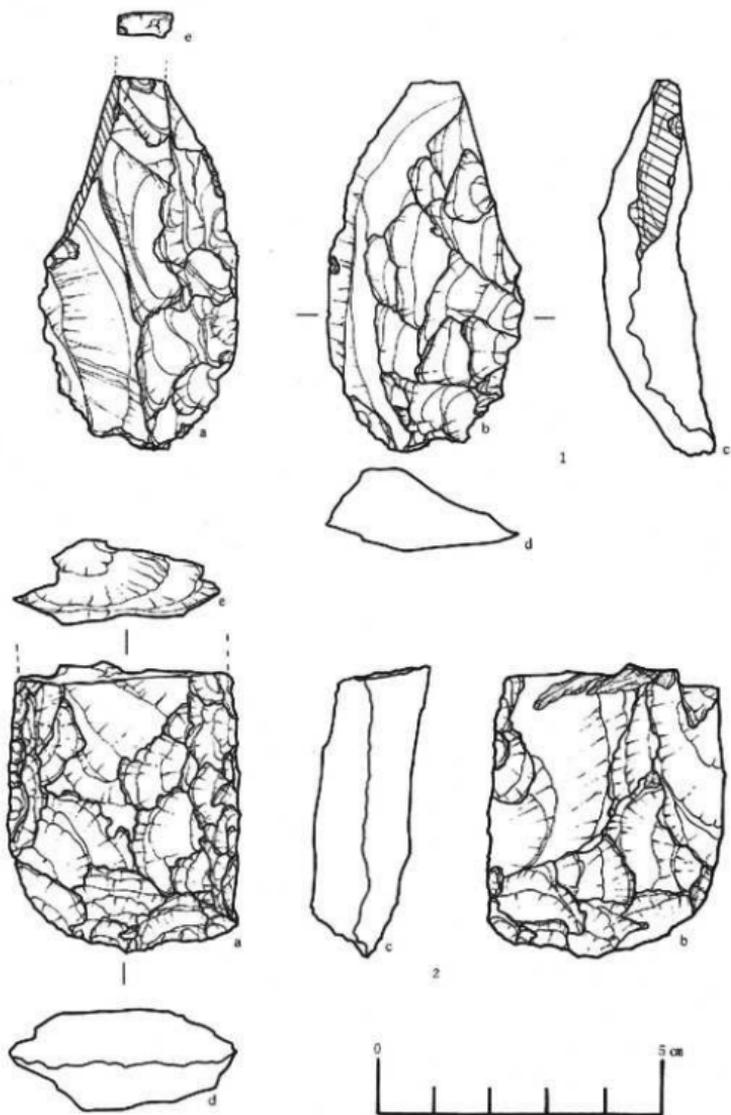
（注1）便宜的にボルド（岸沢他訳：1971）の定義に従っておく。

（注2）背面とは、主要剥離面の反対側の面である。

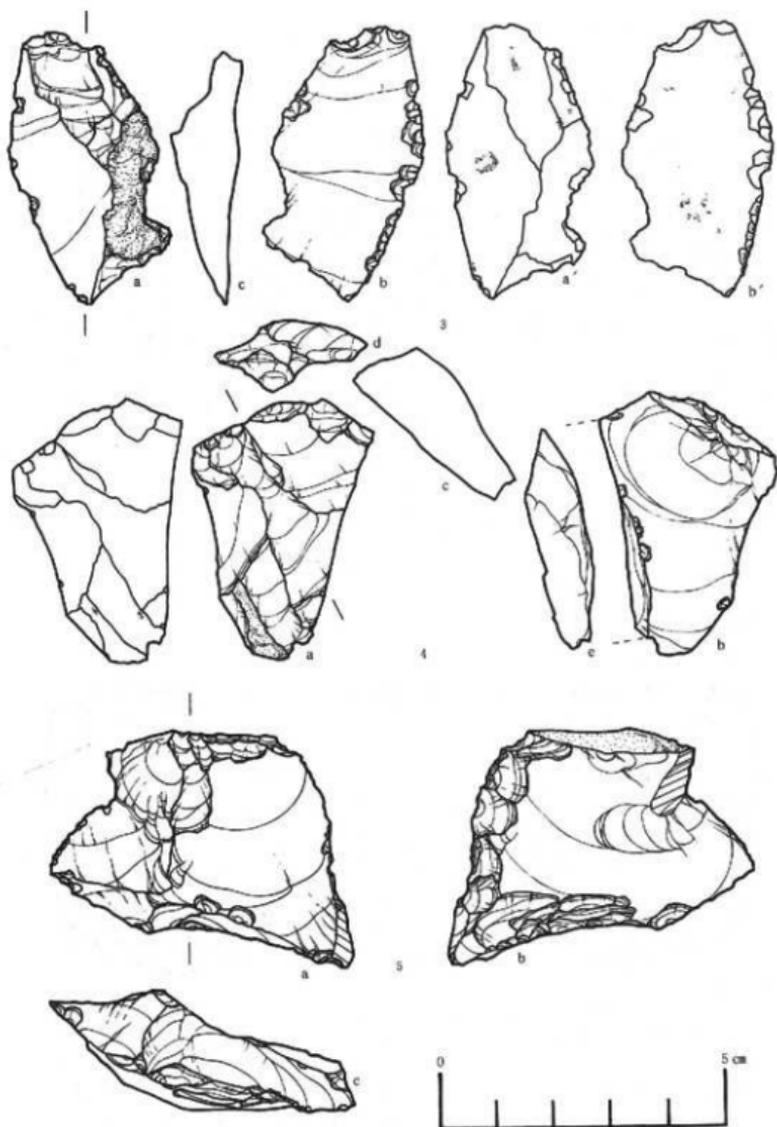
（注3）腹面とは、主要剥離面である。

（注4）この連続した二次加工は尖端部を作出している調整ではないので、あえて「斜軸尖頭器」という名称は用いない。

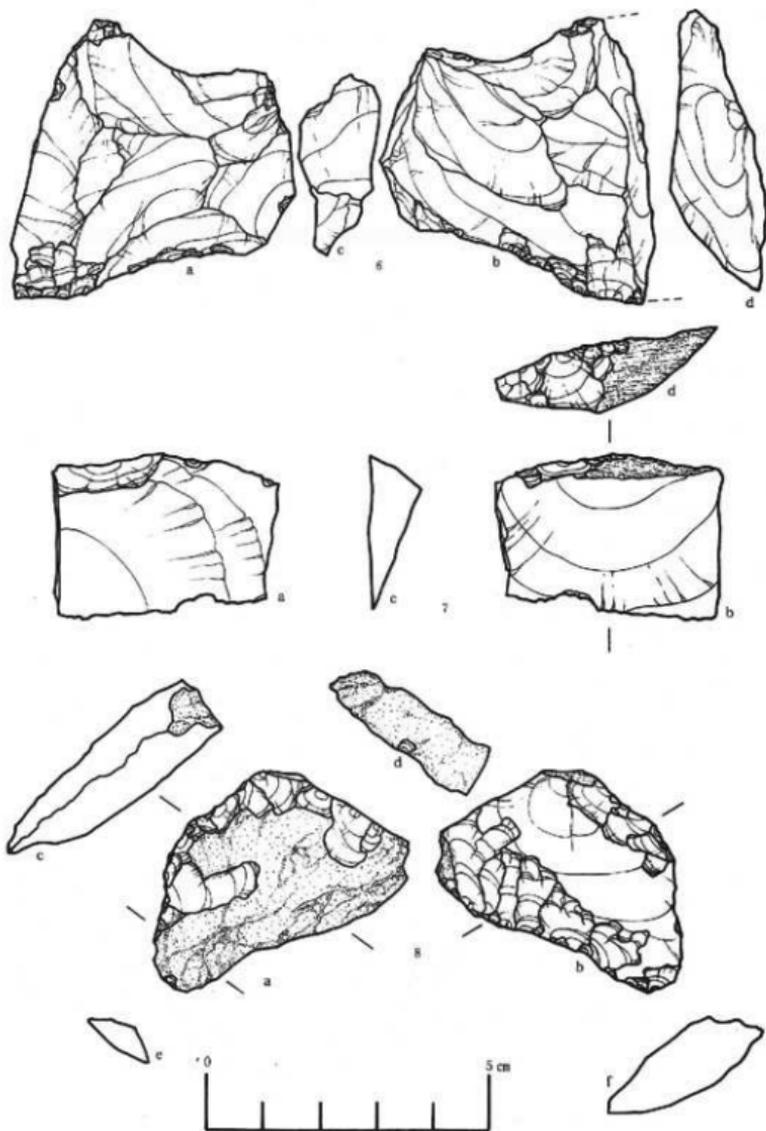
（注5）この石器群の中には、石器の素材となっているものに両極剥離の痕跡が認められることから、剥片剥離技術としての両極剥離の存在が十分に考えられる。従来ピエス・エスキューとして認定されてきた1群の中には、この剥片剥離技術によって生じたものも含まれるであろう。従って、ここで釜山遺跡（河部：1979）や礫石遺跡（岸沢他：1974）で捉えられたピエス・エスキューと同じ特徴を有するものをピエス・エスキューとすることは必ずしも意味をもたない。故にここではこの名を用いておく。なお、本遺跡の縄文時代の石器では、剥片剥離技術としての両極剥離の存在がうかがえるものが確認されていないので、ピエス・エスキューというまとまりを捉えておく。



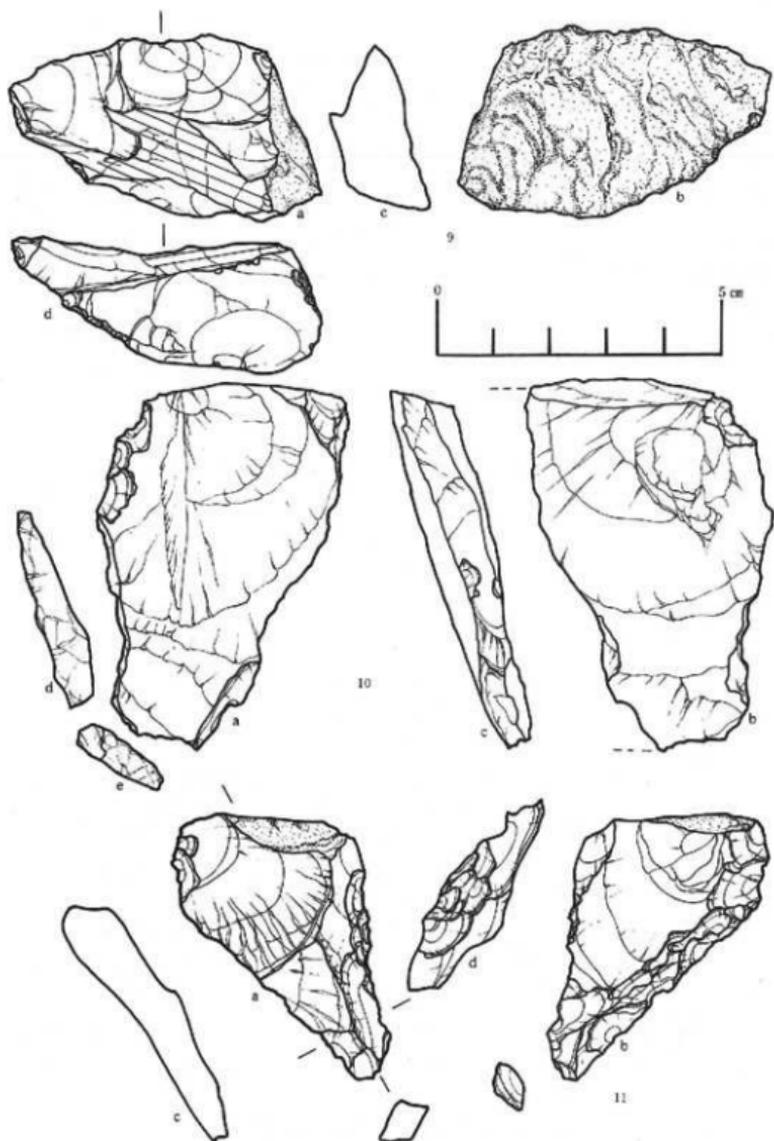
第13图 D-3 a区15層上面出土石器 (旧石器時代)



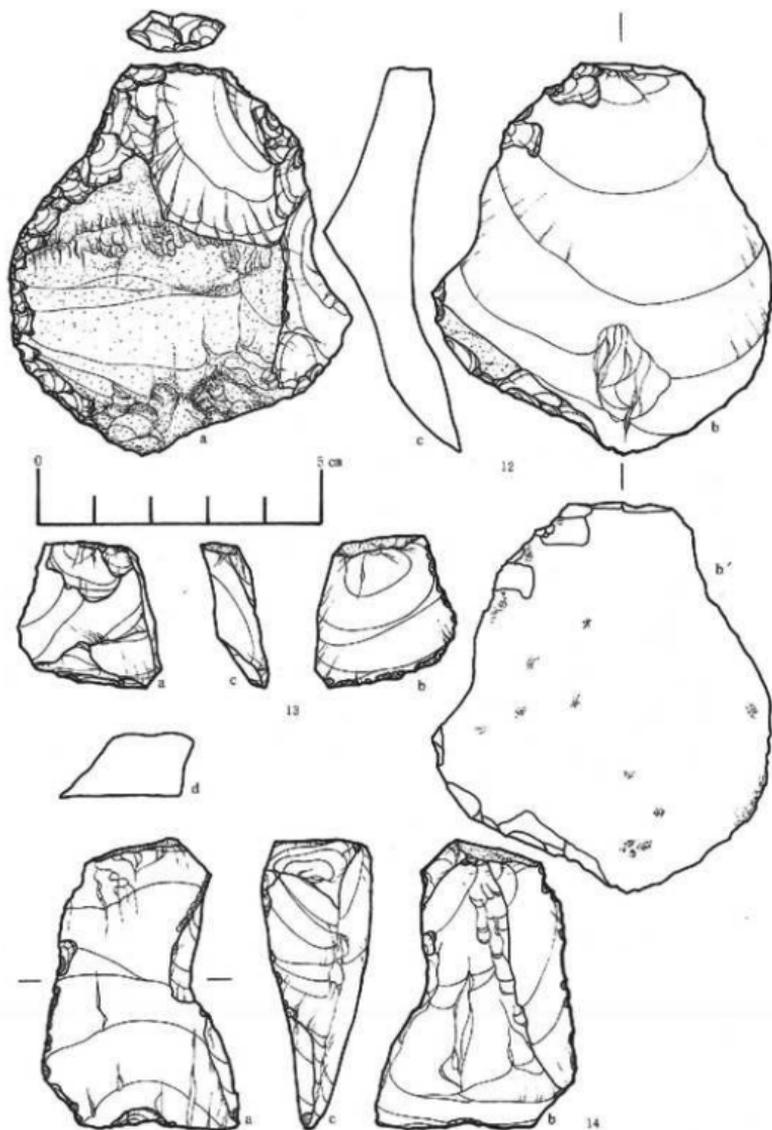
第14圖 D-3 a区15層上面出土石器 (旧石器時代)



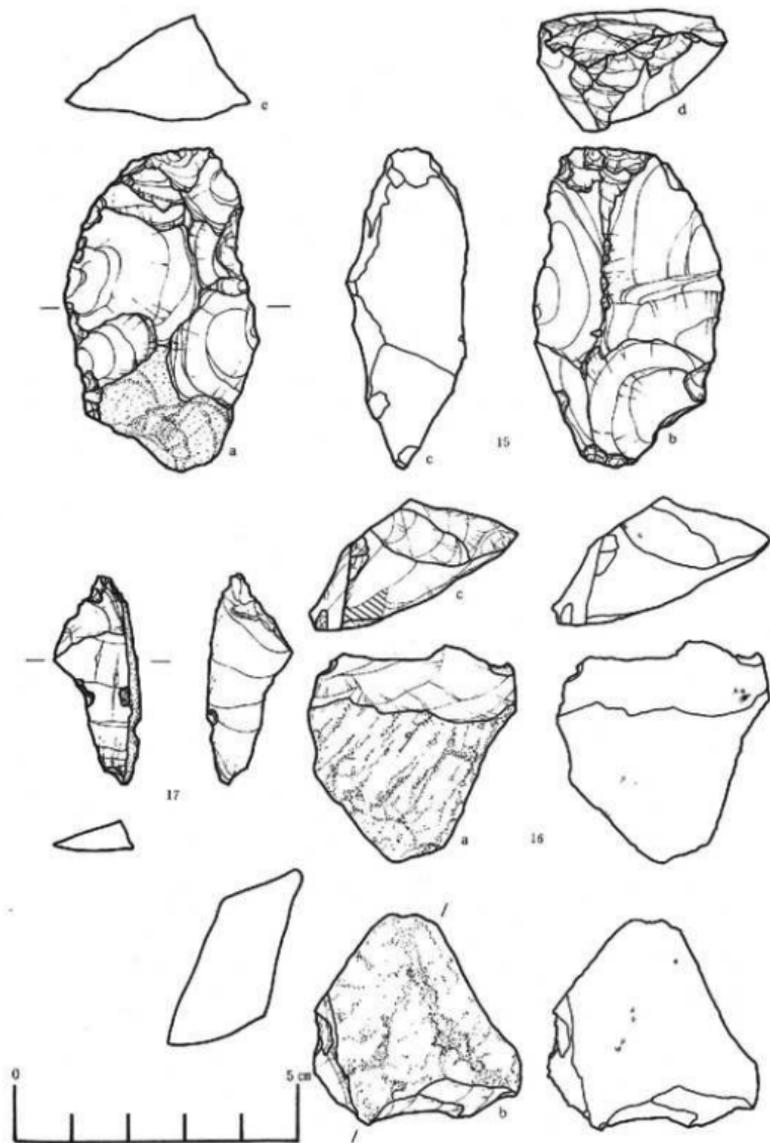
第15图 1-5 b区17層上面出土石器 (旧石器時代)



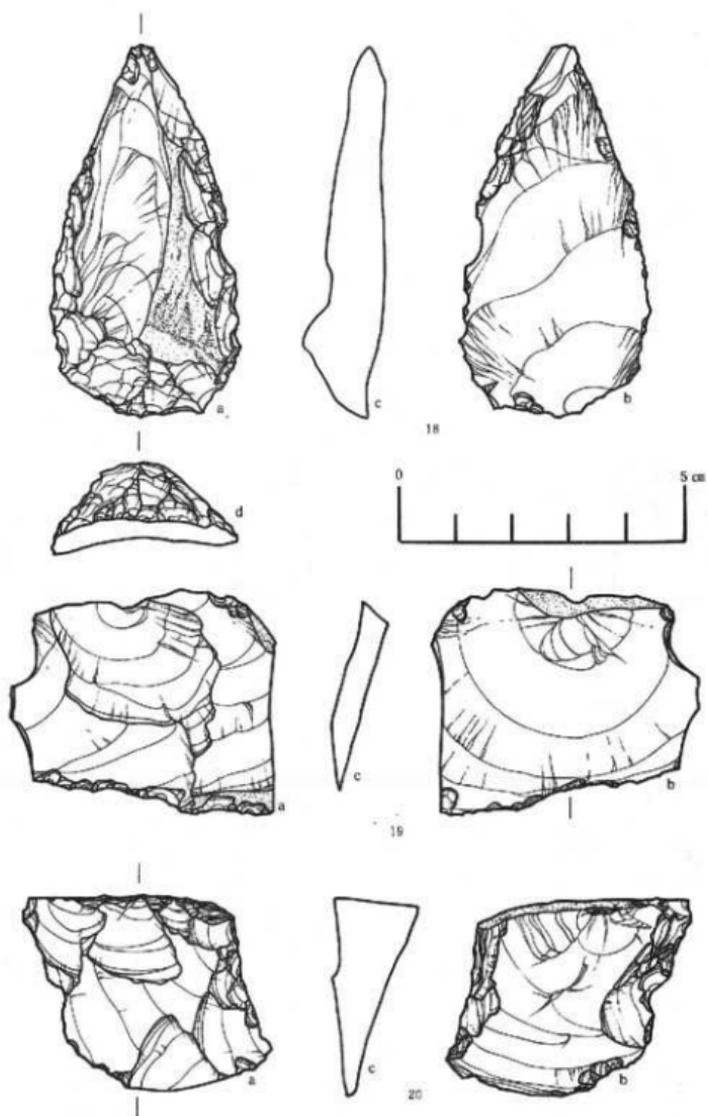
第16图 1-5 b区17層上面出土石器(旧石器時代)



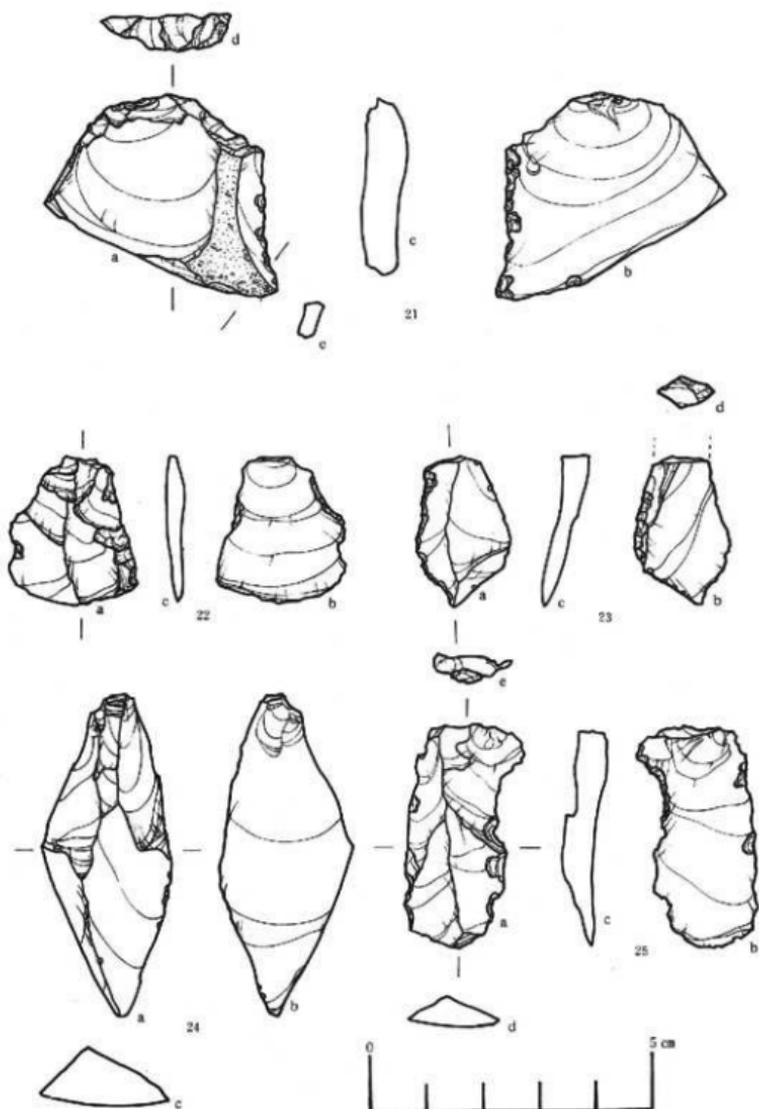
第17图 1-5 b区17層上面出土石器 (旧石器時代)



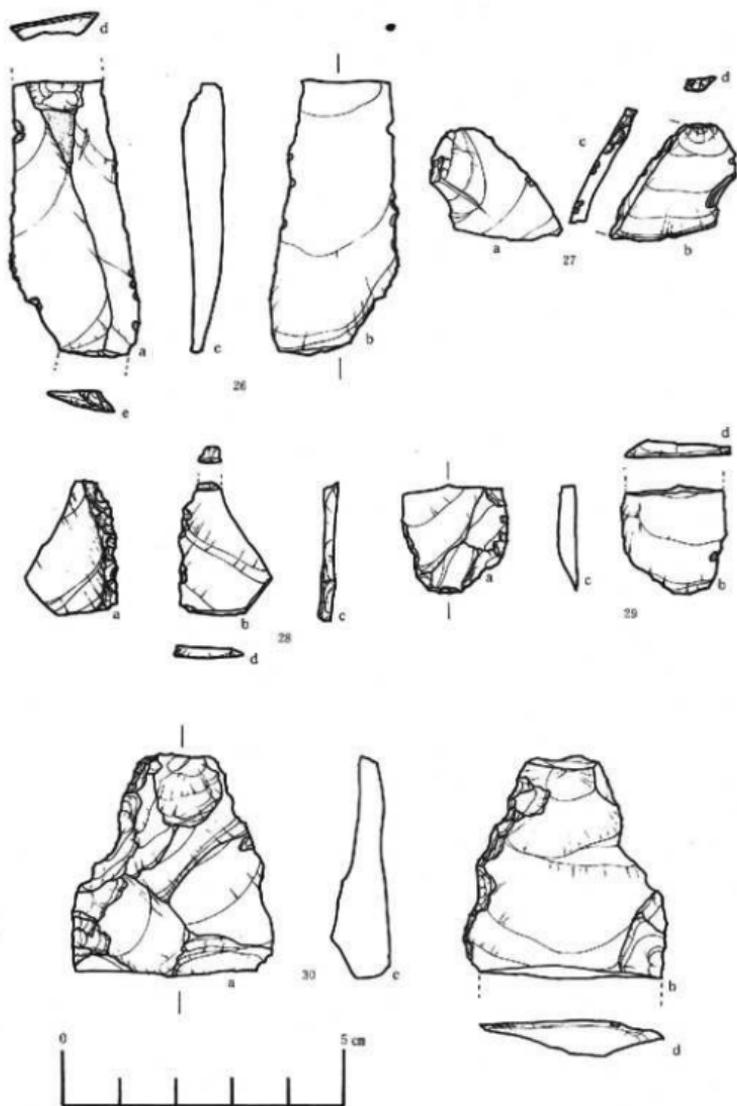
第18图 1-5 b区17層上面出土石器 (旧石器時代)



第19图 1-5 b区17層上面出土石器(旧石器時代)



第20图 1-5 b区第9層上面出土石器 (21·旧石器時代)
A-3 d区第5層上面出土石器 (22~25旧石器時代)



第21回 A-3 d区第5層上面出土の石器 (旧石器時代)

3. 縄文時代早期の遺構と遺物

1号住居跡 (第22図、写真2-1)

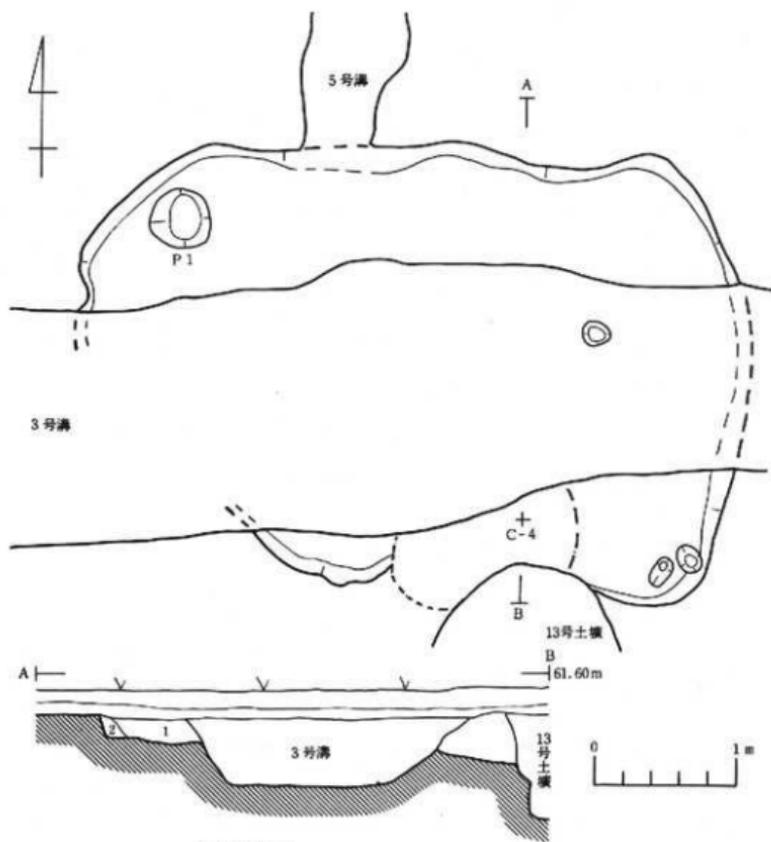
本住居跡は、調査区の北東部B-3・4区、C-3・4区に位置する。住居プランは4層上面で確認された。本住居跡は、3号溝、5号溝、13号土壁に切られている。したがって、住居跡中央部はまったく不明である。規模および形態は、明確な計測はできないが、長軸4.60m、短軸3.14m、深さ22cmの不整の隅丸長方形である。埋土は、少なくとも2層あるいはそれ以上の土層によって構成されていたと考えられる。床面は、残存部分ではほぼ平垣であり、壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。床面上にはピットが3個検出されているが、このうち住居跡に伴うものはP₁であり、他は後世のものである。出土遺物は、早期末の上器片40点、石器は剃片4点(第2表)である。出土土器などから判断して本住居跡は、縄文時代早期末のものである。

図示し得た土器は第22図1・2である。他はいずれも細片である。1は、第2群2類bで、内面に捺痕が認められる。胎土には繊維をわずかに含む。2は、第2群2類aで、内面に極めて不明瞭な条痕文が認められる。

2号住居跡 (第23図、写真2-2)

本住居跡は、調査区南東部のG-4・5区に位置する。住居プランは5層上面で確認された。明確な切り合い関係をとらえることはできなかったが、1号土壁や3号住居跡、そして本住居跡と3号住居跡との間に存在する落ち込みと切り合っている。このうち、3号住居跡については、土層の観察から本住居より古い住居と考えられる。また、南東部は削平のため、明確なプランをおさえることができなかった。規模および形態は、長軸約3.90m、短軸3.60m、深さ23cmの不整の隅丸方形、あるいは楕円形を呈する。埋土は、4層で構成されている。断面は皿状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。床面上には、ピットが16個検出されている。このうち、P₁は比較的しっかりしており主柱穴と考えられるが、他は明確にしがたい。壁際のピットは、壁柱穴と考えられる。プランの西寄りに土壁が1基検出されている。この土壁は、規模が長軸95cm、短軸約65cm、深さ15cmの楕円形を呈する。本住居跡の出土遺物は、早期末の土器片53点、礫石器1点(第24表)である。出土遺物などから判断して本住居跡は、縄文時代早期末の住居跡である。

図示し得た土器は、第23図1～6である。1は、3層より出土し、第2群1類cである。本例のような菱形の沈線モチーフは、本遺跡では他に例がない。繊維・砂粒ともに少なく、焼成良好である。2は、1層より出土し、第2群2類aに属す。繊維は少なく、変って砂粒が目立つ。3は、床面下の土壁の1層から出土し、第2群1類bに属する。内面は単節多条文を施文する。胎土には白色針状物質を含む。4は、3層より出土し、第2群1類cに属する。1部に半截竹管により沈線文が施されている。刺突のある隆帯がみられることから、I類gとも共通



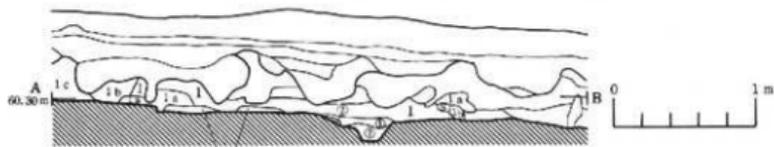
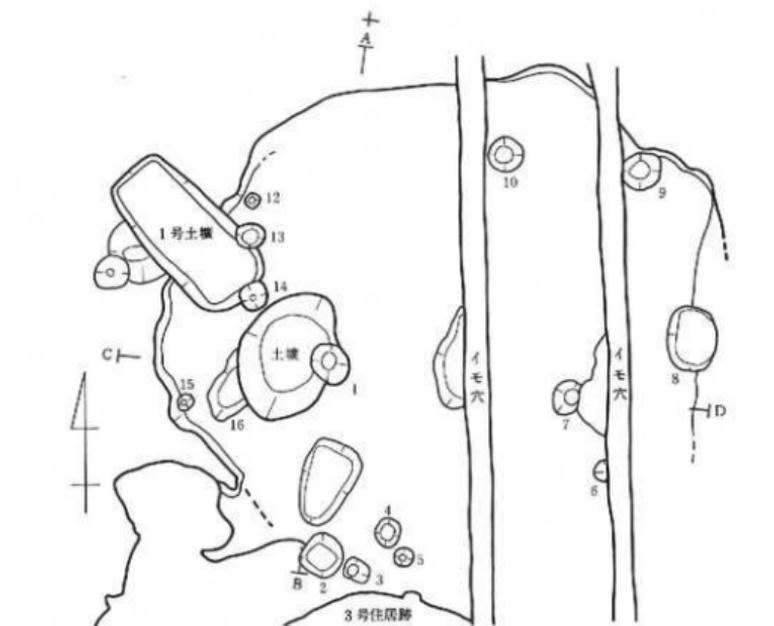
1号住居跡埋土
埋土

層位	土色	土性
1	明褐色 7.5 YR 5/6	シルト
2	褐色 10Y R 5/6	シルト



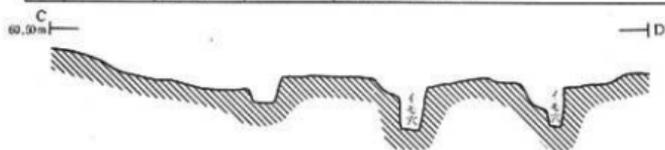
下部 0 5 cm

第22図 1号住居跡

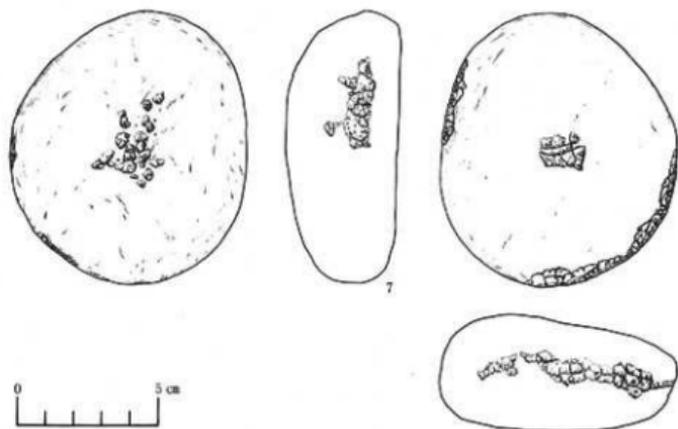
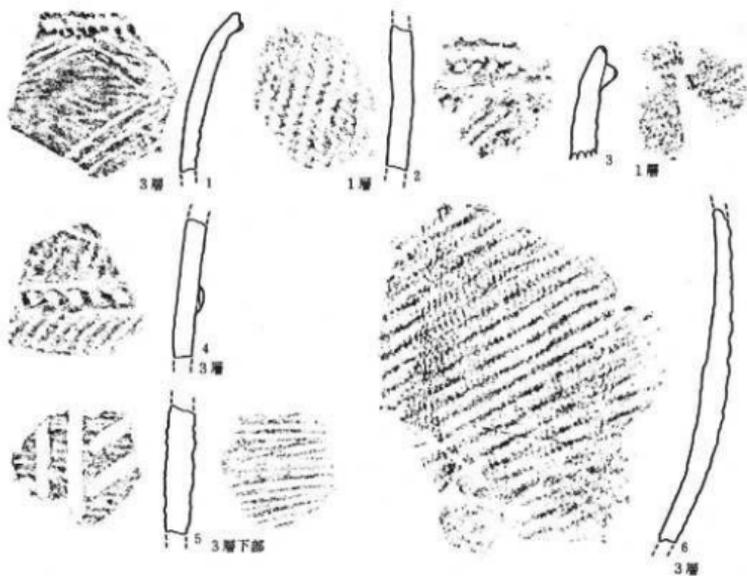


2号住居跡 埋 土

層位	土 色	土 性	留 留	考
1	暗褐色	10Y R 5/	シルト	炭化物を含む。
1a	暗褐色	10Y R 5/	シルト	
1b	褐色	10Y R 5/	シルト	ロームを多量に含む。
1c	褐色	10Y R 5/	シルト	ロームを少量含む。
1d	褐色	10Y R 5/	シルト	ロームを部分的に含む。
1	暗褐色	10Y R 5/	シルト	炭化物をまばらに含む。
2	褐色	10Y R 5/	シルト	黄褐色ブロックを含む。



第23回 2号住居跡



第24図 2号住居跡出土遺物

する。焼成良好。5は、3層より出土し、第2群2類gに属する。内面には条痕文が施される。縦線は比較的多い。6は、3層より出土し、第2群2類aに属する。外面の縄文は単節多条文である。焼成良好。

3号住居跡(第25図、写真2-3)

本住居跡は、調査区南東部G-4・5区、H-4・5区に位置する。住居プランは5層上面で確認された。切り合い関係は、2号住居跡の南東部が不明瞭なため不明な点が多いが、土層の観察によれば、2号住居跡より古いものと考えられる。規模および形態は、長軸3.56m、短軸3.49m、深さ33cmの不整の隅丸方形あるいは楕円形を呈する。埋土は、4層で構成されている。断面は皿状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。ピットは25個検出されているが、このうち主柱穴と考えられるのは、P₁~P₃、P₄~P₇の6個である。壁際に位置するものは、壁柱穴と考えられる。住居内の南側に、土壌が検出された。この土壌の規模は、長軸1.3m以上、短軸約1.05m、深さ11cmで、形態は楕円形を呈するが、北側では床面と区別がつかない。出土遺物は、早期末の土器片110点、石器は、石鏃、ポイント、敲石各1点、ピエス・エスキュー3点、ヘラ状石器1点、二次加工のある剝片3点、微細刺雑種のある剝片14点、剝片27点、チップ11点、破損礫2点(第12・13表)である。本住居跡は、出土遺物などから判断して、縄文時代早期末のものである。

図示し得た土器は、第26図1~6である。1は1層より出土し、第2群1類bに属する。内面は無文である。胎土は砂粒が目立つ。2は、1層より出土し、第2群1類bに属する。単節縄文が施され、内面はこれが横位に施文されている。縦線は少なく、砂粒が目立つ。3は第2群2類aに属する。原体はLRである。4は、1層より出土し、第2群1類bに属する。本例は唯一の波状口縁である。内面には単節多条文を施文する。5は、2層より出土し、第2群2類cに属する。縄文原体は単節多条文のようである。内面の先端に縄文の施文が認められることから、口縁部に近い資料であろう。縦線は多い。6は、2層より出土し、第2群2類dに属する。原体は内外ともにLRである。

4号住居跡(第27図、写真2-5)

本住居跡は、南東部H-4・5区、I-4・5区に位置する。住居プランは5層上面で確認された。明確な切り合い関係はなく、北側で4号溝と接し、南半は床面付近まで削平されている。規模および形態は、長軸3.48m、短軸3.32m、深さ22cmの不整の隅丸方形を呈する。埋土は、8層で構成されるが、4層~8層は木の根の影響で形成された層と考えられる。床面は、比較的平坦であるが、壁に近づくにしたがってゆるく立ち上がってゆく。また、北西部では、床面に段差が生じている。床面上には、28個のピットが検出されているが、主柱穴と考えられるものは掘り込みのしっかりしたP₁、P₄、P₁₀である。また、住居跡との関連が明確でないも

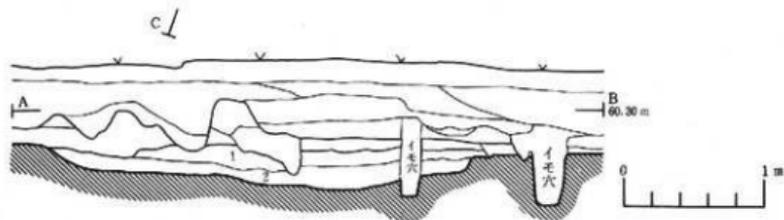
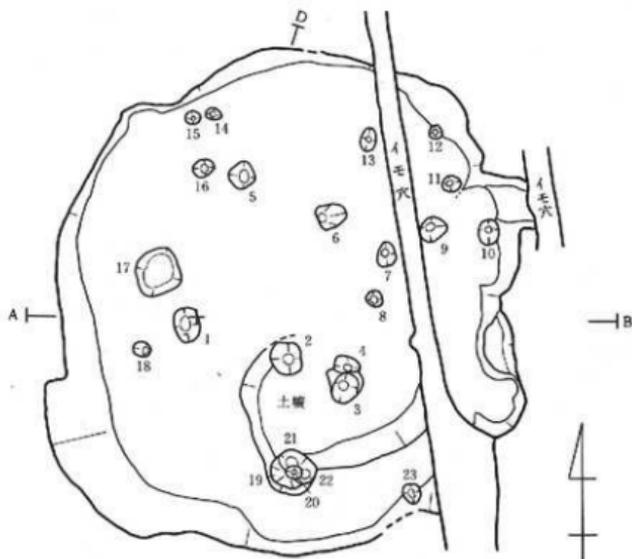
のは、P₁、P₂、P₁₃~P₁₄、P₂₀である。壁際のピットは、壁柱穴と考えられる。床面には、2号、3号住居跡同様に、南東部に浅い土壌が検出された。規模は長軸90cm、短軸81cm、深さ8cmで、形態は、不整楕円形を呈する。遺物は、早期末の土器片64点、石器は、石鏃、ポイント、スクレイパー各1点、ヘラ状石器2点、ピエスエスキュー2点、石核1点、二次加工のある剥片3点、微細剝離痕のある剥片2点、剥片19点、チップ1点(第12・13表)が出土している。出土遺物などから判断して、本住居跡は縄文時代早期末のものである。

図示し得た土器は第28図1・2である。1は、1層より出土し、第2群3類bに属する。単節斜縄文を施文する。内面には、只腹縁の圧痕が1条認められる。胎土に白色針状物質を含む。2は、1層より出土し、第2群2類fに属する。内面は条痕文が施文される。胎土には、白色針状物を含み、砂粒が多い。

5号住居跡(第29図、写真2-7)

本住居跡は、調査区中央からやや南寄りのG-6・7区、H-6・7区に位置する。住居プランは5層上面で確認された。切り合い関係は、6号住居跡を切っている。規模および形態は、長軸6.28m、短軸3.60m、深さ13cmの不整の隅丸長方形を呈する。埋土は、3層で構成されている。床面は、地形面と平行してやや南側に傾斜しているが、平坦である。ピットは、床面上や住居跡周辺部合わせて133個検出されている。このうち、P₁~P₂、P₉~P₁₄が主柱穴と考えられ、また、P₃、P₈、P₁₃~P₁₄もその可能性がある。P₁₃~P₁₄は、壁柱穴と考えられる。その他のピットについては、その性格を明確にできない。北壁中央部のやや東寄りの床面に、焼土が検出され、断面観察では、掘り込んである部分が2ヶ所確認された。したがって、この2ヶ所の濃い焼土部分は、炉であると判断される。P₁₃とP₁₄の間でP₁₃の周辺には、床面上にロームブロックが散見された。本住居跡は、部分的に主柱穴の位置変えか、北西部の壁柱穴の配置から部分的に改築を行っているようである。出土遺物は、早期末の土器片129点、石鏃9点、ポイント2点、スクレイパー3点、ヘラ状石器1点、ピエスエスキュー7点、石核1点、二次加工のある剥片17点、微細剝離痕のある剥片13点、剥片111点、磨石3点、チップ113点(第12・13表)がある。特に、P₁の北側の床面上には、ピエスエスキュー2点、剥片26点の集中地点が1ヶ所確認された。石器の出土点数が極めて多い。本住居跡は、出土遺物などから判断して縄文時代早期末の住居跡である。他の住居跡と比較した場合に、形態が異なること、面積比も約2倍近くあること、炉跡を持つこと、そして、早期の総石器数の約5割を占めることなどから、他の住居跡とは異なる性格が想定されよう。

図示し得た土器は、第30図1~5である。1はNo73ピットより出土し、第2群3類aに属する。砂粒が多い。2は1層より出土し、第2群2類bに属する。原体は単節多糸文である。3は、1層より出土し、第2群1類cに属すると考えられる。繊維は少ない。4は、No42ピット

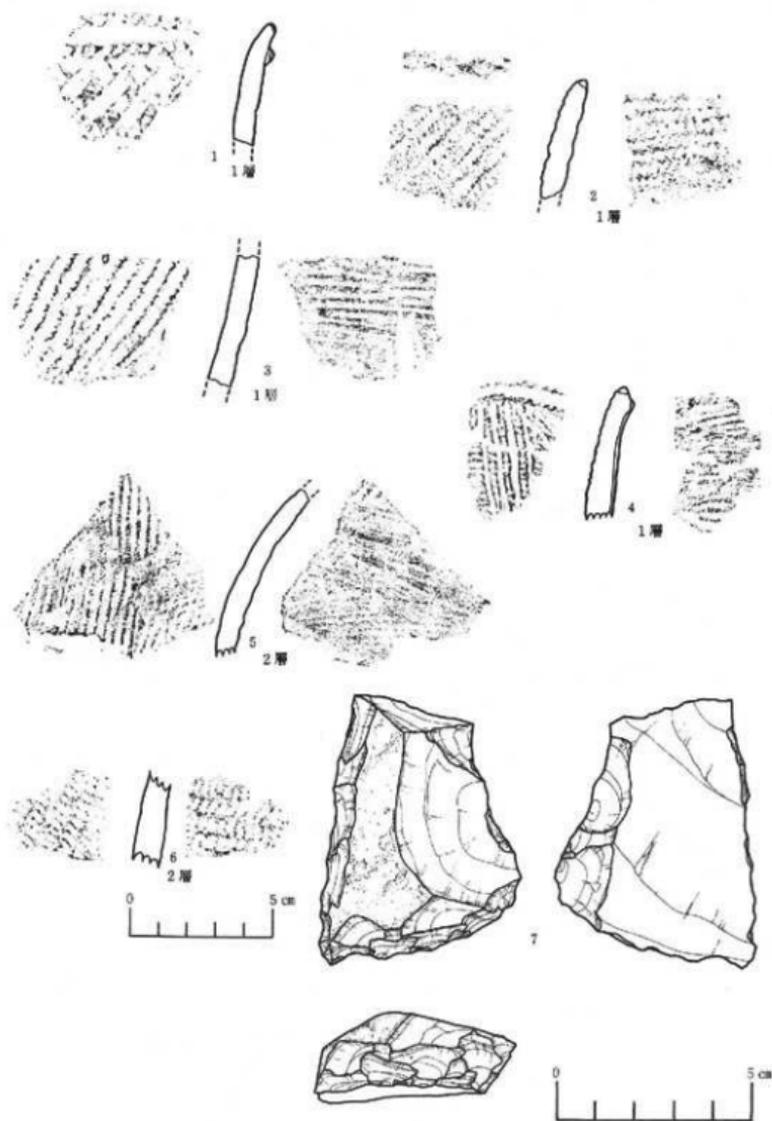


3号住居跡 埋 土

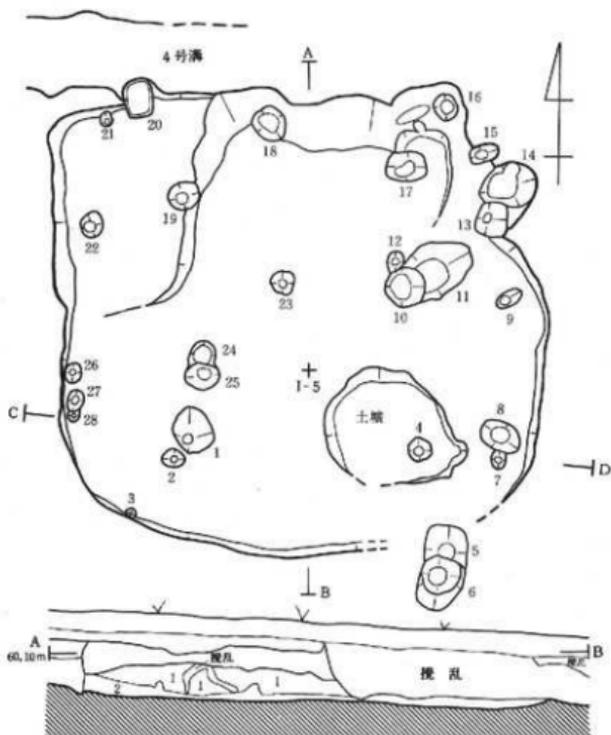
層位	土 色	土 性	備 考
1	褐色	シルト	炭化物・ロームを含む。
2	褐色	シルト	炭化物・ロームを含む。



第25図 3号住居跡



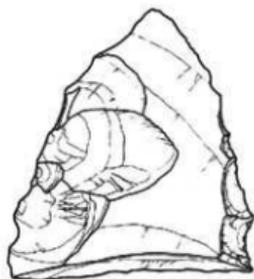
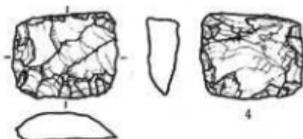
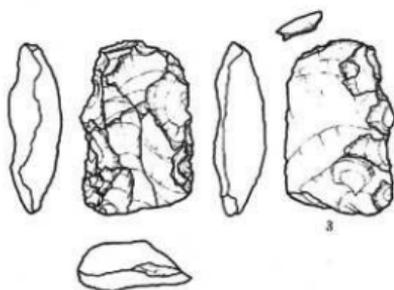
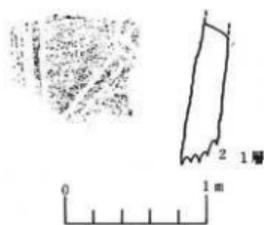
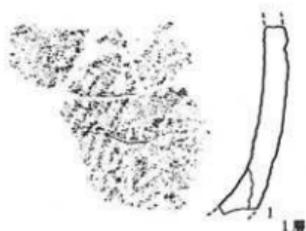
第26図 3号住居跡出土遺物



埋 土				
層位	土 色	土 性	備 考	
1	暗褐色	10Y R 7/4	シルト	ローム 粒子・円礫 (約5cm) を含む。
2	褐色	10Y R 7/4	シルト	ロームブロック・炭化物を少し含む。



第27図 4号住居跡



第28图 4号住居跡出土遺物

より出土し、第2群1類cに属する。胎土は白色砂粒を多量に含む。5は、2層より出土し、第2群1類aに属する。内面の原体は単節多条文であろう。

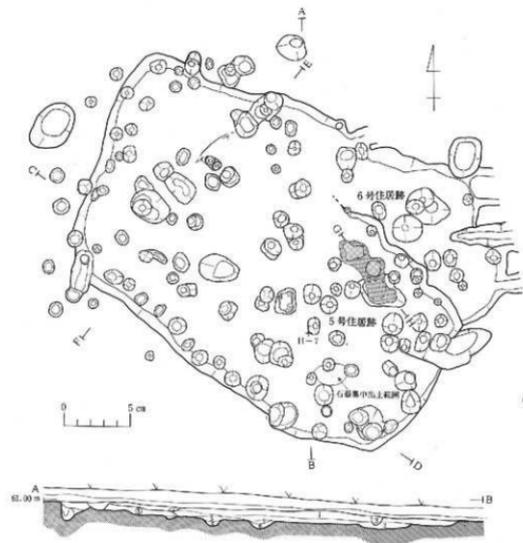
6号住居跡（第29図、写真2-7）

本住居跡は、調査区中央からやや南寄りのG-6・7区に位置している。住居跡の検出面は、第5層上面である。本住居跡は、5号住居跡によって南側約1/3を切られている。規模および形態は、明確なプランがつかめないが、5号住居の北西部床面上にゆるい段差が認められることから、長軸約5.00m、短軸約3.50m、深さ10cmの不整の隅丸長方形を呈すると考えられる。埋土は、明確ではないが、残存部分では1層で構成されている。床面は、やや南側に傾斜しているものの、ほぼ平坦である。壁はゆるく立ち上がる。主柱穴は明確ではないが、 P_{68} ～ P_{67} が最も可能性があると考えられる。 P_{68} から P_{67} 付近にかけてゆるい段差があり、本住居のプランの可能性が高い。出土遺物は、早期末の土器片25点・石鏝1点・石核1点・二次加工のある剥片2点・微細刻離痕のある剥片1点・剥片7点(第12・13表)である。出土遺物などから判断して縄文時代早期末の住居跡である。土器は細片のみで図示できない。

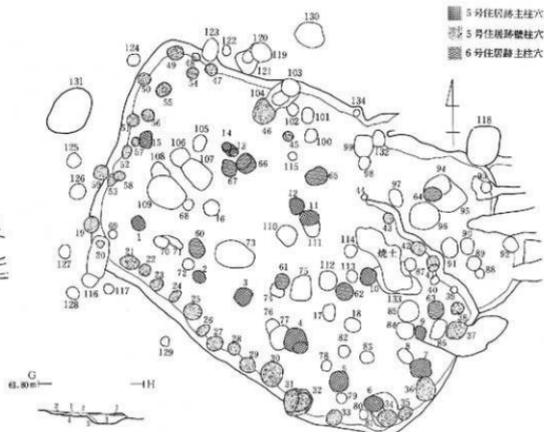
7号住居跡（第31図、写真2-6）

本住居跡は、調査区南部1-7・8区を中心に位置する。住居跡の検出面は、第5層中である。この検出面については、4号溝に囲まれた南側の部分で4層・5層が確認できなかったことから、4号溝の構築時かあるいはその前後の時期に削平を受けた結果と考えられる。したがって、本住居跡ではほとんど床面のみが検出された。江戸時代以降のビットに切られ、また、10号土壇と切り合い関係にあるが、新旧は不明である。規模および形態は、長軸4.27m、短軸3.01m、深さ17cmの不整の隅丸長方形を呈する。埋土は、4層で構成されている。壁の立ち上がりは不明である。床面は皿状を呈し、17個のビットが確認された。このうち、 P_1 、 P_2 、 P_3 、 P_{11} 、 P_{12} が主柱穴と考えられ、さらに、 P_1 、 P_2 についてもその可能性が認められる。床面中央の西側に、土壇が1基検出された。規模および形態は、長軸1.21m、短軸0.82m、深さ22cmの楕円形を呈し、その位置は、1号住居跡と共通する。土壇の底は、さらに段差がある。本住居跡の出土遺物は、早期末の土器片99点、ピエスエスキューズ2点、石核1点、微細刻離痕のある剥片1点、剥片7点、凹石1点、磨石2点(第12・13表)などである。これらのことから判断して、本住居跡は縄文時代早期末のものである。

図示し得た土器は、第32図2～5である。2は、1層より出土し、第2群2類aに属する。繊維を多く含む。3は、1層より出土し、第2群1類aに属する。幾何学的な文様がくずれて曲線文となる。繊維を多く含む。4は、1層より出土し、第2群1類bに属する。胴部文様の原体は単節多条文と考えられる。5は、4層より出土し、第2群2類bの土器を利用した円盤状土製品である。全周の約半分を研磨している。

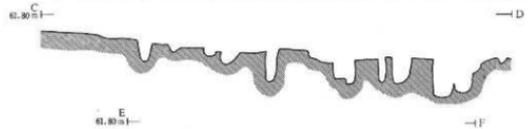


5号・6号住居跡 埋土				
層位	土色	土性	備	考
5号住居跡				
1	暗褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	
2	暗褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	黄褐色土粒・炭化物を少量に含む。
3	暗褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	黄褐色粘土粒・炭化物を含む。
4	褐色	7.5 Y R 5/6	粘土質シルト	黄褐色土層内
5	暗褐色	7.5 Y R 5/6	粘土質シルト	
6	褐色	7.5 Y R 5/6	粘土質シルト	
6号住居跡				
1	褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	

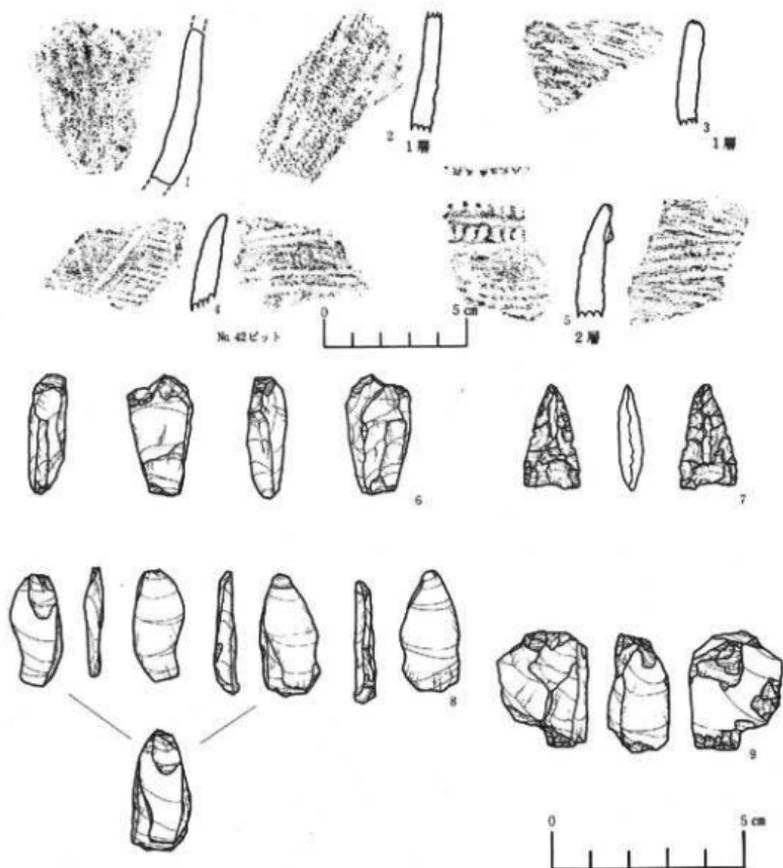


埋土

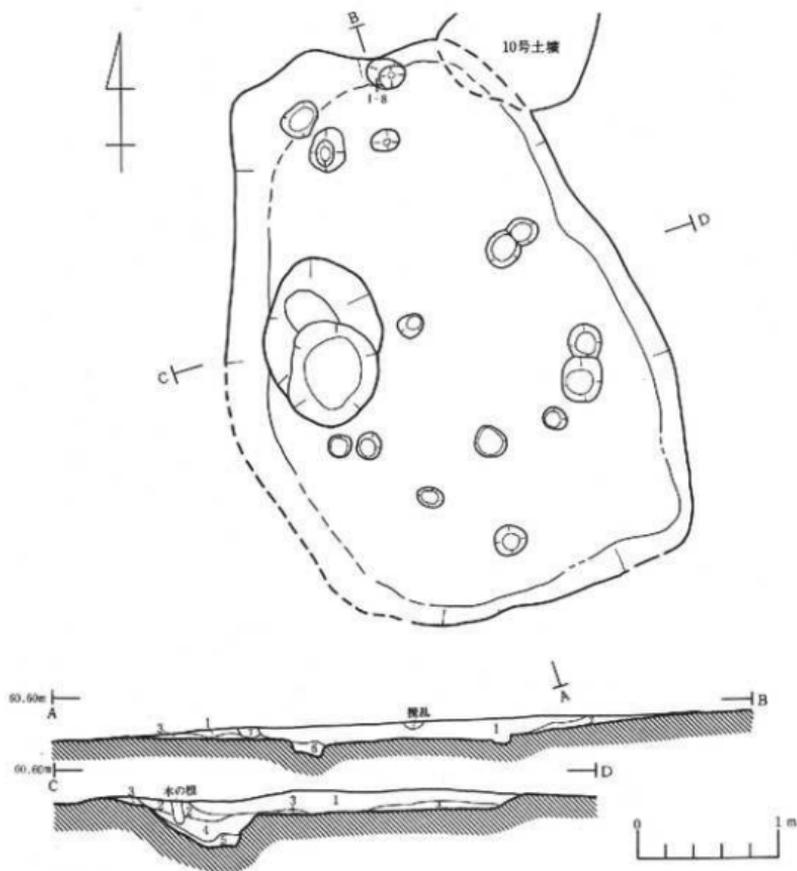
層位	土色	土性	備	考
1	暗褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	炭化物含む。
2	暗褐色	2.5 Y R 5/6	シルト	黄 土
3	暗褐色	10Y R 3/6	シルト	炭化物含む。
4	褐色	10Y R 5/6	シルト	
5	褐色	10Y R 5/6	シルト	



第29図 5号住居跡・6号住居跡



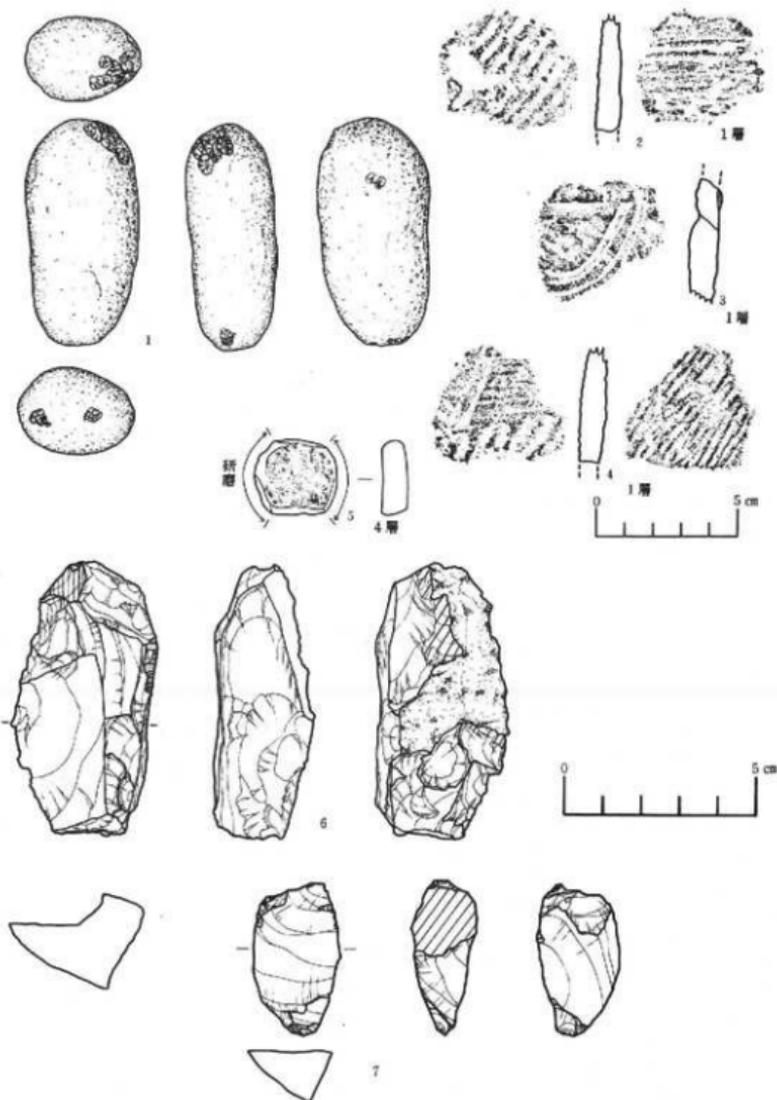
第30図 5号住居跡出土遺物



7号住居跡埋土

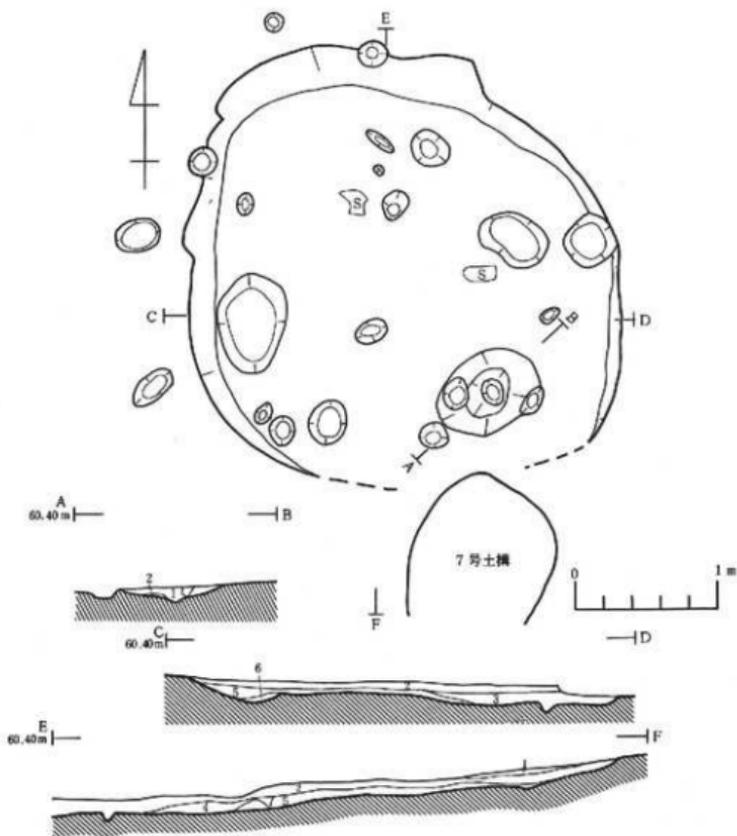
層位	土色	土性	留	考
1	暗褐色 7.5 YR 3/5	シルト	炭化物 (5-1mm) を少量含む。	
2	暗褐色 10Y R 3/5	シルト	焼土 (1mm) を微量含む。	
3	褐色 10Y R 3/5	シルト	ロームをブロック状に含む。	
4	暗褐色 10Y R 3/5	シルト	ローム・焼土・炭化物を含む。	
5	明黄褐色 2.5 YR 3/5	粘土質シルト	暗褐色土をブロック状に少量含む。	
6	黄褐色 10Y R 3/5	粘土質シルト		
7	黒褐色 10Y R 3/5	シルト		

第31回 7号住居跡



第32图 6·7号住居跡出土遺物

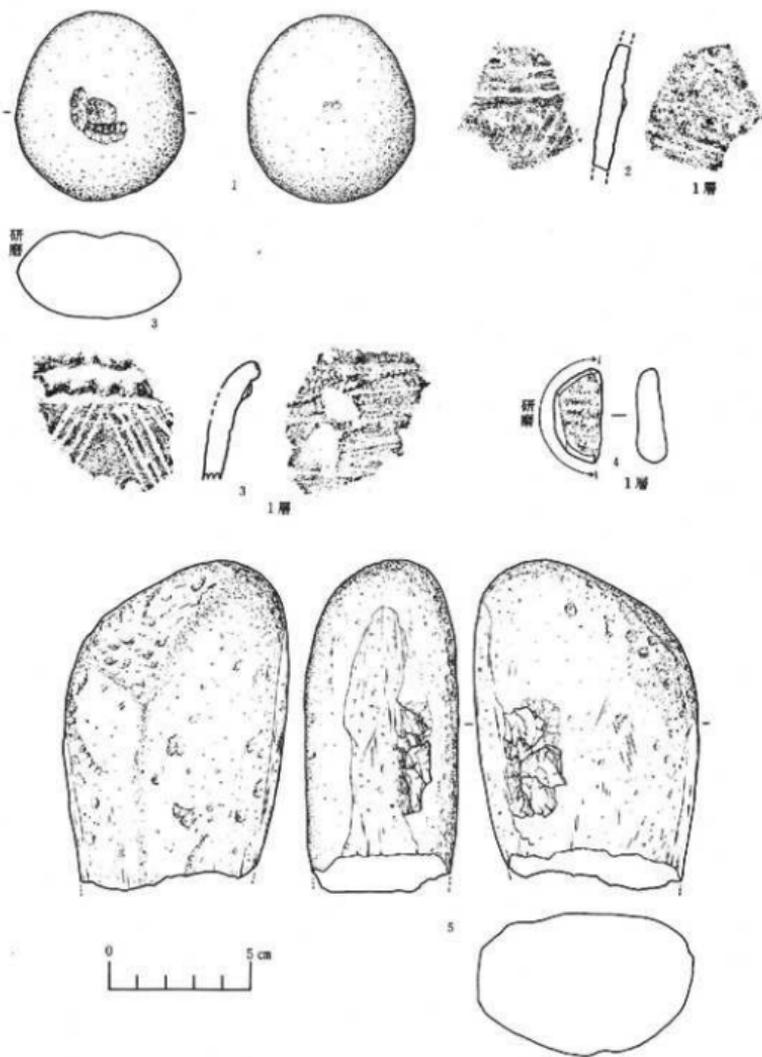
(1. 6号住居跡、2~7. 7号住居跡)



8号住居跡 土

層位	土 色	土 性	備 考
1	暗褐色 7.5 YR 3/7.5	YR 土	基本層位3層に相当する可能性あり。
2	褐色 7.5 YR 3/4	シルト	
3	褐色 10Y R 3/4	シルト	
4	暗褐色 7.5 YR 3/4	シルト	
5	褐色 7.5 YR 3/4	シルト	
6	褐色 10Y R 3/4	シルト	土壌埋土
南側土壌			
1	暗褐色 7.5 YR 3/4	シルト	
2	暗褐色 7.5 YR 3/4	粘土質シルト	

第33図 8号住居跡



第34图 7·8号住居跡出土遺物 (1. 7号住居跡、2~4. 8号住居跡)

8号住居跡 (第33図)

本住居跡は、調査区南部の中央1-6・7区に位置する。住居跡の検出面は、7号住居跡と同様に上部が削平されているため明確な判断はできないが、第5層中である。本来は、第5層上面であろう。本住居跡は、36号土壌に切られ、7号土壌と切り合っている。しかし、この7号土壌との新旧関係は不明である。規模および形態は、長軸約3.30m、短軸3.06m、深さ17cmの不整楕円形、あるいは隅丸方形と考えられる。埋土は4層で構成されている。床面は、肌状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。また、床面上にはピットが3個確認された。このうち、P₁、P₂、P₃、P₄に上柱穴の可能性が認められる。また、住居の西側および南側に、土壌が1基ずつ確認された。西側の土壌は、長軸70cm、短軸49cm、深さ11cmの楕円形を呈する。南側の土壌は、長軸73cm、短軸53cm、深さ9cmの楕円形を呈する。土壌底にはピットが1個検出されている。本住居跡の出土遺物は、早期末の土器片61点(第5表)である。石器は出土していない。出土遺物などから判断して、縄文時代早期末の住居跡である。

図示し得た土器は、第34図2~4である。2は、1層より出土し、第2群2類gに属する。内面はわずかに条痕文の痕跡を留める。陰帯下に縄文が施文されている。3は、1層より出土し、第2群1類aに属する。繊維を多く含み、もろい。内面は、条痕文の上にさらに縄文を施文している。4は、1層より出土し、第2群2類bの土器を利用した円盤状土製品である。原体は単節多条文である。残存部は全面研磨されている。

1号土壌 (第35図、写真3-1)

本土壌は、調査区南東部G-5区に位置している。確認面は第4層上面である。本土壌は、上部が耕作によって部分的に攪乱を受け、また、2号住居跡と切り合っているが、新旧関係は不明である。規模および形態は、長軸1.23m、短軸0.61m、深さ39.6cmの隅丸方形を呈する。埋土は4層で構成されている。底面は、若干皿状に窪み、壁はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は、早期末の土器片11点、ヘラ状石器1点が検出されている。出土遺物などから判断して、本土壌は縄文時代早期末の土壌である。

2号土壌 (第36図、写真3-2)

本土壌は、調査区南東部G-5区に位置している。確認面は第4層上面である。本土壌は、南側が耕作によって攪乱を受けている。また、3号土壌を切っている。規模および形態は、長軸約1.2m、短軸0.69m、深さ34.2cmの隅丸形を呈する。埋土は6層で構成されている。底面はほぼ平出で、壁は垂直に立ち上がる。遺物は、早期末の土器片が9点出土している。出土遺物から判断して、本土壌は縄文時代早期末の土壌である。第36図の土器は第2群bである。

3号土壌 (第36図)

本土壌は、調査区南東部G-5区に位置している。確認面は第4層上面である。本土壌は、

東側を2号土壌によって切られている。規模および形態は、長軸1.72m、短軸1.43m、深さ21.6cmで楕円形を呈する。埋土は、4層で構成されている。底面は平坦であり、壁はゆるく立ち上がる。また、底面のやや北寄りに、深さ5.8cmのピット1個が存在する。遺物は、早期末の土器片8点、スクレイパー1点、剥片1点が出土している。これらのことから、本土壌の時期は縄文時代早期末である。

4号土壌 (第37図、写真3-3)

本土壌は、調査区南東部G-5区、H-5区にかけて位置する。確認面は、第4層上面である。規模および形態は、長軸1.75m、短軸1.53m、深さ16cmで、長方形が基調と考えられる不整形を呈する。埋土は、3層で構成されている。底面は、やや起伏があり、皿状を呈している。壁はゆるく立ち上がる。遺物は、早期末の土器片8点が出土している。これらのことから、本土壌の時期は、縄文時代早期末である。

5号土壌 (第37図、写真3-4)

本土壌は、調査区南東部H-5区に位置する。確認面は、第4層上面である。規模および形態は、長軸1.88m、短軸1.85m、深さ15cmで楕円形を呈する。埋土は2層で構成されている。底面はやや起伏があり、皿状を呈している。壁はゆるく立ち上がる。遺物は、早期末の土器片18点、石鏝1点、二次加工のある剥片8点、微細剥離痕のある剥片2点、剥片17点が出土している。これらのことから、本土壌の時期は、縄文時代早期末である。第37図1は第2群2類bに属し、胴部の縄文は単節多条文が施文される。2は第2群2類hに属する。

6号土壌 (第38図)

本土壌は、調査区南部1-7区に位置する。確認面は、5層上面である。本土壌は、江戸時代以後と考えられるピットに切られている。規模および形態は、長軸1.35m、短軸約1.00m、深さ10cmで、楕円形を呈する。埋土は、中に炭化物や礫を含む、暗褐色シルト(7.5YR3/4)の単層である。底面は皿状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。遺物は、早期末の土器片1点が出土している。このことから、本土壌の時期は、縄文時代早期末である。

7号土壌 (第39図、写真3-5)

本土壌は、調査区南端1-6・7区にかけて位置する。確認面は、5層上面である。本土壌は、長軸1.00m以上(南端は未調査)、短軸0.97m、深さ16cmで、楕円形を呈する。埋土は、暗褐色シルト(7.5YR3/4)の単層である。底面は、起伏があるがほぼ皿状を呈し、壁はゆるく立ち上がる。西壁際に、深さ10cmのピット1個が検出されている。遺物は、皆無である。本土壌の時期は、層位的判断や埋土の観察によれば、縄文時代早期末と考えられる。

8号土壌 (第39図)

本土壌は、調査区中央やや東寄り、F-5区に位置する。確認面は、4層上面である。本土

墳は、耕作による攪乱を受けている。規模および形態は、長軸推定2.45m、短軸0.95m、深さcmの隅丸長方形を呈する。埋土は、暗褐色シルト(10YR 3/5)の単層で構成されている。断面形は、ほぼ皿状を呈し、壁はゆるく立ち上がる。底面は、やや起伏はあるもののほぼ平坦である。出土遺物は皆無である。本土墳の時期は、4層上面で確認できたことから、縄文時代早期末の可能性が強いと考えられる。

9号土墳(第39図、写真3-6)

本土墳は、調査区南部I-6区に位置する。確認面は、6層中である。本土墳は、最近の土取りによって、6層中まで削平されている。したがって、掘り込み面はさらに上層にあったと考えられる。規模および形態は、長軸1.09m、短軸0.85m、深さ29cmで、楕円形を呈する。埋土は、2層で構成されている。底面はほぼ平坦で、壁はゆるく立ち上がる。遺物は、わずかに早期末の土器片1点である。本土墳の時期は、出土遺物や埋土から判断して、縄文時代早期末である。

10号土墳(第39図)

本土墳は、調査区南部H-6、I-7区に位置する。確認面は、5層中である。本土墳は、上部が削平されており、江戸以後のビッドが7号住居跡と切り合っている。住居跡との新旧関係は不明である。規模および形態は、長軸約1.2m、短軸1.03m、深さ14cmの楕円形を呈する。埋土は、暗褐色シルト(7.5YR 3/5)の単層で構成されている。底面は、やや西側に傾斜するが、ほぼ平坦である。遺物は、早期末の土器片1点、磨石1点が出土している。2号住居跡と新旧関係が不明であることや、早期末の土器が出土していることなどから、本土墳の時期は早期末と考えられる。

早期包含層

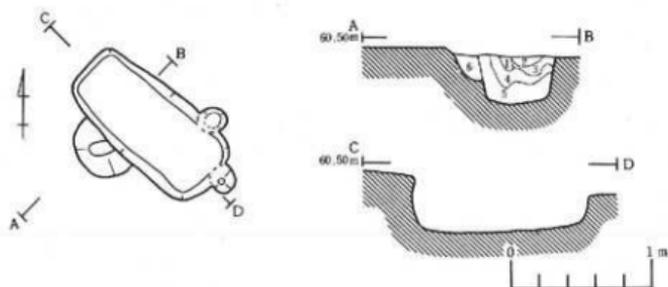
北前遺跡では、調査区のほぼ全面にわたって早期の遺物が出土しているが、明確に包含層として確認できた範囲は、およそ、2号住居跡、9号住居跡、8号住居跡を結ぶラインの南側である。この範囲の3層が、縄文時代早期末の包含層である。ただし、I-4・5区、さらに6区の東側は、5層～6層中まで削平を受けている。

包含層及び遺構外出土遺物(第40図1~23・第41図1~4)

第40図1は、G-5区より出土し、第2群1類cと考えられる。内面は縄文が施文される。2はG-4区より出土し、第2群1類bである。内面は無文である。3はG-4区より出土し、第2群1類bに属する。沈線文は、半截竹管を使用したものではない。内面は条痕文のみがみられる。4はG-5区より出土し、第2群1類dに属する。胴部の縄文は単節多条文である。

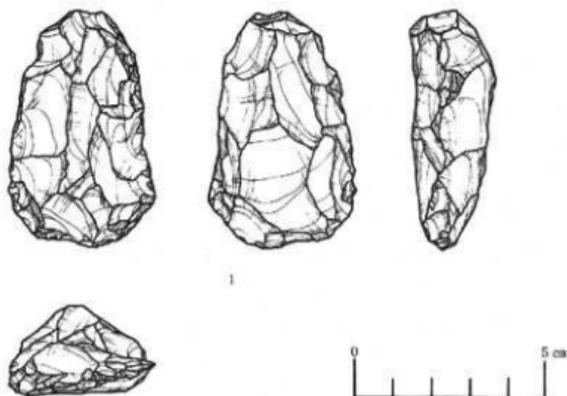
内面には擦痕が認められる。5は、H-5区より出土し、第2群2類bに属する。原体単節多条文である。6は、J-10区の耕作土より出土した第1群土器である。細砂を多く含むが焼成、胎土ともに良好である。7は、J-9区より出土した。第2群1類aに属する。内面は縄文が施文される。8は、19号土壌より出土した。第2群2類gに属する。内面は無文である。9も19号土壌より出土している。第2群1類bに属する。口唇部及び口唇部直下に刺突が施される。10・20・22は第2群1類iに属する。いずれも結束第1種である。20・22は単節多条文、10は無節のようである。20の胎土には金雲母を含む。11は20号土壌より出土した。第2群2類bに属する。8や9と類似する。12は、27号土壌より出土。第2群1類aに属する。胎土に白色砂粒を含む。内面は無文である。13は、C-4区より出土し、第2群1類hに属する。原体はLRである。14は、E-6区4層上より出土した。第2群2類hに属する。胎土には繊維は少なく、砂粒が多い。唯一の例である。15はD-5区の2層より出土した。第2群1類bに属する。内面は地文に条痕文、さらにその上に無節縄文(R)を施文する。16はG-5区より出土し、第2群1類cに属する。繊維・砂粒ともに多い。17は、H-6区より出土し、第2群2類gに属する。胎土に白色砂粒を多く含む。18はI-6区より出土し、第2群1類eに属する。内面には単節縄文LRを施文している。19はG-5区より出土し、第2群1類bに属する。繊維・砂粒ともに多い。21は、B-3区より出土し、第2群1類aに属するが、胴部文様との区画に刺突のある隆帯を施している。したがって、1類gとも共通する。23は、H-9区より出土し第2群3類aに属する。内面には縦位の擦痕をもつ。原体は不明であるが、横位の縄文が施文されている。

第41図1は、C-4区から出土し、第2群2類fに属する。2は、B-4区より出土し、第2群3類cに属する。底面にも条痕文の施文が認められる。胎土は砂粒が多い。3は、I-7区より出土し、第2群1類aの破片を利用した円盤状土製品である。胎土には白色砂粒を多く含む。約分を欠く。4は、H-5区より出土し、第2群2類bの破片を利用した有孔円盤である。有孔は、本例が唯一のものである。外面には、単節多条文が施されている。焼成は比較的良好である。

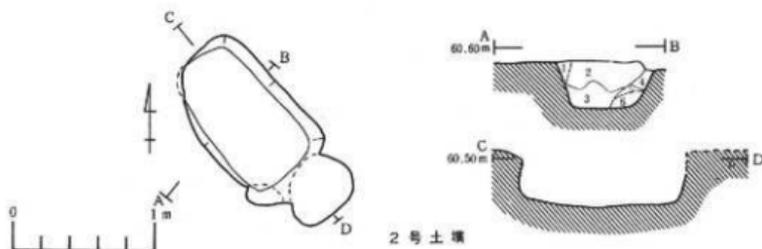


1号土壇 埋 土

層位	土 色	土 性	備 考
1	暗褐色 10Y R 5/2	シルト	カクワン
2	暗褐色 7.5 Y R 5/2	シルト	炭化物を微量含む。
3	暗褐色 10Y R 5/2	粘土質シルト	ロームを多量含む。
4	暗褐色 10Y R 5/2	シルト	ロームを少量含む。
5	暗褐色 10Y R 5/2	シルト	炭化物を少量含む。
6	褐色 10Y R 5/2	シルト	

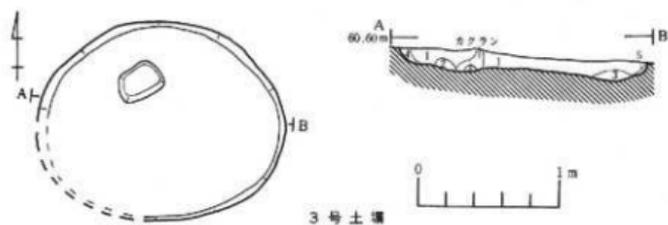


第35図 1号土壇



2号土壌埋土

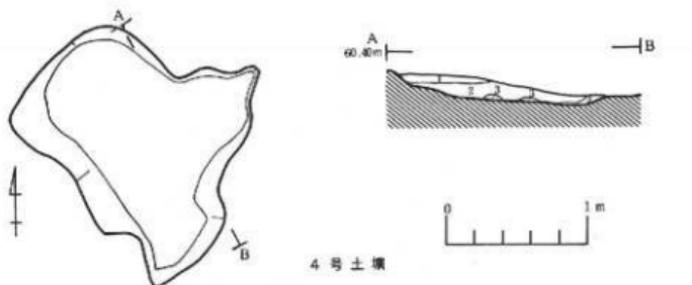
層位	土色	土性	層	考
1	褐色	シルト		ロームブロックを少量、炭化物極少
2	暗褐色	シルト		炭化物粒極少、オレンジ色のスコリア少量
3	暗褐色	シルト		オレンジ色のスコリア(1-3m)を少量
4	褐色	シルト		明黄褐色土粒を少量含む。
5	暗褐色	シルト		
6	褐色	7.5 YR 5	シルト	オレンジ色スコリアを極少量含む。



3号土壌埋土

層位	土色	土性	層	考
1	暗褐色	10Y R 5	シルト	炭化物粒を少量含む。
2	黄褐色	10Y R 5	シルト	
3	褐色	10Y R 5	シルト	
4	褐色	10Y R 5	シルト	
5	褐色	10Y R 5	シルト	

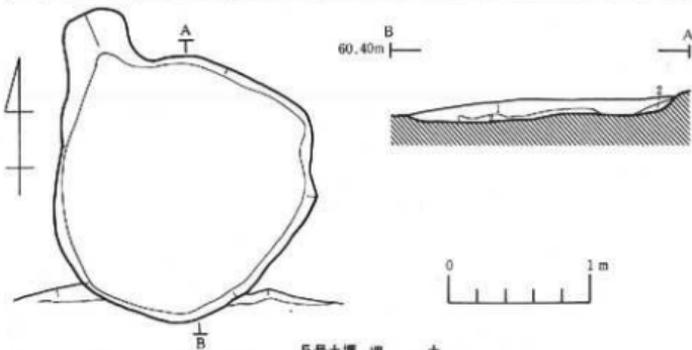
第36図 2・3号土壌



4号土壇

4号土壇 埋土

層位	土色	土性	備考
1	褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	ロームブロックを微量含む。
2	褐色 10 Y R 5/6	シルト	スコリアを一部含む。
3	褐色 10 Y R 5/6	シルト	スコリアを一部含む。



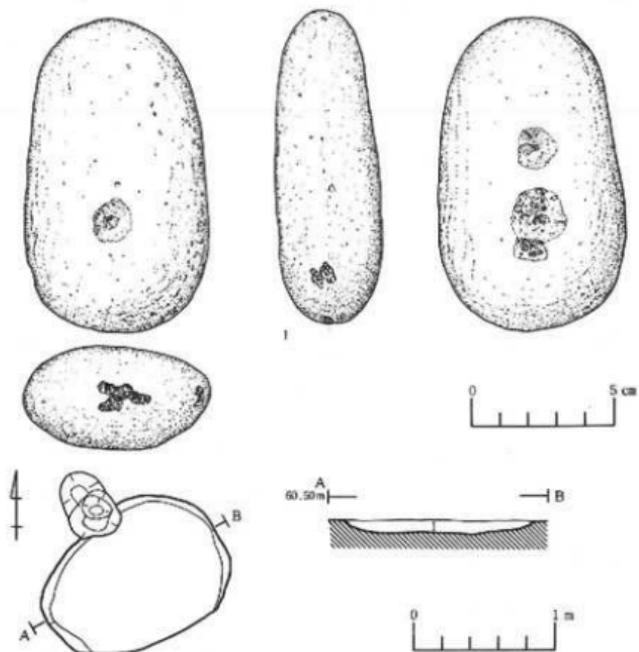
5号土壇 埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	ロームブロックを一部に含む。
2	黄褐色 10 Y R 5/6	シルト	ロームブロックを全体的に含む。



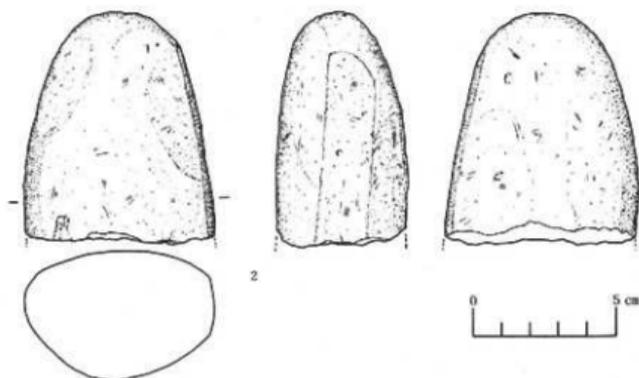
5号土壇

第37図 4・5号土壇

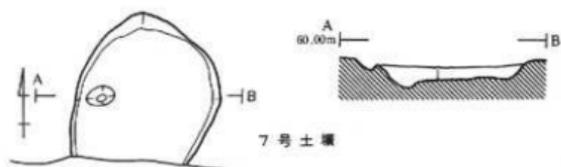


6号土壌 埋 土

解位	土 色	土 性	備 考
1	暗褐色	シルト	炭化物を少量含む。



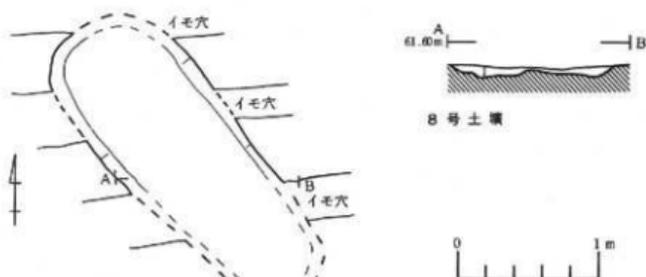
第38図 5号土壌出土遺物、6号土壌 (1. 5号土壌、2. 6号土壌)



7号土壌

7号土壌 埋 土

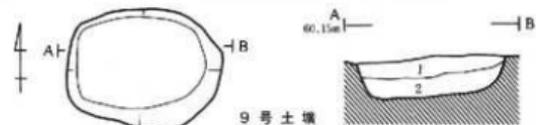
層位	土 色	土 性	備 考
1	暗褐色	7.5 Y R 3/4 粘土質シルト	明黄褐色ブロックを少量含む。



8号土壌

8号土壌 埋 土

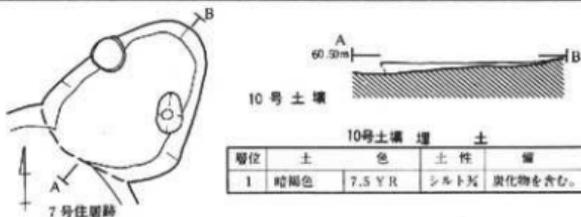
層位	土 色	土 性	備 考
1	暗褐色	10Y R 3/4 シルト	



9号土壌

9号土壌 埋 土

層位	土 色	土 性	備 考
1	褐色	10Y R 3/4 シルト	スコリア含む。
2	褐色	10Y R 3/4 シルト	スコリア含む。



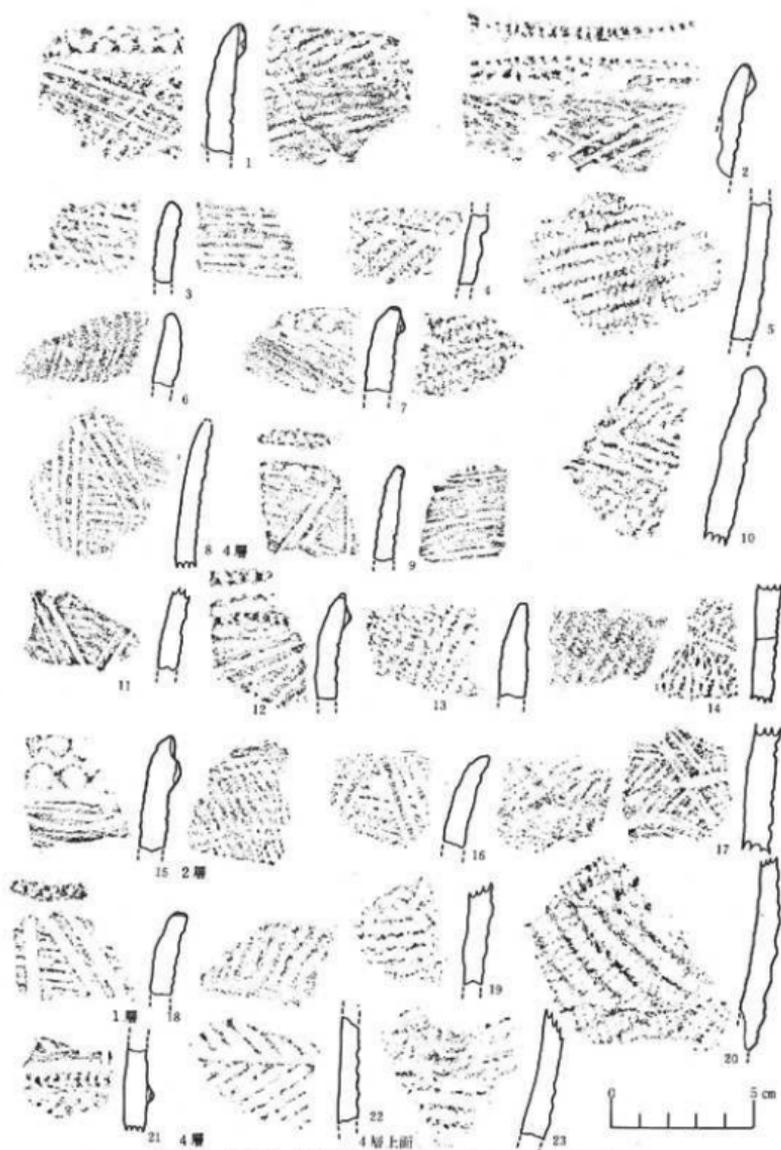
10号土壌

10号土壌 埋 土

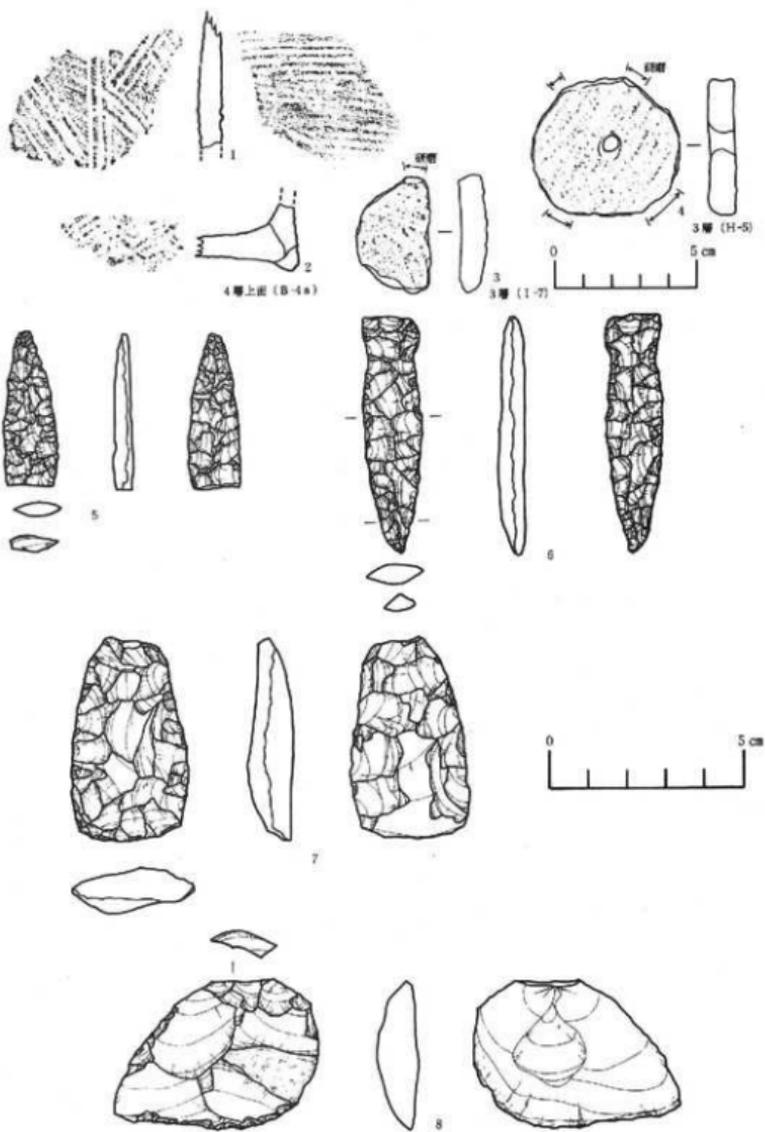
層位	土 色	土 性	備 考
1	暗褐色	7.5 Y R シルト質	炭化物を含む。

7号住居跡

第39図 7・8・9・10号土壌



第40圖 包含層・遺構外出土土器 (1~7包含層、8~23遺構外)



第41圖 遺構外出土土器 (1、2) 早期包含層出土円盤状土製品 (3、4) 石器 (7、8)

第4表 縄文早期住居跡内ピット計測表

第1号住居			13	26×22	11	43	16×15	6	105	44×32	11	
番号	規模(cm)	深さ(cm)	14	35×—	11	44	9×8	4	106	28×24	12	
1	44×43	12	15	21×13	7	45	15×15	7	107	41×32	11	
第2号住居			16	18×16 <th>7 <th>46</th> <th>39×35 <th>25</th> <th>108</th> <th>28×—</th> <th>10</th> </th></th>	7 <th>46</th> <th>39×35 <th>25</th> <th>108</th> <th>28×—</th> <th>10</th> </th>	46	39×35 <th>25</th> <th>108</th> <th>28×—</th> <th>10</th>	25	108	28×—	10	
番号	規模(cm)	深さ(cm)	17	29×21	11	47	19×17	9	109	25×42	42	
1	30×25	22	18	25×24	9	48	14×12	10	110	30×21	47	
2	30×28	6	19	18×18	19	49	25×21	21	111	23×19	18	
3	24×19	6	20	23×20	9	50	20×18	14	112	29×27	43	
4	22×18	5	21	28×20	7	51	20×18	19	113	20×17	43	
5	18×13	9	22	10×9	6	52	20×13	17	114	20×20	32	
6	16×—	9	23	16×15	27	53	20×12	12	115	13×13	11	
7	24×—	7	24	18×16	18	54	17×17	11	116	27×21	17	
8	47×36	11	25	17×16	14	55	24×19	13	117	16×15	12	
9	30×25	15	26	18×—	7	56	20×18	16	118	60×50	15	
10	24×23	13	27	24×19	12	57	14×11	11	119	34×29	23	
11	63×—	13	28	14×12	5	58	19×15	16	120	17×15	17	
12	12×10	7	29	14×11	5	59	22×19	29	121	36×26	7	
13	19×—	11	30	9×—	5	60	31×23	19	122	17×12	8	
14	18×—	6	第5号住居			61	23×21	43	123	39×23	25	
15	12×11	10	番号		規模(cm)	深さ(cm)	62	26×26	44	124	19×17	16
16	40×—	7	1	22×19	29	63	26×23	30	125	22×20	12	
第3号住居			2	21×18	44	64	27×22	52	126	26×24	16	
番号	規模(cm)	深さ(cm)	3	28×25	44	65	27×22	59	127	21×18	12	
1	24×16	31	4	23×18	39	66	28×28	27	128	22×21	11	
2	26×23	28	5	30×29	41	67	29×23	36	129	15×13	9	
3	23×18	23	6	29×24	49	68	17×15	14	130	47×39	26	
4	18×13	10	7	31×28	32	69	13×13	11	131	79×55	30	
5	19×17	21	8	26×18	48	70	22×16	13	132	25×18	10	
6	21×17	33	9	21×17	26	71	32×12	6	133	78×48	13	
7	18×13	25	10	27×25	52	72	19×17	12	134	10×11	11	
8	12×11	7	11	30×22	28	73	60×42	21	第7号住居			
9	19×13	9	12	25×22	43	74	24×—	11	番号		規模(cm)	深さ(cm)
10	16×13	5	13	23×17	42	75	38×32	11	1	20×16	16	
11	13×12	5	14	23×17	42	76	22×—	9	2	28×18	9	
12	9×9	7	15	26×19	21	77	40×—	13	3	31×22	17	
13	17×11	11	16	24×24	12	78	18×15	43	4	18×15	15	
14	12×12	13	17	25×18	50	79	17×16	38	5	16×16	17	
15	11×8	5	18	24×23	50	80	15×13	22	6	20×17	16	
16	11×10	5	19	25×22	18	81	19×—	28	7	18×15	5	
17	15×12	7	20	55×31	8(12)	82	27×26	7	8	22×20	10	
18	32×31	7	21	29×22	14	83	21×19	8	9	24×—	7	
19	13×10	11	22	19×18	31	84	32×20	8	10	17×15	9	
20	39×32	9	23	20×17	8	85	32×41	15	11	33×31	9	
21	11×11	16	24	22×14	6	86	15×14	9	12	25×24	8	
22	18×—	12	25	28×25	13	87	19×16	10	13	25×23	7	
23	17×—	14	26	23×15	19	88	15×14	9	14	22×19	5	
24	26×22	28	27	26×22	18	89	23×21	5	第8号住居			
25	24×22	7	28	20×18	16	90	26×20	8	番号		規模(cm)	深さ(cm)
第4号住居			29	25×24	18	91	31×25	13	1	16×12	5	
番号	規模(cm)	深さ(cm)	30	36×34	26	92	24×20	14	2	16×11	7	
1	31×26	33	31	36×22	40	93	17×16	15	3	21×18	8	
2	16×14	8	32	46×43	27	94	—×30	41	4	33×27	4	
3	7×7	4	33	25×23	25	95	—×45	24	5	21×19	4	
4	18×17	16	34	31×26	36	96	45×42	42	6	24×17	9	
5	31×—	10	35	23×18	38	97	29×20	9	7	24×11	8	
6	38×31	28	36	37×29	13	98	20×17	37	8	14×9	7	
7	10×—	7	37	32×26	15	99	32×17	50	9	38×16	10	
8	30×20	9	38	20×19	17	100	23×19	7	10	48×33	8	
9	20×11	13	39	11×10	5	101	25×17	9	11	26×—	8	
10	28×28	18	40	14×12	12	102	18×17	10	12	8×—	5	
11	38×—	10	41	22×18	11	103	29×25	57	13	8×7	8	
12	13×—	8	42	23×20	15	104	—×36	30				

第5表 第1・2群土器集計表

	第1群土器										第2群土器										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
1	a	1																			
	b		1																		
2	a	1																			
	b		1																		
3	a																				
	b																				
不明																					
合計	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
合計	12	12	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	
不明																					
第1群土器																					
合計	60	52	10	64	10	52	10	60	58	11	9	8	5	18	1			1	2	55	3
1	a	1	1	2																	
	b		1	2																	
2	a	1	5	7																	
	b		12	20																	
3	a																				
	b																				
不明																					
第2群土器																					
合計	9	24	32	1	2	42	13	9	1	31	4	57	7	5	1	2	6	3	1	16	1
1	a	1																			
	b																				
2	a	1	5	7																	
	b		17	20																	
3	a																				
	b																				
不明																					
第1群土器																					
合計	6	37	42	2	5	3	32	13	4	1	2	2	75	46	2	9	3	3	18	66	17

4. 縄文時代前期末の遺構と遺物

11号土壌 (第42図・写真4-1)

調査区北東部、B-4区に位置する。12号土壌と重複関係があり、12号土壌より新しい。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.77m、短軸1.29mの楕円形である。深さ84cm、底面は平坦であるが東壁際に56×46cm、深さ20cmの楕円形のピットを有する。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、オーバーハングする所もある。埋土は10層で構成され、第8層にはローム粒を多量に含む。

遺物は縄文土器片17点、石器は7点出土している。第42図は第3群8類に属する口縁部破片である。横位連続刻突文を2段に施文してある。1類か2類の口縁部と考えられる。また口唇に連続刻目を施した^(A-3-2)もの、地文が絞線文の土器片も出土している。石器はスクレイパー1点、二次加工のある剥片1点、微細刺離痕のある剥片2点、剥片1点、磨石1点、凹痕と磨痕のある礫石器1点が出土している。

12号土壌 (第42図)

調査区北東部、B-4区に位置する。11号土壌と重複関係にあり、北側4分の1を削平されている。11号土壌より古い。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.53m、短軸1.26mの楕円形である。

遺物は皆無であったが12号土壌の埋土は早期の遺構の埋土と全く違い、また11号土壌より古いとしても、それほどの時期差があったとは考えられず、前期末の土壌とした。

13号土壌 (第42図・写真4-2)

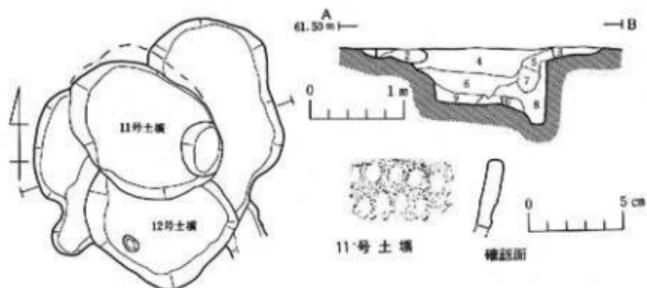
調査区北東部、C-4区に位置する。1号住居跡と重複関係にある。1号住居より新しい。上端平面形は長軸1.67m、短軸1.38mの楕円形である。深さ74cm、底面は平坦であり、壁面は直線的に内傾し壁中位上半から外傾するが北壁はほぼ直線的に立ち上がる。埋土は6層で構成され、2層と6層にロームブロックを含む。

遺物は縄文土器片7点が出土した。第42図2は第3群8類に属する半截竹管による横位平行沈線文を施文した胴部破片である。3類の胴部破片であろうか。^(A-1-3)

14号土壌 (第42図・写真4-3)

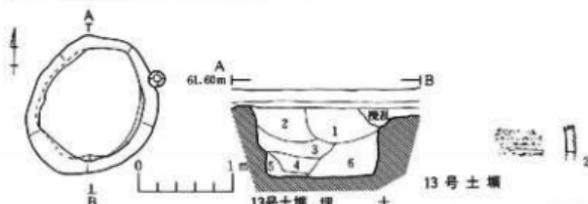
調査区北東部、C-5区に位置する。第4層上面で確認した。3号溝と重複関係にあり、3号溝より古い。上端平面形は長軸1.04m、短軸1.02mの円形である。深さ108cm、底面は平坦であり、断面形は袋状をなし、最大径は1.42m×1.37mを測る。埋土は12層で構成され、全体的にローム粒子の混入が顕著であり、7層、10層中にロームブロックを含む。

遺物は縄文土器片12点、礫1点を出土した。第42図3は第3群8類に属する二又で先端の尖った施文具による押しひき連続刻突文を施した胴部破片である。胎土は緻密で焼成もよく、^(C-3-3)



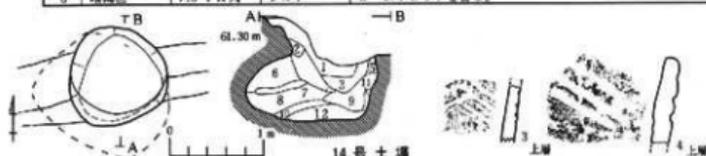
11号土坑 埋土

層位	土色	土質	備考
1	暗褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	炭丸
2	明黄褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	炭丸
3	褐色 10Y R 5/6	シルト	炭丸
4	褐色 10Y R 5/6	シルト	炭化物を微量とロームを全体に含む。
5	褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	ロームを少量含む。
6	褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	炭化物を微量とロームを全体の1/3含む。
7	褐色 10Y R 5/6	シルト	炭化物を微量とロームを全体の1/3含む。
8	黄褐色 10Y R 5/6	シルト	ロームを多量に含む。
9	暗褐色 10Y R 5/6	シルト	
10	黄褐色 10Y R 5/6	シルト	暗褐色を少量含む。



13号土坑 埋土

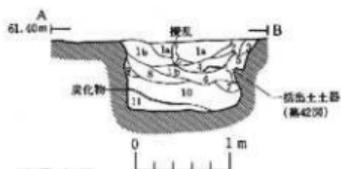
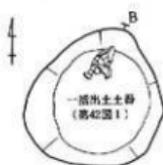
層位	土色	土質	備考
1	暗褐色 10Y R 5/6	シルト	
2	褐色 10Y R 5/6	シルト	ロームブロック状に含む。
3	暗褐色 10Y R 5/6	シルト	炭化物を少量含む。
4	暗褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	炭化物を少量含む。
5	黄褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	炭化物を少量含む。
6	暗褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	ロームブロックを含む。



14号土坑 埋土

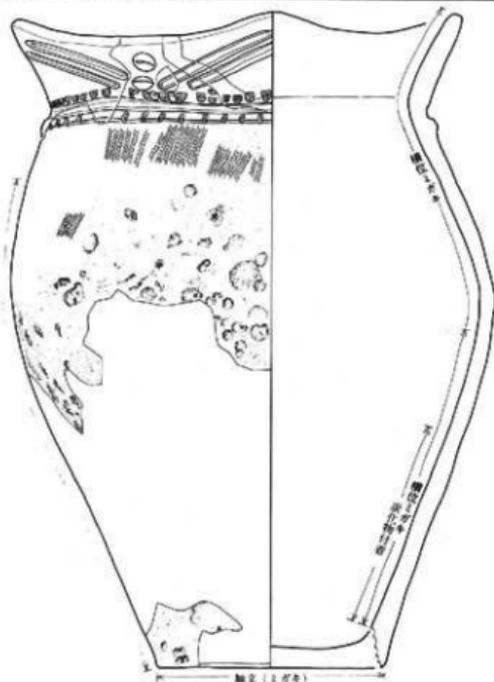
層位	土色	土質	備考
1	褐色 10Y R 5/6	シルト	
2	暗褐色 10Y R 5/6	粘土質シルト	ローム粒子を全体の1/3含む。
3	褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	ローム粒子を全体の1/3含む。
4	褐色 10Y R 5/6	シルト	
5	暗褐色 10Y R 5/6	粘土質シルト	ローム粒子を全体の1/3含む。
6	暗褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	ローム粒子を全体の1/3含む。
7	明黄褐色 2.5 Y R 5/6	粘土質シルト	ロームブロック
8	褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	ローム粒子を全体の1/3含む。
9	暗褐色 10Y R 5/6	シルト	ローム粒子を全体の1/3含む。
10	暗褐色 7.5 Y R 5/6	粘土質シルト	ロームブロック
11	暗褐色 10Y R 5/6	粘土質シルト	ローム粒子を全体の1/3含む。
12	暗褐色 10Y R 5/6	シルト	ローム粒子少量

第42図 11・13・14号土坑 (縄文時代前期末葉)



15号土壌

LA		15号土壌		埋 土	
層位	土 色	土 質	備 考		
1a	暗褐色	7.5 Y R 5/1	シルト		
1b	暗褐色	10Y R 5/1	シルト	ローム粒少量含む。	
2	褐色	7.5 Y R 5/1	シルト		
3	黄褐色	10Y R 5/1	シルト		
4	暗褐色	7.5 Y R 5/1	シルト	炭化物微量含む。	
5	褐色	7.5 Y R 5/1	シルト		
6	暗褐色	10Y R 5/1	シルト	ローム粒少量含む。	
7	暗褐色	10Y R 5/1	シルト	ロームロックを含む。	
8	暗褐色	10Y R 5/1	シルト	ローム粒少量含む。	
9	褐色	10Y R 5/1	シルト	ローム粒子少量含む。	
10	明黄褐色	10Y R 5/1	粘土質シルト		
11	明黄褐色	10Y R 5/1	粘土質シルト		



遺物名	層位	出土状況	保存	法量	器文・調整	備 考
15号土壌	8層上面	一 積	口縁一	器高34.8cm 口径23.8cm	・刺突文	胴部、幾何は七ヶが 多い。
	6層上面		胴部	器径12.1cm	・鳥帯・刺突文	
	4層				・波線(線部)	

第43図 15号土壌 (縄文時代前期末葉)

3群土器の中では異質である。第42図4は第3群1類1種に属する口縁部破片である。波状口縁を呈し、太い斜行平行沈線を口縁に沿って平行に施文、また口縁下端には横位連続刺突文が施される。
(A-1-2) (A-3-2)

15号土壙 (第43図・写真4-4)

調査区北東部、C-5区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.47m、短軸1.38mの円形である。深さ80cm、底面はほぼ平坦であり壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は11層で構成されており、大別して2層に分かれる。下層の9、10層は粘土質シルト層で固くしまる。19層と11層の間に炭化物の層が入る。上層はほとんどの層がローム粒を含み、第4層中に炭化物が認められた。

遺物は第43図1が4層中から、5層、8層上面に乗るよう一括出上した。他に礫が1点出土したのみであった。第43図1は第3群3類1種に属する3類の深鉢形土器である。器高34.8cm、口径23.8cm、底径12.1cm、最大径は胴部にあり25.6cmを測る。口縁は四波状を呈する。口縁部文様帯には太い2本1組の平行沈線が山形に施文されるが山形頂部は連続せずそこに円形刺突文が1~2個配される。口縁部下端には半截竹管による半月形横位連続刺突文が施文される。頸部には横位沈線と隆帯+連続刺突文が施文され口縁部と胴部を区画している。地文は単節斜行縄文が施文されており、薄い撫で消しが行なわれている。器面の剥落が激しい。胎土は粗く、角礫凝灰岩粒を多く含む。砂粒の混入も多い。

16号土壙 (第44、45図・写真4-5・6)

調査区北東部、C-5区に位置する。第4層上面で確認、17号土壙と重複関係があり、17号土壙より新しい。上端平面形は長軸2.80m、短軸2.45mの楕円形である。深さ74cm、底面は中央がやや低くゆるやかな傾斜をもつ。壁面は内傾し壁中位上半から内弯気味に外傾する。埋土は13層で構成され、2、3a、3c層に多量のロームブロックを含む。

遺物は縄文土器1点(第45図)と縄文土器片4点、石核1点、剥片1点、柱化木1点が出土した。45図は北東部壁際の床面から一括出上した。第3群1類1種に属する深鉢形土器である。器高40.7cm、口径25.5cm、底径14.3cm、最大径は口縁にある。平縁であり、口縁部は肥厚する。口縁部文様帯には第42図1と同様太き2本1組の平行沈線が山形に施文される、山形頂部は連続せず、そこに径1~1.5cmの円形刺突文が1~2個配される。口縁部文様は第42図1と同じであるが45図は口縁部下端に段がつき半截竹管先端による連続刺突文が施文される。頸部には隆帯+連続刺突文が施文され、口縁部と胴部を区画している。胴部は剥落が激しいが、横位絞絡文が地文として施文され、薄い撫で消しが行なわれている。胎土は粗く角礫凝灰岩粒を多く混入している。砂粒の混入も多い。

17号土壌 (第44図・写真4-7)

調査区北東部、C-5区に位置する。第4層上面で確認、16号土壌と1号竪穴遺構と重複関係にあり、両遺構より古い。上端平面形は、長軸1.26m・短軸0.96m以上の円形と考えられる。深さ90cm、底面は平坦であり壁面は内傾し壁中位上半で外傾する。埋土は8層で構成される。

遺物は縄文土器片22点、ヘラ状石器1点、剥片1点が出土している。第44図1は3群8類に属する破片である。細い沈線をも2本1組にし山形に短く施文、その下に横位平行沈線文がめぐり
(C-1-1) (C-1-3)

る。第44図2も3群8類に属する胴部破片である。
(C-1-1)

18号土壌 (第46図・写真4-8、5-1)

調査区北東部、D-4区に位置する。第4層上面で確認、39号土壌と40号土壌と重複関係にあり両遺構より古い。上端平面形は、長軸1.23m、短軸約0.85mの楕円形と考えられる。深さ82cm、底面は平坦であり、30cm×20cm程の円礫及び角礫を4個敷いてあり、底面中央に炭化物が認められた。壁面はほぼ直線的に垂直に立ち上がる。埋土は6層で構成されている。

遺物は縄文土器片30点、石器3点が出土した。第46図1-4は最下層から出土している。1・2は第3群1類1種に属する同一個体の口縁部破片である。山形突起を有する。口縁部の文様は第43図1、第45図と同じ山形沈線文と円形刺突文であるが、頸部には半截竹管による横位平行沈線がめぐりボタン状貼付文が並び、さらにボタン状貼付文から下に半截竹管による縦位平行沈線が認められることから、文様帯の四区画が行なわれていると考えられる。第46図3、4は3群8類に属する口縁部破片である。1類か2類の口縁部破片と考えられる。3は斜行平行沈線文とコブ状貼付文が施文され、4は山形突起を有する口縁部破片である。頸部に太い横位沈線文が認められる。
(A-1-1) (A-3-1) (B-1-3) (C-1-4) (C-1-4) (A-2-1) (B-1-3)

19号土壌 (第46図)

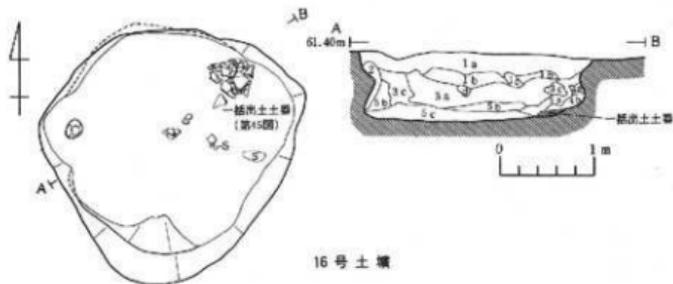
調査区北東部、D-5区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸0.85m、短軸0.64mの楕円形である。

遺物は(第4層から)縄文土器片7点出土した。第46図5は3群8類に属する胴部破片である。半截竹管による山形及び波形平行沈線の下位に半截竹先岩端による横位連続刺突文が2段に施される。第46図6は3群8類に属する肥厚する口縁部破片である。爪先による横位連続刺突文を2段に施文してある。1類か2類の口縁部であろう。
(C-1-1) (C-3-2) (A-3-2)

20号土壌 (第46図・写真5-3)

調査区北東部、D-5区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.76m、短軸1.57mの楕円形である。深さ68cm、平面は平坦であり壁面は内傾し壁中位上半で外傾する。埋土は13層で構成される。9層10層にローム粒子を多量に含む。

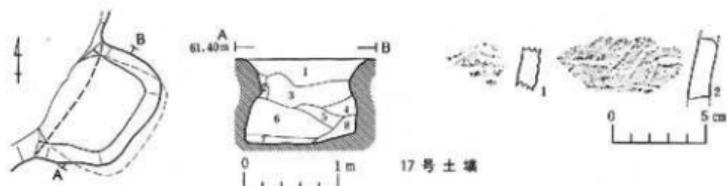
遺物は縄文土器1点(第46図12)、縄文土器片116点、石器8点出土した。縄文土器片はほと



16号土壌

16号土壌 埋土

層位	土色	土性	備考
1a	褐色 10Y R 列	シルト	炭化物 (2mm) を少量含む。
1b	褐色 7.5 Y R 列	シルト	炭化物とロームを少量含む。
1c	褐色 10Y R 列	シルト	ロームを少量含む。
1d	褐色 10Y R 列	シルト	
2	褐色 10Y R 列	シルト	ロームブロックを多量に含む。
3a	褐色 7.5 Y R 列	シルト	ロームブロックを多量に含む。
3b	黄褐色 10Y R 列	シルト	
3c	褐色 7.5 Y R 列	シルト	暗褐色土ブロックを多量に含む。
4a	暗褐色 10Y R 列	シルト	
4b	暗褐色 7.5 Y R 列	シルト	
5a	黄褐色 7.5 Y R 列	シルト	
5b	黒褐色 10Y R 列	シルト	ロームを少量含む。 □
5c	黒褐色 10Y R 列	シルト	明黄褐色土少量を含む。

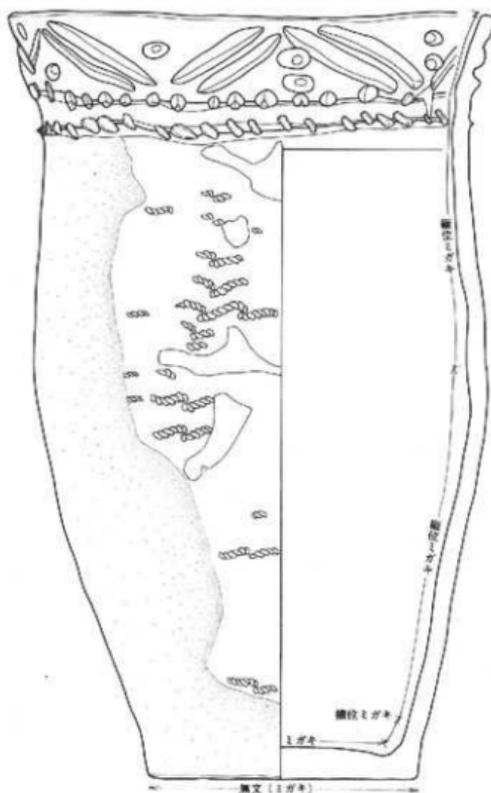


17号土壌

17号土壌 埋土

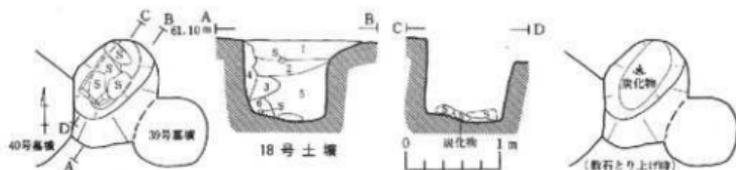
層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 10Y R 列	シルト	明黄褐色土を全体に含む。
2	明褐色 7.5 Y R 列	シルト	
3	褐色 10Y R 列	シルト	炭化物を含む。明黄褐色土を全体に含む。
4	褐色 7.5 Y R 列	シルト	明黄褐色土を少量含む。
5	暗褐色 7.5 Y R 列	シルト	
6	褐色 10Y R 列	シルト	炭化物を含まない。
7	褐色 10Y R 列	シルト	
8	褐色 10Y R 列	シルト	明黄褐色土をブロック状に含む。

第44図 16・17号土壌 (縄文時代前期末葉)

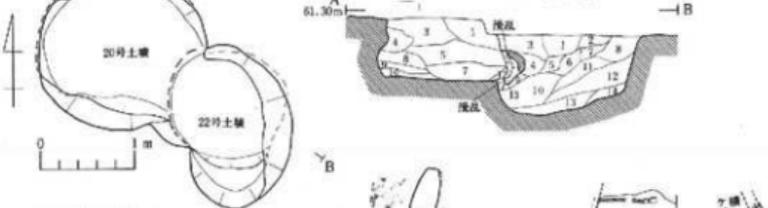
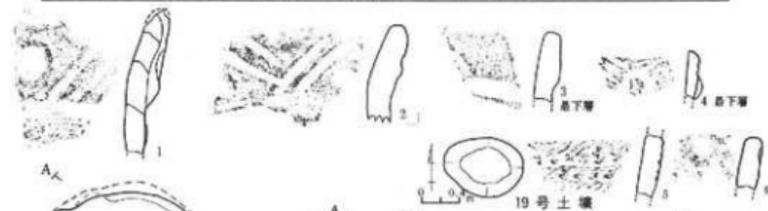


遺物名	単位	出土状況	保存	法量	織文・図型	備考
16号土織 (C-5)	5C層 (残面織上)	一括	口縁部 写欠損	原高 8.7cm 口縁部 3.9cm 底幅 14.3cm	・沈黙文 → 閉孔 ・刺突文 → 閉孔 ・織文(1.5織文の結束の横位回転による連続文)	新図が 詳しい。

第45図 16号土織出土遺物 (縄文時代末葉)



層位	土色	土性	備考
1	褐色色 10Y R 7/5	砂質シルト	黄褐色土をブロック状に含む。
2	褐色色 7.5 Y R 7/5	砂質シルト	黄褐色土をブロック状に含む。
3	暗褐色色 10Y R 7/5	砂質シルト	黄褐色土を含む。
4	暗褐色色 10Y R 7/5	砂質シルト	黄褐色土を含む。
5	暗褐色色 7.5 Y R 7/5	砂質シルト	黄褐色土ブロックを含む。
6	暗褐色色 10Y R 7/5	シルト	黄褐色土ブロックを多量含む。



層位	土色	土性	備考
1	褐色色 7.5 Y R 7/5	シルト	炭化物・黄褐色土粒少量含む。
2	褐色色 7.5 Y R 7/5	シルト	黄褐色土量わずかに含む。
3	褐色色 10Y R 7/5	シルト	炭化物・黄褐色土粒少量含む。
4	黄褐色色 10Y R 7/5	粘土質シルト	炭化物を多量含む。黄褐色土粒多量含む。
5	褐色色 10Y R 7/5	シルト	
6	褐色色 7.5 Y R 7/5	シルト	
7	暗褐色色 10Y R 7/5	シルト	
8	褐色色 7.5 Y R 7/5	シルト	黄褐色土粒を含む。
9	褐色色 7.5 Y R 7/5	シルト	ローム粒多量含む。
10	暗褐色色 10Y R 7/5	シルト	ローム粒少量含む。
11	暗褐色色 10Y R 7/5	シルト	
12	褐色色 10Y R 7/5	シルト	
13	明褐色色 7.5 Y R 7/5	シルト	

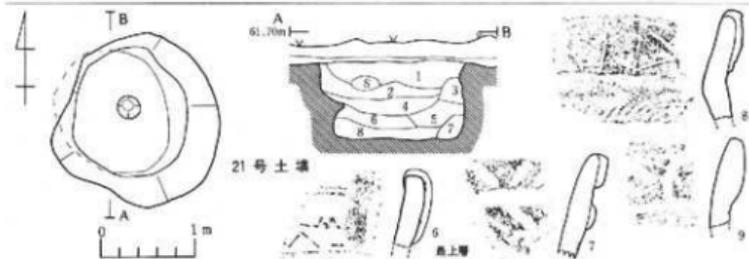
第46図 18・19・20・22号土壌 (縄文時代前期期末葉)

22号土壌 埋 土

層位	土 色	土 性	備 考	
1	褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	明黄褐色土ブロック少量含む。
2	明黄褐色	10Y R 5/6	粘土質シルト	
3	褐色	10Y R 5/6	シルト	
4	明褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	
5	褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	
6	暗褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	明黄褐色土粒少量含む。
7	明黄褐色	10Y R 5/6	粘土質シルト	暗褐色土ブロック含む。
8	暗褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	炭化物少量含む。
9	褐色	10Y R 5/6	シルト	明黄褐色土ブロック含む。
10	暗褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	黄褐色土ブロック少量含む。
11	暗褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	黄褐色土粒少量含む。
12	黒褐色	10Y R 3/4	シルト	
13	黒褐色	10Y R 3/4	シルト	
14	暗褐色	10Y R 5/6	シルト	



22号土壌出土遺物



21号土壌

21号土壌 埋 土

層位	土 色	土 性	備 考	
1	褐色	10Y R 5/6	シルト	ローム粒子微量
2	暗褐色	10Y R 5/6	シルト	炭化物少量
3	褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	ロームブロック含む。
4	黒褐色	10Y R 3/4	シルト	
5	褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	ローム粒子全体的に含む。
6	褐色	10Y R 5/6	シルト	ローム粒子少量
7	明褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	
8	暗褐色	10Y R 5/6	シルト	炭化物微量



第47図 22・21号土壌 (縄文時代前期末葉)

んどが5層より上の層から出土した。一個体に復元できるものはなかった。第46図7は3群1類1種に属する肥厚する口縁部破片である。縦位平行沈線文、斜行平行沈線文、山形沈線文が施文され、口縁下端に段を有する。第46図8は3群5類1種に属する口縁から胴部上半に及ぶ破片である。口縁部胴部共に地文として単節斜行縄文が施文され薄い撫で消してある。胴部に小突起があり口縁部には横位沈線文と山形沈線文、頸部に横位平行沈線文、胴部には斜行平行沈線文が施文されている。第46図9-11は3群7類に属する。第46図11は底部近くまで曲線的な沈線文が施されている底部破片である。第46図9は爪先による横位連続刺突文を2段に施した肥厚する口縁部破片である。第46図10は半截竹管による平行沈線を縦横に施した胴部破片である。第46図12は3群8類に属する胴部上半を欠いた鉢形土器である。残存器高7cm、胴部最大径9cm、底径5.5cmである。地文は施文されていない。胴部上半に横位押し引き連続刺突文が施文されている。内面にはすずが付着している。胎土は粗く、角礫凝岩粒が多く含まれる。石器は微細刻離痕のある剥片1点、剥片5点、磨石2点である。

21号土壌 (第47図・写真5-2)

調査区北東部、D-5区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.80m、短軸1.69mの円形である。深さ86cm、底面は平坦であり壁面はほぼ垂直に立ち上がる。坩土は8層で構成され、5層6層にローム粒、3層にロームブロックを含む。

遺物は縄文土器片107点、石器7点、柱化木1点、礫4点が出土した。(石皿は2層上面に乗って出土した。)また縄文土器片のうち52点は最上層1層出土である。第47図6は3群8類に属する口縁部破片である。棒状貼付文が口唇部まで及び小突起となっている。また細い粘土紐を貼り付け幾何学文を展開させている。5類2種の口縁部と考えられる。第47図8は3群5類1種に属する口縁から胴部上半までの破片である。口縁は肥厚し頸部に段を有する。文様は縦位沈線文、横位沈線文、斜行沈線文が施文される。胴部には単節斜行縄文が地文として施文され薄い撫で消しがなされている。第47図9-12は3群8類に属する頸部破片である。隆帯斜めの連続刺突文が施され、その上下を横位沈線文がめぐる。第47図7、9は3群1類1種に属する肥厚する平線の口縁部破片である。第47図7は隆帯+2本1組の山形平行刺突文を2段に施し、その下にさらに山形平行刺突文を施文している。第47図9は口縁部に馬蹄形沈線文と2本1組の太い斜行沈線文が施文され、頸部には半截竹管による横位平行沈線が施文される。第47図13、14は3群8類に属する胴部破片である。第47図13は半截竹管先端による押し引き連続刺突文が施文されている。第47図15は横位の細い隆帯をまたいで半截竹管先端による連続刺突文が施されている。第47図14は3群8類に属し弧状沈線2本による()文を施文してある。石器は石礫1点、ヘラ状石器1点、二次加工のある剥片1点、微細刻離痕のある剥片1点、剥片1点、凹痕と磨痕のある礫1点、石皿1点である。

22号土壌 (第46、47図・写真5-3)

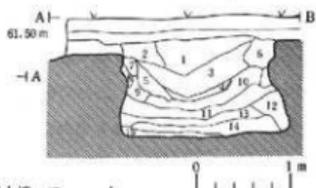
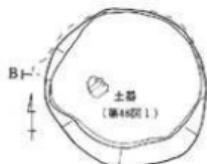
調査区北東部、D-5区に位置する。第4層上面で確認、20号土壌に西側を一部を切られている。上端平面形は長軸1.70m、短軸1.25mの楕円形である。深さ84cm、底面は西北部が一段低くなっている。壁面はほぼ直線的にゆるやかに立ち上がる。埋土は14層で構成されており9層、11層にロームブロック及びローム粒を含む。

遺物は縄文七器片58点、削片1点、磨石1点、礫1点が出土した。4層中からの出土が多い。第47図1-4は4層から出土している3群土器である。第47図2、4は第3群5類種に属する肥厚するI1縁部破片である。第47図2は横位沈線文、縦位沈線文、斜行沈線文、第47図4には横位沈線文、斜行沈線文によるX字状文、弧状沈線2本による()文が口縁部に施文され、共に頸部に太い横位沈線文が一条めぐる。第47図1は4類に属する胴部破片である。横位沈線文が施文されている。第47図3はI1類1種の胴部破片である。半截竹管による縦位及び横位の平行沈線文が施文されている。第47図5は細い粘土紐隆帯を弧状に貼りつけている。

23号土壌 (第48図・写真5-4・5・6)

調査区北東部、D-5区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.74m、短軸1.65mの円形である。深さ106m、底面は平坦であり壁面はほぼ垂直に立ち上がるが一部内傾するところもある。埋土は15層で構成されており8層にロームブロックを含む。

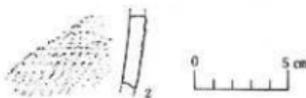
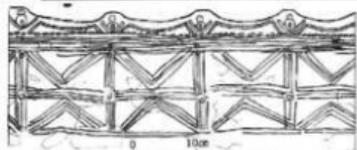
遺物は縄文土器1点(第48図1)、縄文土器底部1点(第48図6)、縄文土器片52点、微細削片のある削片1点、凹石1点が出土した。第48図1、6及び縄文土器片の約半数は7層より上層から出土している。第48図1は3群3類1種に属する深鉢形土器である。底部を欠く。残存器高24cm、口径17.6cm、胴部径18.3、文様帯は頸部をめぐる平行沈線文によりI1縁部と胴部に二分され、さらに貼付文、刺突文、縦位平行沈線文により四区画されている。口縁は四波状を呈し、口縁部には波状頂部の直下に円形刺突文とコブ状貼付文を縦位並列させる。太い斜行沈線文及び2本1組の太い平行沈線文が施文され、口縁下端には半截竹管先端による半月形刺突文がめぐり直下に段を有する。頸部には半截竹管による平行沈線文が、胴部には半截竹管による縦位、横位、山形沈線文が施文され、波状頂部から垂下するライン上には、頸部にはボタン状貼付文、平行沈線の交叉する胴部中位にはコブ状貼付文が、上位にはボタン状貼付文が施される。地文は半節斜行縄文が施文され薄い撫で消しがなされている。胴部下半は火熱をうけたため剥落が激しい。胎土はもろく、0.1-3mmの粒状の角礫凝灰岩を多量に含む。第48図6は3群3類に属する底部破片である。底径10.8cm、器壁はやや内湾気味に立ち上がる。4類あるいは5類の底部と考えられる。第48図3-5は3群5類1種に属する口縁から胴部上半に及ぶ同一個体の破片である。平縁で口縁はやや内湾気味に外傾する。口縁部上端及び上端と頸部に半截竹管先端により刺突がなされている。胴部上半には半截竹管文による斜行平行沈線文や幾



23号土壌

23号土壌 埋 土

層位	土 色	土 性	備 考
1	褐色 7.5 YR 5/6	シルト	炭化物・明黄褐色土プロック少量含む。
2	暗褐色 10Y R 7/6	シルト	
3	暗褐色 7.5 YR 5/6	シルト	炭化糠粒・炭化物少量含む。
4	暗褐色 7.5 YR 5/6	シルト	炭化物全体に多量含む。
5	褐色 10Y R 7/6	シルト	炭化物わずかに含む。
6	褐色 7.5 YR 5/6	シルト	炭化物少量含む。
7	明褐色 7.5 YR 5/6	シルト	
8	褐色 10Y R 7/6	シルト	ロームプロック全体に含む。
9	褐色 10Y R 7/6	シルト	
10	褐色 7.5 YR 5/6	シルト	
11	黒褐色 7.5 YR 2/6	シルト	
12	褐色 10Y R 7/6	シルト	ローム粒子全体に少量含む。
13	褐色 10Y R 7/6	シルト	ローム粒子わずかに含む。
14	褐色 7.5 YR 5/6	シルト	
15	明褐色 7.5 YR 5/6	シルト	



遺構名	層位	出土状況	遺 存 状 況	備 考	備 考
23号土坑	10層上層	一括	溝内実地 遺構次相	11層 17.0cm	(11層部) 出 孔 → 銅製文 ★小突縁 ← 沈銅文

第48図 23号土壌 (縄文時代前期末葉)

何学文が施文されている。第48図2は第3群8類に属する胴部破片である。横位平行沈線文と山形平行沈線文が施文される。
(C-1-1) (A-3-1)

24号土壙 (第49図・写真5-7)

調査区北側中央、D-6区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.72m、短軸1.24mの楕円形である。深さ32cm、底面にはやや起伏がある。壁面は内穹気味にゆるやかに立ち上がる。埋土は5層で構成されている。

遺物は縄文土器片7点、微細刺離痕のある剝片1点、凹石1点が出土した。第49図1は3群8類に属するI1縁部破片である。複合I1縁であり肥厚している。竹管先端による縦位連続刺突文が2列に施文されるが一部は横位に施文されている。I1縁部中間帯に窓く状に凹部を設けている。I1縁上端には爪先による横位連続刺突文、口縁部下端、及び凹部の周囲には断面が三角形の工具による連続刺突文が施されている。
(A-3-2)

25号土壙 (第49図・写真5-8)

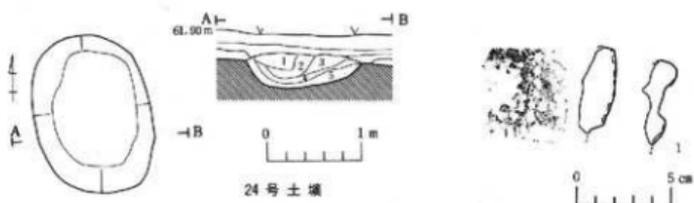
調査区北側中央、D-6区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.41m、短軸1.20mの楕円形である。深さ84cm、底面は平坦でありほぼ中央に27×27cm、深さ14cmのピットを有する。壁面は直線的に垂直に立ち上がる。埋土は8層で構成されている。

遺物は縄文土器片23点、石器5点、礫3点が出土した。第49図2～4は3群8類に属する。第48図2は横位平行沈線文と弧状沈線文が施文された胴部破片である。第48図4には折り返しI1縁が見られる。第49図3は山形沈線文と半截竹管先端による横位連続刺突文が2段に施された胴部破片である。石器はドリルスクリーパー1点、石核1点、二次加工のある剝片2点、磨石1点である。
(C-1-3) (C-1-7) (C-1-1) (C-3-3)

26号土壙 (第49・50図・写真6-1)

調査区北側中央、D-6区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.69m、短軸1.61mのほぼ円形である。深さ62cm、底面はほぼ平坦であり壁は急激に立ち上がる。埋土は6層で構成され、4層上面に焼土が乗っている。

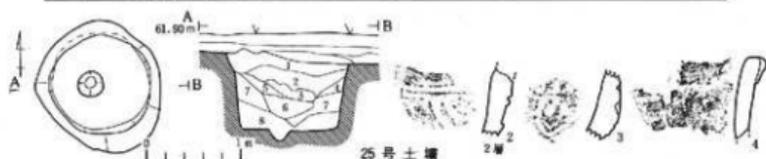
遺物は縄文土器片1点(第50図1)、縄文土器片36点、石器6点、礫1点が出土した。第50図1は土壙北側の焼土下4層上面より一括出土した。第3群2類に属する深鉢形土器である。器高36.4cm、口径32.7cm、底径14.9cm、最大径は口縁にある。平縁であり、I1縁部は肥厚せず弧状沈線2本によって描かれた馬蹄形沈線文が上下から交互に施文され、沈線内は1個ずつ円形刺突文が配される。口縁上端には半截竹管による短い山形沈線文が、頸部には隆帯上に山形沈線文がそれぞれ施文され、口縁部と胴部とを区画している。地文は単節斜行縄文が施文されるが薄い塗で消しがなされている。胎土はもろく0.1～3mmの粒状の角礫凝灰岩を多量に含む。第50図6は3群5類1種に属するI1縁部及び胴部上半の破片である。I1縁部に無文帯があり胴部



24号土壌

24号土壌 埋 土

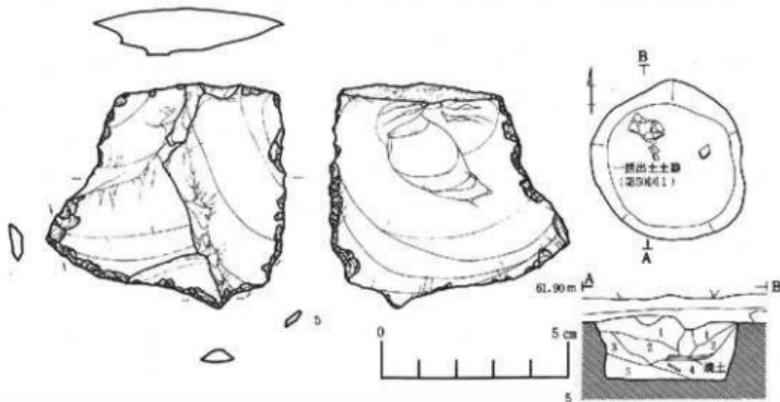
層位	土 色	土 産	備 考
第 1 層	暗褐色 7.5 Y R 5/	シルト	
2	暗褐色 7.5 Y R 5/	シルト	
3	褐色 7.5 Y R 5/	シルト	
4	にじみ黄褐色 10Y R 5/	シルト	ロームを微量含む。
5	明黄褐色 10Y R 5/		



25号土壌

25号土壌 埋 土

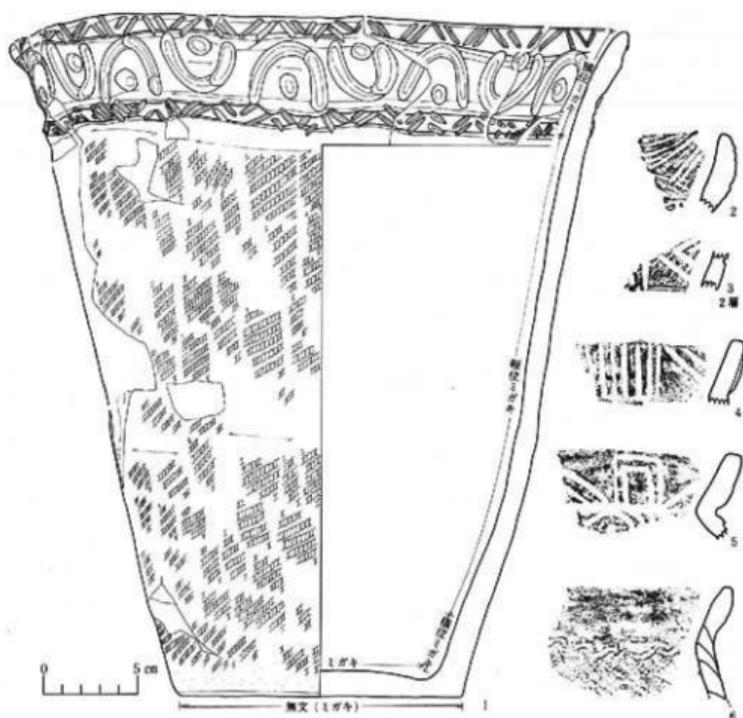
層位	土 色	土 産	備 考
1	褐色 7.5 Y R 5/	シルト	炭化物を少量含む。
2	暗褐色 10Y R 5/	シルト	炭化物・ロームを多量含む。
3	暗褐色 10Y R 5/	シルト	炭化物を多量含む。
4	褐色 7.5 Y R 5/	粘土質シルト	
5	明黄褐色 10Y R 5/	粘土質シルト	暗褐色土ブロックを含む。
6	明黄褐色 10Y R 5/	粘土質シルト	炭化物を微量、礫を少量含む。
7	暗褐色 10Y R 5/	シルト	ローム・スコリアを少量含む。
8	暗褐色 7.5 Y R 5/	シルト	炭化物少量含む。



26号土壌

第49図 24・25・26号土壌 (縄文時代前期末葉)

埋 土				
層位	土 色	土 性	備 考	
1	暗褐色	7.5 YR 5/1	シルト	
2	暗褐色	10Y R 3/1	シルト	炭化物を多量、ローム・炭土を少量含む。
3	黄褐色	10Y R 3/1	シルト	炭化物を少量含む。
4	暗褐色	10Y R 3/1	シルト	炭土を微量含む。
5	明褐色	7.5 YR 5/1	粘土質シルト	
6	褐色	7.5 YR 5/1	シルト	



遺構名	層位	出土状況	遺 存 法	尺 寸	施 文	回 壁	備 考
26号土壺 (D-6)	4層土層	一括	口縁・胴部 部分欠損	口高 35.4cm 口径 32.7cm 底径 14.9cm	● 施 文 → 刻 凸 → 沈 線 → 1方巾	● 横位L状縄文	全平 磨滅

第50図 26号土壺 (縄文時代前期末葉)

には横位綫縮文が施文される。第50図4、5は3群5類1種に属する口縁部破片である。第50図4は2本1組の斜行平行沈縮文、縦位沈縮文及び横位平行沈縮文が施文され、第50図5は頸部に横位沈縮文、胴部には弧状沈縮文が施文されている。石器は二次加工のある剝片1点、磨石2点、凹痕と磨痕のある礫石器1点、凹痕と敲打痕のある礫石器1点、石皿1点である。

27号土壙 (第51・52図・写真6-2)

調査区北西区、E-9区に位置する。第5層上面で確認、28号土壙を切っている。上端平面形は長軸2.14m、短軸2.02mのほぼ円形である。深さ80cm、底面は平坦であり壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は9層で構成され、上下2層に大別される。

遺物は縄文土器片多数、石器3点が出土している。遺物はほとんどが2 a層中より出土しており、第51図1、第52図1、2、9-12は2 a層から出土した。第52図10は3群5類に属する口縁から胴部にかけての破片である。平縁であるが、半円状の突起を有し、ボタン状貼付文を伴う。また縄文原体による圧痕文が施文されている。地文は無節斜行縄文であるが、撫で消しについては不明である。第51図1は3群6類に属する円筒形の深鉢形土器の口縁部破片である。口唇直下に粘土紐による隆帯をめぐらし、縦位沈縮文を施されたコブ状貼付文を4ヶ所に配してある。地文は無節の斜行縄文である。第51図1は3群3類1種に属する口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁端の内外面に隆帯をめぐらし、口縁部文様は上下に平行沈縮、その中間に山形沈縮を施文し、4ヶ所にコブ状貼付文を配している。胴部には曲線的な沈縮文、縦位平行沈縮文が施文される。第52図2は3群8類に属する底部破片である。底径14.9cmを測る。地文は施文されていない。第52図12は3群3類2種に属する胴部破片である。半截竹管による山形平行沈縮文が二段に施文され、山形頂部の接点には円形沈縮文が施文される。胴部文様帯の四区画が行なわれている。第52図9は3群8類に属する口縁部破片である。半円状とコブ状の突起3個をもち、半円状の突起の直下には刺突の加えられたコブ状貼付文が配され、コブ状突起には縦位の沈縮文が施文される。石器は縦形石匙1点、剝片1点、磨石1点である。

28号土壙 (第51・52・53図・写真6-3)

調査区北西部、E-9区に位置する。第5層上面で確認、27号土壙に南半を切られている。上端平面形は長軸1.25m、短軸約1.23mのほぼ円形と考えられる。深さ72cm、底面は平坦であり、壁面は強くオーバーハングする。埋土は4層で構成されており、27号土壙へ倒れ込むような状況を示している。

遺物は縄文土器多数、石器16点、礫5点が出土した。第52図7、8は3群1類1種に属する口縁部破片である。横位沈縮文が施され、第52図7は口縁部下端に段を有し、第52図8は双コブ状突起を有する。第52図4は棒状貼付文が施され、小突起を11縁を有する。第52図3、6は

3群8類に属する口縁部破片である。第52図3には山形平行連続刺突文が、第52図6には渦巻状の沈線文が施文され、口縁下端に段を有する。石器は石匙2点、石核1点、ドリル2点、2次加工のある剥片1点、微細刺離痕のある剥片1点、剥片8点、凹石1点である。

29号土壙 (第52図・写真6-4)

調査区中央やや北西寄りのD-8区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸0.86m、短軸0.82mの円形である。深さ62cm、底面は中央が低く、ゆるやかな傾斜をもち、壁面は急激に立ち上がる。埋土は6層で構成されている。

遺物は縄文土器2点が出土している。第52図13は3群8類に属する胴部破片である。縦位、横位、斜行、弧状の各平行沈線文が施文されている。
(A-1-3)(A-1-2)(A-1-7) (A-1-4)

30号土壙 (第53図・写真6-5)

調査区中央、G-6区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸0.82m、短軸0.78mのほぼ円形である。深さ44cm、底面は平坦であるが、扁平な輝石安山岩が敷いてあった。壁面は急激に立ち上がる。埋土は5層で構成され、全層にわたってローム粒が認められた。

遺物は縄文土器片5点、石器3点、礫5点が出土した。太い縦位沈線文をもつ3群8類に属する口縁部破片が出土している。石器は微細刺離痕のある剥片1点、釣針形石器1点(第52図5)、板状磨石1点である。釣針形石器は、実用品とは考えにくい。

31号土壙 (第54図・写真6-6)

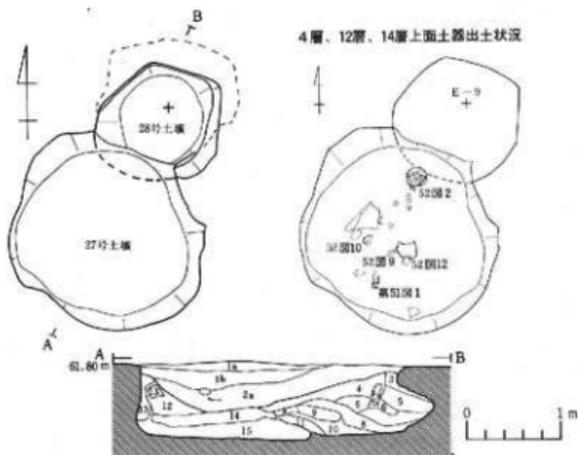
調査区中央、G-6区に位置する。第5層上面で確認、芋穴により上半はほとんど削平を受けている。上端平面形は長軸推定約1.46m、短軸推定約1.11mの楕円形と考えられる。深さ47cm、底面は中央が低くゆるやかな傾斜をもち、中央にピットを有する。壁面はゆるやかに立ち上がる。埋土は9層で構成されている。

遺物は縄文土器片10点、剥片2点が出土している。第54図1は第3群1類1種に属する口縁部破片である。弧状沈線文、斜行沈線文、横位沈線文が施文され、口縁部が肥厚し下端に段を有する。
(A-1-7) (A-1-2) (A-1-3)

32号土壙 (第54図・写真6-7)

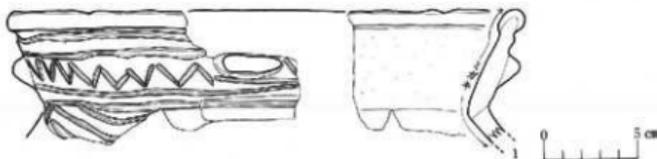
調査区中央北西寄り、H-8区に位置する。第5層上面で確認した。上端平面形は長軸0.97m、短軸0.79mの楕円形である。深さ28cm、底面はほぼ平坦であり、壁面は内湾気味に急激に立ち上がる。埋土は単層である。上部は削平を受けていると考えられる。

遺物は縄文土器片28点が出土した。第54図3は3群1類2種に属する口縁部破片である。口縁は肥厚し、口唇直下に横位沈線文、その下に縦位弧状沈線文が横位連続施文される。口縁下端に段を有する。第54図2は3群3類2種に属する口縁部から胴部上半へかけての破片である。山形突起を有する。口縁部には半截竹管による横位平行沈線文、棒状貼付文が施され、胴部上
(A-1-3) (A-2-3)



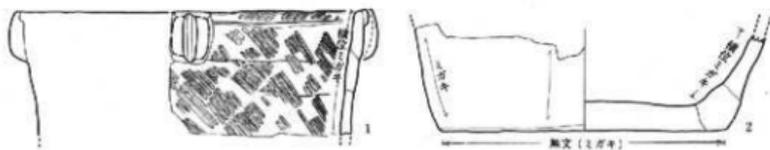
27・28号土壌 埋 土

層位	土色	土性	備 考		
共有埋土	1a 暗褐色	10Y R 5/6	シルト		
	1b 暗褐色	10Y R 5/6	シルト	炭化礫少量、炭化物を含む。	
	2a 黒褐色	10Y R 5/6	シルト	炭化礫粒・炭化物を含む。	
	3 黄褐色	10Y R 5/6	粘土質シルト	炭化礫少量、ロームを含む。	
	4 暗褐色	7.5 Y R 5/6	シルト	炭化物を全体に含む。	
	28号土壌埋土	5 暗褐色	10Y R 5/6	シルト	
		6 暗褐色	10Y R 5/6	シルト	炭化物少量、炭化物を全体に含む。
		7 褐色	7.5 Y R 5/6	粘土質シルト	
		8 黄褐色	10Y R 5/6	粘土質シルト	
		9 暗褐色	7.5 Y R 5/6	粘土質シルト	ローム?
	27号土壌埋土	10 暗褐色	7.5 Y R 5/6	粘土質シルト	炭化物少量、炭化物を全体に含む。
11 褐色		10Y R 5/6	粘土質シルト		
12 褐色		7.5 Y R 5/6	シルト		
13 黄褐色		10Y R 5/6	粘土質シルト	炭化礫少量、ロームを含む。	
14 黄褐色		10Y R 5/6	粘土質シルト	炭化物を全体に含む。	
15 黄褐色		10Y R 5/6	粘土質シルト	炭化物を全体に含む。	

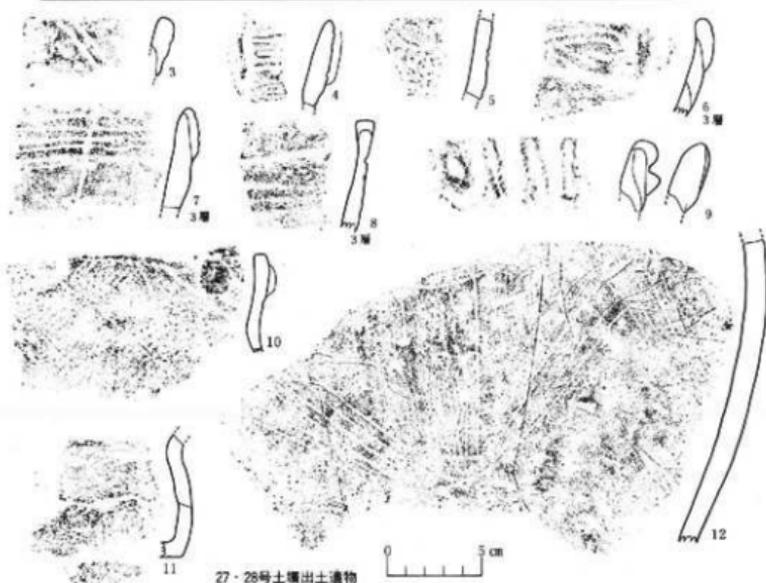


遺 構 名	層位	出土状況	遺 存 法 量	陶文・調整	備 考
27, 28号土壌 (E-9)	4層上面	口縁部	口径27.4cm	小突起 → 沈線文	磨滅している。

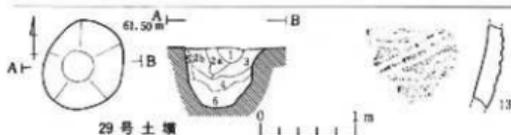
第51図 27・28号土壌 (縄文時代前期末葉)



遺物名	層位	出土状況	遺存	法	量	施文・調整	備考
27・28号土壙 (北-9)	2 a 層		口縁部	口徑18.5cm		縄文・隆帯 (口縁部)	輪痕あり。



27・28号土壙出土遺物

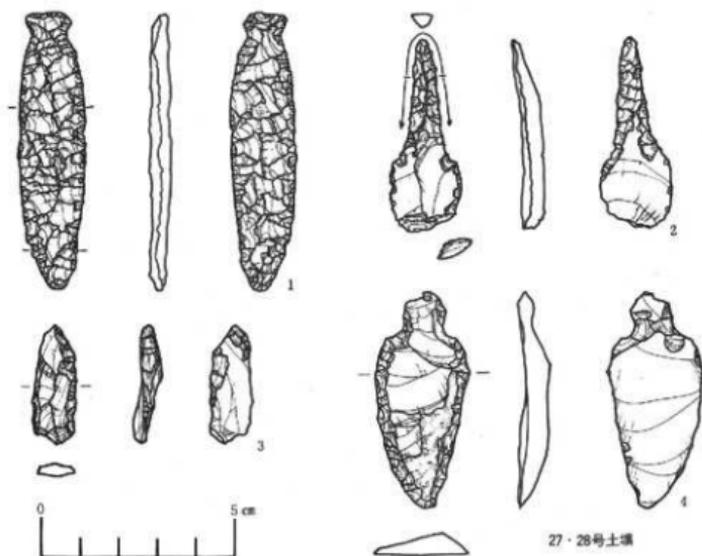


29号土壙

29号土壙 埋

層位	土	色	土性	備考
1	暗褐色	10YR 5/1	シルト	
2 a	暗褐色	7.5 YR 5/1	シルト	
2 b	暗褐色	7.5 YR 5/1	シルト	
3	褐色	7.5 YR 4/1	シルト	
4	暗褐色	10YR 5/1	シルト	
5	暗褐色	10YR 5/1	シルト	ロームブロック少量。
6	褐色	10YR 5/1	粘性シルト	ローム・炭化物を含む。

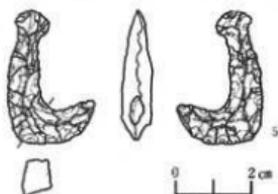
第52図 27・28号土壙出土遺物・29号土壙 (縄文時代前期末葉)



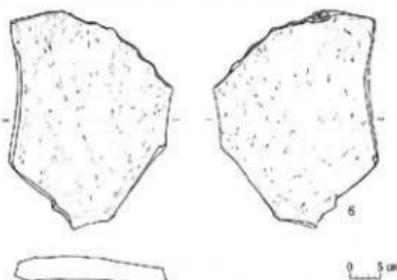
27・28号土壌



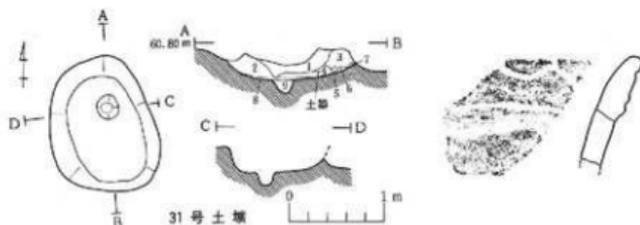
30号土壌



層位	土色	土性	質	特
1	暗褐色 7.5 YR 4/1	シルト	ロームアロップと炭化物を含む。	
2	暗褐色 10Y R 4/1	シルト	ロームとカーボンを微量含む。	
3	にぶい黄褐色 10Y R 4/1	シルト	カクラン。	
4	黄褐色 10Y R 4/1	シルト	ロームを少量含む。	
5	黄褐色 10Y R 4/1	シルト	ロームと石を含む。	

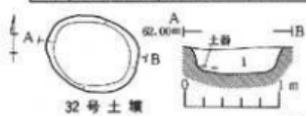


第53図 27・28号土壌出土遺物・30号土壌 (縄文時代前期末葉)



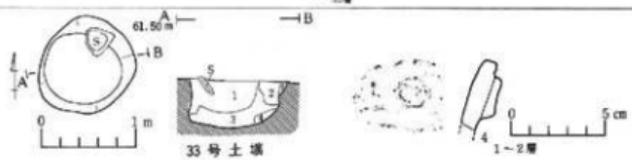
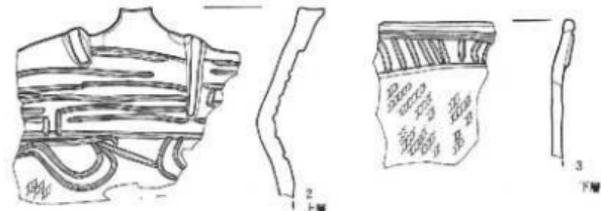
31号土壌 埋 土

層位	土 色	土 性	備 考
1	暗褐色 10Y R 7/5	シルト	黄褐色ブロックと炭化物を含む。
2	暗褐色 7.5 Y R 7/5	シルト	ロームブロックを含む。
3	黒褐色 10Y R 7/5	シルト	ロームを含む。
4	黒褐色 10Y R 7/5	シルト	ロームを含む。
5	黒褐色 7.5 Y R 7/5	シルト	
6	黒褐色 10Y R 7/5	シルト	
7	明黄褐色 10Y R 7/5	シルト	
8	黄褐色 10Y R 7/5	シルト	暗褐色ブロックを含む。
9	にぶい黄褐色 10Y R 7/5	シルト	



32号土壌 埋 土

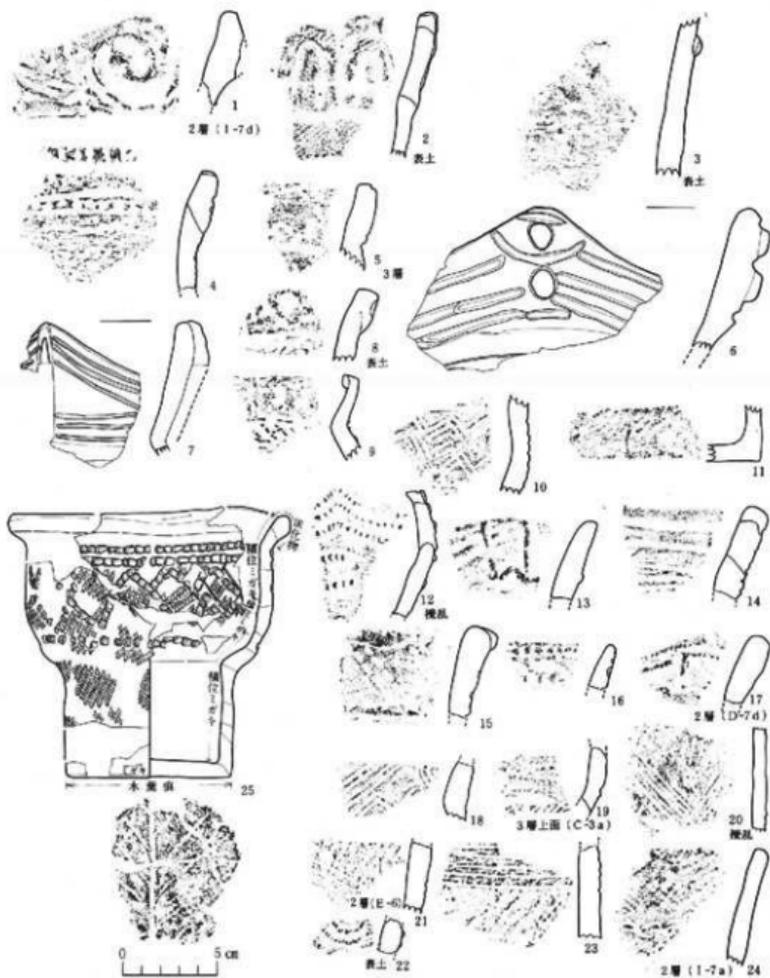
層位	土 色	土 性	備 考
1	黒褐色 10Y R 7/5	シルト	炭化物を若干含む。



33号土壌 埋 土

層位	土 色	土 性	備 考
1	黒褐色 10Y R 7/5	シルト	炭化物少量混入。
2	暗褐色 10Y R 7/5	シルト	
3	褐色 10Y R 7/5	シルト	明黄褐色粘土を部分的に含む。
4	褐色 7.5 Y R 7/5	シルト	明褐色粘土ブロックを多量に含む。

第54図 31・32・33号土壌 (縄文時代前期末葉)



遺構名	層位	出土状況	保存法	数	施文・調整
1号壺穴 (D-5)	上層	一括	写欠損 口徑 17.6cm		(胴部・刺突文)

第55図 遺構外出土の縄文土器 (前期末葉)

半には血輪的な平行沈線文が施文される。

(A-1-7)

33号土壌 (第54図・写真6-8)

調査区南西部、1-8区に位置する。第5層上面で確認。上端平面形は長軸1.06m、短軸0.94mのほぼ円形である。深さ34cm、底面は中央が低くゆるやかな傾斜をもつ。壁面は急激に立ち上がる。理上は4層で構成され、3層4層にはロームブロックを含む。また1層中には扁平な円礫が認められた。

遺物は縄文土器片20点、石器3点、礫1点が出土した。第54図4は3群8類に属する口縁部破片である。ボタン状貼付文が施され、口縁上下端に横位沈線文が施文され、その間に弧状の沈線文が連続施文される。

(A-2-2)

(A-1-3)

(A-1-6)

遺構外出土遺物について (第55図)

第54図1-3は3群1類1種に属する口縁部破片である。第55図1は山形突起をもち、コブ状貼付文の周囲に細い粘土紐を渦巻状に貼り付けている。第55図2は第50図1で見られた馬蹄形沈線文を連続して施され半円状の突起をもつ。頸部に横位沈線がめぐり、第55図3は頸部から胴部上半へかけての破片である。頸部に隆帯十連続刺突文、胴部には結絛文が施文される。

第55図4は3群1類2種に属する口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部は肥厚し横位平行沈線文が施され、その間に竹管文による連続刺突文が施文される。胴部上半には半截竹管による横位平行沈線が施文され、その上に半截竹管による半月形刺突文が2段に施される。

第55図9は3群3類1種に属する口縁部破片である。口縁部上端内面に段を有する細い粘土紐の貼り付けによる幾何学文を施す。

第55図5・6は3群3類2種に属する口縁部破片である。第55図4は半縁であり口縁が肥厚し下端に段を有する。口縁上端に斜行沈線文、下端には弧状沈線文、横位沈線文が施される。第55図5は波状口縁で肥厚する。3本の斜行する平行沈線が波状頂部へむかい、頂部直下にコブ状貼り付け文が縦位に2個施され3本の短い横位沈線文にはさまれる。第55図7も波状口縁であり、口縁上端で3本の斜行する平行沈線が波状頂部へむかい、頂部から棒状貼り付け文が施され、口縁には3本の横位平行沈線が施文される。

第55図8は3群3類2種に属する口縁部破片である。上下幅の狭い口縁部に凹形刺突文と連続弧状沈線文が施文される。口縁は肥厚し下端に段を有する。

第55図10、11は3群4類に属する。第55図10は胴部破片であり山形平行沈線文が2段に施文される。上端には横位沈線文が施文される。第54図11は底部破片である。器壁は内弯気味に立ち上がる。

第55図12は3群7類に属する口縁部から胴部上半にかけての破片である。山形突起を有する。

隆帯十半截竹管文による連続押し引き刺突文を口縁に山形に3列、胴部に2列配している。

第55図13～17は3群8類に属する口縁部破片である。第55図13は口縁がやや波状をなす。波状頂部へむかう斜行平行沈線文が施文され、細い粘土紐により縦位及び弧状の貼り付け文が施される。^(A-1-2) 第47図6と共通する。第55図14は横位平行沈線が施文されている。第55図15は口縁上端と下端に半截竹管による連続刺突文が施文され、その間に斜行する連続刺突文が施文される。^(A-3-2) 第55図16は半截竹管による弧形刺突文が2段に連続刺突されるものである。第55図17は波状口縁であり、波状頂部に凹形刺突文、口縁端に沿って隆帯十半截竹管文による連続押し引き刺突文が施文される。^(A-6-2)

第55図18～23は3群8類に属する胴部破片である。第55図18・20・21・23は半截竹管による平行沈線が施文されたものである。第55図18・20では胴部文様帯の四区画が行なわれていると考えられる。第55図19・22は隆帯十半截竹管先端による連続押し引き刺突文が施文されている。^(C-6-2)

第55図24は3群8類に属する口縁部破片である。単節斜行縄文が施文されている。

第55図25は3群4類に属する深鉢形土器である。器高14.0cm、口径15.0cm、底径8.6cmで、最大径は口縁にある。平縁であり、口縁部はやや肥厚する。口縁部は無文であり、文様帯は胴部上半にある。文様は先端がヘラ状の工具による横位連続押し引き刺突文が胴部上半の上端に2条、下端に1条めぐり、その間に同じ工具による山形連続押し引き刺突文が2段に施文されており、一部には文様の削りつけのためと考えられる細い沈線がみられる。地文は単節斜行縄文が施文されるが、文様施文前に薄くまで消してある。胎土は緻密であり、砂粒の混入は少ない。また底部には木葉痕が認められる。

5. 縄文時代中期の遺構と遺物

1号竪穴遺構 (第61図・写真8a-1)

調査区北東部、C-4区、C-5区に位置する。第4層上面で確認、12号土壇と47号土壇と重複関係があり、両遺構より新しい。上端平面形は長軸3.33m、短軸3.03mの円形である。深さ13cm、底面は平坦である。底面中央部はさらに竪穴状に落ちこみ、平面形は長軸2.50m、短軸1.71mの楕円形である。深さは35cm、底面は平坦であり壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は9層で構成され大きく上下2層に分かれる。

遺物は南西部の確認面から第3群4類土器(第55図25)が出土、また北東部の上段の底面から第3群土器の破片1点が出土し、下層より第4群土器破片14点が一括出土したことから、第4群土器の時期の遺構とした。また石器は石匙3点(第56図8・10)、石核1点(第56図9)、剥片2点が出土している。

第56図1～6は同一個体である。第4群1類に属する。1～2は口縁部上半の破片である。隆帯と沈線による渦巻文・曲線文が施文される。3は口縁部下半の破片であり無文帯を有し、(A-5-2)(A-5-3)隆帯と沈線による横位直線文が施文されている。4～6は胴部破片である。4・5には直曲平(A-1-3)行沈線文が、6には平行沈線による棘状文が施文されている。(C-1-9)

9号住居跡(第57・58・59図・写真7-1～4)

調査区ほぼ中央東寄り、F-6区・G-6区を中心に位置する。第5層上面で確認された。遺構の保存状況は極めて悪く、遺構の北側3分の2は軸約40cmの機械掘りの芋穴が東西に7列走りさらに遺構全面にわたって東西に手掘りの芋穴が走るため、壁面及び周溝は北西部で確認されたにすぎず、床面はほとんど残っていない。遺構の上端平面形は明確にはわからないが長軸約7.60m、短軸約6.80mの楕円形と考えられる。主軸方向はN-16°-Eである。深さ32cm、床面については不明であるが本来は平坦であったと考えられる。壁面はゆるやかに立ち上がる。南西部で一部段差が認められるが、本遺構との関係は不明である。

周溝は軸約40cm、深さ6cmを計り、北西部のみに認められるが本来は全周していたと考えられる。柱穴は13個確認された。P3とP2、P6とP7に重複関係が認められ、P2よりP3が、P7よりP6が古い。柱痕は確認されなかった。炉跡は遺構南部に位置する。平面形は長軸約2.90m、短軸1.50mの北側でやや幅の狭くなる楕円形である。土器埋設石組部、石組部、前庭部で構成される複式炉である。炉石は前庭部東壁面、石組部四面に存在していたと考えられるが倒平をうけており残存する炉石は前庭部東壁に扁平な角礫が1個、石組部東西壁面で扁平な角礫がそれぞれ1個、前庭部と石組部との仕切石(角礫及び円礫)が6個である。前庭部の平面形は長軸1.85m、短軸1.50mの隅丸長方形で深さは18cmである。南壁際に幅約30cm、深さ約20cmの溝状の落ち込みが認められ、中央がピット状にやや深くなっている。底面は中央

がやや低くなっておりゆるやかな傾斜をもつ。また径10~30cm、深さ5~10cmの円形の浅いピットが5個認められる。石組部には掘り方があり、前庭部との仕切り石を埋め込み底面は南側を低くしゆるやかな傾斜をもつように構築されている。また底面下には性格不明のピットがある。石組部の平面形は長軸約1.20m、短軸1.05m以上の北側で幅の狭くなる台形と考えられ、深さは18cmである。底面は前底部底面より一段下がり、全面焼けている。特に北半の燃焼度が強く底面下3~5cmまで加熱により赤変している。土器埋設石組部には径約48cm、深さ14cmの掘り方があり深鉢形土器の胴部が埋設されてある。掘り方に円礫・角礫を配している。が跡の埋土は18層で構成されている。10層に焼土粒を多く含み石組部最下層11層には焼土粒と炭化物を極めて多量に含む。土器埋設石組部では掘り方埋土には焼土粒が認められるが埋設土器内部の埋土中にはほとんど認められず底面も焼けていない。また、遺構北部の主軸線上に埋設土器が1個存在する。径57cm、深さ10cmの円形の掘り方があり深鉢形土器の胴部が埋設されてある。掘り方底面は壁際を土器に合わせてやや深く掘り込んである。埋土は10層で構成される。掘り方埋土には焼土粒が認められるが埋設土器内部の埋土中には焼土粒は認められず、底面は焼けてはいない。

9号住居跡は内部施設に複式炉と埋設土器を有しているが、炉の改築が行なわれた痕跡はない。また柱穴は13個のうち重複関係をもつものが計4個あるが、他の柱穴に建て替えは行なわれていない事から、一部の柱穴の建て替えがあるにせよ住居の建て替えはなかったものと判断できる。柱穴はP3とP12がやや内側に位置することから、西側はP1とP3、東側はP13とP12の計4本が石組部と土器埋設石組部を覆う形で組み、北半部では西側がP4、P5、P6、東側ではP11、P10、P9あるいはP8が対応すると考えられる。住居の規模が比較的大形なために10本柱穴という構造にしたと考えられる。

遺物は第5群土器と石器16点が出土している。第59図1は炉に伴なう埋設土器である。口縁部の上半と胴部下半及び底部を欠く。最大径38.5cmを計る。第5群2類1種に属する深鉢形土器である。口縁部には隆帯と沈線による渦巻文と曲線文、胴部には楕円文・懸垂文が施文されている。地文は単節L R斜行縄文が沈線区画内に施文されている。第59図2は埋設土器である。口縁部の上半と胴部下半及び底部を欠く。最大径29.0cmを計る。第5群2類2種に属する深鉢形土器である。胴部には楕円文と懸垂文・逆「じ」字文・「C」字文が施文される。地文は単節L R斜行縄文が沈線区画内に施文されている。第59図3はが跡から出土した第5群2類に属する胴部破片である。楕円文と懸垂文が施文されている。

石器は石鏃3点(第58図2、3、4)、スクレイパー1点、石匙1点(第58図5)、ヘラ状石器(第58図1)、ピエスエスキュー1点、二次加工ある剥片1点、剥片2点、磨石1点、礫6点が出土している。

10号住居跡（第60図・写真7-5～8）

調査区南西端、J-10区に位置する。第4層上面で確認した。西側で2号溝、67号土城、68号土城と重複関係があり、3遺構より古い。南側は崖面になっており南側壁面は消失している。上端平面形は長軸6.22m、短軸5.78m以上のほぼ円形である。主軸方向はN-30°-Wである。深さ16cm、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦である。貼り床はない。

周溝は2条確認された。外側の1号周溝は幅約30cm、深さ8～22cmとやや段差があり一部とぎれるが炉跡を除いて全周すると考えられる。内側の2号周溝は幅約16cm、深さ9～13cmである。南西部では確認されなかった。柱穴は18個確認されP10とP4とP5、P6とP7、P3とP17に重複関係がみられ、P5よりP4が、P4よりP10、P7よりP6、P17よりP3が古い。柱痕は確認されなかった。また他にピットが4個検出された。炉跡は2基検出された。1号炉は遺構南西部に位置し、主軸方向はN-40°-Eである。2号がP8・P9と重複関係がありこれらより古い。長軸2.50m以上、短軸1.20m以上の不整楕円形で深さ12cmある。前庭部と石組部を確認したが2号が構築の際に破却されたらしく前庭部及び石組部に炉石が散乱していた。複式炉である。前庭部は長軸1.75m、短軸1.30mの楕円形である。底面は中央部が低くゆるやかな傾斜をもつ。石組部は長軸1.20m、短軸1.16mの楕円形であり、炉石は原位置を保っていたのは南東隅の角礫2個と前庭部との仕切り石3個（角礫）だけであり、他は抜き取り痕を確認した。底面は平坦であったと考えられる。2号炉は遺構南部に位置し、主軸方向はN-3°-Wである。前庭部と石組部a・bで構成されている複式炉である。平面形は長軸2.5m以上、短軸0.96mの楕円形を2つ合わせた形をしている。前庭部は長軸1.97m、短軸1.70m以上の楕円形で深さ12cmである。底面は中央が低くゆるやかな傾斜をもつ。石組部aは平面形が長軸1.10m、短軸0.95mの楕円形で深さ20cmある。底面は平坦で焼けている。円礫と角礫を使用して構築されている。石組部bは平面形が径0.45mの円形の掘り方を有し小礫を配している。深さは10cmである。また2号炉の主軸線上、北壁際に埋設土器が1個存在する。径38cm、深さ16cmの円形の掘り方があり深鉢形土器の胴部が埋設されてある。

10号住居跡は炉の重複関係、柱穴の重複関係、2条の周溝から3時期の変遷が考えられる。第1期は主軸方向は北東方向で、北西側がP16・P11・P15、東南側がP2・P13・P19が組み2号周溝が対応する。第1期の炉は1号炉の石組部の可能性がある。第2期の主軸方向も北東方向で、柱穴は北西側がP4（P10）、P6、P8、東南側はP1・P14・P17が組み1号周溝が対応する。炉は1号炉である。第3期の主軸方向は北方向であり柱穴は西側がP5、P7・P9、東側はP3・P12・P14が組み1号周溝が対応する。炉は2号炉である。埋設土器は第3期のものと考えられる。

遺物は第5群土器と石器40点が出土している。第61図1は埋設土器である。口縁部と胴部下半

及び底部を欠損している。第5群2類3種に属する深鉢形土器である。地文だけが施文されている。第62図1は床面より出土した深鉢形土器である。胴部下半と底部を欠損する。口縁部には栴円文、隆帯と沈線による渦巻文・曲線文が施文され、横位平行沈線文が頸部文様として施文される。(C-1-10) (A-5-2) (A-5-3) (B-1-3) 胴部には縣垂文あるいは栴円文・隆帯と沈線による縦の渦巻文が施文されていると考えられる。第62図2-4は第5群2類に属する。胴部破片である。3・4は隆帯と沈線による渦巻文が施文されている。3はP13出土、4は埋土1層出土である。2は2号炉底面から出土している。栴円文が施文されている。(C-1-10)

石器はスクレイパー2点、石匙1点(第62図7)、ピエスエスキュー2点(第62図6、8)、二次加工のある刮片3点、ドリル1点、微細剝離痕のある刮片5点、刮片16点、磨石2点、凹痕と磨痕のある礫石器2点、珪化木4点、礫1点、小石皿様礫器1点(第62図5)、有溝砥石1点が出土している。

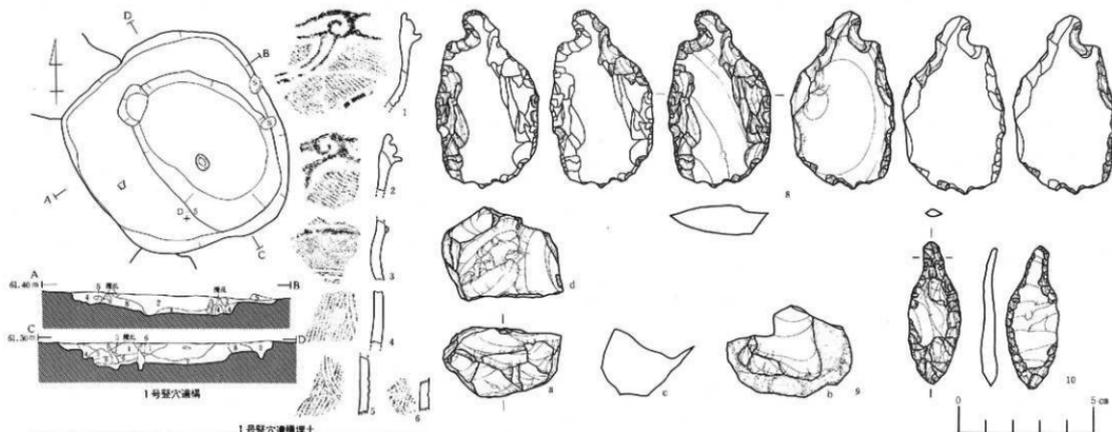
1号埋設土器(第56図・写真8a-2)

調査区北側中央、D-7区に位置する。第4層上面で確認、掘り方の上端平面形は長軸37cm、短軸約31cmの円形で、深さは16cmである。底面は平坦であり、壁面は急激に立ち上がる。埋土は3層で構成されている。

埋設土器(第56図7)は底面からやや浮いて倒立した状態で出土した。口縁から胴部上半にかけて残存している。第5群2類2種に属する深鉢形土器である。口径35.5cmを計る。頸部文様として横位沈線文が施文される。胴部には栴円文が施文され、縦位沈線文により区画されている。(B-1-5) (C-1-10) (C-1-4) また埋設土器のすぐ北には40cm程の扁平な角礫があり、西側50cm程の所には第63図1の土器が第4層上面から出土している。

遺構外出土遺物(第63・64図)

第63図2・3は第4群2類に属する同一個体の口縁部破片である。波状口縁を呈する。口縁部は無文で口唇部に隆帯と沈線による渦巻文が施文される。第64図5・6は第4群あるいは第5群に属する同一個体の胴部及び底部の破片である。隆帯と沈線による縦位直線文を有する。(A-5-2) (C-5-4) 第63図5は第4群あるいは第5群に属する口縁部近くの破片である。隆帯と沈線による横位直線文に連続刺突文が加えられている。第63図1は第5群2類に属する上半部を欠損する深鉢形土器である。口径5.8cmを計る。縣垂文が施文される。地文は単節斜行縄文が施文されている。(C-1-11) 第62図8は第5群2類に属する口縁部破片である。隆帯と沈線による縦位の渦巻文が施文され口縁に突起を形成する。また栴円文あるいは縣垂文が施文されていると考えられる。第63図7は第5群3類に属する口縁部破片である。隆帯と沈線による渦巻文と、縣垂文あるいは栴円文が施文されている。第63図9-11、第64図1-3は第5群に属する胴部破片である。栴円文が施文されている。第64図4は第4群あるいは第5群に属する胴部破片である。剝落面に粘土細



1号壑穴遺構

1号壑穴遺構埋土

層位	土色	土性	特徴	備
1	黒褐色	30Y R 写	シルト	
2	暗褐色	7.5 Y R 写	シルト	
3	暗褐色	7.5 Y R 写	シルト	ロームを少量含む。
4	暗褐色	30Y 灰写	シルト	炭化したブロックを少量含む。
5	暗褐色	7.5 Y R 写	シルト	ロームブロックを少量含む。炭化物を少量含む。
6	黒褐色	7.5 Y R 写	シルト	炭化物を微量含む。
7	褐色	7.5 Y R 写	シルト	
8	黄褐色	30Y 灰写	シルト	ロームブロックを少量含む。
9	褐色	30Y R 写	シルト	

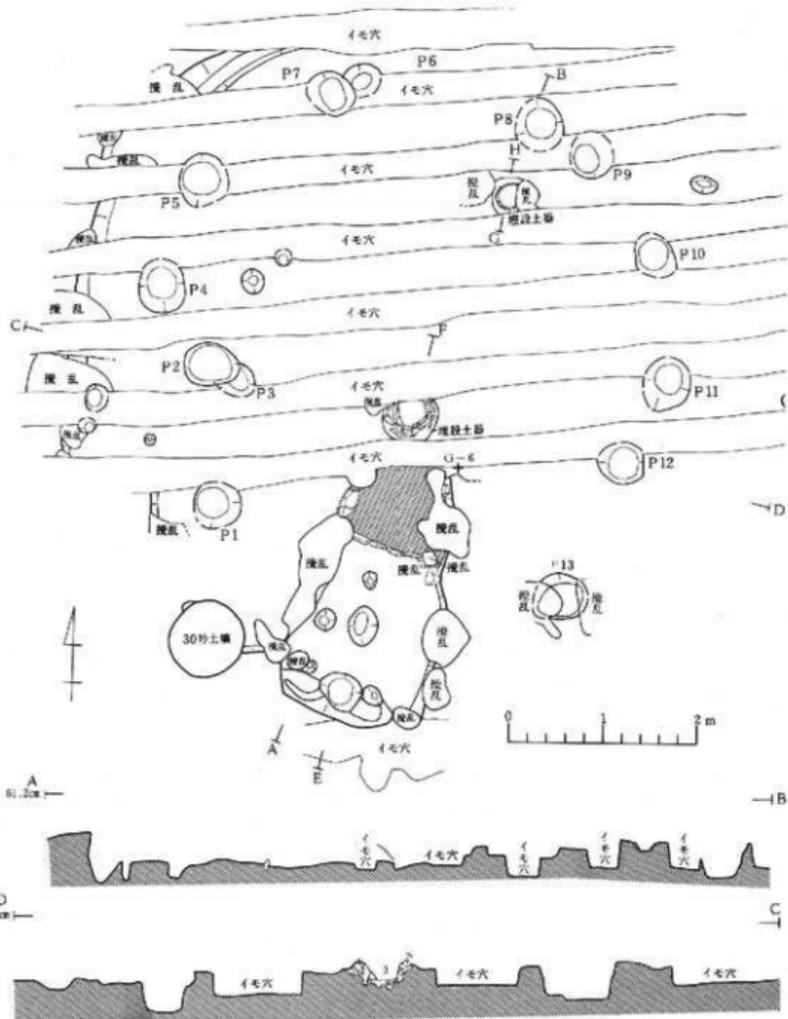
1号埋設土器平面図



1号埋設土器埋土

層位	土色	土性	特徴	備
1	暗褐色	30Y R 写	シルト	
2	暗褐色	30Y R 写	シルト	
3	暗褐色	30Y R 写	シルト	
4	黄褐色	7.5 Y R 写	シルト	
5	暗褐色	30Y 灰写	シルト	
6	褐色	7.5 Y R 写	シルト	
7	褐色	30Y R 写	シルト	
8	褐色	7.5 Y R 写	シルト	
9	褐色	7.5 Y R 写	シルト	燻土を含む。
10	暗褐色	30Y R 写	シルト	

第56図 1号壑穴遺構 (縄文時代中期中葉)・1号埋設土器 (縄文時代中期後葉)



9号住居跡・伊勢埋設土器埋土

層位	土色	土性	備	考
1	赭色 10Y R 5/4	シルト	埋 瓦	
2	褐灰色 10Y R 5/1	シルト	黄褐色粘土・炭化物・焼土粒を含む。	
3	褐灰色 10Y R 5/1	シルト	黄褐色粘土・炭化物・焼土粒を含む。	
4	褐色 10Y R 5/3	シルト	焼瓦、黒褐色土を含む。	
5	褐灰色 10Y R 5/1	シルト	黄褐色粘土・炭化物・焼土粒を含む。	

第57図 9号住居跡（縄文時代中期後葉）

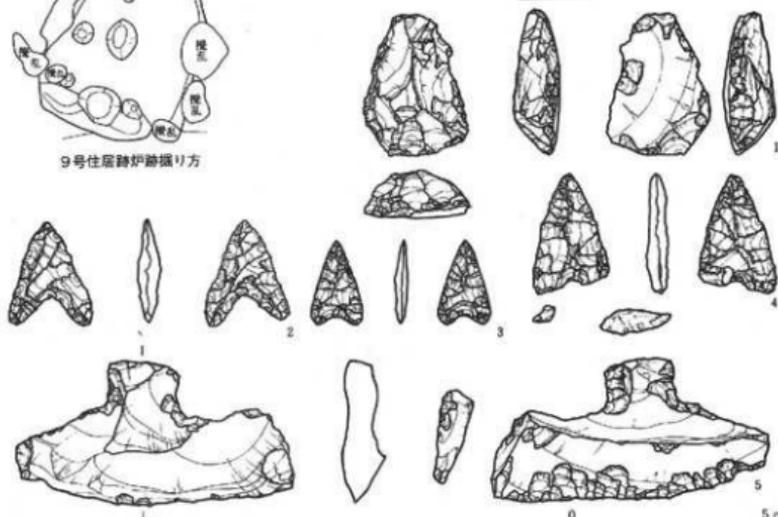


9号住居跡炉跡掘り方



9号住居跡炉跡

9号住居跡埋設土器



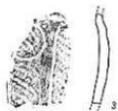
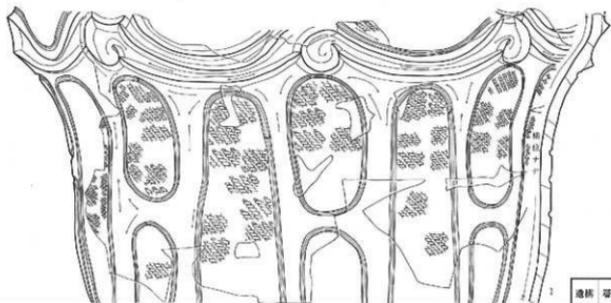
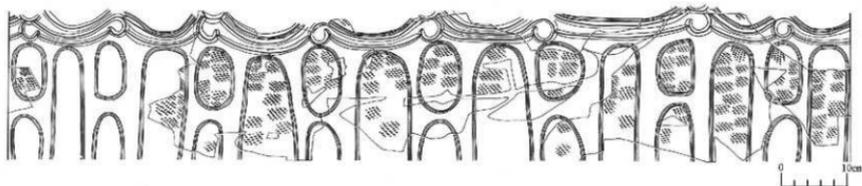
9号住居跡炉跡埋土

層位	土色	土性	備考
1	黒褐色	10Y R 5/2	シルト 腐乱
2	褐色	10Y R 4/2	シルト 褐色土(2-4mm)をまばらに含む。
3	暗褐色	10Y R 3/2	シルト 褐色土(2-4mm)を多く含む。
4	暗褐色	10Y R 3/2	シルト 黄褐色土をブロック状に含む。
5	黄褐色	10Y R 5/2	シルト
6	黒褐色	10Y R 3/2	シルト 褐色土を多く含む。
7	暗褐色	10Y R 3/2	シルト 褐色土(2-4mm)を多く含む。
8	褐色	10Y R 4/2	シルト 褐色土を少量含む。
9	褐色	10Y R 4/2	シルト
10	にぶい黄褐色	10Y R 5/2	シルト 黄褐色土を全体に含み、焼土粒・炭化物を極少量含む。
11	褐色	10Y R 4/2	シルト 焼土粒・炭化物を全体に含む。
12	暗褐色	10Y R 3/2	シルト
13	暗褐色	10Y R 3/2	シルト 黄褐色土を部分的にブロック状に含む。
14	褐色	10Y R 4/2	シルト
15	褐色	10Y R 4/2	シルト 黒褐色土をブロック状に少量含む。
16	褐色	10Y R 4/2	シルト 黄褐色土(1mm)を全体に多く含む。
17	暗褐色	10Y R 3/2	粘土質シルト ロームブロックを含む。
18	黒褐色	10Y R 3/2	シルト

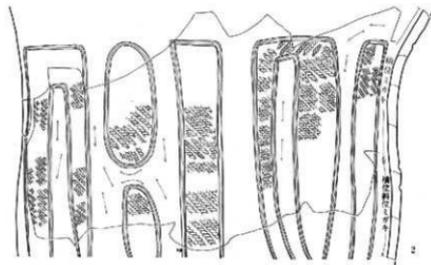
9号住居跡埋設土器埋土

層位	土色	土性	備考
1	褐色	7.5 Y R 4/2	シルト 褐色焼土(2-3mm)を全体に含む。
2	褐色	10Y R 4/2	シルト 黄褐色土を少量含む。
3	黄褐色	10Y R 5/2	粘土質シルト 褐色土を少量含む。
4	暗褐色	10Y R 3/2	シルト 褐色土を多く含み、炭化物・焼土粒を少し含む。
5	黒褐色	10Y R 3/2	シルト 炭化物・焼土粒を多量に含む。
6	黒褐色	10Y R 3/2	シルト 炭化物・焼土粒を多量に含む。
7	黒褐色	10Y R 3/2	シルト 腐乱
8	褐色	10Y R 4/2	シルト 黄褐色土・炭化物・焼土粒を含む。
9	褐色	10Y R 4/2	シルト 黒褐色土・炭化物・焼土粒を含む。

第58図 9号住居跡(縄文時代中期後葉)

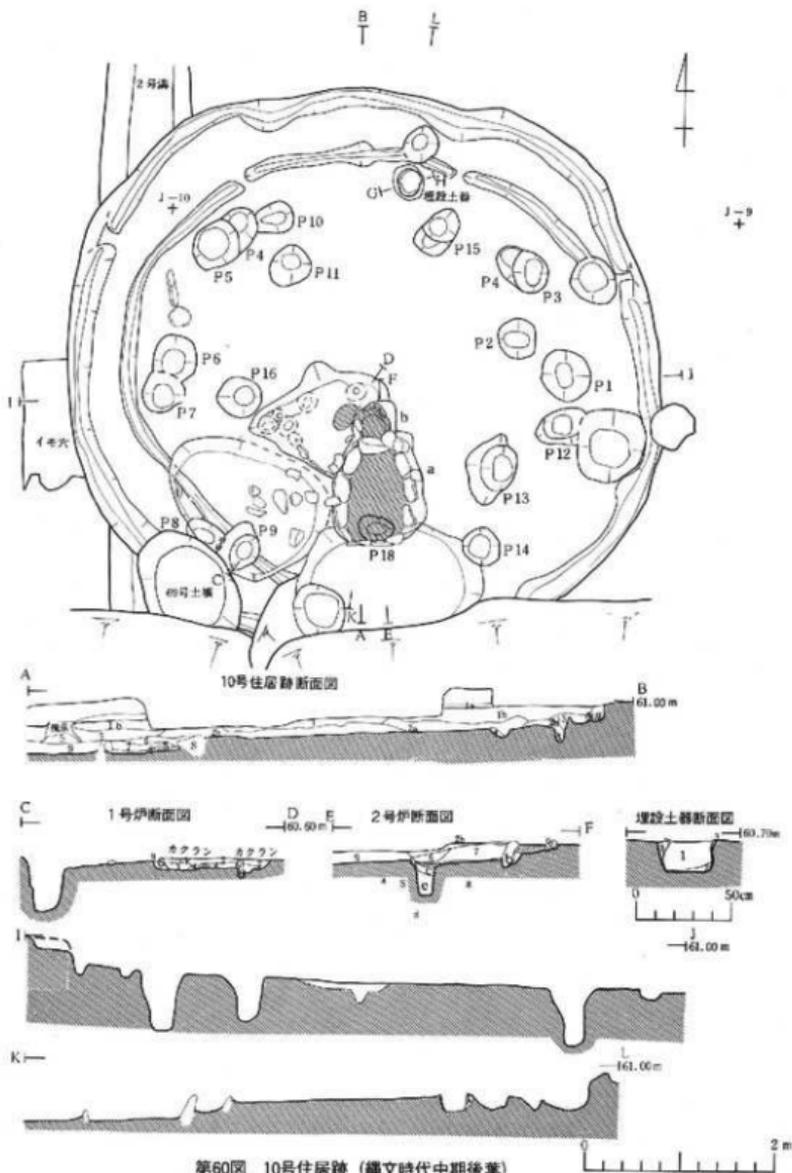


遺構部位	出土状況	保存状況	法量	原文・調整	備考
9住	紅地	断面写 遺存	断面最大径 38.5cm	陰線文・綫文(L,R 部分同相) → 沈線文 →調整(1/4半)	



遺構部位	出土状況	保存状況	法量	原文・調整	備考
9住	埋設	断面写 遺存	断面最大径 23.0cm	綫文(L,R 部分同相) → 沈線文 →調整(1/4半)	

第59図 9号住居跡出土遺物



10号住居跡埋土

層位	土色	土性	層
1a	紫褐色シルト 7.5 YR 5/6	シルト	7.5YR紫褐色シルトを容状に含む。
1b	紫褐色シルト 7.5 YR 5/6	シルト	炭化物を散見含む。
1c	紫褐色 7.5 YR 5/6	シルト	1bより土が硬い。
2a	緑褐色 10 YR 5/6	シルト	炭化物を散見含む。
2b	黒褐色 7.5 YR 5/6	シルト	
3	褐色 7.5 YR 5/6	シルト	
4	にがい黄褐色 10 YR 5/6	シルト	
5	褐色 7.5 YR 5/6	シルト	焼土粒を少量含む。
6	褐色 10 YR 5/6	シルト	焼土粒(2mm)を多量に含む。
7	赤褐色 5 YR 5/6	シルト	焼土粒を含む。
8	明赤褐色 5 YR 5/6	シルト	焼土を含む。
9	褐色 10 YR 5/6	シルト	ロームを少量含む。
10	赤褐色 2.5 YR 5/6	シルト	非常に硬い(焼土)

10号住居跡1号伊跡埋土

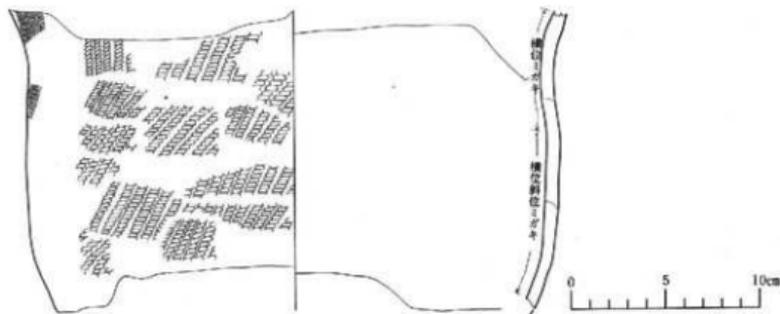
層位	土色	土性	層
1	褐色 10 YR 5/6	シルト	ロームをブロック状に含む。焼土粒を散見含む。
2	褐色 7.5 YR 5/6	シルト	ロームを含む。焼土粒を散見含む。
3	赤褐色 5 YR 5/6	シルト	少量の炭化物と焼土粒を多量に含む。
4	赤褐色 2.5 YR 5/6	シルト	焼土粒を多量に含む。
5	赤褐色 10 YR 5/6	シルト	焼土
6	明赤褐色 5 YR 5/6	シルト	焼土粒を散見含む。
a	明褐色 7.5 YR 5/6	粘土質シルト	
b	褐色 7.5 YR 5/6	粘土質シルト	

10号住居跡2号伊跡埋土

層位	土色	土性	層
2b	黒褐色 7.5 YR 5/6	シルト	
6	紫褐色 10 YR 5/6	シルト	焼土粒を少量含む。
7	赤褐色 5 YR 5/6	シルト	焼土粒(2mm)を多量に含む。
8	明赤褐色 5 YR 5/6	シルト	焼土粒を含む。
9	褐色 10 YR 5/6	シルト	ロームを少量含む。
10	赤褐色 2.5 YR 5/6	シルト	非常に硬い(焼土)
a	褐色 7.5 YR 5/6	粘土質シルト	焼土粒を少量含む。
b	褐色 7.5 YR 5/6	粘土質シルト	焼土粒を少量含む。
c	明赤褐色 5 YR 5/6	シルト	焼土粒を少量含む。
d	黄褐色 10 YR 5/6	シルト	ロームを少量含む。
e	灰褐色 10 YR 5/6	シルト	

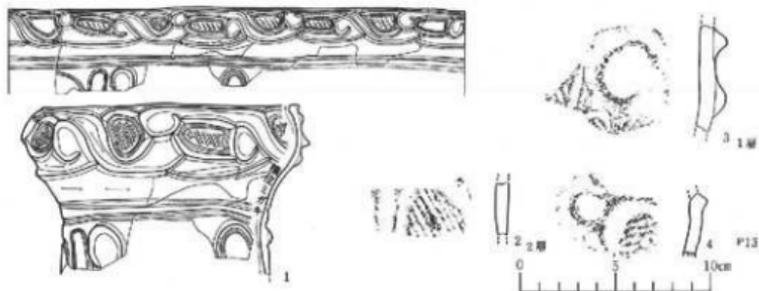
10号住居跡埋設土器埋土

層位	土色	土性	層
1	緑褐色 7.5 YR 5/6	シルト	ロームを散見含む。
2	緑褐色 10 YR 5/6	シルト	焼土粒を少量含む。
3	緑褐色 7.5 YR 5/6	シルト	

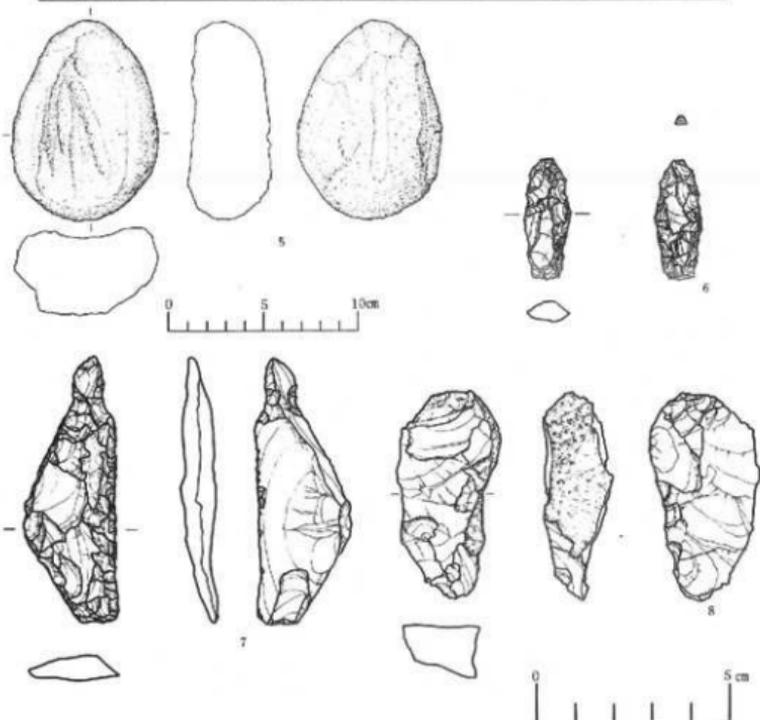


遺構	層位	出状	土記	遺状	存況	法	屋	節文	調整	備考
10	住	埋設		銅部のみ遺存	銅部最大径	28.0cm		縄文(R.L.層位同転)		

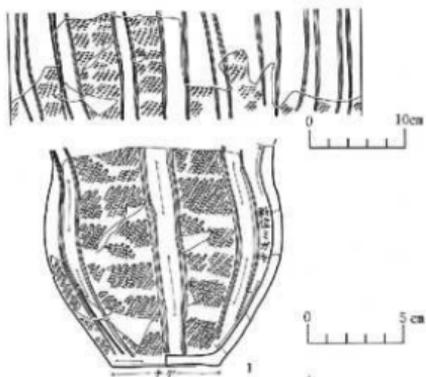
第61図 10号住居跡出土遺物(縄文時代中期後葉)



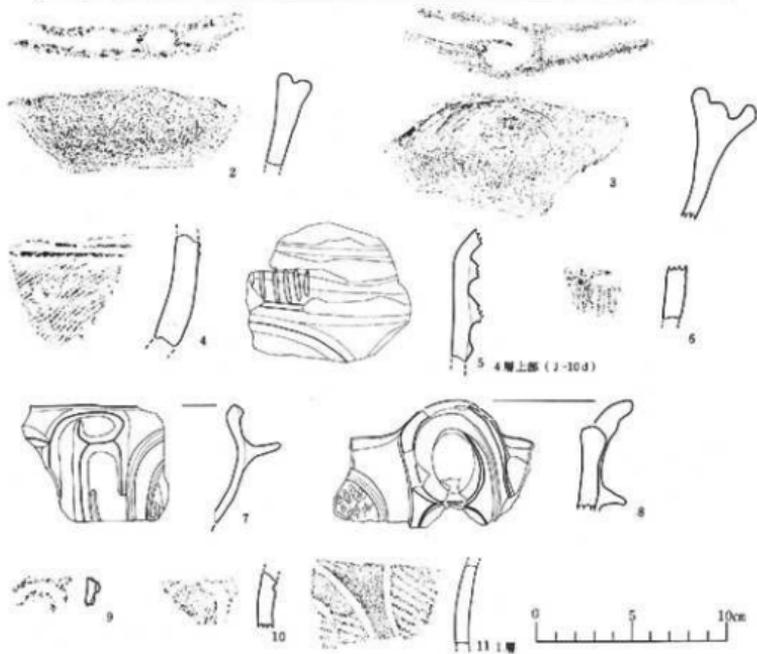
遺構	層位	出土状況	遺存状況	法量	施文・調整	備考
10住	床面	一括	口縁部欠遺存	口径13.5cm	縮繪文・縄文(口縁部同様に調整)→洗原文(ミガキ)	



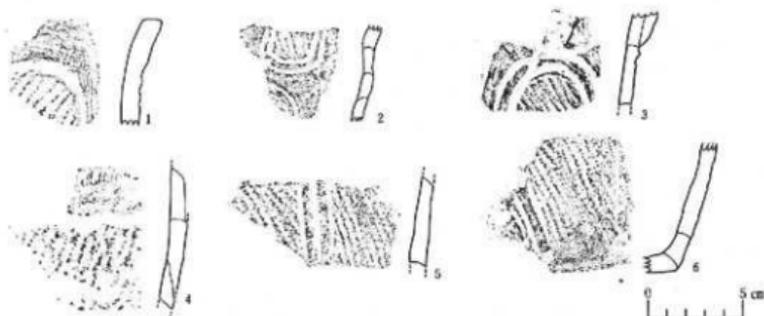
第62図 10号住居跡出土遺物(縄文時代中期後葉)



区	層位	出土 状況	流 状	存 況	法 量	施文・面整	備 考
D-7	4層 上面	一括	底部・ 胴部与 遺存	底径 5.8cm	縄文 (R.L. 旋回回転) → 沈澱文・調整 (土方本)		



第63図 遺構外出土遺物 (縄文時代中期)



第64図 遺構外出土の縄文土器 (中期)

9号住居跡ピット一覧表

Pit	長軸	短軸	深さ	備考
1	31cm	48cm	28cm	
2	29cm	46cm	30cm	
3	25cm以上	35cm	28cm	
4	56cm	48cm	36cm	
5	58cm	52cm	29cm	
6	47cm	36cm	38.5	
7	48cm	45cm	38.5	

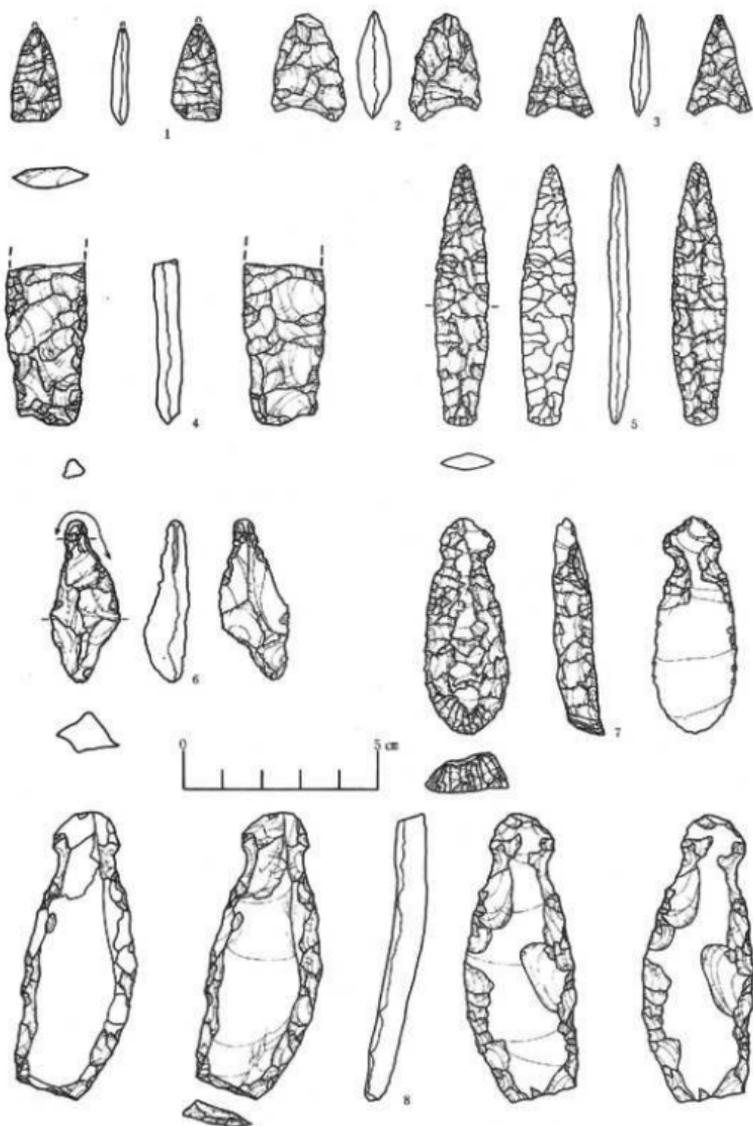
10号住居跡柱穴一覧表

Pit	長軸	短軸	深さ	備考	Pit	長軸	短軸	深さ	備考
1	56cm	51cm	41cm		10	40cm以上	34cm	62cm	
2	44cm	41cm	28cm		11	44cm	42cm	55cm	
3	42cm	30cm	53cm		12	47cm	34cm	60cm	
4	28cm以上	45cm	62cm		13	52cm	37cm	45cm	
5	55cm	48cm	64cm		14	45cm	46cm	58cm	
6	52cm	44cm	—		15	38cm	39cm	68cm	
7	44cm	37cm	—		16	51cm	48cm	54cm	
8	40cm以上	30cm以上	27cm		17	40cm以上	28cm	41cm	
9	56cm	42cm	40cm		18	38cm	27cm	37cm	

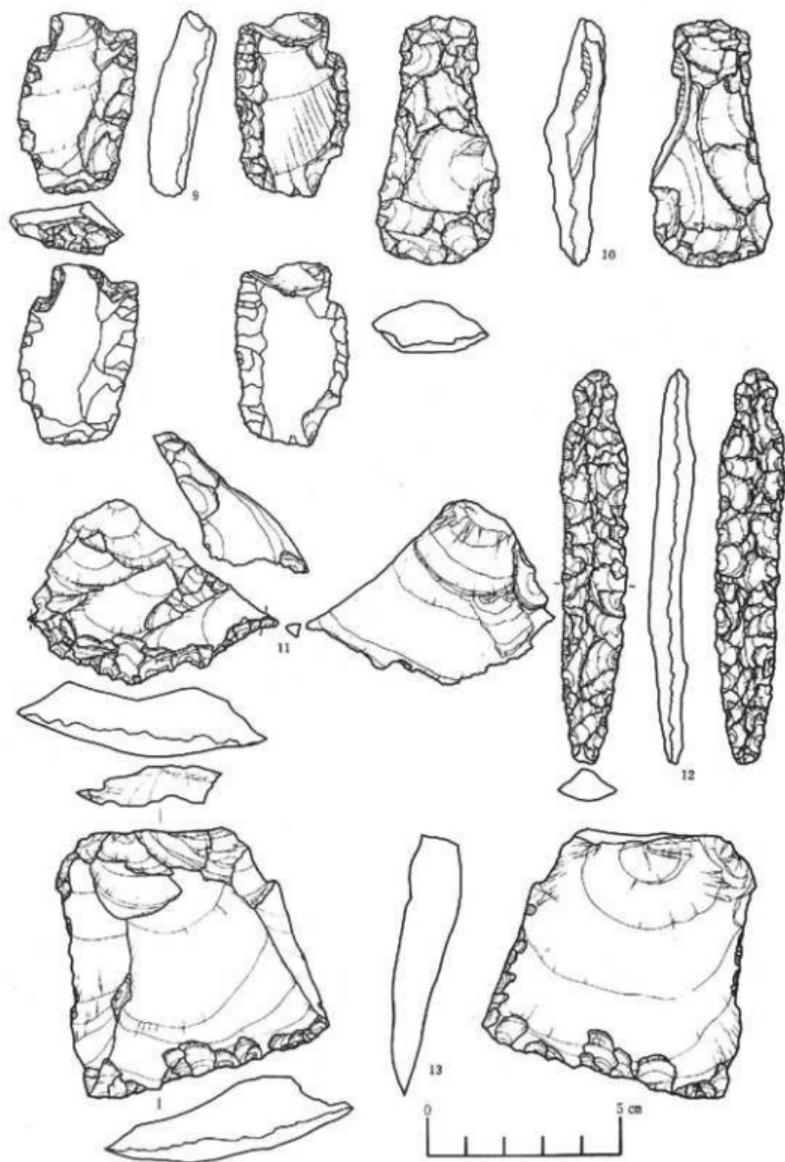
積みあげのための調整痕と考えられる爪先による連続した刻目がみられる。

まとめ

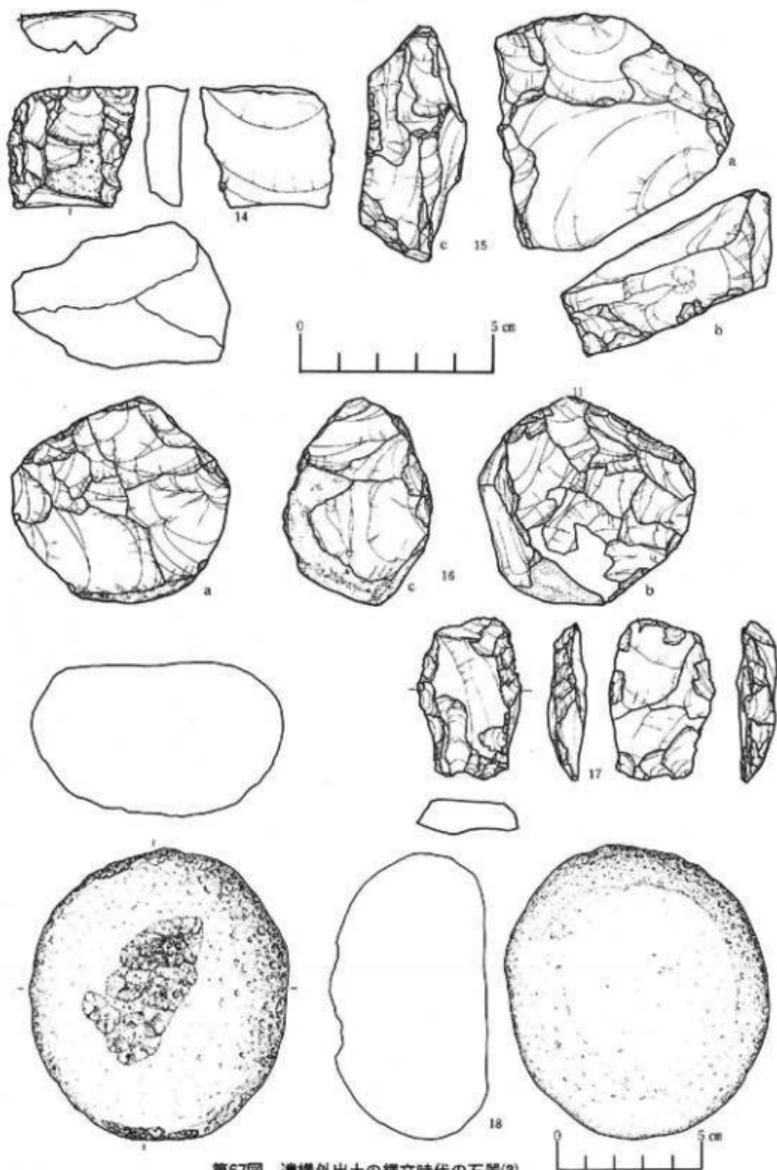
縄文時代中期の遺構は竪穴遺構1基、竪穴住居跡2棟、埋設土器1基が検出された。1号竪穴遺構からは第4群土器が出土している。第4群土器は大松沢貝塚（加藤、1956）出土遺物に類似しており1号竪穴遺構は大木8b式期の遺構と考えられる。性格は不明である。9号住居跡・10号住居跡からは第5群土器が出土しており、埋設土器も第5群に属する。第5群土器は青島貝塚（加藤、後藤、1976）、上深沢遺跡（丹羽、1978）に類似資料が認められることから、これらの遺構は大木9式期のものと考えられる。9号住居跡・10号住居跡は共に複式炉を伴ない、炉の主軸線上に埋設土器がある。9号住居は壁面がほとんど確認されなかったが、長軸約7.5mと大形の住居であり、10本柱穴と考えられる。また10号住居跡には3時期の変遷が認められる。埋設土器の性格については不明である。



第65図 遺構外出土の縄文時代の石器(1)



第66図 遺構外出土の縄文時代の石器(2)



第67図 遺構外出土の縄文時代の石器(3)

6. 平安時代の遺構と遺物

11号住居跡・12号住居跡（第68、69、70図、写真8b-1・2・3）

調査区南部H-5区・H-6区に位置する。第3層上面で確認した。11号住居が古く12号住居が新しい。遺構全面にわたる芋穴による攪乱、また4号溝が東西に走りさらに南半部は削平を受けており、床面及び壁面を確認できない所もある。保存状況は良好ではない。

11号住居跡の上端平面形は長軸4.75m以上、短軸約4.6mの方形と考えられる。深さは北壁際で20cm、壁面は内湾気味に急激に立ち上がる。床面は芋穴による攪乱を受けているが本来は平坦であったと考えられる。埋土は3層で構成される。

壁溝は北西コーナーで確認され幅28cm、深さ8cmを計る。柱穴は4個である。柱穴の壁面・底面には粘土を貼りつけてある。カマドは東壁中央に存在したが、12号住居のカマド構築の際に破却されている。北側の袖石が2個残存していた。カマドの北側には貯蔵穴が認められた。長軸1.25m、短軸0.80m、深さ18cmを計る。また北西コーナー附近には住居に付属すると考えられる土壁が1基床下から検出された。長軸0.87m、短軸0.52m、深さ14cmを計る。

遺物は埋土から第6群土器の破片が多数出土した。内黒の坏の破片がほとんどであり甕の胴部破片が少量見られた。第70図1は北壁際のやや西寄りから一括出土した第6群1類土器である。

12号住居の上端平面形は長軸3.87m、短軸約3.57mの方形と考えられる。深さは24cm、壁面は内湾気味に急激に立ち上がる。床面は4号溝の削平を受けているがほぼ平坦である。埋土は4層で構成され、3層には灰白色火山灰を含む。

周溝は存在しない。柱穴は中央西寄りに1個ある。柱穴の壁面には粘土が貼り付けてあるが底面にはない。カマドは東壁中央に存在する。焚口には焼土が一面に広がるが、芋穴による攪乱が激しく北側の袖と一部の袖石が残存しているにすぎない。北側袖部先端部の下でP6を検出したが、これは4号溝底面で検出したP7と対応すると考えられる。P6とP7の埋土には焼土が見られ、土師器片を出土している。煙道は確認できなかったが、本来存在しない可能性もある。床面中央東寄りに焼土が2カ所認められた。南東コーナーには貯蔵穴が検出されている。長軸0.72m、短軸0.57m、深さ12cmを計る。また、南東コーナーからビット列が南へ伸びるが、あるいは11号住居の周溝に伴うものかもしれない。

遺物は埋土から第6群土器の破片が多数出土した。内黒の坏の破片がほとんどである。2は南東コーナー付近から、3・4は住居跡周溝より出土した1類土器である。5・6はカマド内より出土した2類土器I線部破片である。また底径10cm程の薄い内黒の底部破片が2点出土している。切り離し痕はヘラ調整により全く消失している。塊あるいは鉢の底部と考えられる。

11号・12号住居は東壁を共有しており、遺物からはほぼ同時期と認められることから、11号

住居から12号住居への立て替えによる新旧関係を示していると考えられる。住居の規模が縮小し、柱穴数も4個から1個へと減少している。

34号土壇（第70図）

調査区南部中央、H-6区に位置する。第5層上面で確認、62号土壇と重複関係があり62号土壇より新しい。上端平面形は長軸0.72m、短軸0.48mの隅丸長方形である。深さ7cm、底面は平坦であり壁面は内弯気味に急激に立ち上がる。

遺物は第6群土器破片が出土している。

35号土壇（第70図、写真8b-4）

調査区南部中央、I-6区に位置する。第5層上面で確認、8号住居跡の埋土を掘り込んでいる。上端平面形は長軸1.26m、短軸1.12mの隅丸長方形である。埋土は4層で構成される。

遺物は第6群土器破片が出土している。

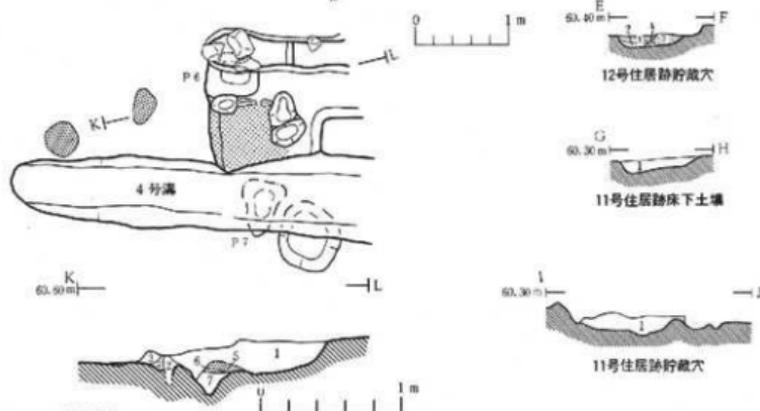
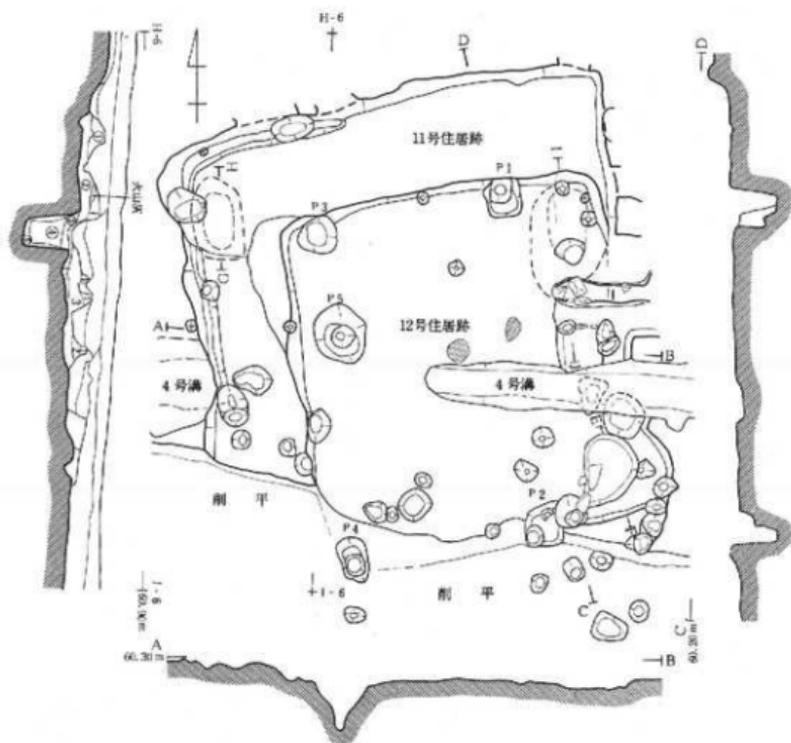
36号土壇（第70図）

調査区南部中央、I-6区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸1.02m以上、短軸1.06mの楕円形である。深さ34cm、中央が低くゆるやかな傾斜をもつ。壁面はゆるやかに立ち上がる。埋土は4層で構成され、1a層1b層3層に炭化物、2層に焼土粒を含む。

遺物は第6群1類に属する環形土器1点（第70図5）と第6群土器破片が出土した。

ま と め

平安時代の遺構は住居跡2棟と土壇3基を検出した。遺構は調査区南部に集中する。遺物はすべてロクロ成形であり、表杉ノ入式である。12号住居跡の埋土3層に灰白色火山灰を含むことから住居の時期は9世紀代と考えられる。（山田他、1980）。また煙道は検出されなかったが本来煙道のないカマドであった可能性もある。また11号住居跡出土の土師器環（第70図1）と12号住居跡出土の土師器環（第70図2・3・4）とは底径にやや差違が見られるが口径・器高はほぼ同一である。これに対し36号土壇出土の土師器環（第70図5）は器高が住居跡出土のものに比べやや高い。36号土壇は34・35号土壇が隅丸長方形と規格化された形態を示すのに対し埋土に焼土、炭を含み形態も楕円形と性格を異にするものと考えられる。これら3土壇と住居跡とが同一時期に存在した可能性は高いが現段階では不明と言わざるを得ない。



第68図 11・12号住居跡 (平安時代)

11号・12号住居跡埋土

層位	土色	土性	備考
1	黒褐色 10 Y R 5%	シルト	褐色粘土粒を少量含む
2	暗褐色 10 Y R 5%	シルト	
3	褐色 7.5 Y R 5%	シルト	火山灰をブロック状に含む
4	暗褐色 10 Y R 5%	シルト	褐色粘土粒を部分的に含む
①	黄褐色 10 Y R 5%	シルト	黄褐色粒を全体的に含む
②	暗褐色 10 Y R 5%	シルト	
③	暗褐色 10 Y R 5%	シルト	褐色粘土粒を全体的に含む
④	暗褐色 10 Y R 5%	シルト	
⑤	黄褐色 10 Y R 5%	シルト	黒褐色土を少量含む

12号住居跡貯蔵穴埋土

層位	土色	土性	備考
1	褐色 7.5 Y R 5%	シルト	焼土を多量含む
2	暗褐色 10 Y R 5%	シルト	黄褐色土を少量含む
3	暗褐色 10 Y R 5%	シルト	焼土を少量含む
4	褐色 10 Y R 5%	シルト	黄褐色土を少量含む

11号住居跡床下土埋埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 10 Y R 5%	シルト	炭化物を少量含む

11号住居跡貯蔵穴埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 10 Y R 5%	シルト	焼土粒を少量含む

12号住居跡カマド埋土

層位	土色	土性	備考
1	黒褐色 10 Y R 5%	シルト	飛乱
2	暗褐色 7.5 Y R 5%	シルト	ローム粒子を少量含む
3	暗褐色 7.5 Y R 5%	シルト	ロームブロック火山灰を少量含む
4	黄褐色 10 Y R 5%	シルト	焼瓦
5	褐色 7.5 Y R 5%	シルト	焼土、炭化物を少量含む
6	褐色 7.5 Y R 5%	シルト	焼土を多量含む
7	暗褐色 7.5 Y R 5%	シルト	凝灰岩を少量含む

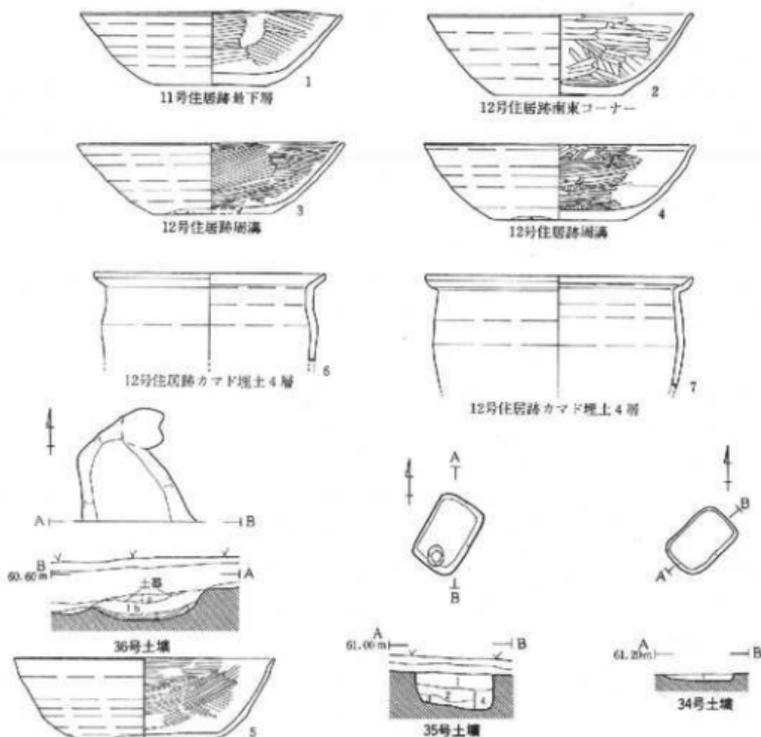
土師器観察表

No	出土状況	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	成形	割	断面	胎土	焼成	色別
1	11号住居跡 北壁際下層	杯	4.0	13.8	6.0	ロクロ	内面ミガキ、黒色処理、底 部放射状ミガキ	同底縁切り後ヘラ削り (一部体部まで及ぶ)	緻密	良好	7.5 Y R 5% にR10褐色
2	12号住居跡 南壁コーナー	杯	4.05	14.4	7.1	ロクロ	内面ミガキ、黒色処理	同底縁切り後ヘラ削り (一部体部まで及ぶ)	緻密	良好	7.5 Y R 5% にR10褐色
3	12号住居跡 溝	杯	4.3	14.1	6.6	ロクロ	内面黒色処理、底放射状 ミガキ兼底縁に沿ってミガキ	同底縁切り後ヘラ削り	緻密	良好	7.5 Y R 5% にR10褐色
4	12号住居跡 溝	杯	3.8	14.2	6.3	ロクロ	内面ミガキ、黒色処理、底 部放射状ミガキ	ヘラ削り(一部体部ま で及ぶ) 明確には不明	緻密	良好	7.5 Y R 5% にR10褐色
5	36号土庫 フタ土器	杯	4.6	13.8	6.4	ロクロ	内面ミガキ、黒色処理、底 部放射状ミガキ	同底縁切り後ヘラ削り (一部体部まで及ぶ)	緻密	良好	7.5 Y R 5% 褐色
6	12号住居跡 カマド内4層	壺 (残高)	4.7	(12.3)		ロクロ			緻密	良好	5 Y R 5% 褐色
7	12号住居跡 カマド内4層	壺 (残高)	5.8	(14.2)		ロクロ			緻密	良好	2.5 Y R 5% 褐色

11号住居跡・12号住居跡柱穴一覽表

No	柱穴	長軸	短軸	深さ
P 1	11号住居	40.0	36.0	52.0
P 2	11号住居	36.0	35.0	42.0
P 3	11号住居	42.0	42.0	52.0
P 4	11号住居	32.0	20.0	42.0
P 5	12号住居	66.0	55.0	56.0

第69図 11・12号住居跡(平安時代)



34号土壌埋土

層位	土色	土性	備	考	
1	黒褐色	10Y R 汚	シルト	ローム粒、ブロックを多量に含む。	

35号土壌埋土

層位	土色	土性	備	考	
1a	暗褐色	10Y R 汚	シルト	炭化物を微量含む。	
1b	暗褐色	7.5 Y R 汚	シルト	炭化物を少量含む。	
2	黒色	7.5 Y R 汚	シルト	炭化物の層。	
3	暗褐色	10Y R 汚	シルト	焼土を少量含む。	

36号土壌埋土

層位	土色	土性	備	考	
1	暗褐色	10Y R 汚	シルト	ロームブロック一部含む。	
2	暗褐色	10Y R 汚	シルト	ロームブロック全体を含む。	
3	暗褐色	10Y R 汚	シルト	ロームブロック少量含む。	
4	暗褐色	10Y R 汚	シルト		

第70図 11・12号住居跡出土遺物・34・35・36号土壌 (平安時代)

7. 江戸時代以降の遺構と遺物

1号溝 (第71図・写真9-1)

1号溝は、調査区南部H・I・Jの各7区に位置する。確認面は第4層上面である。4号溝および65号土壌を切っている。南部は、崖によって消失しているが、本来はさらに南側に続くものである。埋土は、4層で構成されるが、場所によって異なる。規模は、上端幅1.30m～2.05m、下端幅0.47m～0.77m、深さ10～50cmである。底面は皿状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土2層よりビール瓶が出土している。他に縄文土器の細片と、小形磨製石斧(第71図1)・ヘラ状石器(第71図2)・礫石器(第71図3)が出土している。溝の性格は不明であるが、下位に存在する4号溝を再利用したものと考えられる。時期は明治以降のものであろう。

2号溝 (第71図・写真9-2)

2号溝は、調査区西端F～Jの各7区に位置する。確認面は第4層上面である。58号・64号・68号・69号土壌・10号住居跡を切っている。南部は、崖によって消失しているが、本来はさらに南側に続くものである。また、北半部では耕作による擾乱を受けている。埋土は2層で構成されている。規模は、上端幅0.38m～1.06m、下端幅0.22m～0.56m、深さ10～21cmである。底面は皿状を呈し、壁はゆるく立ち上がる。遺物は、わずかに縄文土器の細片が出土しているだけである。時期については、おそらく江戸時代以降であろう。

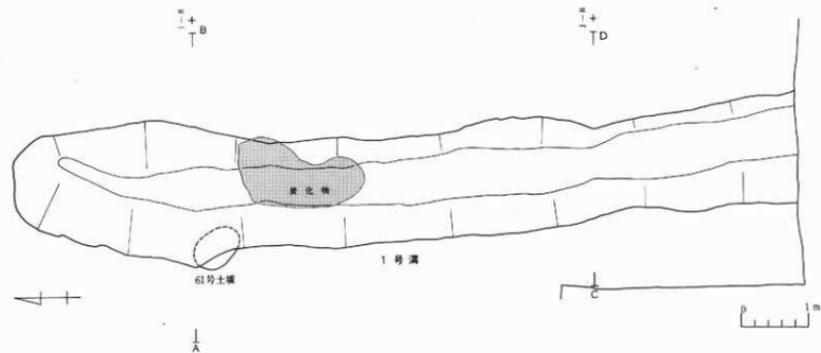
3号溝 (第72図・写真2-1・9-3)

3号溝は、調査区北部Cライン付近に位置する。溝はさらに東西に延びる。確認面は第2層上面である。工房跡、6号溝、14号・46号土壌、1号住居跡を切っている。5号溝との切り合いは不明である。規模は、上端幅1.28m～1.94m、下端幅0.71m～1.30m、深さ20～50cmである。埋土は4層、5層で構成され、場所によって異なる。底面は比較的平坦な面が多く、壁はゆるく立ち上がる。底面から鉄製の寛永通宝などが出土していることから、溝の時期は江戸時代後半であろう。

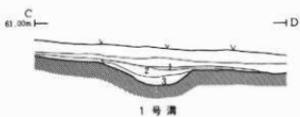
出土遺物は、B-7区底面から鉄製寛永通宝2枚、C-6区底面から口径7.9cm、底径4.6cm、器高1.7cmの土師質土器(第72図1)が出土している。この土器は、ロクロ水挽きによって成形され、底部の切り離しは回転系切りである。埋土の上部より煙管の吸口(第72図2)が、1層より一銭銅貨が出土している。

4号溝 (第73図・写真9-4)

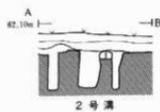
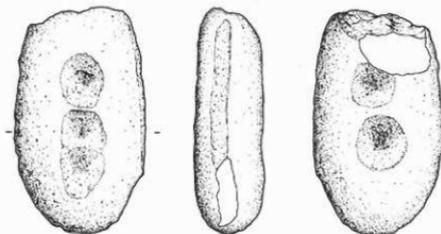
4号溝は、調査区南部H-5～8区、I-8区、J-8区に位置する。溝はL字形に延びているが、J-8区、H-5区で割半を受け、消失している。確認面は、西側では第4層であるが、H-5区の一部で第2層上面より確認された。耕作による擾乱を受け、1号溝に切られる。



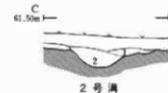
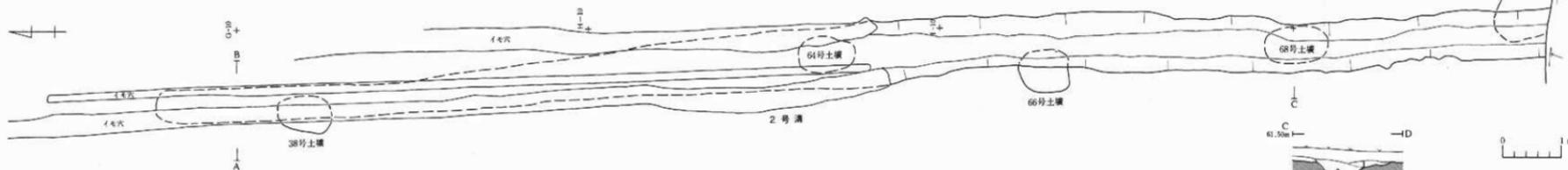
層位	土色	土性	備考
1	褐色	7.5 YR 5/2 シルト	炭化物少量。
2	褐色	10 YR 5/2 シルト	
3	褐色	7.5 YR 5/2 シルト	明褐色土ブロック含む。
4	暗褐色	10 YR 5/2 シルト	



層位	土色	土性	備考
1	暗褐色	7.5 YR 5/2 シルト	
2	暗褐色	7.5 YR 5/2 シルト	1-8-1-7断面3層に相当。
3	暗褐色	7.5 YR 5/2 シルト	1-8-1-7断面4層に相当。

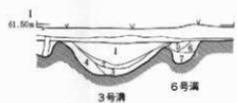


層位	土色	土性	備考
1	褐色	7.5 YR 5/2 シルト	ローム粒数多い。



層位	土色	土性	備考
1	褐色	10Y R 5/2 シルト	
2	褐色	10Y R 5/2 シルト	ローム粒数多い。

第71図 1号溝・2号溝 (江戸時代)

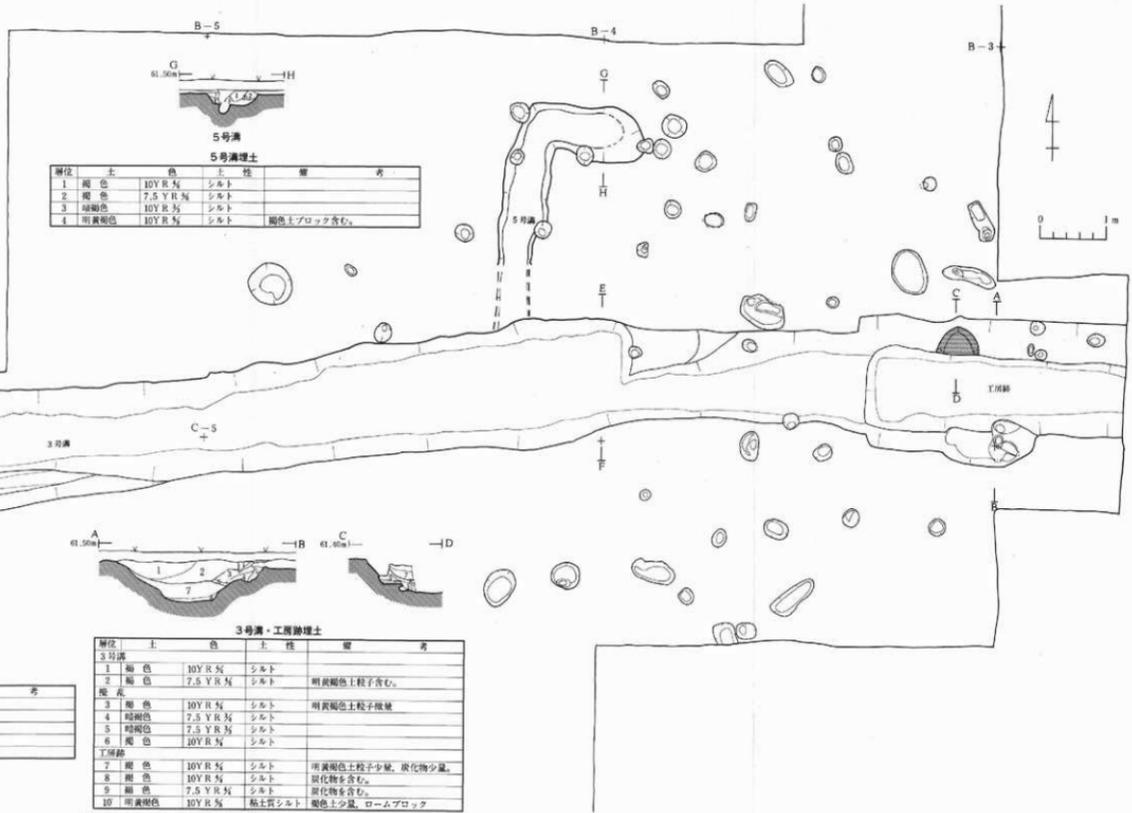


3号・6号溝埋土

層位	土色	土性	層	考
3号溝				
1	暗褐色	10Y R 5/1	シルト	黄褐色粒含む。
2	暗褐色	10Y R 5/1	シルト	黄褐色粒含む。
3	褐色	10Y R 5/1	シルト	黄褐色粒含む。
4	黄褐色	10Y R 5/1	シルト	黄褐色粒少量含む。
6号溝				
5	暗褐色	10Y R 5/1	シルト	炭化物粒少量含む。
6	暗褐色	10Y R 5/1	シルト	黄褐色粒含む。
7	暗褐色	10Y R 5/1	シルト	黄褐色粒多量含む。

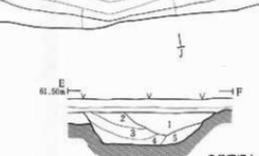
3号・6号溝埋土

層位	土色	土性	層	考
3号溝				
1	褐色	10Y R 5/1	シルト	
2	褐色	10Y R 5/1	シルト	
3	褐色	10Y R 5/1	シルト	黄褐色粒含む。
4	褐色	10Y R 5/1	シルト	
6号溝				
5	暗褐色	10Y R 5/1	シルト	
6	褐色	7.5 Y R 5/1	シルト	
7	褐色	10Y R 5/1	シルト	



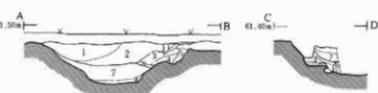
5号溝埋土

層位	土色	土性	層	考
1	褐色	10Y R 5/1	シルト	
2	暗褐色	7.5 Y R 5/1	シルト	
3	暗褐色	10Y R 5/1	シルト	
4	明黄褐色	10Y R 5/1	シルト	褐色土ブロック含む。



3号溝埋土

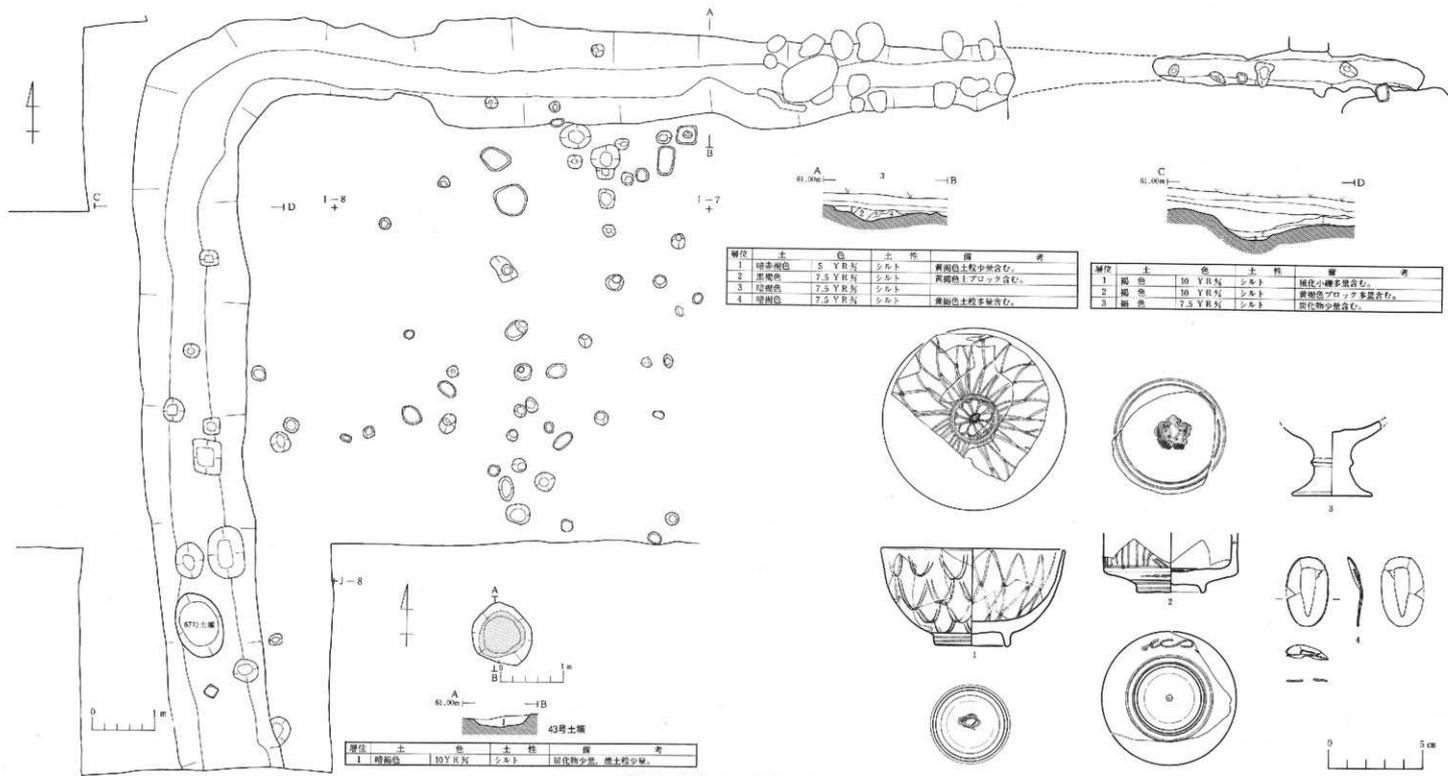
層位	土色	土性	層	考
1	褐色	10Y R 5/1	シルト	
2	褐色	7.5 Y R 5/1	シルト	
3	褐色	7.5 Y R 5/1	シルト	
4	褐色	7.5 Y R 5/1	シルト	
5	暗褐色	7.5 Y R 5/1	シルト	黄褐色土粒含む。



3号溝・工房跡埋土

層位	土色	土性	層	考
3号溝				
1	褐色	10Y R 5/1	シルト	
2	褐色	7.5 Y R 5/1	シルト	明黄褐色土粒子含む。
3	褐色	10Y R 5/1	シルト	明黄褐色土粒子微量
4	暗褐色	7.5 Y R 5/1	シルト	
5	暗褐色	7.5 Y R 5/1	シルト	
6	褐色	10Y R 5/1	シルト	
工房跡				
7	褐色	10Y R 5/1	シルト	明黄褐色土粒子少量、炭化物少量。
8	褐色	10Y R 5/1	シルト	炭化物を含む。
9	暗褐色	7.5 Y R 5/1	シルト	炭化物を含む。
10	明黄褐色	10Y R 5/1	褐色土シルト	褐色土少量、ロームブロック

第72図 3・5・6号溝 (江戸時代)



第73図 4号溝・43号土溝 (江戸時代)

また、11号・12号住居跡、5号・65号土塋を切っている。規模は、上端幅0.88m～1.76m、下端幅0.20m～0.93m、深さ5cm～33cmである。埋土は3層ないし4層で構成される。底面は比較的平坦であり、壁はゆるく立ち上がる。底面にはピットが認められ、特にI-8区に集中している。切り合いが認められないことから、溝に伴うものであろう。また、67号土塋がJ-8区の底面より検出された。遺物は、磁器がI-8区・I-8区の3層より多く出土している。時期は、3層出土の磁器および67号土塋の鉄製寛永通宝を考慮すれば、江戸時代後半と考えられる。

出土遺物は、茶碗・仏飯器・金属器(第73図1～4)がある。1は、染付銅目文茶碗である。体部の $\frac{3}{4}$ を欠く。推定口径9.7cm、器高5.2cm、高台径3.7cmを測る。全面に施軸され、外面と内面の銅目文の表現が異なっている。見込みには10弁の花文がみられる。高台の内側に文様がみられる。貫入は認められない。2は、半筒型の染付茶碗である。全体の $\frac{3}{4}$ 以上を欠く。体部下半径7.1cm、現存高2.8cm、高台径3.4cmを測る。現存部位では全面に施軸されている。見込みには五弁花がみられる。3は、仏飯器である馬上杯であろう。底径4.1cm、現存高4.0cmを測る。底面以外の残存部に施軸(灰軸)されている。底面には回転糸切り痕が残る。1・2は伊万里系の磁器であろうか。また、これらの磁器の製作年代は、溝の時期より古くなるであろう。4は、鐺の1部の切羽である。銅製である。長さ3.7cm、幅推定2.2cm、厚さ約0.1cmを測る。茎径の長さ2.6cm、最大幅0.8cmを測る。

5号溝(第72図)

5号溝は、調査区北東端B-4区に位置する。確認面は第4層上面である。1号住居を切るが、3号溝との切り合い関係は不明である。規模は、上端幅0.48m～0.70m、下端幅0.36m～0.54m、深さ34cm～37cmである。形態は、北側で方向を変えL字形を呈する。埋土は4層で構成される。底面は平坦で、壁はゆるく立ち上がる。時期を決定できる遺物はないが、おそらく江戸時代以降のものである。

6号溝(第72図・写真9-3)

6号溝は、調査区北部C-5・6区に位置する。確認面は第2層上面である。3号溝に切られ、全体の状況は不明である。また、14号溝を切る。規模は、上端幅0.48m～0.72m、下端幅0.12m～0.20m、深さ32～42cmである。埋土は3層で構成される。底面はU字形を呈し、壁はやや急に立ち上がる。時期を決定できる遺物はないが、しまりがなく3号溝の埋土と類似していることなどから、3号溝より古い江戸時代に属する可能性がある。

7号溝(第74図)

7号溝は、調査区北部E-5～7区に位置する。確認面は場所によって異なるが、基本的には第2層上面である。東側では23号土塋を切り、西側では擾乱を受けている。いずれも、切り

合い部分で消失している。規模は、上端幅0.20m～0.40m、下端幅0.12m～0.20m、深さ12～25cmである。溝断面はJ字形を呈する。埋土は単層である。遺物は、縄文土器の細片がわずかに出土している。時期は、埋土にしまりが無いことなど他の溝の特徴と共通する点が多いことから、江戸時代以降であろう。

8号溝（第74図）

8号溝は、調査区中央E-4区からF-7区にかけて位置する。確認面は場所によって異なるが、基本的には第2層上面である。東西端ともに攪乱を受けている。規模は、上端幅0.20m～1.05m、下端幅0.04m～0.20m、深さ6cm～30cmである。埋土は単層である。底面は皿状を呈し、壁はゆるく立ち上がる。遺物は、縄文土器の細片がわずかに出土している。時期は、年代決定遺物を欠くことから不明であるが、他の溝（特に7号溝）と共通する特徴をもつことから、江戸時代以降の溝であろう。

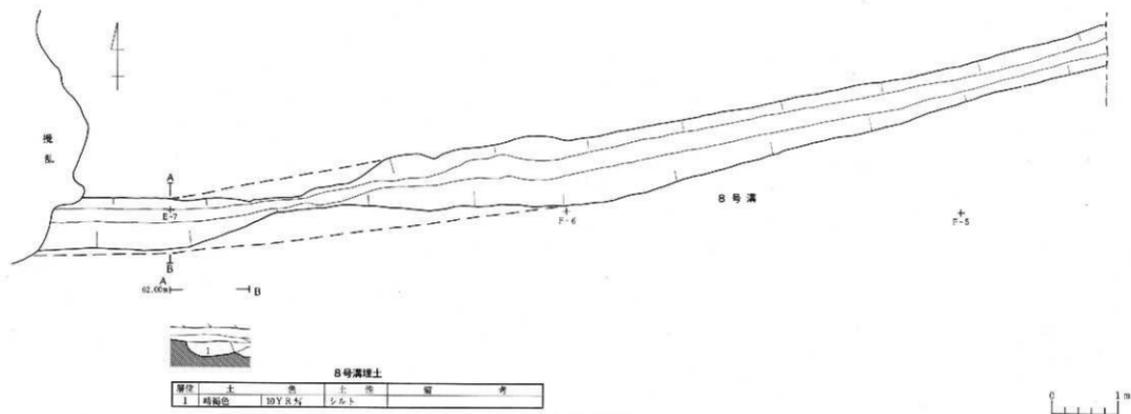
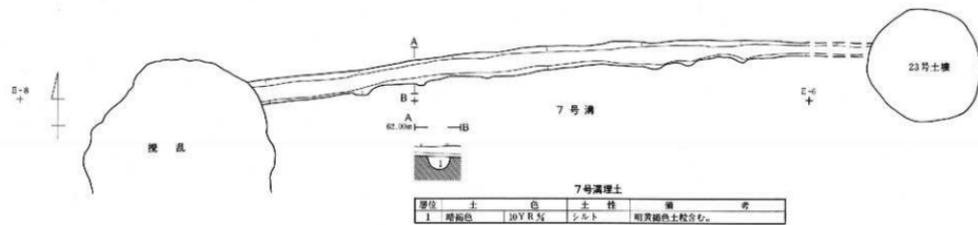
37号墓墳（第75図・写真9-7）

本墓墳は、調査区北東部D-4区に位置する。確認面は第2層上面で、切り合いはない。規模は、長軸1.26m、短軸1.12m（下端1.07m×0.85m）、深さ46cmである。形態は隅丸方形を呈する。埋土は3層で構成されるが、一度に埋められたものである。また、最下層である3層は、白濁しており、脂肪分が溶け込んだものと考えられる。底面はゆるく皿状を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。墓墳の確認面と同一面上の西側で焼土が確認されている。送り火のようなものが想定されよう。墓墳の主軸はおよそN-13°-Eを示し、人骨はほぼ解剖学的位置を留めていることから、北枕で埋葬されたものである。人骨は極めて保存が悪く、頸骨（上下歯の一部）と脛骨と腓骨の破片が検出されたにすぎない。墓墳の規模が小さいことが、人骨の検出状況から判断して屈葬の可能性が高い。後述するように、棺の大きさが小さいことから、子供の可能性も考えられる。人骨の位置は、棺からはみ出している。これは死後硬直によるものであろうか。

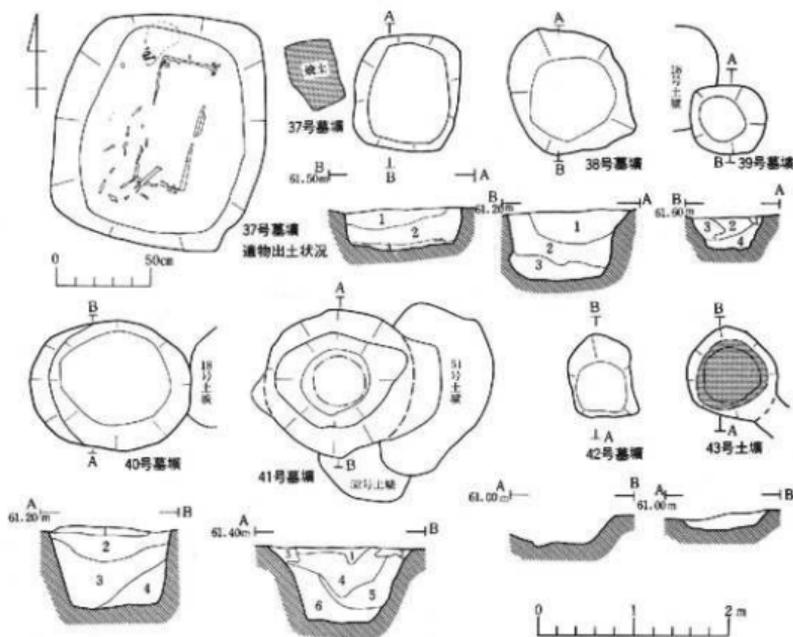
出土遺物は、棺と考えられる木箱の底板の一部（長さ1.35m・巾0.55m）、南側に備在する鉄釘23点、六道銭である寛永通宝6枚（第76図1～4・第8表1～4）がある。このうち、寛永通宝2枚は盗鑿にあった。六道銭は頭骨のすぐ南に位置している。

38号墓墳（第75図・写真9-8）

本墓墳は、調査区北東部D-4区に位置する。確認面は第2層上面で、切り合いはない。規模は長軸1.32m、短軸1.20m（下端0.93m×0.87m）、深さ75cmである。形態は、上面では不整の梅川を呈すが、底面は円形を呈する。埋土は3層で構成されるが、いずれも粘性やしまりがなく、ロームブロックを含む点で共通している。底面は皿状を呈し、ほぼ垂直に近い立ち上がりを示す。底面付近には、かなり腐敗した骨片と六道銭が出土している。底面が狭く、円形



第74図 7・8号溝



37号墓埋土

層位	土色	土性	備	考
1	暗褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	多量のローム粒子, プロックを含む。	
2	黒褐色 10 Y R 5/6	シルト	少量のローム粒子, 炭化物を含む。	
3	褐色 10 Y R 5/6	シルト		

38号墓埋土

層位	土色	土性	備	考
1	暗褐色 10 Y R 5/6	シルト	0.2-10.0mmのロームブロックを含む。カーボン粒少量。	
2	にがい黄褐色 10 Y R 5/6	シルト	0.2-10.0mmのロームブロックを含む。	
3	暗褐色 10 Y R 5/6	シルト	0.2-3.0mmのロームブロックを含む。	

39号墓埋土

層位	土色	土性	備	考
1	暗褐色 10 Y R 5/6	シルト	ローム粒子を少量含む。	
2	暗褐色 10 Y R 5/6	シルト	ロームブロック(5.0cm)を含む。	
3	暗褐色 10 Y R 5/6	シルト	ローム粒子を少量含む。	
4	暗褐色 10 Y R 5/6	シルト	ローム粒子を全体に含む。	

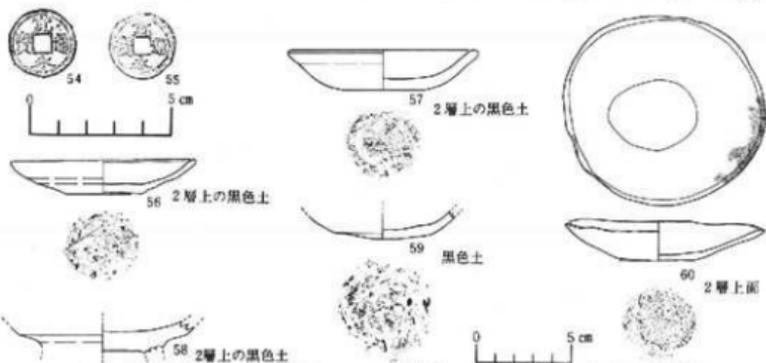
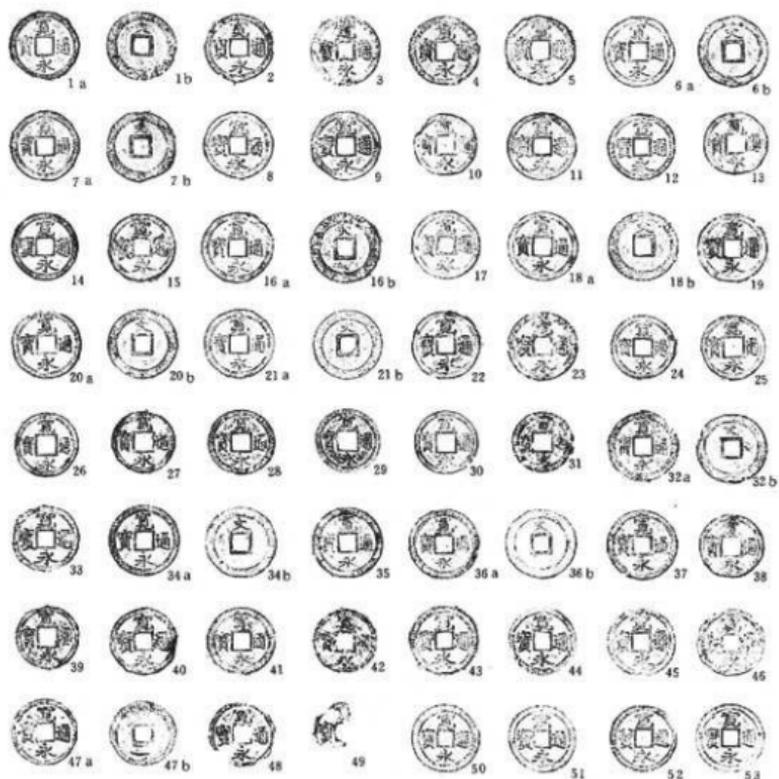
40号墓埋土

層位	土色	土性	備	考
1	暗褐色 10 Y R 5/6	シルト	ロームブロックを含む(0.2-5.0cm)	
2	暗褐色 10 Y R 5/6	シルト	ロームが全体的に混入。	
3	暗褐色 10 Y R 5/6	シルト	ロームが全体的に混入。	
4	暗褐色 10 Y R 5/6	シルト	ロームブロックを含む(0.2-5.0cm)	

41号墓埋土

層位	土色	土性	備	考
1	褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	明褐色土を多量に含む。	
2	褐色 7.5 Y R 5/6	シルト	明褐色土を多量に含む。	
3	褐色 10 Y R 5/6	シルト	明黄褐色土を全体に含む。	
4	褐色 7.5 Y R 5/6	シルト		
5	暗褐色 10 Y R 5/6	シルト	明黄褐色土を少量含む。	
6	暗褐色 10 Y R 5/6	シルト	明黄褐色土を多量に含む。	

第75図 37・38・39・40・41・42・43号土壌 (江戸時代)



1~4, 37号幕城 5~9, 38号幕城 10~43, 39号幕城 44~49, 41号幕城 50~55, 42号幕城
56, F-4区2層上の黒色土, 57・58, G-5a区2層上, 59, 12号住居跡上の黒色土, 60, H-5区2層上

第76図 古銭・土師質土器

を呈することから、座棺の可能性が考えられよう。

出土遺物は、六道銭である寛永通宝5枚（第76図1～5・第8表1～5）がある。

39号墓墳（第75図・写真10a-1）

本墓墳は、調査区北東部D-4区に位置する。確認面は第2層上面であり、18号土層を切っている。規模は、長軸0.8m、短軸0.74m（下端0.49m×0.44m）、深さ37cmである。形態はほぼ円形を呈する。埋土は4層で構成され、いずれも粘性やしまりがなく類似した層相を示す。底面はほぼ平坦で、壁はゆるく立ち上がる。底面中央より骨片が、やや北東よりに古銭が出土している。

出土遺跡は、六道銭と考えられる寛永通宝34枚（第76図10～43・第8表10～43）がある。この中に布片？の付着したものが認められることから、これらの古銭は布袋のようなものに入られていたか、紐に通されていたものであろう。

40号墓墳（第75図・写真10a-2）

本墓墳は、調査区北東部D-4区に位置する。確認面は第2層上面であり、18号土層を切っている。規模は、長軸1.70m、短軸1.39m（下端1.16m×1.03m）、深さ82cmである。形態は上面および底面ともに楕円形を呈する。埋土は4層で構成され、ロームブロックの混入などいずれも類似した層相を示す。底面は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面付近のほぼ中央に、かなり腐敗した骨片が出土した。他に出土遺物はない。

41号墓墳（第75図・写真10a-3）

本墓墳は、調査区北東部D-5区に位置する。確認面は第2層上面であり、51号・52号土層を切っている。規模は、長軸1.58m、短軸1.57m（下端0.72m×0.65m）、深さ77cmである。形態は、東側と西側の一部を掘り過ぎたが、本来はほぼ円形を呈する。埋土は5層で構成され、いずれもロームブロックを含むなど類似した層相を示す。底面は平坦であり、壁はゆるく立ち上がる。底面には径約53cmで、幅・深さともに約2cmの細い溝が検出された。これはおそらく棺桶の枠の痕跡と考えられる。底面中央には腐敗した骨片、中央よりやや北側に六道銭が出土している。

出土遺物は、六道銭である寛永通宝6枚（第76図44～49・第8表44～49）である。

42号墓墳（第75図）

本墓墳は、調査区北部D-6区に位置する。確認面は第2層上面であり、木の根によって底面付近まで攪乱を受けている。かろうじて北側の上面プランだけが確認しえたが、他は明確ではない。確認しえた規模は、長軸0.92m、短軸0.65m（下端0.53m×0.50m）、深さ30cmである。形態は攪乱を受け不明であるが、おそらく円形あるいは楕円形を呈していたと考えられる。残存部分から判断して、床面はほぼ平坦であり、壁はゆるく立ち上がるようである。

出上遺跡は、六道銭である寛永通宝6枚(第76図50~55・第8表50~55)である。人骨などは確認されなかった。

43号土壌(第75図・写真10a-4)

本土壌は、調査区南部11-7区に位置する。確認面は第4層上面である。切り合いはない。規模は、長軸1.0m、短軸0.88m(下端0.76m×0.7m)、深さ22cmである。形態は不整形円形を呈する。埋土は単層(10YR4暗褐色シルト)で、焼土・炭化物を含む。また、底面に密着するように炭化物が認められた。底面は皿状を呈し、壁はゆるく立ち上がる。他に遺物は出土していない。埋土はしまりがなく、4号溝埋土と類似することなどから、時期は江戸時代以降であろう。

67号土壌(第80図・写真12-7)

本土壌は、調査区南西部J-8区に位置する。4号溝の底面より確認された。4号溝との切り合いは明確ではないことから、4号溝に帰属する可能性が高い。規模は、長軸1.07m、短軸0.74m(下端0.73m×0.58m)、深さ26cmである。形態は楕円形を呈する。埋土は3層で構成される。底面は皿状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。遺物は、3層より鉄製寛永通宝1枚が出土している。遺物などから判断して、江戸時代後半の土壌である。

工房跡(第72図・写真9-5)

工房跡は、調査区北西端B-2・3区に位置する。確認面は第2層上面である。南部は木の根の攪乱を受け、上部は全面に渡って3号溝に切られる。規模は、確認長約2m、幅0.84m~1.0m、深さ49cmである。形態は全面を調査していないので不明であるが、確認範囲内では、長方形を呈すると推定される。埋土は2層で構成され、とりわけ下層(8層)には炭化物を多量に含む。付属施設として、北壁にカマドが検出された。この内部には焼土・炭が多量に認められ、さらに鉄滓1個(写真28-58)が出土した。時期は、出土遺物から江戸初期であろう。

年代決定できる遺物として、第72図3・4がある。3は無軸の掛鉢の口縁部破片である。無軸であることと口縁部が肥厚しないことから、中世末~江戸初期と考えられる。4は煙管の雁首である。火皿部分は、口径1.5cmと大きく江戸時代でも古い様相を示す。

遺構外出土の土師質土器

遺跡全体で約15・16個体出土した。しかし、実測しえたものは5点であり、全体を知りえるものはそのうち3点である。したがって、この土師質土器の特徴を把握するには、資料が少ない。ここでは個々の土器(第76図56~60)の特徴をまとめる。

56は、F-4区の第2層上に存在した黒色土より出土した。口縁の一部を欠く。口径9.7cm、底径4.0cm、器高1.8cmである。口口水挽きで、底部切り離しは回転糸切り無調整である。57は、G-5a区の第2層上にある黒色土より出土した。体部上半約3/4を欠く。口径10.0cm、底径

第8表 古銭(寛永通宝)一覽表

番号	遺構名	外径	内径	文字	番号	遺構名	外径	内径	文字
1	D-4区37号墓	2.315	0.4	正字文	29	D-4区39号墓	2.12	0.435	
2	"	2.235	0.345		30	"	2.10	0.435	
3	"	2.31	0.355		31	"	1.97	0.43	不明 (附著)
4	"	2.35	0.4		32	"	2.205	0.37	
5	D-4区38号墓	2.32	0.485		33	"	2.34	0.385	
6	"	2.35	0.4	正字文	34	"	2.335	0.405	正字文
7	"	2.33	0.395	正字文	35	"	2.325	0.385	正字文
8	"	2.265	0.37		36	"	2.335	0.39	正字文
9	"	2.315	0.375		37	"	2.32	0.375	正字文
10	D-4区39号墓	2.085	0.45		38	"	2.11	0.44	
11	"	2.260	0.355		39	"	2.075	0.425	
12	"	2.245	0.34		40	"	2.25	0.335	
13	"	2.10	0.34		41	"	2.21	0.38	
14	"	2.21	0.385		42	"	2.05	0.415	
15	"	2.215	0.365		43	"	2.24	0.355	
16	"	2.330	0.375	正字文	44	H-5区41号墓	2.24	0.385	
17	"	2.25	0.32		45	"	2.29	0.33	
18	"	2.29	0.43	正字文	46	"	2.27	0.37	
19	"	2.31	0.485	正字文	47	"	2.185	0.37	
20	"	2.305	0.385	正字文	48	"	2.185	0.33	
21	"	2.285	0.38		49	"(破損)			
22	"	2.245	0.37		50	D-6区42号墓	2.27	0.32	
23	"	2.285	0.355		51	"	2.255	0.36	
24	"	2.09	0.4		52	"	2.22	0.37	
25	"	2.12	0.46		53	"	2.26	0.335	
26	"	2.12	0.44		54	"	2.26	0.4	
27	"	2.07	0.475		55	"	2.225	0.37	
28	"	2.16	0.385						

(いずれも複製である)

4.4cm、器高2.1cmである。ロクロ水挽きで、底部切り離しは回転糸切り無調整である。58は、G-5区の第2層上の黒色土より出土した。底部付近の破片である。底径約5cm、現在高1.6cmである。ロクロ水挽きで、底部切り離しは回転糸切りである。底部には、高台が剝離した痕跡が認められる。59は、H-5区12号住居跡上の黒色土より出土した。体部上半を欠く。底径約5cm、現存高1.5cmである。成形はロクロ水挽き、底部切り離しは回転糸切り無調整である。60は、H-5区第2層上の黒色土より出土した。唯一の完形品である。口径11.4cm、底径3.8cm、器高2.1cmで最も大形である。成形はロクロ水挽き、底部は回転糸切り無調整である。成形が雑で、一見手捏ね風にみえる。口縁部にタール状の炭化物が認められる。

口径は底径の2倍を超える長さのものが多く、器高は約2cm前後でほぼ一定している。すでに前述した3号溝より出土したものは、これらとは特徴を異にする。器高はほぼ同じであるが口径と底径の差は2倍を越えない。また色調は、橙色(5YR%)を基調とするものが多いが57と59は、くすんだ橙色(7.5YR%)を基調とする。

注 本例の標例として、石巻市西下軒屋遺跡(土塚)・市原市南総中学遺跡(H-43遺構)がある。

8. 時期不明の遺構と遺物

44号土壌 (第77図、写真10b-1)

調査区北東端、B-3区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.36m、短軸1.30mの円形で、深さ48cm。底面は中央部が低く、ゆるやかな傾斜を有し、壁面は内弯気味にゆるやかに立ち上がる。埋土は4層で構成され、第4層にはロームブロックを含む。

遺物は縄文土器片4点を出上、うち1点は早期である。

45号土壌 (第77図)

調査区北東端、B-3区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.40m、短軸1.32mのほぼ円形と考えられる。深さ12cm、底面は平坦であるが、南壁際に24cm×20cm、深さ8cmの円形ピットを有する。壁面はゆるやかに立ち上がる。

遺物は皆無である。

46号土壌 (第77図、写真10b-2)

調査区北東部、C-4区に位置する。第4層上面で確認、遺構の北半分は3号溝に切られている。3号溝よりも46号土壌の方が古い。上端平面形は、長軸約1.45m、短軸約0.60m以上の不整形円形である。深さ3cm、底面は平坦であり、壁面は内弯気味に急激に立ち上がる。埋土は5層で構成されている。

遺物は尖頭器が1点出上している。

47号土壌 (第77図、写真10b-3)

調査区北東部、C-4区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.40m、短軸1.00mの楕円形である。深さ38cm、底面は平坦であるが東壁際に47cm×37cm深さ5cmの浅い隅丸長方形のピットを有し、壁面はほぼ直線的に急激に立ち上がる。埋土は3層で構成され、第1層は焼土で、第3層にはロームブロックを含む。

遺物は縄文土器片9点が出上している。

48号土壌 (第77図)

調査区北東部、C-4区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸0.92m、短軸0.51mの楕円形である。深さ12cm、底面は中央部がやや低くなっており、壁面の立ち上がりは極めてゆるやかである。埋土は1層のみである。

遺物は皆無である。

49号土壌 (第77図、写真10b-4)

調査区北東部、C-4区に位置する。1号竪穴遺構と重複しており、1号竪穴遺構底面で確認された。1号竪穴遺構よりも49号土壌の方が古く、遺構上半は1号竪穴遺構に切られている。

上端正面形は長軸1.30m、短軸0.98mの楕円形である。深さ64cm、底面には凹凸があり、壁

面はわずかに内湾しながら急激に立ち上がる。埋土は4層で構成される。

遺物は皆無である。

50号土壌（第77図）

調査区北部中央、C-7区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.08m、短軸0.98mの不整形円形である。深さ75cm、底面は平坦であり、壁面は直線的に立ち上がる。埋土は8層で構成される。

遺物は縄文土器片9点、剥片1点が出土しているが、土器片はもろく、胎上には砂粒を多量に含んでいる。

51号土壌（第78図）

調査区北東部、D-5区に位置する。第4層上面で確認、52号土壌と重複しており、52号土壌よりも51号土壌の方が新しい。上端平面形は長軸1.84m、短軸約1.61mの円形である。深さ45cm、底面は平坦で、壁面は内湾気味に急激に立ち上がる。埋土は5層で構成され、全層にわたって炭化物の混入が認められる。

遺物は剥片2点が出土している。

52号土壌（第78図）

調査区北東部、D-5区に位置する。第4層上面で確認、41号土壌、51号土壌と重複しており、新旧関係は52号土壌が最も古く、遺構の大半は両連構に切られており、長軸1.0m、短軸0.64mを計るのみで、上端平面形は不明である。深さ26cm、底面は平坦で、壁面は直線的に、ややゆるやかに立ち上がる。埋土は2層で構成されており、ローム粒を多量に含む。

遺物は皆無である。

53号土壌（第78図、写真11-1）

調査区北部中央、D-7区に位置する。第4層上面で確認、上端平面形は長軸1.73m、短軸1.63mの不整形円形であるが、遺構上半が擾乱を受けている事から、下端平面形長軸1.36m、短軸0.82mを重視し、平面形は楕円形と考えられる。深さ76cm、底面は平坦であり、壁面は直線的にほぼ垂直に立ち上がり、一部オーバーハングする所もある。埋土は6層で構成される。

遺物は縄文土器片15点、二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片1点が出土している。

54号土壌（第78図、写真11-2）

調査区中央部西寄り、F-8区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸1.74m、短軸1.68mの円形である。深さ28cm、底面は平坦であり、壁面は直線的にゆるやかに立ち上がる。埋土は単層である。（10YR3/4暗褐色シルト、ローム粒、炭化物少量含む。）

遺物は縄文土器片2点が出土している。

55号土壙（第78図、写真11-3）

調査区西部、F-10区に位置する。第5層上面で確認、南北に走る芋穴により分断されているが、上端平面形は長軸約2.50m、短軸0.63mの不整長方形と考えられる。深さ22cm、底面は平坦であり、壁面は内寄してゆるやかに立ち上がる。埋土は2層で構成される。

遺物は皆無である。

56号土壙（第78図、写真11-4）

調査区中央部西寄り、G-7区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸1.07m、短軸0.98mの円形である。深さ64cm、底面は平坦であり、壁面はやや内寄気味に急激に立ち上がる。埋土は4層で構成され、第4層にはローム粒を多量に含む。

遺物は縄文土器片15点、剥片1点が出土している。

57号土壙（第79図、写真11-5・6）

調査区西部、G-10区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸2.02m、短軸1.74mの楕円形である。深さ121cm、底面は平坦で、長軸2.12m、短軸2.04mを計る。壁面は直線的に内傾し、壁中位上半から外形する。北西壁中位下半に奥行き42cmの横穴を持つ。埋土は14層より構成されるが、大きく上下2層に分かれ、下層はロームブロックを多量に含む。

遺物は縄文土器片33点、石器6点出土。石鏃1点、二次加工のある剥片2点、剥片1点、破損燧石2点が出土した。土器片はすべて小破片で、時期のわかるものはなかった。

58号土壙（第79図）

調査区西部、G-10区に位置する。第5層上面で確認、2号溝と重複しており、2号溝よりも古いので、残存状態は非常に悪く、上端平面形は長軸約0.91m、短軸0.61mの楕円形と考えられる。深さは26cm以上である。

遺物は皆無である。

59号土壙（第79図、写真11-7・8）

調査区南部、H-5区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸1.12m、短軸0.69mの楕円形である。深さ70cm、底面は平坦であり、壁面は内寄気味に急激に立ち上がる。埋土は9層より構成され、第7層中に焼土を含み、第8層中に地山ブロックを多量に含む。

遺物は縄文土器片6点が出土している。

60号土壙（第79図、写真12-1）

調査区南部、H-5区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸1.70m、短軸1.41mの隅丸長方形である。深さ38cm、底面は中央部がやや低くなっており、ゆるやかな傾斜をもつ。埋土は3層から構成される。

遺物は皆無である。

61号土壌（第79図、写真12-2）

調査区南部、H-6区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸0.92m、短軸0.90mの円形である。深さ55cm、底面は中央がやや低くなっており、ゆるやかな傾斜をもち、壁面は内弯気味に立ち上がる。埋土は4層で構成され、第4層にロームブロックが多数に含まれる。また、径20cm程の円礫2個が重なり気味に2層3層中に存在した。

遺物は縄文土器片25点、石器4点出土。石核2点、微細刻離痕のある剝片1点、剝片1点。縄文土器片は、すべて小破片で、時期のわかるものはなかった。

62号土壌（第80図、写真12-3）

調査区南西部、H-9区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸0.79m短軸0.77mの円形である。深さ38cm、底面は平坦で、壁面はほぼ直線的に急激に立ち上がる。埋土は3層で構成され、第1層中に径30cm×25cm程の楕円形の礫を1個含んだ。

遺物は皆無である。

63号土壌（第80図、写真12-4）

調査区南西部、H-9区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸0.95m、短軸0.79mの楕円形である。深さ40cm、底面は平坦であり、壁面はほぼ直線的に急激に立ち上がる。埋土は12層で構成される。

遺物は縄文土器片1点が出土している。

64号土壌（第80図）

調査区南西部、H-10区に位置する。1号溝底面で確認、底面の半分程が残存しているのみで、上端径0.98m、下端径0.62m、深さ約39cmを計る。

遺物は縄文土器片10点が出土している。

65号土壌（第80図、写真12-5）

調査区南西部、I-8区に位置する。第5層上面で確認、上端平面形は長軸0.75m、短軸0.52mの楕円形である。深さ40cm、底面は中央部がやや低く、ゆるやかな傾斜をもつ、壁面は内弯気味に急激に立ち上がるが、一部ほぼ垂直に立ち上がる所もある。埋土は4層で構成される。

遺物は皆無である。

66号土壌（第80図、写真12-6）

調査区南西部、I-10区に位置する。2号溝に東側を3分の1程切られている。第5層上面で確認、上端平面形は長軸0.84m、短軸0.71mの楕円形で、深さ49cm、底面は平坦であるが東側に向かって傾斜し、壁面はほぼ直線的に急激に立ち上がる。埋土は4層で構成される。

遺物は皆無である。

68号土壌（第80区）

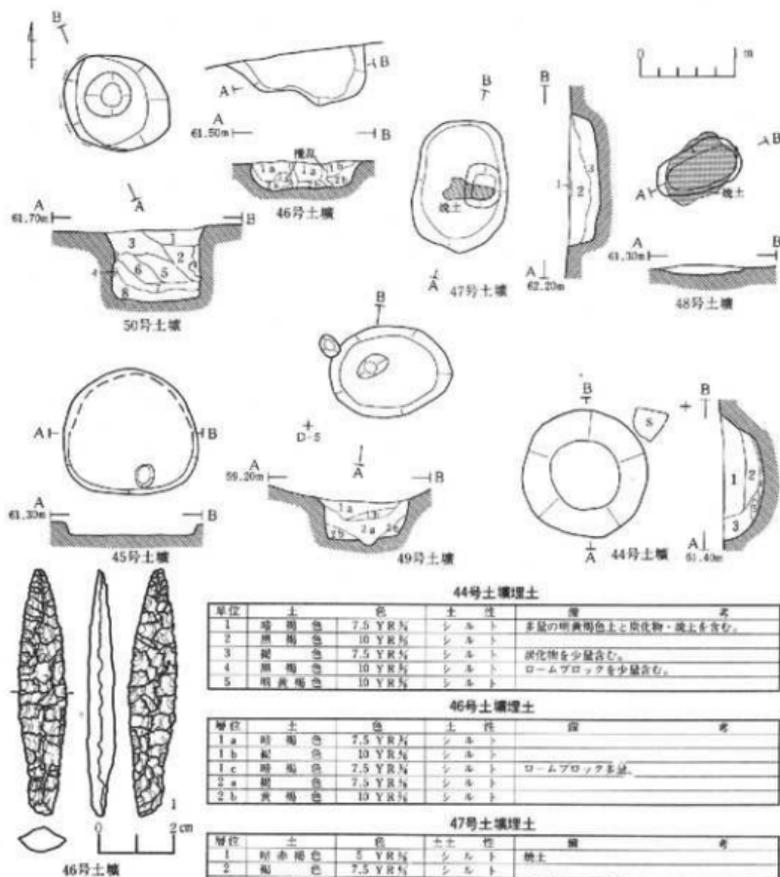
調査区南西端、J-9区に位置する。第4層上面で確認、10号住居と重複しており、68号土壌の方が新しい。南側を一部切られている。上端平面形は長軸1.34m、短軸0.7mの楕円形であると考えられる。

遺物は皆無である。

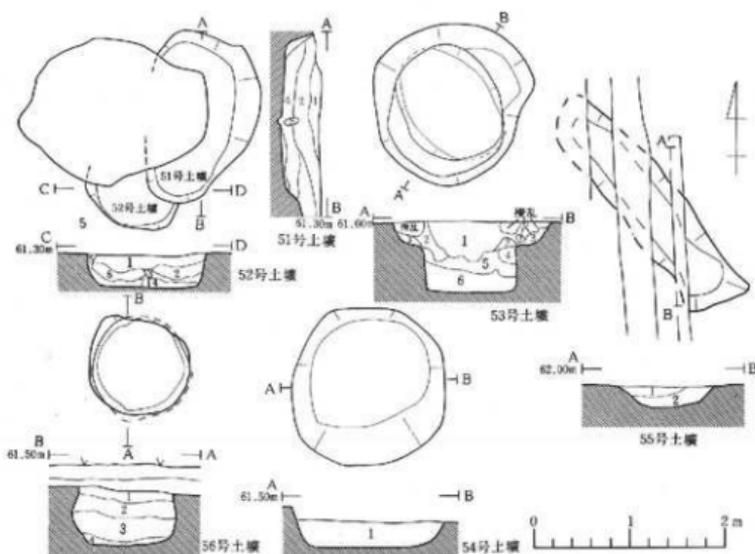
69号土壌（第80区）

調査区南西端、J-10区に位置する。第4層上面で確認、2号溝にほとんど切られている。10号住居よりは新しい。上端平面形は長軸1.11m、短軸0.64m程の楕円形と考えられる。深さ28cmを計る。

遺物は皆無である。



第77図 時期不明土罐 (44号~50号土罐)



51号土壇埋土

層位	土色	土性	備考
1	緑褐色 7.5 YR 5/1	シルト	ロームブロック・炭化物を少量含む。
2	緑褐色 7.5 YR 5/1	シルト	ローム・炭化物を含む。
3	黒褐色 7.5 YR 5/1	シルト	炭化物を含む。
4	暗褐色 7.5 YR 5/1	シルト	ローム炭化物を少量含む。
5	褐色 7.5 YR 5/1	シルト	炭化物を少量含む。
6	褐色 7.5 YR 5/1	シルト	ロームブロック・炭化物を少量含む。

52号土壇埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗緑褐色 7.5 YR 5/1	シルト	ローム・炭化物を含む。
2	黒褐色 7.5 YR 5/1	シルト	炭化物を含む。
3	暗褐色 7.5 YR 5/1	シルト	ローム・炭化物を少量含む。
4	褐色 7.5 YR 5/1	シルト	炭化物を少量含む。
5	暗褐色 7.5 YR 5/1	シルト	ロームブロックを少量含む。
6	褐色 7.5 YR 5/1	シルト	多数のロームと少量の炭化物を含む。
7	暗褐色 7.5 YR 5/1	シルト	多数のロームと少量の炭化物を含む。

53号土壇埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗緑褐色 7.5 YR 5/1	シルト	
2	褐色 10 YR 5/1	シルト	
3	褐色 10 YR 5/1	シルト	ロームブロックを含む。
4	褐色 10 YR 5/1	シルト	ロームブロックを含む。
5	褐色 10 YR 5/1	シルト	
6	褐色 7.5 YR 5/1	シルト	硬(3.0cm)炭化物を少量含む。

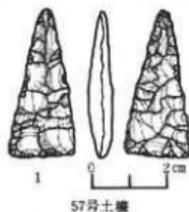
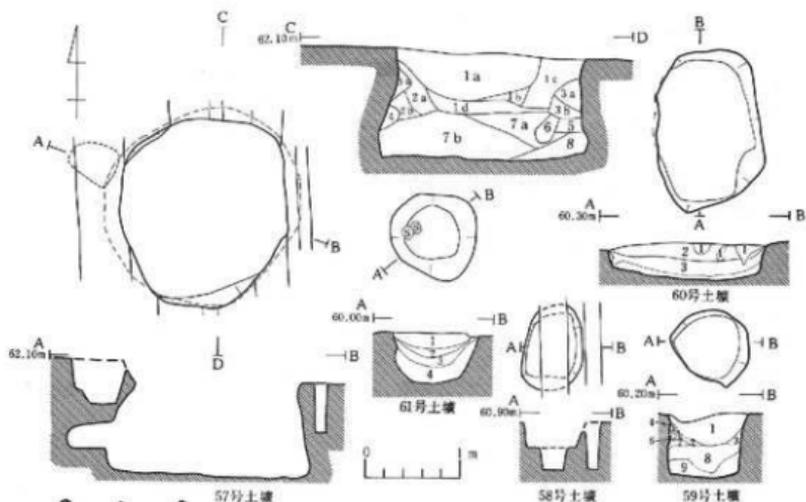
55号土壇埋土

層位	土色	土性	備考
1	褐色 7.5 YR 5/1	シルト	ロームブロックを少量含む。
2	暗褐色 10 YR 5/1	シルト	炭化物を少量含む。

56号土壇埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗緑褐色 7.5 YR 5/1	シルト	暗色土粒・炭化物を含む。
2	暗緑褐色 7.5 YR 5/1	シルト	暗色土粒・炭化物を含む。
3	暗緑褐色 7.5 YR 5/1	シルト	暗色土粒・炭化物を含む。
4	褐色 7.5 YR 5/1	シルト	ローム較多量を含む。

第78図 時期不明土壇 (51号~56号土壇)



57号土墾

57号土墾埋土

層位	土色	土性	備考
1a	暗褐色 7.5Y R 5/1	シルト	炭化物・灰化物・焼土少量含む。スコリア含む。
1b	暗褐色 10Y R 5/1	シルト	炭化物・スコリア少量含む。
1c	暗褐色 7.5Y R 5/1	シルト	炭化物・焼土少量含む。
1d	褐色 10Y R 5/1	粘土質シルト	焼・スコリア少量含む。
2a	褐色 7.5Y R 5/1	粘土質シルト	焼土少量含む。
2b	褐色 10Y R 5/1	粘土質シルト	
3a	褐色 7.5Y R 5/1	粘土質シルト	ロームブロック少量含む。
3b	褐色 7.5Y R 5/1	粘土質シルト	
4	暗黄褐色 10Y R 5/1	粘土	ローム埋土。
5	暗褐色 7.5Y R 5/1	シルト	
6	褐色 7.5Y R 5/1	シルト	
7a	黄褐色 10Y R 5/1	粘土	ローム粒・焼土少量含む。
7b	黄褐色 7.5Y R 5/1	粘土	ローム粒・焼土少量含む。
8	暗褐色 10Y R 5/1	粘土	焼土少量含む。

59号土墾埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 7.5Y R 5/1	シルト	スコリア(約10mm)を一部含む。
2	褐色 10Y R 5/1	シルト	ロームブロックを層に含む。
3	褐色 10Y R 5/1	シルト	炭化物とロームブロック少量を含む。
4	黄褐色 10Y R 5/1	シルト	ロームブロックを含む。
5	褐色 10Y R 5/1	シルト	炭化物を一部に微量に含む。
6	暗黄褐色 10Y R 5/1	シルト	
7	黄褐色 10Y R 5/1	シルト	スコリアと焼土を一部に含む。
8	褐色 10Y R 5/1	シルト	多量のロームブロックと炭化物を含む。
9	褐色 10Y R 5/1	シルト	スコリア炭化物を少量含む。

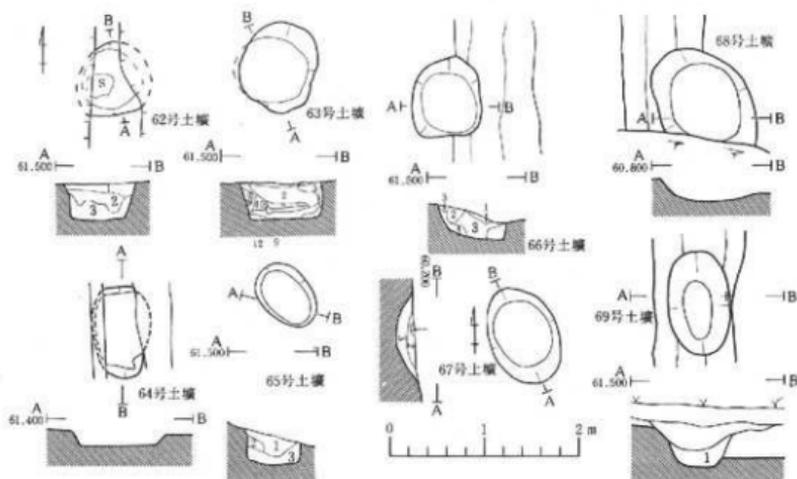
60号土墾埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 7.5Y R 5/1	シルト	ロームブロックを少量含む。
2	褐色 10Y R 5/1	シルト	
3	褐色 7.5Y R 5/1	シルト	
4	褐色 10Y R 5/1	シルト	スコリア(約10mm)を微量含む。

61号土墾埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 7.5Y R 5/1	シルト	スコリアを一部に含む。
2	暗褐色 10Y R 5/1	シルト	スコリア粒わずかに含む。炭化物を少量含む。
3	褐色 7.5Y R 5/1	シルト	スコリア粒わずかに含む。
4	褐色 10Y R 5/1	シルト	ロームブロック多量含む。

第79団 時期不明土墾 (57号~61号土墾)



62号土壌埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 10 Y R 5	シルト	黄褐色土粒 (0.2~0.3cm) をまばらに含む。
2	褐色 7.5 Y R 5	シルト	黄褐色土粒 (0.2~1.0cm) を全体的に含む。
3	褐色 7.5 Y R 5	シルト	黄褐色土粒 (0.1~0.2cm) をまばらに含む。

63号土壌埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 10 Y R 5	シルト	
2	暗褐色 10 Y R 5	シルト	炭化物少量、黄褐色土粒をまばらに含む。
3	褐色 7.5 Y R 5	シルト	明黄褐色土粒少量含む。
4	褐色 10 Y R 5	シルト	明黄褐色粘土が混入。
5	暗褐色 10 Y R 5	シルト	
6	黄褐色 10 Y R 5	粘土質シルト	黒色土を部分的に含む。
7	暗褐色 7.5 Y R 5	シルト	
8	褐色 7.5 Y R 5	シルト	
9	暗褐色 10 Y R 5	シルト	黄褐色土が混入。
10	暗褐色 10 Y R 5	シルト	炭化物を少量含む。
11	暗褐色 7.5 Y R 5	シルト	
12	暗褐色 7.5 Y R 5	シルト	黄褐色粘土ブロックが混入。

65号土壌埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 7.5 Y R 5	シルト	暗黄褐色土粒を全体にまばらに含む。
2	暗褐色 7.5 Y R 5	シルト	褐色土が混入。
3	褐色 10 Y R 5	シルト	黒色土が混入。

66号土壌埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 10 Y R 5	シルト	明黄褐色土粒 (0.1~0.3cm) 多量。
2	暗褐色 10 Y R 5	シルト	粘土粒・暗褐色土含む。
3	暗褐色 7.5 Y R 5	シルト	暗黄褐色土粒 (0.1~0.5cm) 多量。
4	暗褐色 10 Y R 5	シルト	明黄褐色粘土をアロック状に含む。
5	暗褐色 7.5 Y R 5	シルト	明黄褐色土 (0.1~1.0cm) 多量に含む。

67号土壌埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 10 Y R 5	シルト	
2	暗褐色 10 Y R 5	シルト	黄褐色粘土をブロック状に多量に含む。
3	暗褐色 7.5 Y R 5	シルト	炭化物を少量含む。

69号土壌埋土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 10 Y R 5	シルト	ロームブロック少量含む。

第80回 時期不明土壌 (62号~69号土壌・67号土壌は近世の土壌である。)

第Ⅳ章 考察とまとめ

1. 縄文時代早期

土器の属性と編年の位置

胎土

第1群土器は、わずか2点なので明確な判断はできないが、砂粒を多く含み、繊維は含まない。とりわけ胎土に大きな特徴は見出せない。器面調整や焼成は良好である。

第2群土器の胎土は、砂粒を多く含み、繊維の少ないものが多い。そうした中で、極めて特徴的な胎土をもつものが存在する。第3群土器の中のものと同化した白色砂粒(角礫凝灰岩)を多量に含むもの、金雲母を多く含むもの、白色針状物質(佐藤洋:1981)を含むものがある。これらは、いずれも第2群土器全体の1割未満である。金雲母は、特に2類b・gに見られる。白色針状物質は、第2群土器だけの特徴ではなく、時期に関係なく含有されている。

原体

縄文は、基本的に単節・単節多条文の2種類の原体が認められる。このうち、第2群土器の主体となる原体は、単節多条文であり、およそ6~7割を占めるようである。しかも左燃が比較的多いようである。羽状縄文にも単節多条文を原体として使用しているものもある。しかし、この羽状縄文は、全体の1割未満である。

文様

第1群土器についてはわずか2点であるので、ここでは論じられない。したがって、第2群土器について述べたい。

第2群土器の文様は、大きく2分される。第1は口縁部文様帯をもつもの、第2は文様帯をもたず、地文(単節・単節多条文・羽状縄文)のみのものである。

口縁部文様帯をもつものは、半截竹管による平行沈線文を組合せて、幾何学的なモチーフを表現する点が大きな特徴といえよう。これらはさらに細分が可能である。まず、文様帯の巾がほぼ一定して、口縁部に集中し、口縁部直下に隆帯をもつグループ(1類a・b・c)があり、隆帯を伴わず、文様帯が体部上半まで広がり、曲線文が加わるグループ(1類d・e・f 2類f・g)がある。この後者のグループの上器群は、大畑G式土器(馬目・他:1975)と共通性をもつ。逆に前者のグループは、在地性の強い上器群と考えられようか。このグループの口縁部文様帯のモチーフは、梨木畑式(林:1967)と共通するが、梨木畑では、押し縄文が盛行する。しかし、第2群土器では、沈線文で表現される。押し縄文の施文例としては、口縁部文様帯と体部文様の区画に使用されているものが、わずか1点のみである。

また、口縁部文様帯と体部文様の区画に隆帯を使用するものがわずかに存在する。これは、

それ以前の名残りと解したい。

編年上の問題

従来より、縄文条痕土器群として、素山Ⅱb式、上川名Ⅰ式、梨木畑式、船入島下層式が存在するが、形式内容については、今だ不十分な点が多い。

今回出土した第2群土器は、先の4形式のうち梨木畑式に近い内容をもつが、梨木畑式そのものではないようである。

また、船入島下層式とは、羽状縄文が伴出する点で共通するが、器内面の縄文が盛行する点や、帯状縄文・燃糸文が存在しない点で区別される。

したがって、厳密にみた場合該当形式がない。北前式とでも呼ぶべきかもしれないが、そう呼ぶためには内容が不十分である。この第2群土器と極めて類似する内容をもつものに、南境貝塚第2層土器（宮城県教委：1969）が存在する。今後、良好な出土資料を待って、検討が必要である。

土器の分布とその問題点

今回、北前遺跡から出土した縄文時代早期の土器は総数1279点（第5表）である。このうち第1群土器は、わずか2点のみであり、十分な特徴をつかむことができないが、およそ、大寺式のものであろうか。

第2群土器は、総数1277点で、早期の土器の上部を占める。このうち、口縁部は110点で全体の約9%、体部は1137点で全体の約89%、底部付近は26点で全体の約2%を占める。また、円盤状土製品4点が出土している。遺構別に見ると、住居跡出土点数は577点で45.2%、土壇出土点数は55点で4.3%、包含層及び遺構外出土点数は645点で50.5%を占める。

これらの土器群の分布（第81図）を見ると、C-4区、D-5区に主体をもつ1号住居跡のグループ（第1グループ）、2号～8号住居跡を含みH-5区、G-5区、I-6区に主体をもつ南東部のグループ（第2グループ）、また、図には表現できなかったが、I-9区、J-10区に比較的多く出土している南西部のグループ（第3グループ）の3ヶ所が、出土頻度が高い。それぞれのグループは、1類a・b、2類a・b、3類a・bを主体的に保有するという基本的な共通点が存在する。しかし、これら3つのグループはそれぞれ、細部において内容が異っている。第1グループには平底（揚底）や、羽状縄文が伴わない1類d～j、2類d～jが多い。胎土に金雲母を含むものがある。第2グループは、特異な例や偏在性は認められず、齊一性が強い。第3グループは、出土点数がやや多いが、このグループの主体はさらに西あるいは南に存在するものと考えられる。したがって特徴を明確に捉えることができないが、第1グループと同様に胎土に金雲母を含むものや、第2グループに近く、第1グループに保有される体部文様との区画に隆帯をもつもの（1類g）がある。

これら3つのグループの時間的な関係については、明確にできないが、第1グループに1類iや、2類eを含む点などを考慮すれば第2グループから第1グループに変遷した可能性が考えられる。

石器について

石器に関しては、以下の2点について指摘しておきたい。

- ①縄文時代早期に属する石器が全出土点数の約5割を占める。
- ②縄文時代の石器の約5割を5号住居跡が占める。

住居跡の特徴について

今回検出された住居跡は、規模が約3～4mで炉の存在しないものが一般的である。土柱穴数は各住居跡によって異なるが、住居内に土壌を伴う点は共通する。ただし、1号住居跡については、3号溝に大半を切られているために、詳細は不明である。この土壌は、住居内の西側か南側に位置している。8号住居跡は、両方に付設されている。

5号・6号住居跡については、他の住居跡に比較した場合、規模が大きく、柱穴の数が多くまた深い。特に5号住居跡には炉が存在するし、出土した石器数は、早期の全出土点数の約5割を占めている。これらの特徴から、少なくとも5号住居跡の性格は、他の住居跡と区別されよう。おそらく、共同作業場や集会所等の性格をもつものであろう。6号住居跡については、5号住居跡に切られており、その特徴は明確にとらえられない。

住居跡外の土壌は、形態を比較すると、隅丸長方形・円形・不整形の3種類があり、ほぼ住居群の内側に点在する。その性格については不明である。

今回、8棟の住居跡が検出され、2号住居跡と3号住居跡、5号住居跡と6号住居跡にそれぞれ切り合いが認められた。したがって、第2グループの住居群には、少なくとも2時期の変遷があったと考えられる。また、1号住居跡については前述したように、第2グループの住居群よりさらに新しくなる可能性をもつ。

以上の特徴がみられる。全体としてみた場合、これらの住居群は、同一型式内において変遷した集落跡と考えられる。



第81図 第2群土器頻度分布図

2. 縄文時代前期

前期末の土壌群と時期不明土壌群について

前期末の時期の土壌とした11～33号土壌の23基は、重複関係及び、出土土器が第3群に属するものであることを判断基準としている。ここでは分布・規模・形態について分析を行ない、前期末の土壌群の特徴を捉え、後に時期不明土壌群との対比を行なう。

最初に規模について分類する。分類基準を長軸とし、1類 $>2\text{m}$ 、 $2\text{m} \geq 2$ 類 $>1.2\text{m}$ 、 $1.2\text{m} > 3$ 類に分けた。1類は16、27号土壌の2基、2類は11、12、13、15、17、18、20、21、22、23、24、25、26、31号土壌、3類は14、19、29、30、32、33号土壌である。1類及び2類は31号土壌を除き調査区北半に、3類は14、19号土壌を除き調査区南西部にそれぞれ分布域を示す。

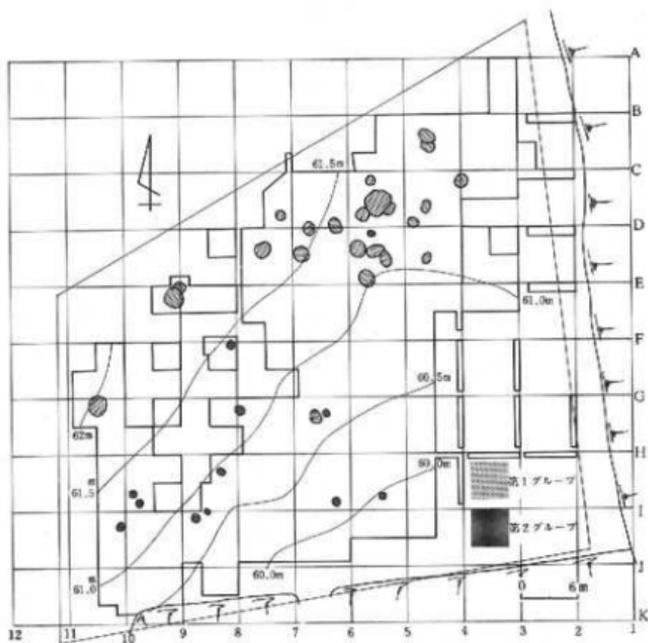
次に形態について分類する。分類基準は上端平面形、壁面の立ち上がり角、長軸と深さの比率について設けた。上端平面形は円形： $\frac{\text{長軸}}{\text{短軸}} < 1.1$ 、楕円形： $1.1 \leq \frac{\text{長軸}}{\text{短軸}} < 2$ 、長楕円形： $2 \leq \frac{\text{長軸}}{\text{短軸}}$ とした。円形は14、15、21、23、26、27、28、29、30号土壌、楕円形は11、12、13、14、15、16、18、19、20、22、24、25、31、32、33号土壌で、長楕円形はない。17号土壌は分類不能である。楕円形を示すものは全て1.5未満である。壁面の立ち上がり角度は断面形において便宜的に下端と上端を直線で結び下端から立てた垂直線との角度とした。壁面が内傾するものはマイナスにした。1類 $< -10^\circ$ 、 $-5^\circ \leq 2$ 類 $\leq 5^\circ$ 、 $10^\circ \leq 3$ 類 $\leq 25^\circ$ 、 $30^\circ \leq 4$ 類 $\leq 50^\circ$ 、 $50^\circ < 5$ 類。1類は13、16、17、20号土壌、2類は11・18、21、23、25、27号土壌、3類は22、26、29、30、32、33号土壌、4類は24、31号土壌で、12、14、15、19、28号土壌は分類不能である。また長軸と深さの比率は、1類： $\frac{\text{長軸}}{\text{短軸}} < 2.5$ 、2類： $2.5 \leq \frac{\text{長軸}}{\text{短軸}} < 4$ 、3類： $4 \leq \frac{\text{長軸}}{\text{短軸}}$ と6、1類は11、13、15、18、21、22、23、25、29、30号土壌、2類は16、20、26、28、31、32、33号土壌、3類は24号土壌であり12、14、19、27号土壌は分類不能である。

以上のことから前期末の土壌群には規模と分布に相関関係が見られ、大形ものが北半部に小形ものが南半部に分布域を示す。形態的には上端平面形は円形及び楕円形を呈するが $\frac{\text{長軸}}{\text{短軸}}$ が1.5を越すものはなく円形に近い楕円形が多い。立ち上がり角度は他の時期と比べると、1類、2類は前期末に特徴的であり、北半部の大形のものに見られるが、南半部にはない。また南半部の29、30、32、33号土壌は立ち上がり角度3類に属し、この4土壌全てが長軸の3類に属しており南半部の土壌群の特徴と言える。また $\frac{\text{長軸}}{\text{深さ}}$ は1類・2類がほとんどである。

次に時期不明土壌25基について、単一要素により消去を行なう。

1. 重複関係から縄文時代中期以降のもの……68・69号土壌
2. $1.5 < \frac{\text{長軸}}{\text{短軸}}$ ……44・59・64・69号土壌
3. $\frac{\text{長軸}}{\text{深さ}}$ が3類に属するもの……48・54・60号土壌

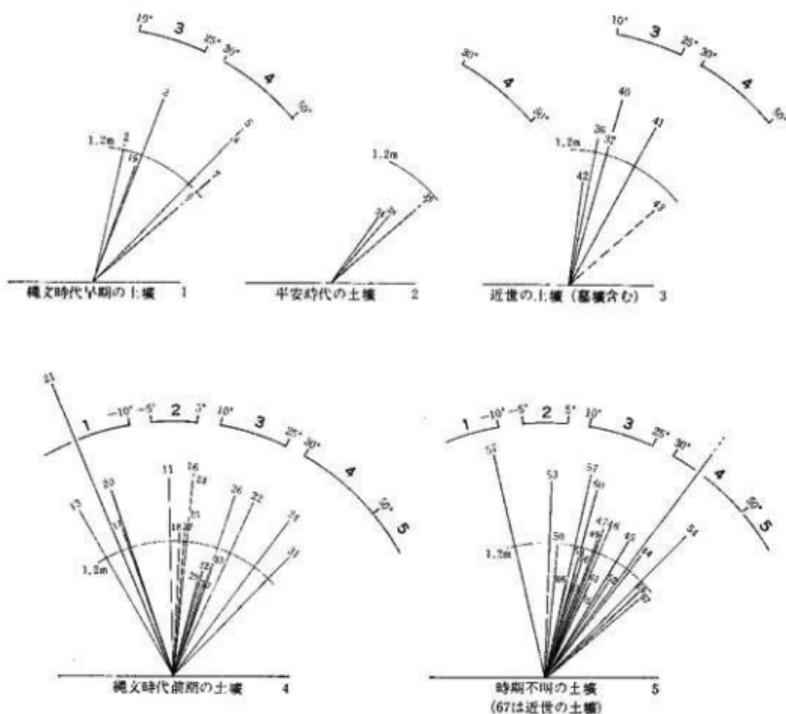
8基が消去された。残り17基について規模・形態の共通性により抽出を行なう。



前期末の土壌

土壌名	長軸：短軸	角度	長軸：深さ	土壌名	長軸：短軸	角度	長軸：深さ
11	1.372	-5°	2.107	23	1.054	5°	1.641
12	1.214	—	—	24	1.387	36°	5.375
13	1.210	-29.5°	2.256	25	1.175	5°	1.678
14	—	—	—	26	1.049	18°	2.725
15	1.065	—	1.837	27	—	4°	2.675
16	1.143	-22.5°	3.783	28	1.059	—	1.708
17	—	-19°	—	29	1.048	13.5°	1.387
18	1.447	2°	1.5	30	1.051	17°	1.864
19	1.328	—	—	31	1.315	43.5°	3.106
20	1.121	-18.5°	2.588	32	1.227	15°	3.464
21	1.065	5°	2.093	33	1.128	19°	3.117
22	1.360	24°	2.023				

第82図 前期末土壌分布図と形態分類表



時期不明の土壌

土壌名	長軸+短軸	角度	長軸+深さ	土壌名	長軸+短軸	角度	長軸+深さ
44	1.768	38°	2.833	57	1.160	-12.5°	1.669
45	1.061	31°	11.66	58	1.492	—	3.640
46	—	23°	4.677	59	1.623	15°	1.600
47	1.400	21°	3.684	60	1.220	15°	4.526
48	1.804	26°	7.666	61	1.022	25°	1.672
49	1.337	20.5°	2.031	62	1.026	19°	2.078
50	1.157	5°	1.573	63	1.234	15°	2.375
51	—	12.5°	4.069	64	1.581	—	2.510
52	—	33°	—	65	1.442	25°	1.875
53	1.061	2°	2.276	66	1.183	12°	1.714
54	1.036	44.5°	6.214	68	1.381	—	6.700
55	—	36.5°	—	69	1.734	47.5°	3.964
56	1.091	17°	1.672				

表9表 土壌形態分類表

1. 長軸が1類か2類で、 $\frac{\text{長軸}}{\text{短軸}} < 1.5$ 、立ち上がり角度が1類か2類か3類に属するもの……

47・49・50・53・57号土壌

2. 長軸が3類で、 $\frac{\text{長軸}}{\text{短軸}} < 1.5$ 、立ち上がり角度が3類のもの……56・59・61・62・63・65・66号土壌

これら12基は規模及び形態において前期末の土壌の性格を有する。また分布域も1は北半部2は南半部を示す。尚50号土壌は長軸1.18mで長軸3類であるが、立ち上がり角度を重視し、1に入れた。

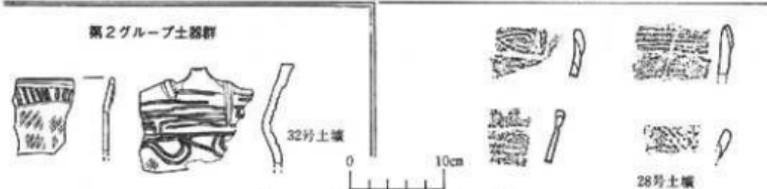
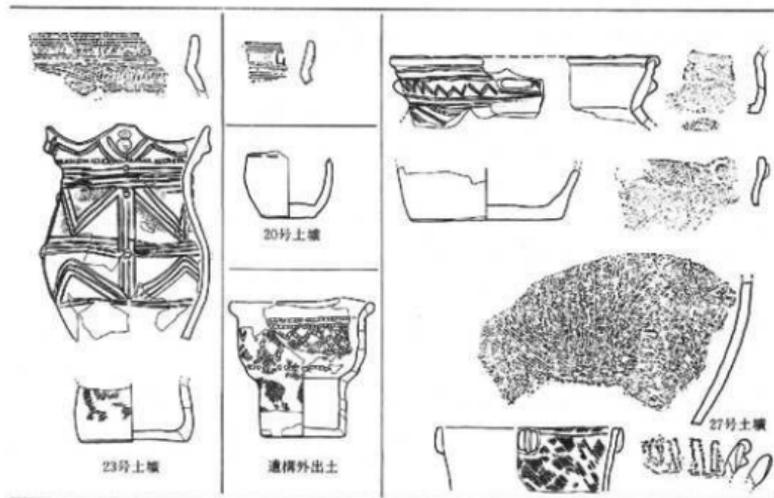
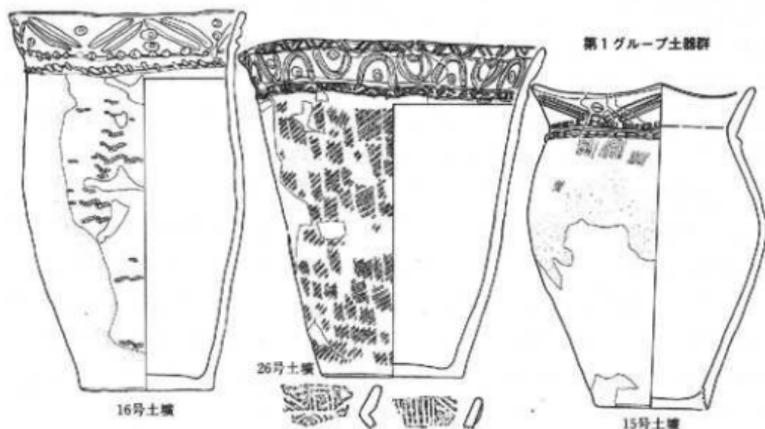
前期の土壌群は分布の結果、大きく2つのグループに分けることができる。第1グループは調査区北半に東西方向に帯状に分布域をもち、等高線が開く北東部の平田面に集中する傾向がある。土壌の規模は大きく(長軸 $> 1.2\text{m}$)、平面形は円形及び楕円形($\frac{\text{長軸}}{\text{短軸}} < 1.5$)で、立ち上がり角度はほとんどが1類・2類・3類に属する。また、 $\frac{\text{長軸}}{\text{深さ}}$ は1基を除き全て1類か2類である。第2グループは調査区南半に分布域をもち、土壌の集中はないが、南へ広がる傾向が認められる。土壌の規模は小さく(長軸 $\leq 1.2\text{m}$)、平面形は円形及び楕円形($\frac{\text{長軸}}{\text{深さ}} < 1.5$)で、立ち上がり角度は3類が、 $\frac{\text{長軸}}{\text{深さ}}$ は1類がほとんどであり、第1グループに比べ規格性がある。

第3群土器について (第83図)

第3群土器は口縁部と胴部が明確に区別つく深鉢形土器を主体としており、深鉢形土器の中での器形の多様性を認めることができる。口縁は四波状口縁を有するものが多い。文様帯も口縁部・胴部と二分され頸部文様を施文することでより明確な区画を示す場合もある。さらに文様帯の4区画が行なわれるものもあり、区画性を有する土器群と言える。地文は横位綾結文・単節斜行縄文が施文されるが薄く推で消してあるものがある。文様施文要素は沈線文が主流を占め、文様要素では横位沈線文・連続刺突文・ボタン状貼付文などが施文される。半截竹管の使用が顕著である。また胎上に角礫凝灰岩粒を多量に含む。

第3群土器類似資料は長根貝塚(藤沼、1969)、沼崎山遺跡(遊佐、1980)、榎塚貝塚(興野、1981)などで出土しており大木6式土器と捉えることができる。長根貝塚では大木6式土器を2つに分けており、第3群1類1種、3類1種、5類1種、5類2種は長根第1群に比定することができ、本調査区では14・15・16・18・19・20・21・22・23・26・27・28号土壌から出土しており、第1グループに属する土器群と考えられる。また第3群1類2種、3類2種は長根第2群に比定することができ、本調査区では32・33号土壌から出土しており第2グループに属する土器群と考えられる。本調査区2類・4類・6類は共存関係から、7類は同一文様要素をもつものが21号土壌で5類1種と共存していることから第1グループの土器群に入ると考えられる。

第3群土器はほとんどが第1グループ土器群と捉えられる。この第1グループ上沿群は第2グループ土器群には見られない細い粘土紐隆帯による幾何学文や、隆帯に連続刺突文を加えた



第93図 縄文時代前期末葉の土器

顔部文様を有するものがある点、また、山形沈線文・山形連続刺突文といった「山形文」が特徴的である。これを大木4式・大木5式からの山形貼付文の施文要素の沈線文、刺突文への転換と見ることができれば、ボタン状貼付文・コブ状貼付文・棒状貼付文といった、貼付文が残るにせよ、第1グループ土器群は貼付文土器から沈線文土器へ移行する過渡的段階の土器群であり、そのために文様要素の多様性が認められると考える。

土壌群の性格について

2つの土壌群は分布域を異にしている。第1グループでは土壌に形態差があり重複関係も認められ集中区を形成している。集中区の形成は土壌を掘る時に撰地性を持っている事によるものであり、この場合は平坦面を撰地する傾向が窺える。このため調査区北東部の等高線が開く最も平坦な場所に土壌が集中したと考えられる。第2グループは規模・形態に規格性があり重複関係はなく集中する傾向は認められない。このことは土壌群が第1グループに比べやや傾斜がある地域に分布している事から地形的な撰地性よりもある一定の域を設定し、そこに土壌が配されている事を考えさせる。この土壌群形成の相違は時期差によるものなのか、性格によるものなのか現段階では不明であるが、以下各土壌及びグループ間において見られた特徴的な事らを列挙しておき、今後の参考としたい。

1. 第1グループの方が第2グループよりも遺物出土量は圧倒的に多い。
2. 第1グループでは一括土器が15・16・23・26号土壌から出土した。このうち16号土壌では底面から出土したが、他の3土壌は底面からの出土ではなく埋土の上面に乗ってやや浮いた状態で出土している。15号土壌では下層に人為的と考えられるロームブロックを含む層が薄い炭化物の層をはさんだ状態で確認され、土器はその上の層の上面に乗って出土している。
3. 第1グループには底面にピットを1個有する土壌が6基あるが、第2グループにはない。
4. 底面に石を敷いたと思われる土壌が第1グループ・第2グループ共に見られる。18号土壌では4個の円礫・角礫が底面に敷いてあり、その下から炭化物が検出されている。また30号土壌では底面に扁平な輝石安山岩が1個敷いてあり、埋土中からは実用品とは考えにくい鈎針形石器が1点出土している。18・30号土壌は、石の検出状況などから墓塚と考えられる。
5. 埋土上層から円礫を出土している土壌がある。21・23・61号土壌である。

現段階では2つの土壌群の性格については不明と言わざるを得ない。今後照例を待ち土壌群の性格に迫りたい。最後に大木6式土器の細分の可能性を指摘し本稿を了とする。

3. ま と め

1. 北前遺跡は、名取川が形成した段丘上に位置する。
2. 旧石器時代の文化層が確認された。前期旧石器時代は、15層上面（D-3 a区）・17層上面（I-5 b区）で確認され、後期旧石器時代は第5層上面において確認された。ところで、旧石器時代の調査面積が狭小なため、層の対比、文化層としての認定（第6層・第9層上面）、石器群の面的広がりなどの問題が調査上の課題として残される。また、石器群の内容検討や他遺跡の資料との対比などが研究上の課題となろう。
3. 今回の3万年以前の石器の出土は、宮城県内では発掘調査の結果確認された遺跡としては、座敷乱木遺跡・山田上ノ台遺跡について3番目である。今後の前期旧石器時代の研究に貴重な資料を提供した。
4. 縄文時代早期末の集落跡（8棟）が発見された。県内では、今まで1遺跡において1～2棟の住居跡の発見は報告されているが、今回のような集落跡として報告された例はなく、貴重な資料である。同時に、この時期の集落構造の解明という大きな問題が提起されたといえよう。また、今回出土した第2群土器についても、その編年の位置づけを明確にしなければならない。
5. 仙台市では初めてであり、県内でも数少ない縄文時代前期末大木6式の上器が出土した。また、この時期に属する遺構（土塚群）についても県内では数少なく、貴重な発見となった。土塚が発見されたことによって、この時期の住居跡の発見が今後期待される。
6. 縄文時代中期後葉の大木9式の住居跡が2軒検出された。特に、9号住居跡は県内でも有数の規模をもつ資料である。
7. 平安時代の改築されたと考えられる住居跡が検出された。今回の調査面積に比較して、極めて住居跡の数が少ない。同様の傾向が山田上ノ台遺跡においても指摘でき、段丘や丘陵上での平安時代の集落跡のあり方が問題となろう。
8. 江戸時代の遺構については、その性格を明らかにできたものは数少ない。今回の調査では、墓塚のみが明確に把握できた。また、小鍛冶と考えられる工房跡が検出されたが、この時期の鉄生産に関連する遺跡の報告例がほとんどなく、その解明は今後の課題である。溝の性格については不明であるが、遺跡の中に所在する杉上手との関連がつかめ、杉上手（土塁）が築造された時期は、江戸時代中期以前である可能性が強まった。また、秋保街道（江戸時代以来のもの）沿いに、江戸時代の遺構が点在することが判明した。

最後に、短期間のうちに、報告書をまとめあげなければならなかったために、調査に参加された方々はもちろん、整理参加された方々や協力していただいた方々に対して、担当者とし

て、改めて感謝申し上げたい。

第10表

住居跡

遺構名	時期	上端長軸	短軸	下端長軸	短軸	深さ	備考
1号住居跡	縄文時代中期後半	4.60m	3.14m	4.48以上	3.04m	0.22m	
2号住居跡	*	約3.9m	約3.6m		3.74m	0.23m	
3号住居跡	*	3.96m	3.49m	3.4m	2.90m	0.33m	
4号住居跡	*	3.48m	3.32m	3.34m	3.12m	0.22m	
5号住居跡	*	6.28m	推3.60m	6.14m	推3.4m	0.13m	
6号住居跡	*	約5.0m	約5.0m	4.6以上	1.2以上	0.10m	
7号住居跡	*	4.27m	3.01m	3.76以上	2.08	0.17m	
8号住居跡	*	約3.30m	3.06m	2.72以上	2.76	0.17m	
9号住居跡	縄文時代中期後半	推7.60m	推6.80m	推7.40	推5.50	?	
10号住居跡	*	5.78以上	6.22m	5.72以上	6.02	?	
11号住居跡	平安時代	推3.70m	3.46m	推3.50m	3.30m	22	
12号住居跡	*	推1.80m	4.76m	推4.50m	4.50m	32	

工房跡

遺構名	時期	上端長軸	短軸	下端長軸	短軸	深さ	備考
1号工房跡	江戸時代	4.0m以上	2.12m	3.7m以上	0.92m		

竪穴

遺構名	時期	上端長軸	短軸	下端長軸	短軸	深さ	備考
1号竪穴遺構	縄文時代中期	3.33m	3.03m	約2.5m	1.71m		

溝一覧

遺構名	上端最大幅	最小幅	下端最大幅	最小幅	深さ最深	最浅	備考
1号溝	2.05m	1.30m	0.77m	0.47m	0.5m	0.1m	
2号溝	1.06m	0.83m	0.56m	0.22m	0.21m	0.1m	
3号溝	1.94m	1.28m	1.30m	0.71m	0.30m	0.2m	
4号溝	1.76m	0.88m	0.93m	0.20m	0.33m	0.05m	
5号溝	0.7m	0.48m	0.54m	0.36m	0.37m	0.34m	
6号溝	0.72m	0.48m	0.20m	0.12m	0.42m	0.32m	
7号溝	0.40m	0.20m	0.25m	0.12m	0.25m	0.12m	
8号溝	1.05m	0.20m	0.2m	0.04m	0.35m	0.06m	

第11表 土壌一覽表(1)

遺構名	上端長軸	短 軸	中端長軸	短 軸	下端長軸	短 軸	深 全	備 考
1号土壌	1.23m	0.61m			1.12m	0.43m	0.40m	
2号土壌	約1.20m	0.69m			1.3m	0.56m	0.34m	
3号土壌	1.72m	1.43m			1.57m	1.33m	0.22m	
4号土壌	1.75m	1.53m			1.57m	1.28m	0.16m	
5号土壌	1.88m	1.85m			1.77m	1.68m	0.15m	
6号土壌	1.35m	約1.00m			1.25m	0.94m	0.10m	
7号土壌	1m以上	0.97m			0.95m以上	0.9m	0.16m	
8号土壌	2.45m	0.95m			2.28m	0.76m	約0.09m	
9号土壌	1.09m	0.85m			0.9m	0.64m	0.29m	
10号土壌	1.20m	1.03m			1.07m	0.75m	0.14m	
11号土壌	1.77m	1.29m			1.47m	1.20m	0.84m	
12号土壌	1.53m	1.26m			1.29m	1.08m		
13号土壌	1.67m	1.38m	1.15m	1.13m	1.20m	1.06m	0.74m	
14号土壌	1.04m	1.02m			1.37m	1.42m	1.08m	
15号土壌	1.47m	1.36m			1.07m	1.04m	0.30m	
16号土壌	2.80m	2.45m	2.30m	2.12m	2.22m	2.70m	0.74m	
17号土壌	1.26m				1.12m	0.80m以上	0.90m	
18号土壌	1.23m	0.85m	0.98m	0.61m	0.81m	0.38m	0.82m	
19号土壌	0.85m	0.64m			0.54m	0.39m		
20号土壌	1.76m	1.57m	1.80m	1.50m	1.67m	1.19m	0.68m	
21号土壌	1.80m	1.69m	1.36m	1.26m	1.35m	1.18m	0.86m	
22号土壌	1.79m	1.25m	1.55m	0.96m	1.21m	1.19m	0.84m	
23号土壌	1.74m	1.65m	1.56m	1.46m	1.45m	1.45m	1.06m	
24号土壌	1.72m	1.24m			1.23m	0.89m	0.32m	
25号土壌	1.41m	1.20m	1.07m	1.03m	1.11m	1.00m	0.84m	
26号土壌	1.69m	1.61m			1.44m	1.33m	0.62m	床底上クマシ土
27号土壌	2.14m	2.02m			1.45m	1.3m以上	0.72m	
28号土壌	1.23m	掘1.25m	0.87m	0.91m	1.81m	1.72m	0.80m	
29号土壌	0.86m	0.82m			0.32m	0.32m	0.62m	
30号土壌	0.82m	0.78m			0.66m	0.57m	0.44m	
31号土壌	1.46m	1.11m			1.17m	0.74m	0.47m	
32号土壌	0.97m	0.79m			0.83m	0.69m	0.28m	
33号土壌	1.06m	0.94m			0.76m	0.82m	0.34m	
34号土壌	0.72m	0.48m			0.72m	0.39m	0.07m	
35号土壌	1m以上	1.06以上			0.9m以上	0.76m以上	0.31m	
36号土壌	0.8m	0.53m			0.68m	0.42m		
37号土壌	1.26m	1.12m			1.07m	0.85m	0.46m	基礎
38号土壌	1.32m	1.20m			0.93m	0.87m	0.75m	基礎

第11表 土壤一覽表(2)

遺構名	上端長軸	短 軸	中端長軸	短 軸	下端長軸	短 軸	深 さ	備 考
39号土壌	0.80m	0.74m			0.49m	0.44m	0.37m	盛壊
40号土壌	1.70m	1.39m	1.49m	1.39m	1.10m	1.03m	0.82m	盛壊
41号土壌	1.58m	1.57m	1.41m	0.98m	0.72m	0.65m	0.77m	盛壊
42号土壌	0.92m	0.65m			0.53m	0.50m	約0.30m	盛壊
43号土壌	1.00m	0.88m			0.70m	0.76m	0.22m	
44号土壌	1.30m	1.30m			0.91m	0.72m	0.48m	
45号土壌	1.40m	1.32m			1.31m	1.23m	0.12m	
46号土壌	1.45m	0.6m以上			1.13m	0.5m以上	0.31m	
47号土壌	1.40m	1.00m			1.21m	0.81m	0.38m	
48号土壌	0.92m	0.51m			0.76m	0.34m	0.12m	
49号土壌	1.30m	0.98m			1.04m	0.75m	0.61m	
50号土壌	1.18m	1.02m			0.95m	0.87m	0.75m	
51号土壌	1.84m	推1.64m			1.64m	1.35m	0.45m	
52号土壌	推1.00m	0.64m					0.26m	
53号土壌	1.73m	1.63m	1.48m	1.32m	1.32m	0.86m	0.76m	
54号土壌	1.74m	1.68m			1.32m	1.17m	0.28m	
55号土壌	2.5m以上	0.63m			2.1m以上	0.38m	0.22m	
56号土壌	1.07m	0.98m	1.09m	1.05m	0.96m	0.93m	0.64m	
57号土壌	2.02m	1.74m			2.12m	2.07m	1.21m	
58号土壌	0.91m	0.61m			0.10m	0.52m	0.25m	
59号土壌	1.12m	0.69m			1.04m	0.53m	0.70m	
60号土壌	1.72m	1.41m			1.61m	1.33m	0.38m	
61号土壌	0.92m	0.90m			0.58m	0.57m	0.55m	
62号土壌	0.79m	0.77m			0.68m	0.64m	0.38m	
63号土壌	0.95m	0.79m			0.76m	0.69m	0.40m	
64号土壌	0.98m	0.62m			0.82m	約0.55m	0.39m	
65号土壌	0.75m	0.52m	0.61m	0.46m	0.59m	0.35m	0.40m	
66号土壌	0.84m	0.71m			0.61m	0.56m	0.49m	
67号土壌	1.07m	0.71m			0.73m	0.58m	0.26m	
68号土壌	1.34m	0.97m			0.92m	0.76m	約0.20m	
69号土壌	1.11m	0.64m			0.62m	0.29m	0.28m	

第12表 出土石器集計表(2)

時期	遺構名又は区名	尖頭	石	ハク状石	スクレイパー	ピレス・エスキム	打製石	釣針形石	石	一次加工のある剥片	剥片	層	有溝	砥石	凹石	解	銚石(ハンマーストーン)	凹石	凹石	凹石	板状	虚	計	
期		頭	器	器	器	器	斧	器	片	片	片	斧	砥	石	石	石	石	石	石	石	木			
縄文時代中期	33棟								2	1												1	4	
	計	1	2	2	1	2	1	1	4	8	11	26			2	3	8		4	1	1	1	2	28
縄文時代中期	9住	3	1	1					2	1	5					1							6	21
	10住	1			1				3	4	15					2			1			4	33	40
	1整		3						1		2												13	19
	計	3	5	1	2	1	3		1	5	6	23	1		1	3	1					4	20	80
平安時代	11住	1			1	1			4	2	7	1										1	19	
	12住								2	4													6	
	35棟					1			2	1										1			1	6
	36棟											1											1	
	計	1			1	1	2		6	4	12	2								1		1	1	32
近世以降	40溝										2												2	
	1溝			1								1											1	4
	2溝			1		1					2												4	
	3溝				2		1	1	1	4			1	2	2		1	1					4	21
	4溝		1			1			1	1						1							5	
	5溝											1											1	
計		1	2	2		3		1	2	2	7	1	1	2	3		2	1				5	35	
表上	A-2								1														1	
	A-3	1									2												3	
	B-3	1			1	2			1	1													7	
	B-4		1		1					3													6	
	C-2									1					1								2	
	C-3																				1		1	
	C-4								2	1												4	7	
	C-5										1				1								2	
	C-6				1					1	1												3	
	C-7				2		1				1												4	
	D-3										1												1	
	D-4				1																		2	3
	D-5	1			1				1	1	3				1	1							7	17
	D-6				1					1	1					1							1	5
	D-7									2	1												1	4
	E-3				1						1	1											3	
	E-4									1	1	1												3
	E-5				1					1	1						1							4
	E-6									3	2	1												6
	E-7									1	1													2
E-8										1					1	2							2	6
F-4									1	2													3	
F-5				2		1			1	2	1											6	15	
F-6				1		1			1	2					3								8	
F-8				1																			1	
G-4									1	1													2	

第13表 縄文時代の石器属性表(1)

石器属性表												
実測No.	出土区・層位	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破損	素材の位置	加工状況	備考		
第65図1	A-3 第4層	燧石	24.0	12.5	4.0	0.9	基部有		両面			
第65図3	I-8 第1層	瑠璃頁岩	26.0	16.5	4.5	1.2	先端・基部両端		両面	付着物あり		
第47図16	21 砂土層	瑠璃頁岩	20.0	21.5	2.0	1.1	先端	左下	両面			
第58図3	9号住居跡林穴	瑠璃頁岩	21.0	12.5	2.5	0.5			両面			
第58図2	9号住居跡跡	瑠璃頁岩	26.5	21.0	6.0	1.9	先端		両面	付着物あり		
第58図4	9号住居跡跡	瑠璃頁岩	31.0	19.0	5.5	2.4	基部両端		両面			
第65図2	H-7 第1層	瑠璃頁岩	25.5	18.0	7.5	3.3	先端		両面			
第300図7	5号住居跡跡P173埋土	瑠璃頁岩	25.5	14.5	5.6			下	両面			
第79図1	57 砂土層	瑠璃頁岩	39.0	18.0	6.0	2.9	先端・基部		両面	付着物あり		
尖頭器属性表												
実測No.	出土区・層位	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破損	素材の位置	加工状況	備考		
第77図1	46 砂土層	チャート	65.5	12.5	7.0	5.1			両面			
第41図5	I-6 第3層	瑠璃頁岩	54.0	14.0	5.0	2.7	基部		両面			
第65図4	H-5 埋土	瑠璃頁岩	64.0	20.5	6.0	6.7	先端		両面			
第65図5	O-9 埋土	瑠璃頁岩	68.0	18.5	5.0	4.3			両面			
石銃属性表												
実測No.	出土区・層位	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破損	素材の位置	加工状況	備考		
第41図6	H-5 第3層	瑠璃頁岩	61.5	14.0	6.0	6.2			両面			
第53図1	27号土層	瑠璃頁岩	71.5	16.0	4.5	6.0			両面			
第53図4	28号土層	瑠璃頁岩	26.5	24.5	8.5	8.9		上	片面			
第54図5	9号住居跡跡	瑠璃頁岩	37.3	77.0	12.0	32.9		上	片面			
第65図7	10号住居跡跡	チャート	69.0	25.0	8.0	11.5		右	片面			
第560図10	1号野方遺構埋土	瑠璃頁岩	31.5	19.0	5.5	5.1		下	両面			
第560図8	*	埋土上層	瑠璃頁岩	65.0	38.0	11.5	26.3		左	両面	3号ハチイナ	
第65図2	F-6 第4層	瑠璃頁岩	30.0	21.5	9.5	11.2		上	片面			
第660図11	E-5 第4層	瑠璃頁岩	102.5	17.5	10.8	14.5			両面			
第650図2	F-5 埋土	瑠璃頁岩	74.5	29.0	8.5	20.7		上	両面	2号ハチイナ		
ヘラ状石器属性表												
実測No.	出土区・層位	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破損	素材の位置	加工状況	備考		
第240図7	3号住居跡埋土1層	瑠璃頁岩	71.5	52.5	21.0	83.8		右	片面	砂(？)		
第280図3	4号住居跡埋土1層	燧石	45.0	28.0	13.0	14.1		下	片面			
第280図4	4号住居跡埋土1層	瑠璃頁岩	22.0	27.0	10.0	6.1	基部		両面	ヘラ状器に類似した石器		
第350図1	1号土層	埋土上層	瑠璃頁岩	61.0	28.5	21.0	41.9		上	両面		
第410図7	H-5 第3層	燧石	53.0	29.0	13.0	13.7		上	両面			
第580図1	9号住居跡跡	瑠璃頁岩	35.5	25.5	11.0	16.6		下	片面			
第710図2	1号溝	埋土	瑠璃頁岩	54.5	35.5	9.5	17.6		左	片面		
第660図10	O-4 第1層	瑠璃頁岩	64.3	30.5	14.1				両面			
石鏃属性表												
実測No.	出土区・層位	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破損	素材の位置	加工状況	備考		
第53図2	28号土層埋土上層	瑠璃頁岩	49.5	19.5	6.5	3.4	30.5	7.0	△	△	先端両端・基部両端	
第53図2	* 埋土2層	瑠璃頁岩	31.0	11.5	5.0	1.6	2.0	3.5	△	△	両面	
第620図6	10号住居跡跡	瑠璃頁岩	31.5	11.5	6.0	2.5		△	先端	両面		
第650図6	1-9 第2層	瑠璃頁岩	41.6	16.5	11.0	4.7	11.5	6.0	△	※先端両端		
スクレイパー属性表												
実測No.	出土区・層位	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破損	加工状況	備考			
第280図5	4号住居跡埋土1層	瑠璃頁岩	70.0	64.0	16.5	66.8			片面			
第410図8	H-4 第3層	砂	37.0	52.0	12.0	19.4			片面			
第660図13	C-7 第2層	瑠璃頁岩	67.5	79.0	28.5	75.7			両面			
第660図9	H-10 埋土	瑠璃頁岩	47.0	28.0	11.0	16.5			両面	※ハチイナ		
第670図7	I-9 埋土	燧石	41.5	26.5	9.0	11.7			両面	クワ・イ・バ・ルナ		

第13表 縄文時代の石器属性表(2)

実測図No	出土区・層位	石質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	破損	加工状況	備考
第47図14	H-5 第1層	凝灰質シスト岩	30.3	33.3	11.5	12.6		片断	折れ面あり
第47図5	25分土層	凝灰質シスト岩	54.0	63.0	13.0	46.4			
第47図6	7号住居跡出土層	凝灰質シスト岩	72.0	87.5	24.5	54.9			素材は石種*

石鏡+スクレイパー属性表										
実測図No	出土区・層位	石質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	破損	素材打点位置	加工状況	備考
第49図5	25分土層	凝灰質	54.0	63.0	13.0	46.4				
第49図1	C-7 第4層上面	凝灰質	48.0	64.0	19.0	36.0				

ピース・エスキュー属性表									
実測図No	出土区・層位	石質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	破損	備考	
第30図6	5号住居跡 埋土2層	凝灰質	31.0	16.0	8.5	4.3			
第30図9	*	粘土岩	30.5	22.0	12.5	6.0			
第30図8	*	床面 粘土岩	30.0	28.0	0.0	1.4		接合	
第30図8	*	粘土岩	29.0	12.0	3.5	0.7			
第32図7	7号住居跡 床面	凝灰質	49.0	22.5	14.5	10.4			
第62図8	10分住居跡 Ph10埋土	凝灰質	53.0	38.0	17.0	20.1			

釣針形・磨製石棒属性表									
実測図No	出土区・層位	石質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	加工状況	備考	
第52図5	9分住居跡 埋土	凝灰質	35.0	22.5	8.0	3.3	両面	釣針形を呈する	
第71図1	1号溝	粘土	36.0	11.0	7.0	6.2		小形磨製石棒	

石核属性表

実測図No	出土区・層位	石質	作 業 所				最終製削 面の大きさ	斜 角 度	備 考		
			数	位置実測図	加工方向	打 面					
第56図9	1号住居跡南面	凝灰質	2	表裏 (a, b)	a, ↓ b, ↓	自然面 不明	(25.0)×(41.0)×(38.8)	不明	不明	34.8°	
第67図13	I-8 第1層	凝灰質	2	a, c面	c, ↓	白, b面	36.0×39.6×22.0	16.6×25.3	72°	70°	93.9° 表面は自然面
第67図16	J-10 第1層	凝灰質	3	a, b, c面	b, ↓ c, ↓	白, b, c 白	52.4×55.4×46.5 28.3×52.0×60.0	18.6×10.3	80°		96.1°
					c, ↓	a, c b, abの接	53.0×49.0×36.5 26.0×25.1×55.0	30.3×27.2	90°		

礫石属性表

実測図No	出土区・層位	石質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	加工状況		備考	
							打 面	破 損		
第32図1	5分住居跡埋土1層	花崗閃緑岩	81.5	40.0	31.5	147.3		両面	ハンマー・ストーン?	
第34図5	7号住居跡出土層	安山岩 (109.0)	76.5	51.0	676.8			右側面	平欠、変形	
第34図1	*	埋土 安山岩	67.0	50.0	37.0	206.7		表面		
第34図7	1号土壌底面	花崗閃緑岩	95.5	82.5	57.0	734.2		裏1、裏1	両面	
第38図1	5分土層 埋土下層	安山岩	110.5	64.0	37.0	373.3		表2、裏1		下 端
第38図2	6号土層 埋土	安山岩 (80.0)	65.0	65.0	45.5	326.2		右側面		平欠
第53図6	20号土層 底面	安山岩	360.0	265.0	40.5			表面		磨製される
第62図5	10号住居跡 床面	凝灰質	104.3	70.0	43.5	204.5		表面全体凹状に磨製		
第71図3	1号溝 埋土	安山岩 (109.5)	64.5	33.3	31.7	美2、美3				平欠
第67図8	E-5 表面	花崗閃緑岩	107.0	88.0	57.0	734.2		裏面		

注1、時間的制約によってすべての石器の属性表を作成することはできなかった。本表は、本報告書に実測図・写真図版を掲載した石器についてのみの属性表である。

注2、石鏡、尖頭器、ヘラ状石器は石質の中軸線の長さを計測した。石匙はつまみ部を上にした場合の最大長を長さとした。その他の石器は、最大長をもつ部分を長さとし、それに直交する最大の長さを幅として計測した。

注3、素材打点位置の上下左右は、主要側面が表現されている実測図の上下左右である。

注4、石核属性表でのa, b, cは実測図に表示されるa, b, cである。また「白」は自然面を表す。

引用・参考文献（五十音順）

- 赤沢威・小田静夫・山中一郎 1980『日本の旧石器』
- 阿部朝暉 1979「第5章遺ピエス・エスキュー」『峠下型山遺跡』P.P.133~159 七坂町教育委員会
- 板垣直俊・豊島正幸・寺ノ恒夫 1981「仙台およびその周辺地域に分布する洪積世末期のスコリア層」『東北地理』第33巻第1号 P.P.48~53
- 伊東信雄 1940「宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告」『東北大学法文学部奥羽資料調査部研究報告第二』
- 氏家和典 1957「東北土器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 P.P.1~14
- 岡村道雄 1976a「約二万五千年前とそれを越える時期の東アジア旧石器文化と日本の関連」『文化』第4巻第1・2号 P.P.1~30
- 1976b「北関東前期旧石器時代における二石器群」『野州史学』第3号 P.P.1~12
- 1976c「日本前期旧石器時代の始源と終末」『考古学研究』第23巻第3号 P.P.73~92
- 岡村道雄・鎌田俊昭 1980「宮城県北部の旧石器時代について」『東北歴史資料館研究紀要』第6巻 P.P.1~28
- 岡本勇編 1982『縄文土器大成1—早・前期』講談社
- 小野山町教育委員会 1980『鹿原D遺跡—小野山町文化財調査報告第1集』
- 加藤孝 1951「宮城県上川名貝塚の研究—東北地方縄文式文化の編年学的研究1」『宮城学院女子大学研究論文集』1号 P.P.213~237
- 1956a「陸前国大沢汎貝塚の研究 その一」『宮城学院女子大学研究論文集』9号 P.P.63~72
- 1956b「陸前国大沢汎貝塚の研究 その二」『宮城学院女子大学研究論文集』10号 P.P.139~156
- 加藤孝・後藤勝彦他 1975「登米郡南方町吉島貝塚発掘調査報告」『南方町史資料編』P.P.1~274
- 興野義一 1968「大木式土器理解のためにIV」『考古学ジャーナル』24 P.P.17~19
- 1969「大木式土器理解のためにV」『考古学ジャーナル』32 P.P.6~9
- 1970a「大木5b式土器の提唱—宮城県長春原遺跡出土資料による—」『古代文化』第22巻第4号 P.P.97~102
- 1970b「大木式土器理解のためにVI」『考古学ジャーナル』48 P.P.20~22
- 1981「熊塚貝塚について」『一迫町史』
- 倉田芳郎編 1978「千葉・南総中学遺跡」『史史10』
- 後藤勝彦 1968「宮城県七ヶ浜町吉山浜貝塚〔I〕」『仙台湾周辺の考古学的研究—宮城県の地理と歴史第3集』P.P.1~20
- 後藤勝彦・斎藤良治・金子浩昌 1969「埋蔵文化財第四次緊急調査概報—南境貝塚—」宮城県文化財調査報告書第20集 宮城県教育委員会
- 佐藤洋 1981「第I章2、遺跡の環境」『第III章6、土器胎土中における白色針状物質について』『山口遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第33集 P.P.1~13 P.P.229~230
- 荘内古文化研究会 1935『吹浦遺跡』
- 石器文化談話会 1978「座敷乱木遺跡発掘調査報告書I」石器文化談話会誌第1集
- 1981「座敷乱木遺跡発掘調査報告書II」石器文化談話会誌第2集
- 芹沢長介 1962「旧石器時代の諸問題」『岩波講座日本歴史1』P.P.77~107

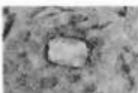
- 1979 『日本旧石器時代の編年について』、『考古学ジャーナル』167 P.P.2~6
- 芥沢長介編 1970 『景野遺跡第3次発掘調査報告書』
- 芥沢長介・岡村道雄・小林博昭(・)・田正勝 1974 『礫石遺跡』
- 仙台市教育委員会 1981 『山田上ノ台遺跡発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書第30集
1981 『山口遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第33集
1981 『六反田遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第34集
- 山山利三郎 1933 『北上山地の地形学的研究其の一 A. 仙台市近傍の河岸段丘』、『斎藤報恩会学術研究報告』
第17号 P.P.1~83
- 地学団体研究会仙台支部編 1980 『新編 仙台の地学』
- 中川久夫・小川貞子・鈴木貴身 1960 『仙台付近の第四系および地殻1』、『第四紀研究』第1巻第6号 P.P.
219~227
- 中川久夫・相馬寛吉・石山琢二他 1961 『仙台付近の第四系および地殻2』、『第四紀研究』第2巻第1号 P.P.
30~39
- 中田高・大槻憲四郎・今泉俊文 1976 『仙台平野西縁・長町一利府線に沿う新时期地殻変動』、『東北地理』第28
巻第2号 P.P.111~121
- 中村光一 1973 『石巻市西三軒屋遺跡の発掘調査』、『石巻地方の歴史と民俗』宮城県石巻工業高等学校創立十
周年記念論集 P.P.139~150
- 丹羽茂 1981 『大木式土器』、『縄文文化の研究』第4巻 P.P.43~60
- 林謙作 1965 『Ⅱ. 縄文文化の発展と地域性 2. 東北』、『日本の考古学 Ⅱ』 P.P.64~132
- 樋口清之・麻生優 1971 『十三善提遺跡』神奈川原埋蔵文化財発掘調査報告2 神奈川県教育委員会
- 藤沼邦彦 1969 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報一長根貝塚一』宮城県文化財調査報告第19集 P.P.3~24 宮城
県教育委員会
- F. ホルド 1968 『旧石器時代』邦訳 芥沢長介・林謙作 1971 平凡社
- 町田貞他編 1981 『地形学辞典』二宮書店
- 馬日順一・原川雄二・山内幹夫 1975 『第6章、H、編年上の問題』、『大畑貝塚調査報告』福島県いわき市教
育委員会
- 宮城県教育委員会 1974 『岩切湯ノ米遺跡』、『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書35
集 P.P.161~274
1978 『上深沢遺跡』、『東北自動車道遺跡調査報告書1』宮城県文化財調査報告書第52集
1981 『清水遺跡』、『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第77集
P.P.3~540
- 山田一郎・庄子貞雄 1980 『宮城県に分布する灰白色火山灰について』、『宮城県多賀城跡研究所年報1979』
P.P.97~102
- 遊佐五郎 1980 『沼崎山遺跡』豊里町文化財調査報告書第2集 豊里町教育委員会
- 米沢市教育委員会 1977 『米沢市八幡原埋蔵文化財調査報告書第3集』



1



2

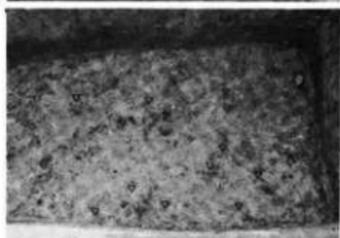


8

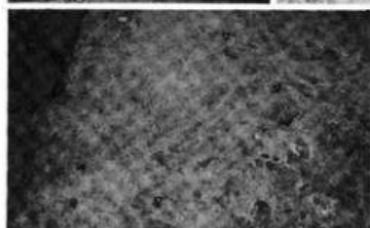


4

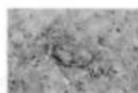
5



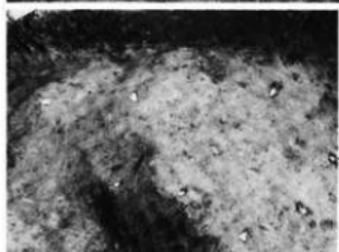
9



6

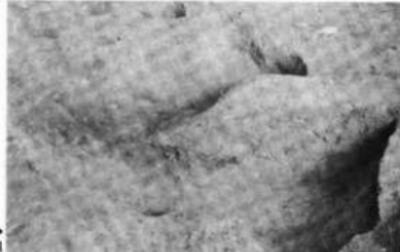


7



3

10 11

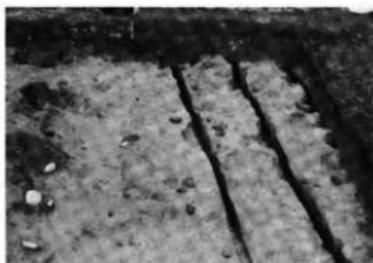


1. 遺跡全景(西より) 2. D-3a区東側断面 3. D-3a区石器出土状況 4-7. 同、銅刃出土状況
8. 1-5b区西側断面 9. 同、石器出土状況 10. A-3d区石器出土状況 11. A-3d区「遺跡本眼」南側断面
(3-9 前期旧石器時代 10. 11. 後期旧石器時代)

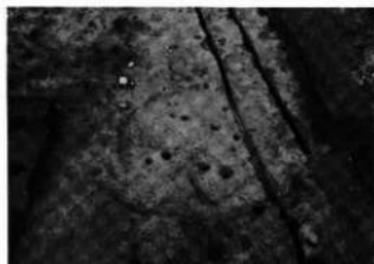
写真1 遺跡全景・旧石器時代の石器出土状況



1



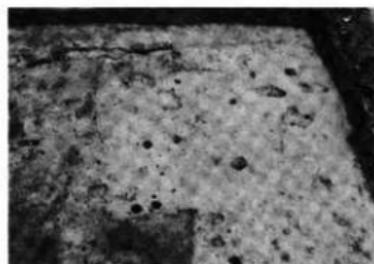
2



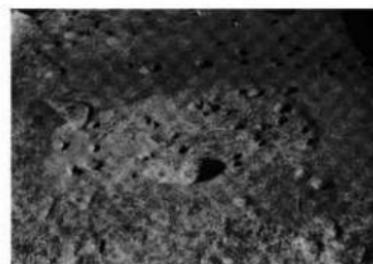
3



4



5



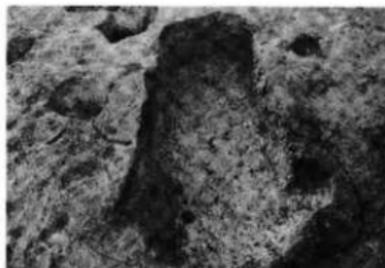
6



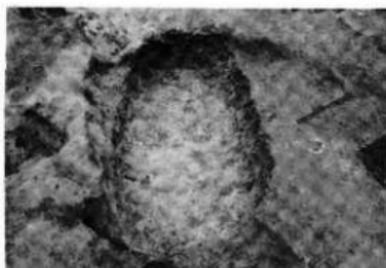
7

1. 1号住居跡・3号溝(江戸時代) 2. 2号住居跡 3. 3号住居跡 4. 3号住居跡断面(西側) 5. 4号住居跡
6. 7号住居跡 7. 5号・6号住居跡

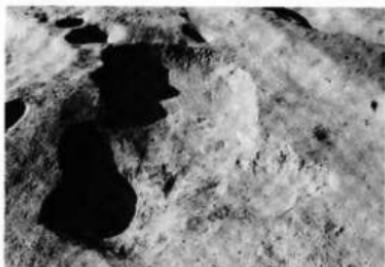
写真2 縄文時代早期の住居跡



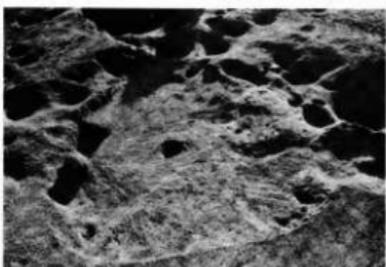
1



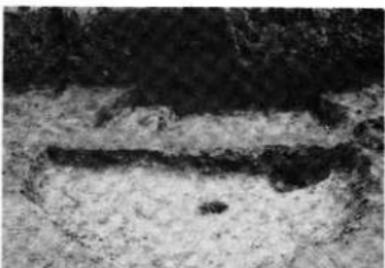
2



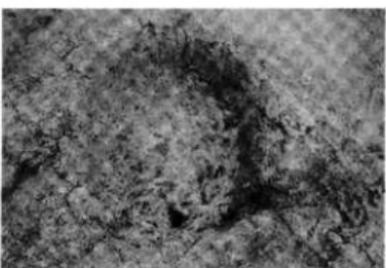
3



4



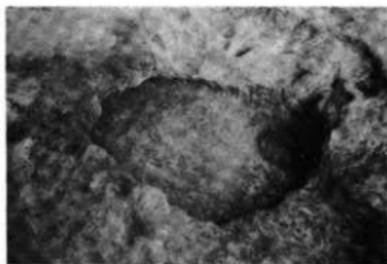
5



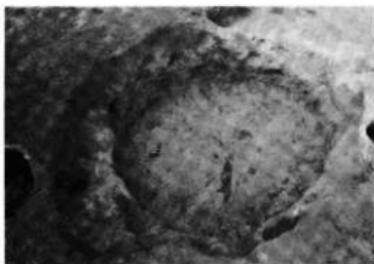
6

1. 1号土坑 2. 2号土坑 3. 4号土坑 4. 5号土坑 5. 7号土坑 6. 9号土坑

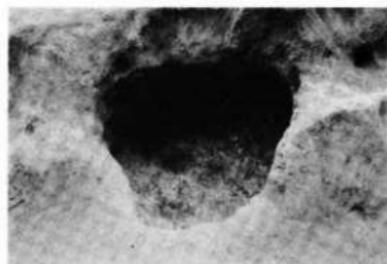
写真3 縄文時代早期の土坑



1



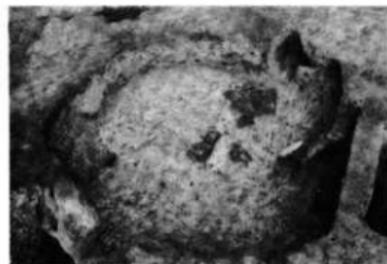
2



3



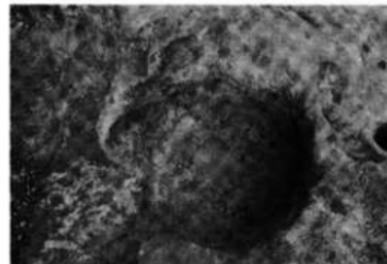
4



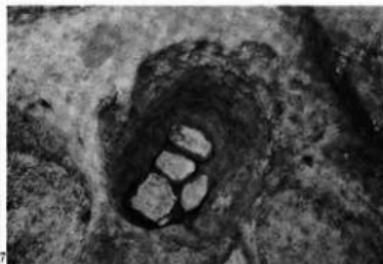
5



6



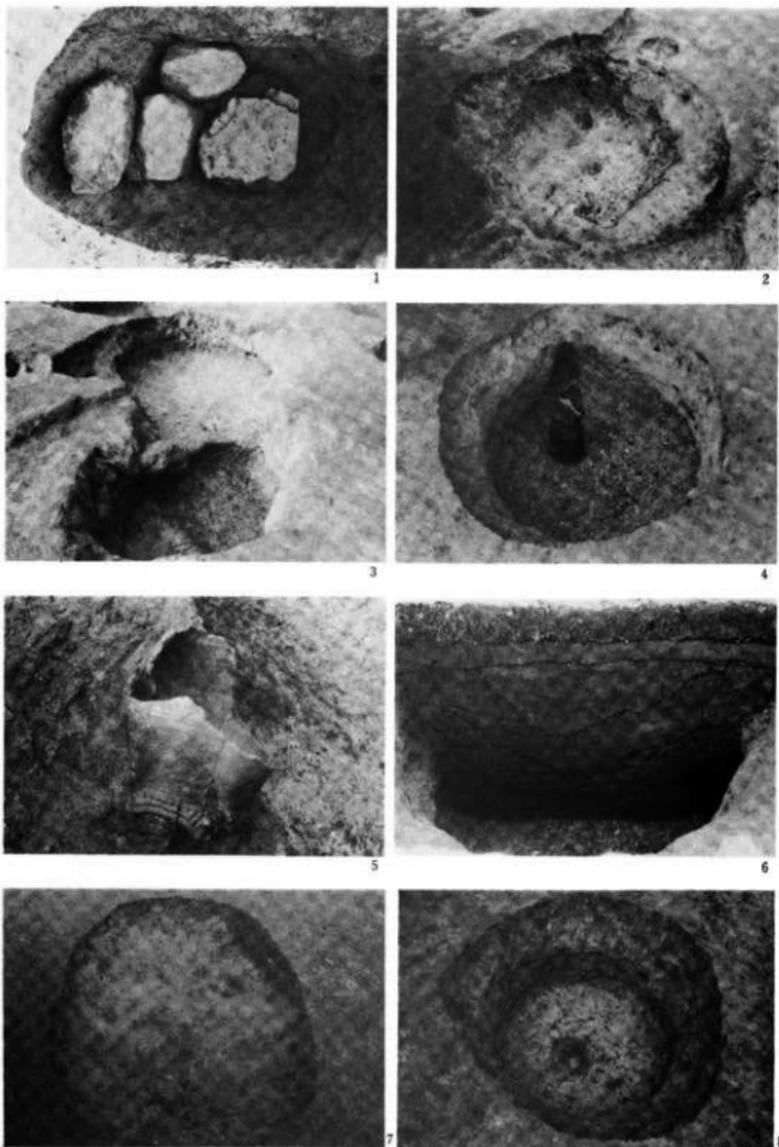
7



8

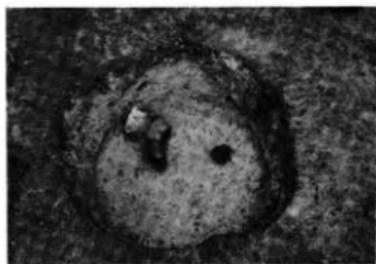
1. 11号土壇 2. 13号土壇 3. 14号土壇 4. 15号土壇 5. 16号土壇 6. 同、一括土器出土状況
7. 17号土壇 8. 18号土壇

写真4 縄文時代前期未業の土壇 (1)



1. 18号土塚 2. 21号土塚 3. 20号土塚(上)22号土塚(下) 4. 23号土塚 5. 同、土器出土状況
 6. 同、断面(南側) 7. 24号土塚 8. 25号土塚

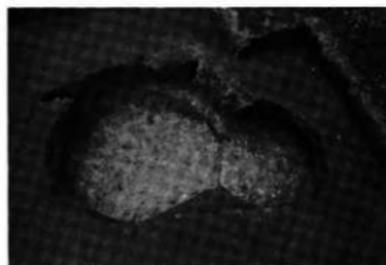
写真5 縄文時代前期末葉の土塚(2)



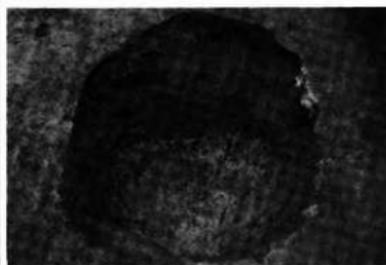
1



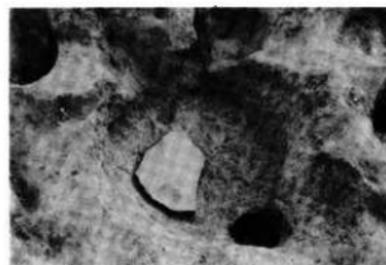
2



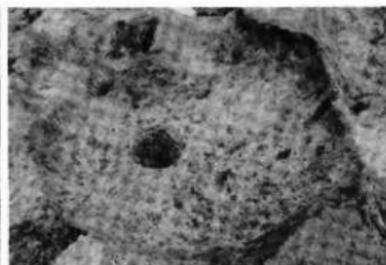
3



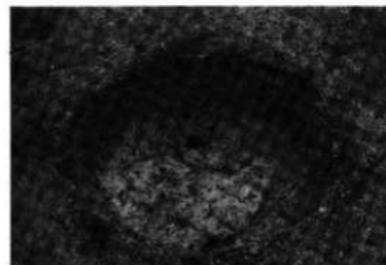
4



5



6



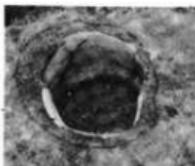
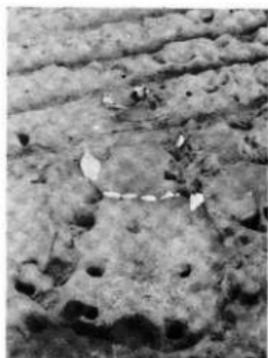
7



8

1. 26号土坑 (一括土器出土状況) 2. 27・8号土坑土器出土状況 3. 28号土坑(右)、27号土坑(左) 4. 29号土坑
5. 30号土坑 6. 31号土坑 7. 32号土坑 8. 33号土坑

写真6 縄文時代前期末葉の土坑(3)



1. 9号住居跡(南より) 2. 同跡 3. 同、炉土器埋設部 4. 同、埋設土器 5. 10号住居跡(北より)
6. 同、炉跡 7. 8. 同埋設土器

写真7 縄文時代中期の住居跡



1



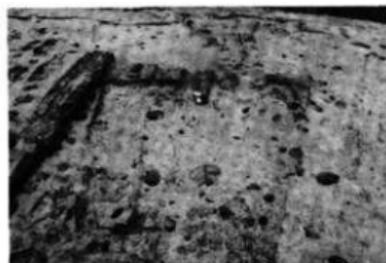
2



3

1. 1号縦穴遺構（南より） 2. 1号埋設土器 3. D-7区一括土器出土状況

写真8 a 縄文時代中期の縦穴遺構・埋設土器・一括土器出土状況



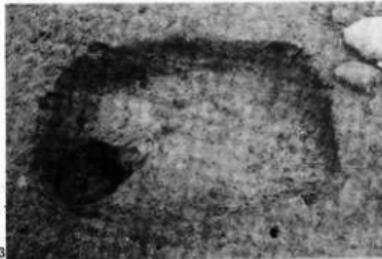
1



2



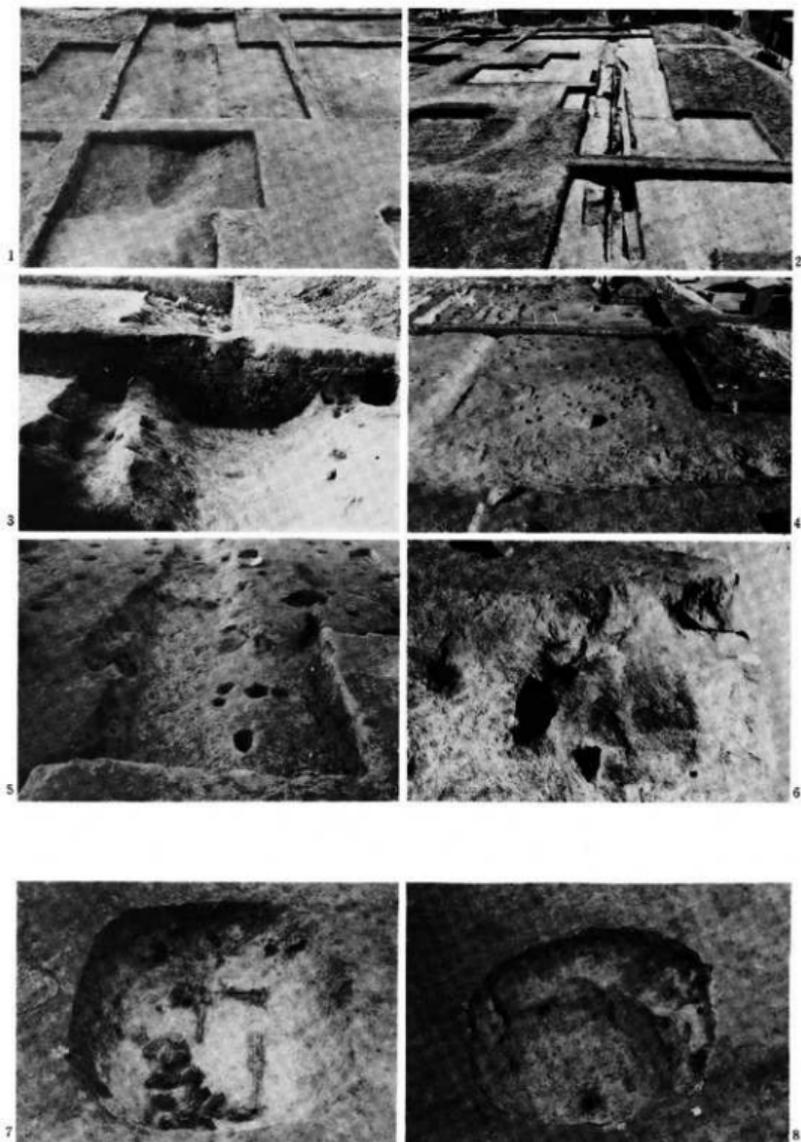
3



4

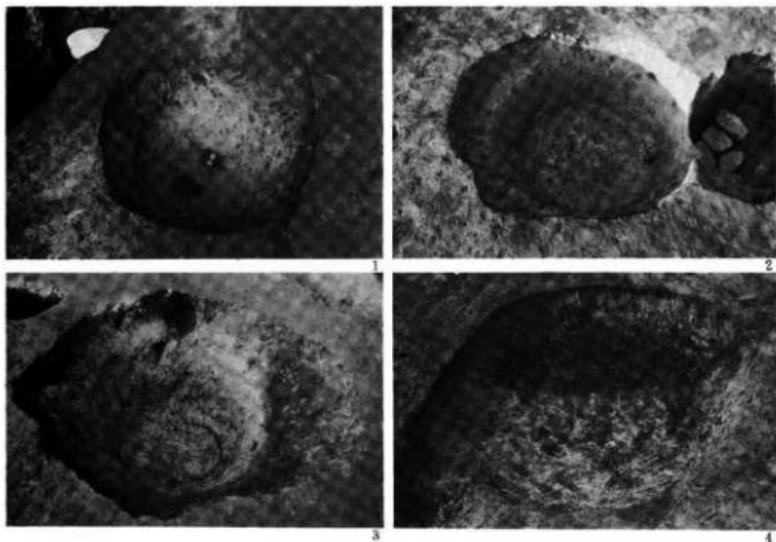
1. 11、12号住居跡 2. 同西側断面 3. 12号住居跡土器出土状況 4. 35号土塚

写真8 b 平安時代の住居跡、土塚



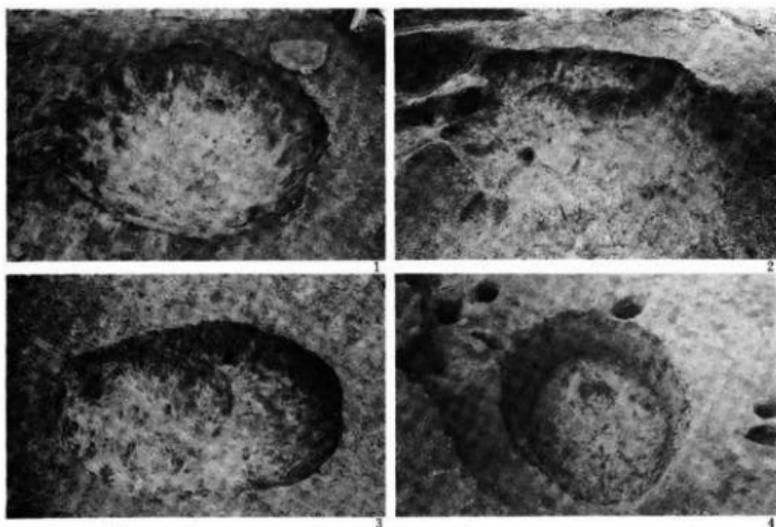
1. 1号溝 2. 2号溝 3. 3号・6号溝 4. 4号溝 5. 工房跡 6. 同、カマド 7. 37号墓壇 8. 38号墓壇

写真9 江戸時代の溝・土壇 (1)



1. 39号土塚 2. 40号墓塚 3. 41号墓塚 4. 43号土塚

写真10a 江戸時代の土塚 (2)

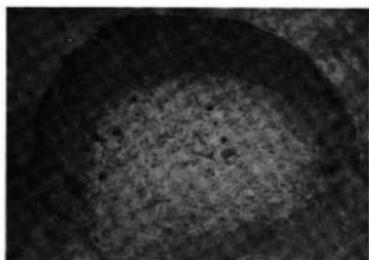


1. 44号土塚 2. 46号土塚 3. 47号土塚 4. 49号土塚

写真10b 時期不明の土塚 (1)



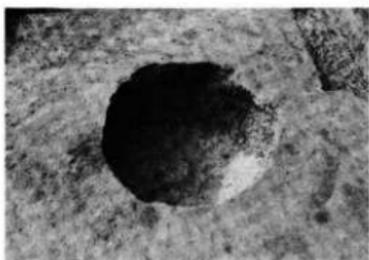
1



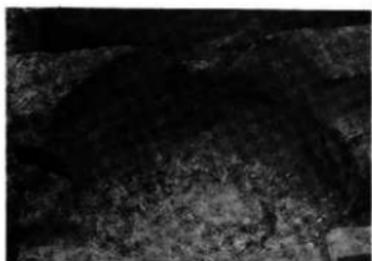
2



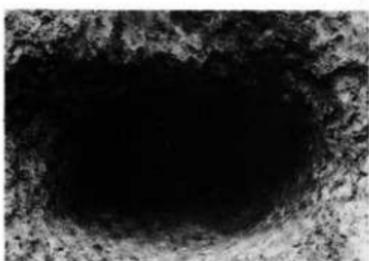
3



4



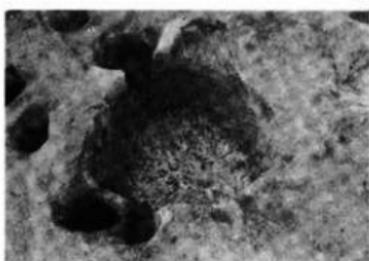
5



6



7



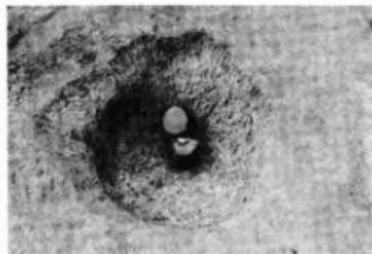
8

1. 53号土塚 2. 54号土塚 3. 55号土塚 4. 57号土塚 5. 56号土塚 6. 57号土塚細部(横穴)
7. 59号土塚西南面 8. 59号土塚

写真11 時期不明の土塚(2)



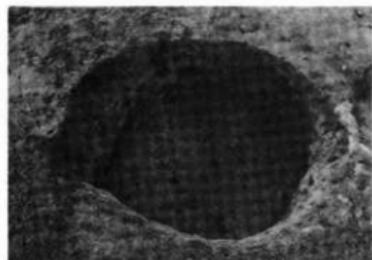
1



2



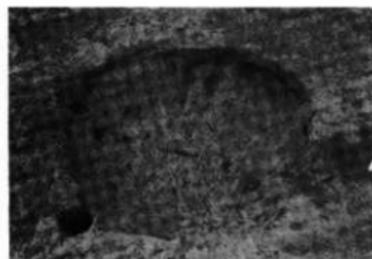
3



4



5



6



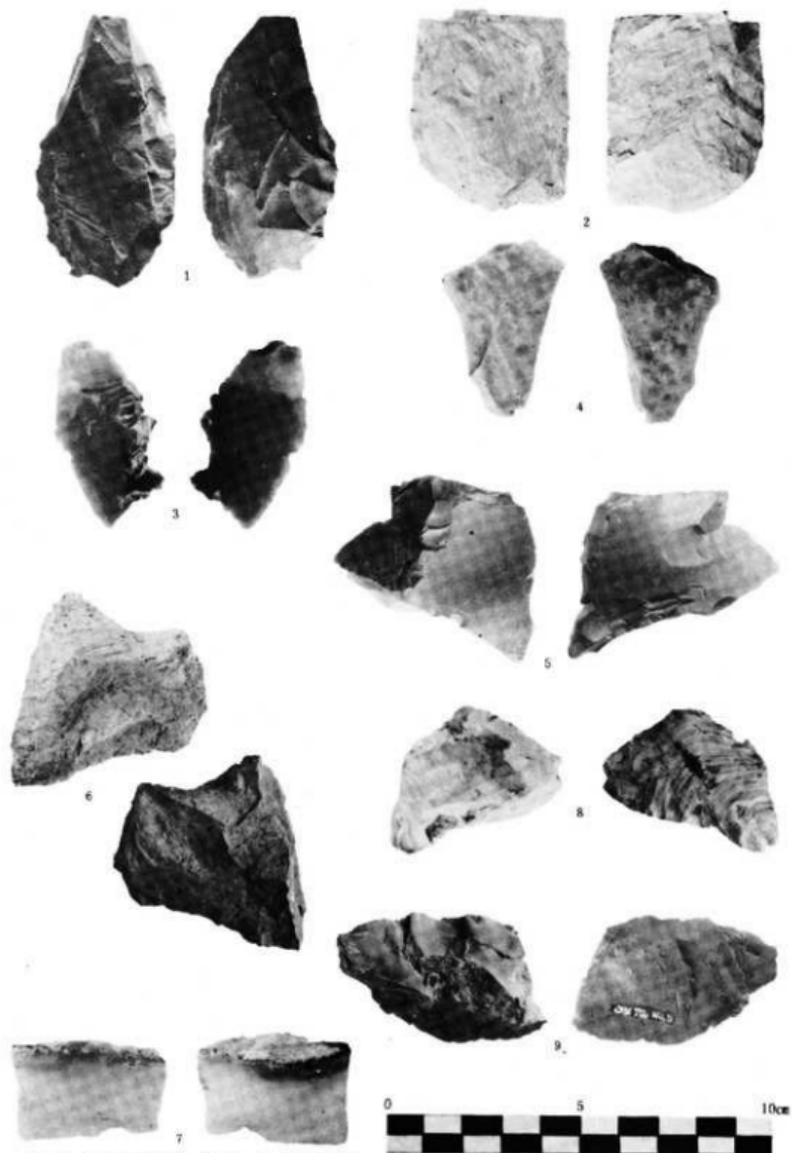
7



8

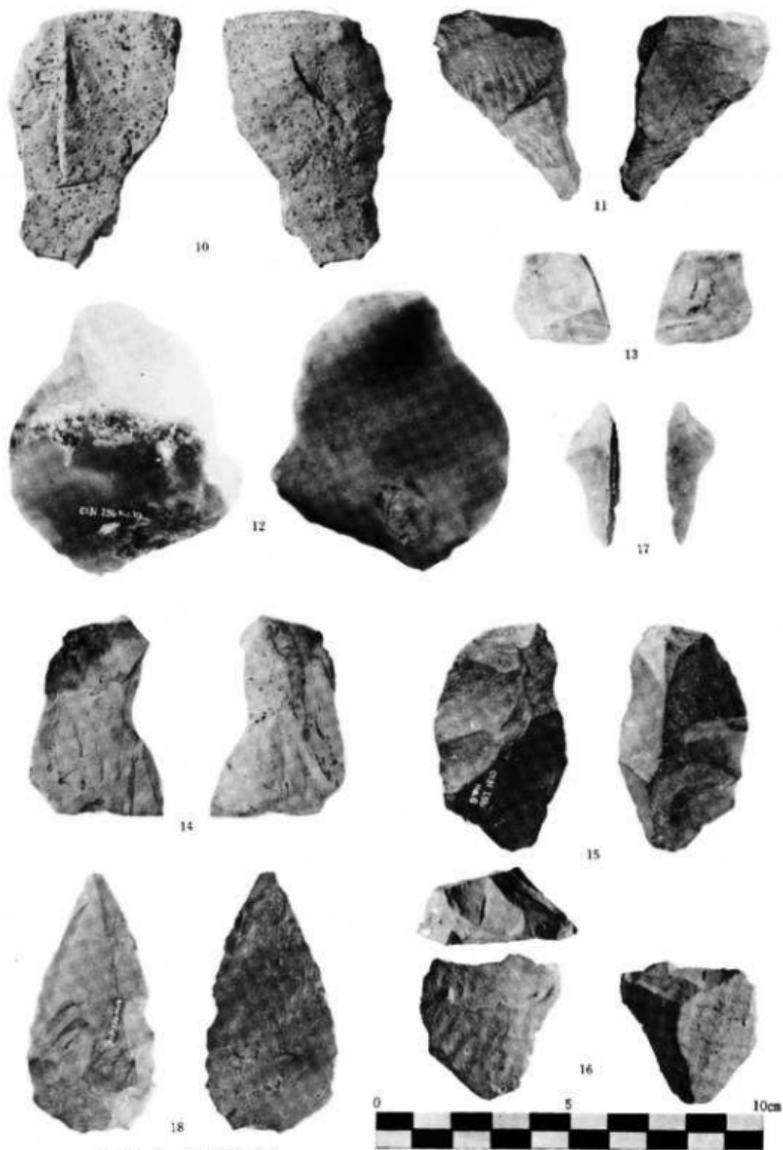
1. 60号土坑 2. 61号土坑 3. 62号土坑 4. 63号土坑 5. 65号土坑 6. 66号土坑 7. 67号土坑 8. 調査風景

写真12 時期不明の土坑 (3) - 調査風景



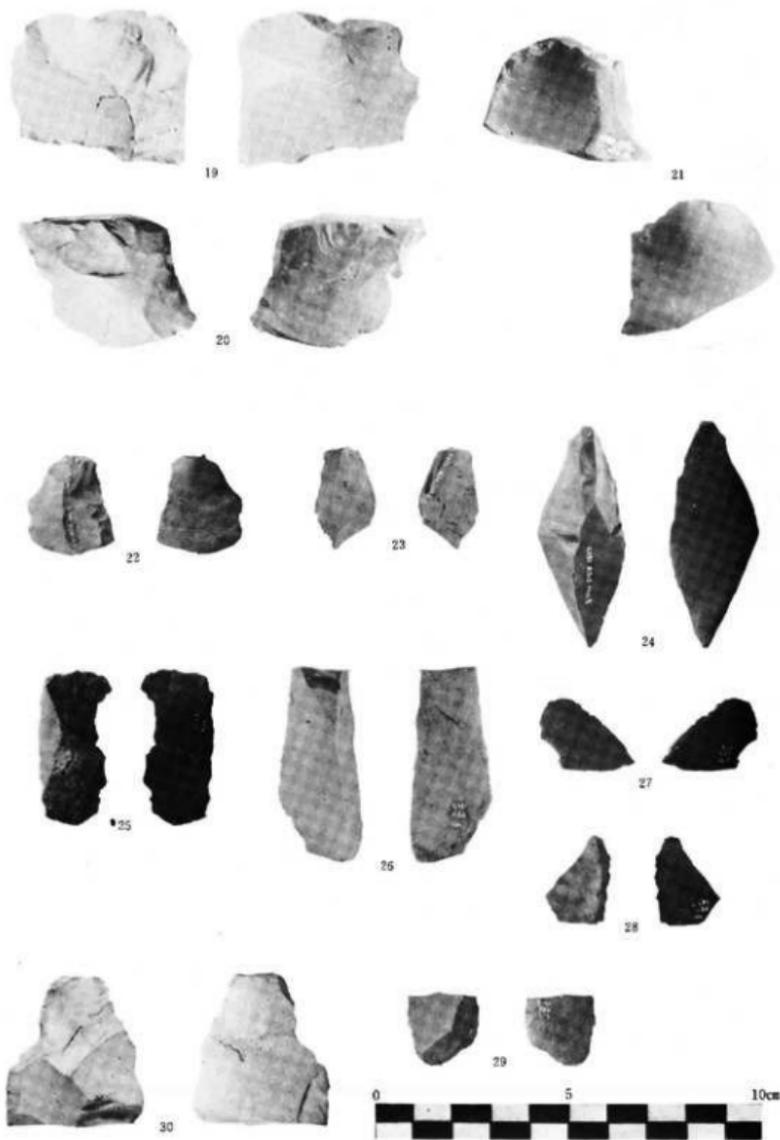
1～5. D-3 a区15層 6～9. 1-5 b区17層

写真13 旧石器時代の石器 (1)



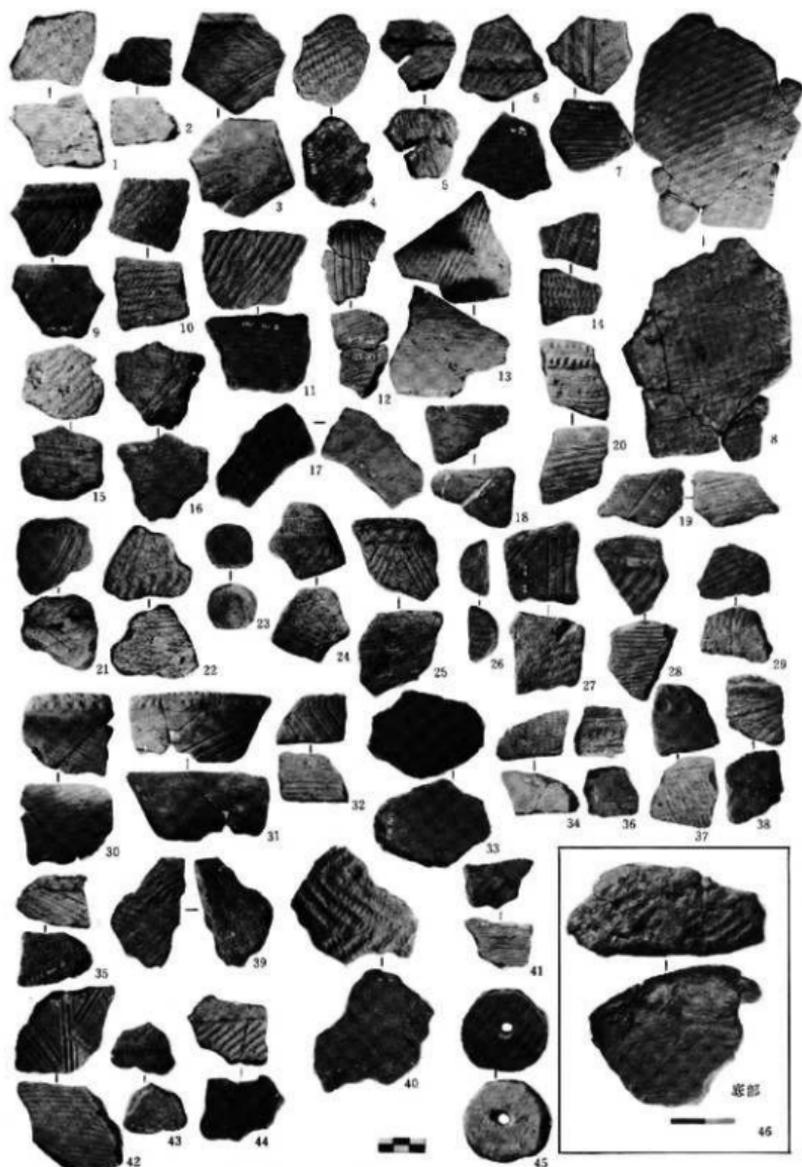
10-18. 1-5 b区17層上面

写真14 旧石器時代の石器 (2)



19. 20. 1-5 b区17層上面 21. 1-5 b区第9層上面 22-30. A-3 d区第5層上面

写真15 旧石器時代の石器 (3)



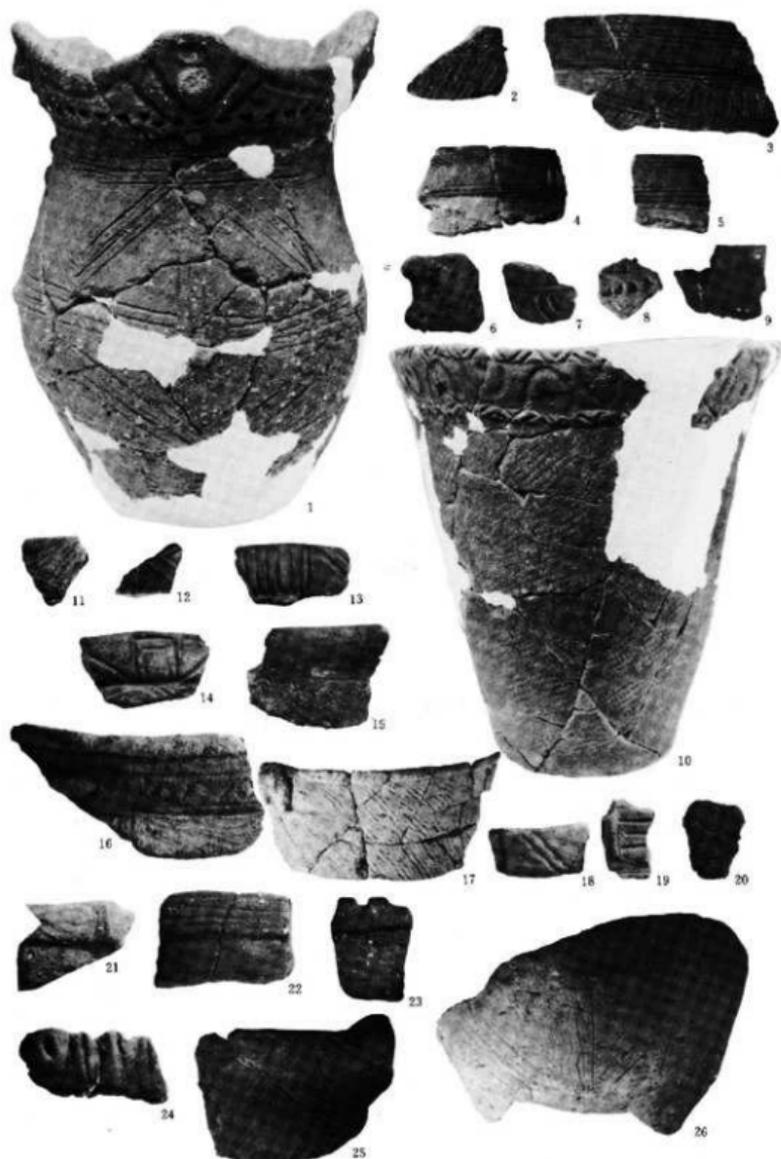
1. 2. 1号住居跡 3~8. 2号住居跡 9~14. 3号住居跡 15. 16. 4号住居跡 17~20. 5号住居跡
 21~23. 7号住居跡 24~26. 8号住居跡 27. 3号土壘 28. 29. 5号土壘 30~35. 36時期不明土壘
 26. 第3層 44. 第4層上部 45. 第3層 46. 第1層上面 (23, 26, 45は円錐状土製品)

写真16 縄文時代早期の土器



1. 2. 14号土塊 3. 15号土塊 4. 5. 6. 16号土塊 7~9. 18号土塊 10. 11. 19号土塊 12~16. 20号土塊
17~21. 22号土塊 22~31. 21号土塊

写真17 縄文時代前期末葉の土器 (1)



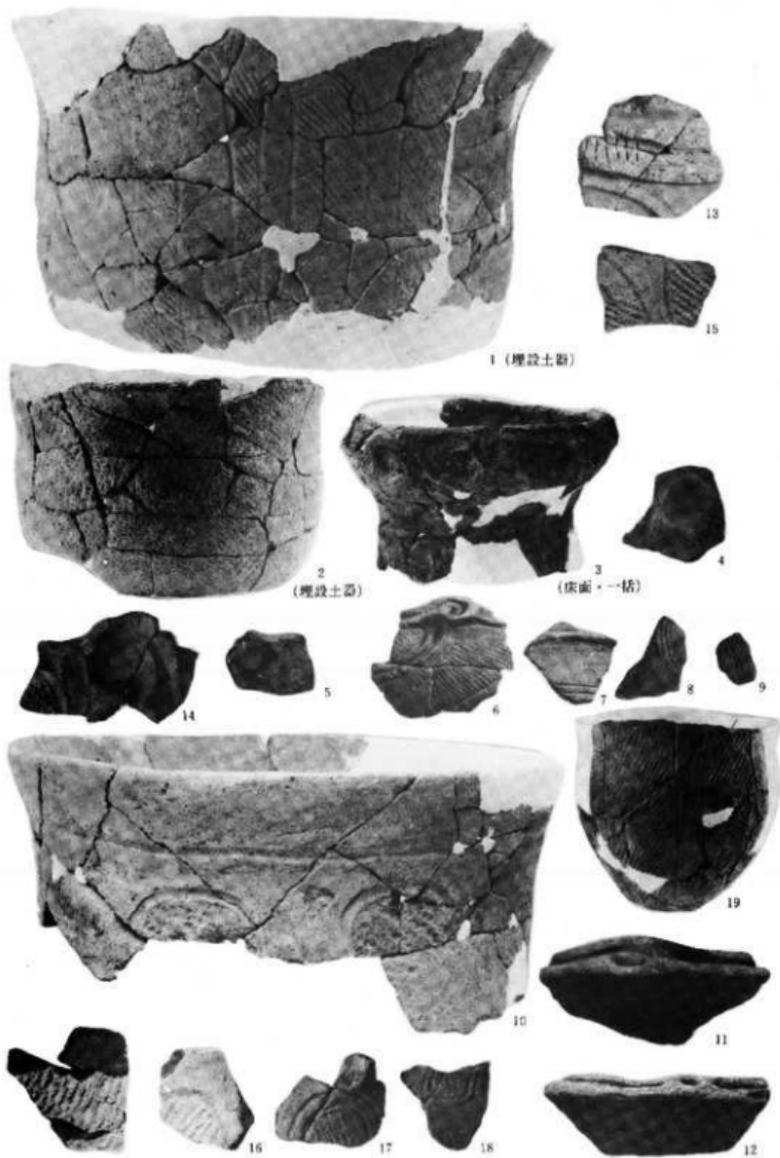
1～5、23号土瓶 6、24号土瓶 7～9、25号土瓶 10～15、26号土瓶 16～25、27・28号土瓶

写真18 縄文時代前期末葉の土器(2)



1. 29号土塊 2. 31号土塊 3. 4. 32号土塊 5. 33号土塊 6-26. 遺構外 28. 29. 9号住居跡
30. 1号整穴

写真19 縄文時代前期末葉の土器(3)・中期の土器(1)



1. 9号住居跡 2~5. 10号住居跡 6~9. 1号壺穴遺構 10. 1号厚設土器 11~19. 遺構外出土

写真20 縄文時代中期の土器 (2)

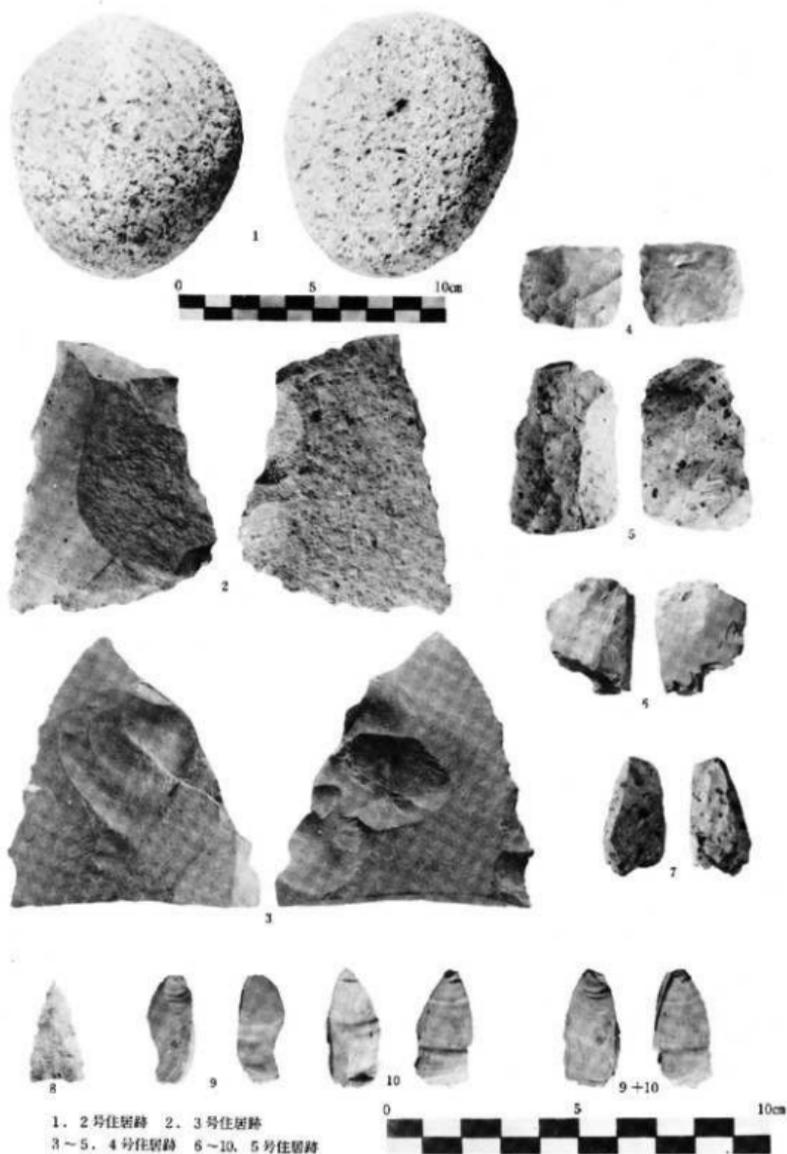
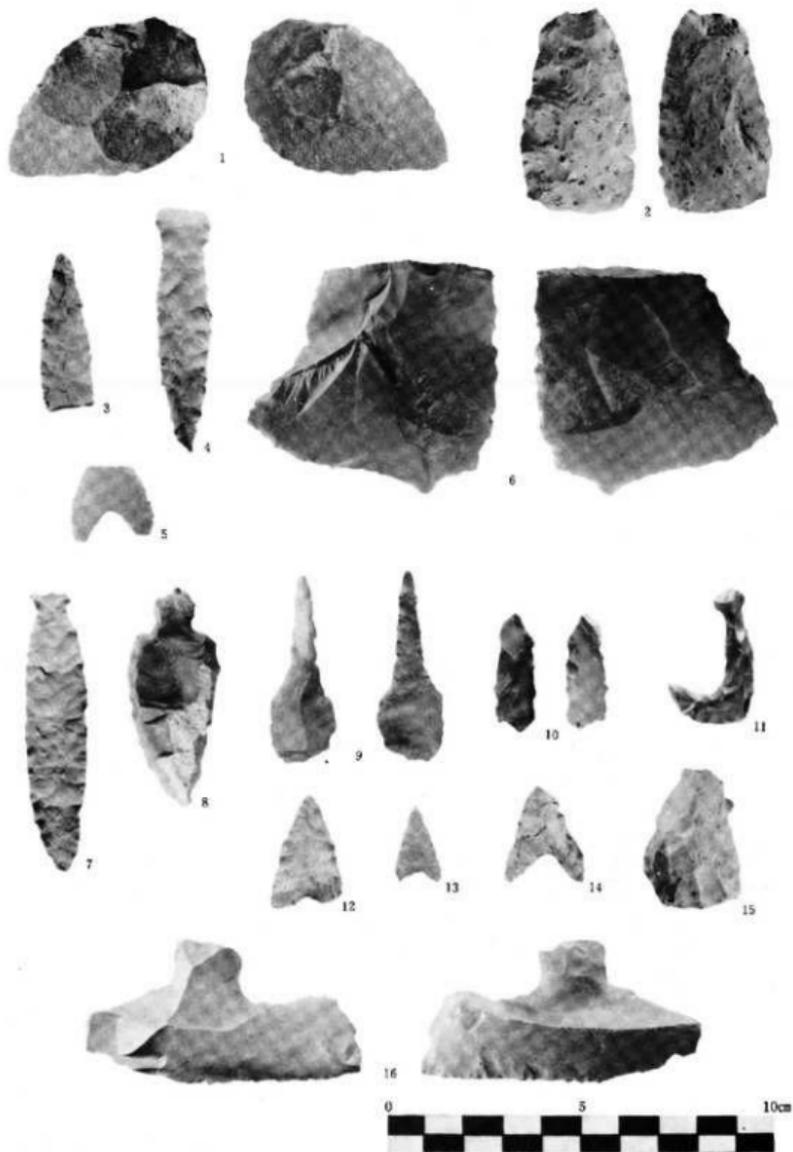


写真21 縄文時代の石器 (1)



1. 6号住居跡 2-4. 7号住居跡 5. 8号住居跡 6. 1号土壌 7. 5号土壌 8. 6号土壌

写真22 縄文時代の石器(2)



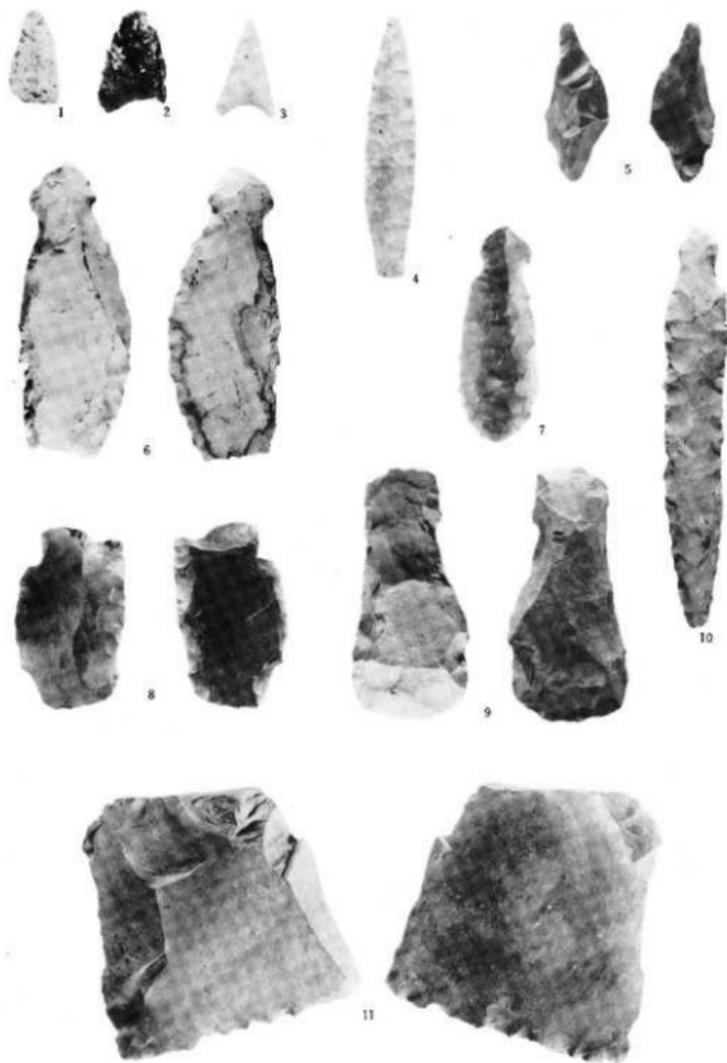
1～4. 早期包含層 5. 21号土塊 6. 20号土塊 7～10. 29号土塊 11. 30号土塊 12～16. 9号住居跡

写真23 縄文時代の石器(3)



1～4. 10号住居跡 5. 46号土塚 6. 57号土塚
7. 8. 1号竪穴遺構 9～11. 1号溝

写真24 縄文時代の石器 (4)



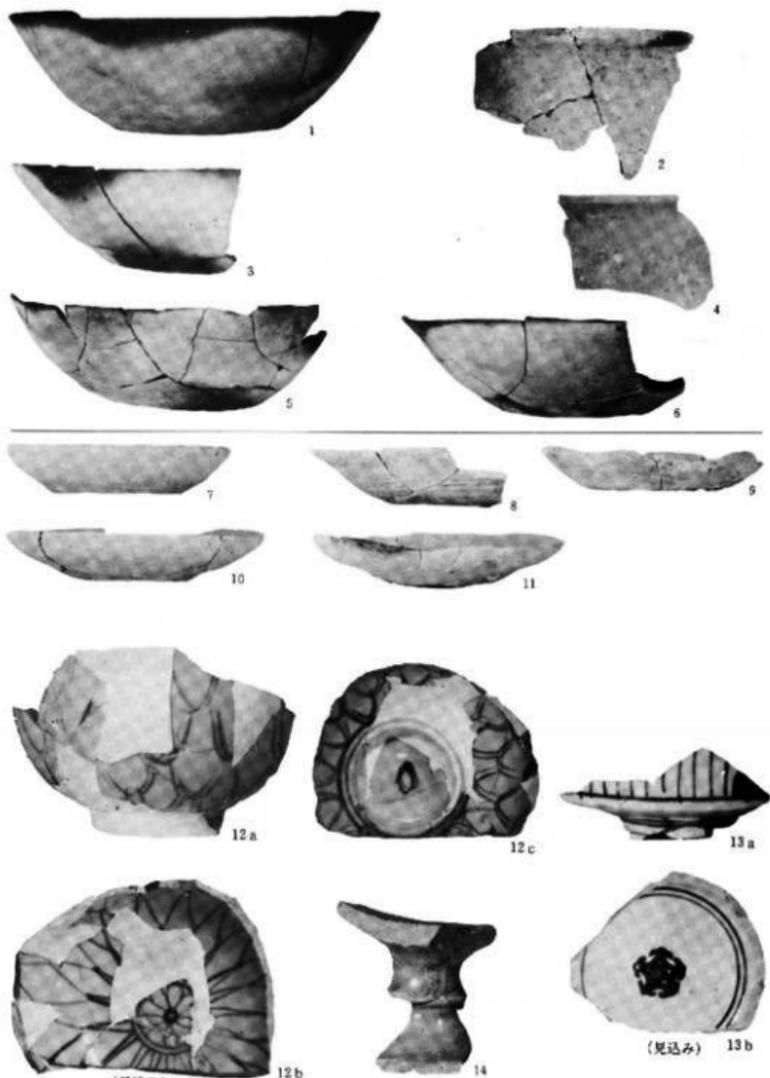
1~11. 表土・撥乱

写真25 縄文時代の石器 (5)



1~6. 表土・撥風

写真26 縄文時代の石器 (6)

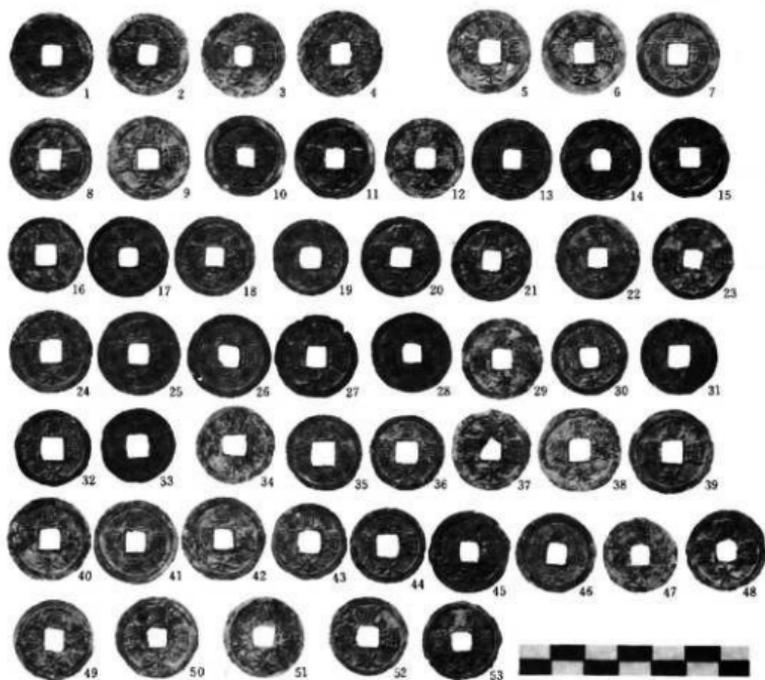


1. 2. 3. 4 1. 2. 4. 5. 12号住居跡 3. 6. 11号住居跡

写真27a 平安時代の土器 (土師器)

7. 3号溝 8. 第2層上の黒色土層(G-5a) 9. 12号住居跡(埋土層) 10. 桜乱(F-4) 11. 第2層(H-5)
12. 7号溝 23. 21. 4号溝(最下層)

写真27b 江戸時代の土師質土器・磁器



墓墳出土の寛永通宝銭



1～4, 37号墓墳 5～15, 38号墓墳 16～48, 39号墓墳 49～53, 41号墓墳 54, 67号土塚 55・58, 工房跡
56, 1～5焼乱 57, 表塚 59, 1号溝 60, 3号溝

写真28 江戸時代及び江戸時代以降の遺物

職 員 録

社会教育課	
課長	永野 昌一
主 幹	早坂 春一
文化財管理係	
係長	鈴木 昭二郎
主 査	鈴木 高文 (10月1日異動)
主 事	山口 宏一 渡辺 洋一
文化財調査係	
係長(兼)	早坂 春一
教 諭	佐藤 隆彦
〃	渡辺 忠彦
〃	佐藤 裕
主 事	加藤 正範
〃	山中 則和
〃	結城 慎一
主 論	成瀬 茂
主 事	青沼 一民
〃	柳 沢みどり
〃	木村 浩二
〃	藤原 信彦
〃	佐藤 甲洋
〃	金森 安孝
〃	佐藤 甲平
〃	吉岡 恭司
〃	工藤 哲司
〃	渡部 弘光
〃	主浜 秀朗
〃	斎野 裕彦
〃	長坂 栄一
〃	荒井 格
臨時職員	高橋 勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書(昭和39年4月)
- 第2集 仙台城(昭和42年3月)
- 第3集 仙台市沢沢善応寺横穴古墳群調査報告書(昭和43年3月)
- 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書(昭和44年4月)
- 第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書(昭和47年8月)
- 第6集 仙台市荒巻五本松宗跡発掘調査報告書(昭和48年10月)
- 第7集 仙台市宮沢裏町古墳発掘調査報告書(昭和49年3月)
- 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書(昭和49年5月)
- 第9集 仙台市根岸町宗禰寺横穴群発掘調査報告書(昭和51年3月)
- 第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報(昭和51年3月)
- 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報(昭和51年3月)
- 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報(昭和52年3月)
- 第13集 南小泉遺跡一帯照確認調査報告書一(昭和53年3月)
- 第14集 栗道跡発掘調査報告書(昭和54年3月)
- 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報(昭和54年3月)
- 第16集 六反山遺跡発掘調査(第2・3次)のあまし(昭和54年)
- 第17集 北屋敷遺跡(昭和54年3月)
- 第18集 橋江遺跡発掘調査報告書(昭和55年3月)
- 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書(昭和55年3月)
- 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報(昭和55年3月)
- 第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告書Ⅰ(昭和55年3月)
- 第22集 結ヶ峯(昭和55年3月)
- 第23集 年報Ⅰ(昭和55年3月)
- 第24集 今泉城跡発掘調査報告書(昭和55年8月)
- 第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書(昭和55年12月)
- 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報(昭和56年3月)
- 第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報(昭和56年3月)
- 第28集 年報Ⅱ(昭和56年3月)
- 第29集 郡山遺跡Ⅰ—昭和55年発掘調査概報—(昭和56年3月)
- 第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報(昭和56年3月)
- 第31集 仙台市開発関係遺跡調査報告書Ⅱ(昭和56年3月)
- 第32集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
- 第33集 山口遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
- 第34集 六反山遺跡発掘調査報告書(昭和56年12月)
- 第35集 南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第一次調査報告(昭和57年3月)
- 第36集 北前遺跡発掘調査報告書(昭和57年3月)
- 第37集 仙台平野の遺跡群Ⅰ—昭和56年度発掘調査報告書(昭和57年3月)
- 第38集 郡山遺跡Ⅱ—昭和56年度発掘調査概報—(昭和57年3月)

仙台市文化財調査報告書第36集

北前遺跡—発掘調査報告書—

昭和57年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 63-1166

